

東方終焉雪

カミユ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつもの日常だった。暇で退屈な日常。そんな日常は嫌いというわけではない。こんな日常が続いて欲しいと思っていたし壊れるものでもないと思っていた。しかし、そんなものは簡単に壊れてしまう

これは自由な主人公が幻想入りしてから今までと違う新しい日常を過ごしていく物語

執筆中である東方現幻夢とは別の物語なので現幻夢のオリキャラが出てくることは
(多分)ありません

すごく駄文です。時々本人でさえも なんだこれ？ となることがあります。また、

独自解釈が多々あります

不定期投稿です

また、キャラ崩壊、チート等が苦手な人はブラウザバックをお勧めします

目次

第0章 プロローグ

第1話 何時もの日常 | 1

第2話 能力測定 | 15

第3話 体育館大騒動 | 33

第4話 前日の話し合い(?) | 49

第5話 壊れた日常 | 64

第6話 戦闘開始 | 80

第7話 三箇所の戦闘 | 89

第8話 雪 vs 松戒 | 106

第9話 雪の消失 | 119

第9・5話 オリキャラ設定 | 127

第1章 異変中に幻想入り

第10話 幻想入りして感じたのは浮遊感 | 134

遊感 | 134

第11話 異変説明からの | 141

第12話 異変現場へGO | 153

第13話 vs 永遠亭のドッペルゲン | 163

ガ―2人 | 163

第14話 竹林の戦い決着 | 170

第15話 話し合いの前には荒事 | 183

第16話 迷いの竹林は不死者と遭遇 | 183

しやすい | 194

第17話 落とし穴の先は | 208

	第18話	紅魔館へご招待	222	第26話	v s 白玉楼の庭師	300
	第19話	紅魔館の戦闘	235	第27話	邪魔者	307
	第20話	一難去ってまた一難		第28話	話と取材と突き落とし	
243	第21話	強力な打撃攻撃には注意		315		
	第22話	雪の能力	261	第29話	地底入り口	324
251	第22話	療養は難しい	272	第30話	地底の鬼	330
	第23話	戦闘しているときは名前を		第31話	温泉描写は無い!	341
	聞くタイミングがあまりない	282		第32話	決戦前夜	351
	第24話	戦闘のない平和な時間		第33話	決戦	361
288	第25話	魔法の森の戦闘	294	第34話	逆転	370
				第35話	v s 雪(ドツペルゲンガー)	379
				第36話	本物と偽物	387

第37話	本物と偽物の決着	395
第38話	影の世界の戦闘①	405
第39話	影の世界の戦闘②	418
第40話	黒幕	429
第41話	異変解決	439
第42話	再会	448
第2章 学園祭		
第43話	帰った日常	465
第44話	勝負の妖怪	475
第45話	v s イルカミア	481
第46話	波乱	491
第47話	お騒がせないところ	497
第48話	学園祭1日目	505

第49話	学園祭2日目①	516
第50話	文化祭メインイベント	524
第51話	結界内の戦い 前編	541

第0章 プロローグ

第1話 何時もの日常

S i d e はくやく 博咲 そくてい 雪

はあ…眠い。今、俺は欠伸をしながら通学路を歩いている。家からは遠くもなく、だからと言って近いわけでもない距離。そして季節は秋。暑くもなく寒くもない個人的には一番最高の季節だと思う。こんな時はつい欠伸をしてもいいと思う

「はあ…学校めんどくさいな。クラスの騒がしい奴等がどうか静かになってくれたら良くなるんだけど…」

学校がある登校日でいつも俺は疲れる目に遭う。高校二年になっても静かにすることができないのか全く理解できない

「おい、待ち伏せするな。あとおはよう」

「おはようございます。待ち伏せと言わないでくださいよ。貴方と登校する為に裸と待つていただけですよ」

「そうかい。じゃあ行くか」

「では行きましょうか。遅刻まであと30分ですよ。雪はここで立っていますか？」

「ほぎけ。待つている必要が無いじゃん」

「おはよ」

「ん。おはよう」

通学路を歩いてしていると幼稚園からの幼馴染の命雛兄弟が立つて待つていた。俺と話していた肩まで伸びている黒が少し入っている茶髪で紳士な口調が命雛めいすう。燈あかり。後から挨拶だけした腰まで伸びている黒髪の奴が命雛めいすう。襖みそぎ。二人は双子で燈が兄で襖が弟。まあ周りから見てもほぼ全員がそう思うだろう。燈の身長は168cm。日本の成人男性の平均身長と同じだ。しかし襖の身長は145cm。中学生と：最悪小学生と間違われそうな身長だ。どうしてこうなったのかは二人にも分からないらしい。まあ成長が早く止まっただけだね。可哀想に：こんなことを襖に言うとか例え下がコンクリートの道路であろうと躊躇なくチョークスリーパー（プロレス技はだいたい使える）をしてるので心の中でいう。ちなみに俺は160cm

「今日の教科って何だっけ？」

「木曜日課ですよ。まあ雪は教科書全て教室に置いてあるので忘れることはないですよっ。」

「まあな。でも朝から今日やる教科知っているとやる気が変わるから」

「そうなのですか。私は全ての教科が好きなので特に問題はないですよ」

「学年一位の言うことは違うな。苦手な教科が無いとか羨ましすぎる」

燈は毎回学年一位になる。殆どのテストが100点。例え間違えているところがあっても1、2問ほど。態度も良く、運動もできるという。まさに文武両道の言葉が似合う奴だ。何故か毎日白い手袋をしている

「そういえば襦はこの前の野球の練習試合の助っ人に出たんだっけ? どうだった?」

「別に…コールド勝ちしただけ」

「えげつねえ。因みに得点は?」

「33—4」

「何でや。阪神関係ないやろ!」

「10—0」

「……………その相手が涙目で帰る姿を思い浮かべることができたんだが…」

「知らない」

襦は背が低いが運動神経が良く、運動会などの競技では必ず一位を取る。中学生の時に握力測定器を破壊した事がある。細身なのに何処からそんな力が出るのかは不明。漫画の主人公か!と言いたくなったことがある。こいつも頭が良く、燈程ではないがテストで毎回一桁の前半に入っている

俺は勉強に関してはできる方だと思う。テストは10位前後。運動は二人に劣るが

できると思う。二人と小学一年生、今の高校二年まで一緒のクラスである。なにこれすい

二人よりもできると言ったら剣術しかない。俺の家系は代々続く剣術の達人らしい。確か1000年前に偉い所に仕えていたとか何とか。その影響か俺の家は広く道場があるほど。俺は10歳で師匠でもある父親を倒した。その時には代々受け継がれる剣術を会得していた。そして代々受け継がれる刀も。今も居る。毎日朝起きてから一通りやるのが日課になっている。

「話しているところ申し訳ないのですが学校に着きましたよ」

「やっぱ二人と話していると時間がすぐに過ぎるな」

三人で校門を通り昇降口で上靴に履き替える。ここから教室に行くだけだけどその前に一つ毎日のようにあるイベントが起こる

「おはよう！三人とも！今日も美形組が揃って登校するね！」

「おはようございます！燈先輩！今日もカッコいいです！」

などと周りから声が聞こえてくる。最初の男は高校一年のときのクラスメイトから。次は燈に一目惚れした後輩の女の子からだろう

「ふふっ。ありがとうございます」

「キヤー！」

燈が後輩の子に礼を言うとき女の子は黄色い悲鳴を発しながら走り去っていった。さっきの高校一年のときのクラスメイトが言っていた美形組の中に俺がいるのが気になる。燈はこの学校一のイケメンと言われている。才色兼備な奴だ。小学校く今まででラブレターが100通を超えている。俺と裸で数えた。まあ100通超えた時点で諦めたけど。その弟の裸も顔はかなり整っていて美形だと思うが、俺は違うだろ

「そんなことはありませんよ。雪もカッコいいですよ」

「それはどうも。あと心を読むな」

「女声をどうにかすれば？」

「どうやるんだよ…」

燈に言われるがどうにも分からない。それに俺は女声で良く街中で話していると女の人と間違われる。よく分からん。時々燈は人の心を読むようなことをする。本人曰く何となくわかるらしい

さて、ここでイベントが終わり2—Bの教室まで来たのだが、ここからが問題なのだ。今燈が教室のドアの取っ手に手をかけているがここを開けると騒がしい奴らが登場する

「何で毎回教室に入ろうとするたびに憂鬱になるんだろ」

「まあ個性豊かなクラスメイトが多いですからね」

「豊か過ぎる」

「だな」

「では開けますよ」

ガラガラと音を立てながら燈が教室のドアを開けると

「おっと」

いきなり横から白いチョークが飛んできた。それを燈が一步退いて避ける

「どうします？ここから席に着くまで安全に行くのは至難かと」

「そりゃあ強行突破しかないだろ」

「うん」

はあ…と溜息をつきながら横から飛んでくる三角定規やチョークを避けながら窓側の席の後ろから二番目の自分の席に向かう

「はあ…早く学校終わらないかな」

つい漏らしてしまった言葉をつくど席に着いた

「ふう…何とか無事に自分の席に着くことができましたね」

「SHが始まるまであと20分」

「いつも通り本でも読んで待つてようか…」

俺の窓側後ろの一番後ろ席に燈、窓側前の後ろのから三番目席に襖が椅子に座る。そして、SHが

始まるまでそれぞれ持ってきた本を読んで時間を潰す

20分が経ち、チャイムが鳴るとさつきまでチヨークやら三角定規を投げていた騒がしいやつらが静かになる。いつも思うけど何これ？みんな先生の前では優等生を気取りたいのか？と思うことが多々ある。まあ先生が来ても騒がしかったら先生が一週間ほどで変わっていきそうではあるが

「みんなおはよう！今日も頑張っていこうな！」

担任が入って来てからみんなに挨拶をする。熱血教師みたいなことを言う担任だが担当教科は化学だ。しかもバーコード

時間が経過し、今は昼休み。燈と禊が弁当（命雛家母が作った）を机に出しながら机を俺の机にくつつけるようにする

「はく何で午前中の授業って長く感じるの？」

「私はそう思いませんが…それは人それぞれでしょう。禊はどうですか？」

「普通」

この二人にとって授業はなんて事のないものらしい

「そういえば明日の午後は体育館に集合でしたよね？」

「あーそんなこと言ってたなあバーコード」

「何やるの？」

「私にはわかりませんが長くなるのではないのでしょうか」

「早く終わってくれば読書タイムにできるんだけどな」

「たしかに」

俺たち三人の趣味が読書である。暇な時は授業中であろうと先生にバレないように本を読んでいる。燈は分からないが

明日の午後に体育館でやるものが少し不安に思っている。何というか：今までの日常を破壊されるような気がする

「そんなことは起こらないことを願いますよ」

「本当に何で心を読むことができるの？」

「何となくわかってしまうのですよ」

こいつには何か特殊な能力でもあるのか？

「そういうえば雪は何か不思議な現象のことを言いますよね。確か授業が始まったと同時に終わっているとか、帰路に着いた時には家に帰っていたとか。帰路のことは分かりませんが授業のことに關しては私たちも感じているみたいで文字通り一瞬で時間が経過していることを」

「(こいつまた心を読んだのか?) まあな。それについてはよくわからん。まあただ授業のことに關してはすぐに終わるから良いんだけどさ、帰路のことはちようど歩いて帰っ

た時と同じくらい疲れているんだよな〜」

「まさか雪がやっている事…はありませんか。普通の人間なのですから」

「そうだな。(禊は人間だけど普通とは言えないと思うが…)」

(こつちを見るな)

(こいつ…直接脳内に！……ファミチキください)

(現在在庫切れ)

と、こんなことをやっていると今日のドアが勢いよく開く

「ねえねえねえ！今の話になに!?時々授業が早く終わる謎を知っているの!?それやったの雪なの!？」

「うわっ…めんどくさいの来たよ。分からん。知らん。お前たちの事に俺たちを巻き込むな。頼むから…」

「まあまあ蓮子さん、落ち着いてください。メリーさんも止めてください」

「蓮子。確かに時間経過は気になるけど食事の中の邪魔はしちゃダメよ」

「じゃあ弁当を持って来れば良いんだね!?持ってくるー!」

「……はあ」

「禊…今の溜息は分かる。取り敢えず近くの机を並べるか…」

「蓮子がごめんなさい」

「ほら早く早く！メリーの分も持って来たよ！」

「早っ！」

さて、今何か元気で活発的な行動をして、二人分の弁当を教室から持ってきたのが宇佐見 蓮子。最初会った時の第一人称は「ハルヒ？」と思つた。それほど活発的な奴だ。茶髪のみディアムヘア。赤いネクタイをしている。テストでは10位前後と俺とほぼ同じくらいなのだ。気に入らん

この学校は偏差値が高く、私服OKな学校だ。一応制服を分けられている。俺は基本的には制服だ。服を選ばないのが楽で良い。偏差値が高いのに朝からハイテンションの奴らが居て、毎朝頭が痛くなる

次に蓮子を追いかけて入ってきたのがマエリベリー・ハーン。外国からの留学生で通称メリー。名前のどこから『メ』が出てきたのかは不明。金髪のみディアムウェーブ。男子からの評判が良く、学校一の美人と言われている。頭が良く、褌と同じくらいテストの順位が高い。蓮子に振り回される事の多いキョンのポジション

二人はサークルを作っており、確か『秘封倶楽部』だったか：活動内容は世界の不思議な事の解明と言っていたような気がした。俺たちは度々勧誘されたが全て断つた。だつてめんどくさかつたし：

最近博麗神社に異世界の入り口を見つけたとか言っていたが胡散臭すぎる。そん

なこんなで秘封倶楽部の二人と話していると昼休みが終わる。二人は急いで教室を出るのを見届ける

「や〜つと今日の授業が終わった〜」

「お疲れ様です。この後何処か行きますか？」

「特に無いかな。襦は？」

「無い」

「じゃあ帰るか」

三人揃って帰路につく。俺たち三人は部活に入っていない。襦は興味がないらしく、時々助っ人としてやる。燈は襦に合わせている。俺は家で剣術やっていれば良いし特に入る気はなかった。しかし、何処から情報を仕入れてきた剣道部の先輩から勧誘されたけど全て断った。なかなか諦めて来れなかったけど根気強く断っていくと「もしかして負けるのが怖いのか？」とありきたりでつまらない挑発を受けて、溜息混じりに「じゃあ俺が勝ったら誘うのをやめてくれますか？」と言ったら快く受け入れてくれた。因みに俺は代々受け継がれる剣術と模造刀でやることを条件にした。模造刀をどうしようかと思っていると何処からか先輩が渡してくれた。

この時に偶然通りかかった燈と襦が観戦に来た。

主将の人と一対一の一本勝負となったが敢えてさつき挑発してきた先輩に同じ挑発

をすると簡単に乗った。内心笑ったが顔に出さなかった。燈は分かったみたいだけど。そんなわけでやったけどめんどくさかったので開始と同時に剣道で言うところの面をやつて終了。先輩は「ふざけるな！こんなのは無効だ！」とか言い始めたので「じゃあ部員の人と全員やつて勝つたら俺の勝ちでいいですか？」と言つたらやる事になった。その後は一方的に勝った。主将の人だけはまあまあだったかな

そんな訳で俺は帰宅部

「では、また明日」

「じゃあね」

「じゃあな〜」

適当に話していると命雛家に着いた。二人と別れ自分の家に帰る。俺の家の通りが命雛家なので最後は俺一人になる

「あく明日の午後のやつどんなのかな〜」

帰り道、誰もいない道で独り呟く。

毎朝頭が痛くなるような日々でも俺はかなり気に入っている。二人の幼馴染と他愛もない会話をして、席に着くまでが大変な学校でも。こんな日常が好きだ

——しかし

「では明日。翠利高等学校にてプロジェクトを開始する。被験体の状態はどうだ？」

「問題ありません。能力レベル紫五体、能力レベル緑10体、能力レベル青20体、能力レベル水色50体はいつでもいけます」

「そうか。クククツ楽しみだ。翠利高等学校にて能力レベル紫を超える者が居るといいなあ」

「能力レベル判別機10機は準備してあります。今すぐにも開始できます」

「そうか。しかし、明日まで待つのだ。楽しみだ。クククツ解剖して能力を量産すれば

第2話 能力測定

Side 雪

「……………き……………あ……………よ……………おき……………朝よ」

うーあと一時間…

「そうしたら遅刻しますよ？朝です、起きてください」

「うい…分かりました…はあ…頼むからもっと寝れるくらいの時間が欲しい」

「おはようございます。雪」

「おはよう」

自室のベッドから上半身だけ起き、起こしてくれた奴に朝の挨拶をする。横に立て掛けてある代々受け継がれる刀、『白雪』を持ち、立ち上がって道場に行く

昨日寝たのは午後10時。そして今の時刻は5時半、大体7時間半寝た。それでも眠い

「ふう」

一息つき素振りを100回してから剣術を一部除いて一通りやる。そして時刻は6時。支度をし、制服に着替える。博咲家は三大家族。台所まで行き母さんの朝食を食べ

る

「おはよう」

「おはよう雪。白雪は居る？」

「居るよ。ちゃんとね」

「そう。気をつけてね。今日は何だか嫌な予感がするの」

「俺もそう思ったいるよ」

俺の予感と母さんの予感は一緒みたいだ。念の為禊にメールで『なんか嫌な予感がするから武器持っていけよ』と送る

「父さんは？」

「そういえば起きないわねえ。どうしたのかしら」

「どうした？俺は元気だぞ」

母さんと話していると父さんが台所に来た

「おはよう」

「二人ともおはよう。雪、今日は気を付けろよ。何か恐ろしい事が起こりそうだ」

「今その話をしてたんだよ」

達人級の剣の腕と人間離れした感覚を持つ父さんが言うからには何か本当に当たり

そうだな

「じゃあ行ってくるよ」

「ああ気を付けろよ」

「いつてらっしやい」

「あと、二人とも気を付けてね。もしかしたら二人にも何かあるかもしれないからさ」
「分かった」

二人に忠告して玄関を出る

この後は登校中命雛兄弟に会ってから禊が武器を持ったかを聞いてからは昨日と変わらない時間が昼休みまで流れた

『5時限目は体育館で行います。時間に遅れないように移動してください』

昼休みの開始と同時に放送が流れる

「禊、ちゃんと持っていていけよ?」

「持った。いつでも行ける」

「朝に何やら忙しそうでしたがまさか持って来ていたとは…先生方に見つからないようにして下さいね?」

「分かってる」

禊は改造モデルガン二丁を内ポケットに入れ、メリケンサックを前ポケットに入れる。何で持っているのは良く不良に絡まれる事があるとかで休日は持ち歩いている

とか…危ねえなコイツ。持って来させるように言った俺が言えることではないけどな
「取り敢えず弁当食つてからにしよう。あと30分はあるからな」

「そうですね。雪はこれから不吉な事が起こると思つて居るのでしよう？雪の勘は良くも悪くも当たりますからね。ならば今のうちに食べていた方が良いでしょう」

「食べ終わった」

「早っ！まだ半分も食つてないんだが」

「禊はいつも最初に食べ終わりますからね。何故でしょうか？」

「知らん」

禊は色々と規格外だからな。頭脳は燈、実行は禊。この二人とまともに戦う奴は早々いないだろうな、知らない限りは…

「私は食べ終わりましたがこれからどうします？」

「十分前に体育館に居れば良いんだろ？だったら丁度十分前に居るような感じで良いんじゃないかね？」

「そうですね。では本を読んでいきましょうか」

そうして俺たちは本を読み始めた。俺は禁書目録、燈はシャナ、禊はデュラ○ラ
そして5時限目開始まで15分前になった

「では移動しましょうか」

「だな…なんか長くなりそうだ」

「早く終わってくれたら良いのですが…まあ耐えるしかないですね」

「行くよ」

「ああ、はあ…「眠い、ですか？」…なんで分かった？」

「雪は「はあ…」の後は大体「眠い」と言いますからね。長年一緒に居れば分かりますよ」

「幼馴染って凄いやな」

そんな話をしながら廊下を歩いて居ると2—Aの教室から蓮子とメリーが出てきた

「おー何時もの三人組じゃないか！体育館まで一緒に行こうではないか」

「口調変わりすぎだろ。どうした」

「それが今から体育館で行うことがどうやら超能力の事らしいので蓮子のテンションが上がっているんです」

「私からすればメリーさんもそう見えますが？」

「その通りよ。何で分かったの？」

「秘封倶楽部の人を超能力の事でテンションが上がらない訳がないと思ったのですよ」

「燈君には敵わないわね。燈君が超能力と言われても納得するわ」

「ありがとうございます」

二人が仲良く話しているのを俺と禊と蓮子が後ろから見ている

「何であの二人付き合っていないの？」

「俺が知っていると思うか？」

「だよね」

「お似合いなのに」

二人で小声で話す

「そう言えばその話を誰から聞いたのですか？」

「あくさつき偶然校長室の前を通ったらそんな話が聴こえたから暫くその場に居たんだよ」

「褒められた趣味じゃないな」

「盗み聞きか」

「私もそう言ったんだけど…」

「後悔もしてないし反省もしていない！」

「断言するな！」

「もうすぐ体育館ですよ」

話していたら体育館に着いたみたいだ

中にはほぼ全校生徒が居てクラス順に縦に並んでいた。蓮子達と別れ俺たちも並ぶチャイムが鳴り5時限目が始まった。全校生徒が静かにクラス順に並んでいる

今のステージの上には10個の椅子の机、机の上に何かの機械が置いてあり、教卓とスタンドにマイクが付いている

『えーテストス：はい、大丈夫ですね。初めまして翠刹高等学校の皆さん。私は超能力を調べている松戒^{まつかい} 廣戸^{ひろと}と申します。これからは私が調べた超能力の事や超能力の在り方について話していこうと思いますのでご静聴をしてください』

教卓の前に立って話す見た目三十代前半の男：松戒さん。蓮子がこつちを見ながらドヤ顔をしている。うざい

『ではまず私の調べた超能力の事からです。この世には沢山の種類の超能力があります。超能力は進化し続けるもので、退化しようが、停滞しようが、それはそれで完成されているのです。仮に、別の概念を超能力を加えるとそれは少なからず別のものになってしまう。そんな超能力の中には皆さんがよく知っている火を操る能力、水を操る能力等あります。しかし同じ能力であろうと、強弱までは同じではありません。つまり能力にも個人差があります。私が今まで見てきた能力の中では空間を操る能力もありました。能力を持つ人は多くありません。大体100人程です。もしかしたら皆さんの中にも自覚していないだけで能力を持っている人が入りかもしれませんね

ここまで話しましたが口頭だけでは分からないと思うので私の協力者である彼女は水を操ります。実際にやってみましょう』

松戒さんがポケットから松戒さんの手程の大きさの石を取り出した。ポケットどれだけ大きいんだよ…

石をみんなに見えるように上に投げるとピキインと音が鳴り石が凍った

生徒の歓声の声や拍手が体育館中に響く。俺は一応拍手はしておくけどあまり凄いととは思わなかった。何というかつまらないと感じたから

「つまんな……ん？あの人……」

今石を凍らせた人表情が変わっていない？まあ、そういう性格ならそうなのかもしれないけど……禿とかいるし……気になるな

『拍手歓声ありがとうございます。このように超能力は存在します。では次に超能力の在り方についてです。先程言いましたが能力には強弱があります。人に害がないものや人を傷つけてしまうものまであります。中には戦争を終わらせてしまうほどのものまであります。ではその超能力を平和のために使うのはどうでしょうか？この世から争いをなくせば平和になるのではないのでしょうか？』

この瞬間松戒さんの話に興味が無くなった。争いがなくなればこの世は平和になる？争いはいろんな事から起こる。超能力を使えば争いが無くなる訳がない。また新しい争いを生むだけだ。それにその『平和』は松戒さんの平和だ。それに在り方から自分の意見になったし

興味が無くなった話であつても聞こえてくる。一応聴いておくとして、さっきの人のことを考える

『……………さて、ご静聴ありがとうございます。では次に皆さんには私の協力をしてもらいたいと思います。私の後ろにあること機械は超能力を持つているかどうかを調べることの出来るものです。やり方は簡単です。どちらでも構いません。腕にこの吸盤みたいな物をつけるだけで構いません。では試しにやってみましょう……………このように超能力を持つている人には『色』が出てきます。白色は能力を持つていません。水色、青、緑、紫の順に強いものを示していきます』

機械のモニターみたいなどころの色が変わるみたいだ。さっきの石を凍らせた人は緑だ

『では一年生からお願ひします』

一年一組からステージに上がって吸盤を腕に付けていく。大体が白色だ。時々青や緑になった奴らがいて戻っていく。中には右手を挿んで「俺の右腕が疼きだした！」とかやっている奴がいる

「盛り上がってるな」

「そうですね。皆さん『もしかしたら自分にも特殊な能力が有るのかも！』と思われるのでしょうからね。分からないわけではありませんが…私にも超能力というものが使

えるかどうかは気になりますから。能力にもよりますけれど」

「自分にあると思う?」

「さあなあつたらあつたで面倒臭いことに巻き込まれたりありそうだからどうでもいい」

「雪らしい意見ですね。それと面倒臭いことに巻き込まれる体質なのを自覚していない事に私は驚きました」

「え?俺って巻き込まれ体質?とりあえず不幸だー!とか叫べばいいの?」

「やらなくて結構です」

「うるさいだけ」

「俺の心が傷ついた」

三人で話していると二年生の番まで回ってきた。蓮子がステージに上がっている。メリーはまだ後みたいだ

「何でこつち向いてるんだよ。こつち見んな」

シツシツと手で追い払うようなジェスチャーをすると椅子に座る。多分「私に能力があつたら驚くだろう!」とか思っているように実際にあつたら言いそうだな

蓮子が吸盤を腕につけて少し経つとモニターが緑色になった。蓮子が凄い勢いでステージから降りてこちらに走ってくる

「ねえねえ！私あったよ！私に能力があったんだよ！驚くだろう！」

「（似たようなこと言ったぞこいつ）無自覚に使ってるかもな。今までで何か不思議なことやおかしな事があったか？」

「え？うーん、どうだろう。秘封倶楽部の活動が長引いて夜になる事があるんだよね」
「警察エ」

「それで夜空を見上げて、星を見ると時間が、月を見ると今いる場所が分かるんだよね」
「それでしよう。それはいつも使っているのですか？」

「時々かな？」

「次はメリーみたいだよ」

蓮子の能力が判り次はメリーの番になった。吸盤を腕につけるで暫くするとモニターが緑になった

「メリーさんも能力が存在ありみたいですね。どんな能力でしょう？」

「あーそう言えば昨日話した神社の異世界の入り口見つけたのメリーなんだよね。でもそれは私には見えなかったんだけど」

「この二人確信犯じゃね？」

「それな」

「これでお二人は能力持ちだと確定しましたね。この学校に通う生徒は能力持ちが多い

のでしょうか？」

「まあ何人か居るみたいだな。紫は見えてはないが」

話していると一組の最後の奴がやった機械のモニターが紫になった

松戒さんも驚きで目を見開いている

『凄いです！紫は10人に一人以上の確率です！私が知っている中では紫以上の色は見
たことありません！』

おおー！と体育館の中がまた歓声と拍手で埋め尽くされる

「10人に一人ですか。まさに天才というものですな」

「でも燈と禊は彼奴よりも凄いよな。もしかしたら二人とも紫だったりしてな」

「雪もそうなる」

「そうですね。私達が紫ならば雪も紫でしょう」

「あり得ないあり得ない」

俺が燈と禊と同じなんてあり得ない。確実に二人に劣っているから

「雪の番ですよ。一応私たちも行きましょう、禊」

「分かった」

「あ、マジだ。回るの早いな」

「行つてら〜。良い結果待ってるよ〜」

「是非3人の話も聞きますからね」

俺たちの番が回って来たのでステージに上がる段差の前に並ぶ。燈と禊は前のやつに頼んで順番を代わってもらったらしい。背後にいる

蓮子とメリーからの言葉に関しては能力があつたとしても話すことなんてないんだな、これが

「2—B、博咲 雪です。よろしくお願いします」

「博咲君ね。まず座って」

「はい」

俺の番になつたので空いた席の前に立つてクラスと名前を言つてから、目の前に座っている二十代前半の金髪ポニーテールの女性に促され椅子に座る

「じゃあ腕を出して」

「はい」

「じゃあ暫く待つてね。雪って滅多にない名前よね」

「それは俺も思いますが今更言つたところでどうすることもできないんで気にしていません」

「ふーん。貴方つて女性と間違われることないかしら？」

「ありますよ。月に5回は」

「まあ分からなくはないわね。見た目は中性的で声が女声なんですもの」
「それはそつちの二人に昨日言われましたよ」

腕に吸盤を付けてから結果が出るまで女性と話す。何気に俺が気にしていることをバンバン訊いてくる

「そういえばさっきの石を凍らせた人の事なんですけど」

「?何かしら?」

「間違つてたら言つてください。その人つて『生きていますか?』」

「!どういう意味?」

「最初はポーカーフェイスだと思つていたんですが、登場してから『一度も瞬きをしていません』。2分間ずっとはきついと思えますよ?」

「どうかしらね。それは想像に任せるわ」

「そうですか。少し気になつただけですので今のは訊かれなかつたことにしてくれて構いませんよ」

「……そう」

俺は気になつたことを訊いてみたけどあの反応からして生きてる可能性は低いかな。他にも瞳孔が開ききつていたりなどなど。まあ、俺に被害が無ければ良いし。最後の間は怪しすぎるけどな

「結果が出たわ……?あれ、色が出てこない?」

モニターを見るが黒から画面の色が変わっていない。故障?と思われたが…

「松戒さん!機械の画面の色が変わりません!」

「こつちもです!」

「こちらもです!」

機械が動かないところは俺のところ以外に二つあるみたいだ。何となく予想はできるが一応横を見る。まあだよな、と思つてしまった。腕に吸盤を付けているのに燈と襖の機械の画面が黒から変わっていない。まあ俺でそうなんだから二人がこうなる事は何となく察してしまった

「?これはどういう事だろう?」

松戒さんが自分に吸盤を付けたら画面が緑になった。この人能力持ちなんだ。体育館にいる生徒の半数は近くにいるやつと話しているがもう半数(蓮子、メリー含め)はこつちを見て首を傾げていた

「すみませんがもう一度よろしいですか?」

「はい」

もう一度吸盤を腕につけるが黒から変わらない

「まさか……ありがとうございました。では、終わるまでお待ち下さい」

「分かりました。ありがとうございます」

終わつたようで礼を言つて立ち上がる。丁度同じタイミングで燈と禊も立ち上がる。少し歩くスピードを上げて燈の元まで近づき耳元で囁くように言う

「舞台袖ぶたいそでからいくつかの気配があるけど、何か感じるか？（小声）」

「……気配はありますが感情と言いますか……こちらに何も興味がないと言えればいいのか……よく分かりませんがこちらに危害を加える気は無いみたいです（小声）」

「そうか。ありがとう（小声）」

燈に確認してもらつたが舞台袖にある気配はこっちに何もする気は無いみたいだ。あとは禊に一応警戒してもらうだけ

禊に警戒してもらうように頼んだら引き受けてくれた。ステージから降りると燈が話しかけてくる

「今気付いたのですが外からも気配を感じます」

「！……先生じゃないのか？」

「そうかも知れませんが数が15はあります」

「今の体育館の先生の数は……」

「15人」

「サンキュー。となるとクラスの担任は全員来てるな。てことは……事務の人は……無い

な」

「副担任の方でも全員来る必要はありません」

「だな。じゃあ誰だ？」

「確かめに行く？」

「理由もなく外に出る事は出来ないだろ」

「トイレに行くと言ってこっそりと外に出るのはどうですか？」

「そうするか。誰が行く？」

「……………じゃんけん」

「よしー！」

「「じゃんけん…ポイ！」」

外の気配の正体を知るためにトイレから出る必要がある。それを誰が行くのかというじゃんけんをやった結果俺がグー、燈、禊がパー…………

「俺かよ…」

「やったね」

「ではよろしく願います。念の為危ないと思ったら戻って来て下さいね」

「了解…こんな所で二人がパーを出すとは…流石双子」

渋々近くの先生に言ってから体育館のトイレに向かう

「全く…面倒だな」

トイレに入ってから中に誰もいないことを確認してから向かい側にある窓を開ける。と、その瞬間に炎が下から襲いかかる

「っ！っぶねえ！何だ！」

咄嗟に後ろに跳び回避する。窓から石を凍らせた人みたいは無表情で身長が高い男性…

「いやいや…それは無いだろ。アンタ天津飯？」

メキメキメキメキ！と、男性の背中から腕が生えた。それは某アニメのキャラと同じようだ。違いがあるとすれば額に目がない事くらいか

「よく分からんが敵…って事で良いのか？」

男性は答えないが、四つの手から炎が飛んでくる

炎を回避すると後ろの壁が破壊され体育館内が見えるようになった

「敵ってことで…ぶっ倒す！」

第3話 体育館大騒動

Side 雪

今、俺の後ろのトイレの壁が壊れ、体育館内が見えている状況で目の前に腕が四本ある背が高い男性と対峙しているわけだが……

「さて、とく倒すとしてもどうやるか。能力なんて俺には持ってないだろうし、素手で戦うのは（物理的に）手数で負けているし……だからと言ってここで白雪を出しわけにもいかない。あるとしてもせいぜいモップくらいか？まあ無いよりはマシか」

近くにある掃除用ロツカーから急いでモップを取り出す。後ろからは戸惑っていたり驚いたりなんかこの状況に目を輝かせている（であろう）声聞こえる

モップを構えながら（なんかのアクション映画みたいだ……）松戒さんに聞こえるように話しかける

「松戒さん！この人たちのことご存知ですか？」

「いえ？私は知りませんが……その人は何者でしょう？」

「俺も知らないから訊いたんですけどね。この人、さつき石を凍らせた人と同じような感じなんですけど協力者って事はないですよね！」

「それはあり得ませんよ。私も想定外ですよ」

どの口がほざく。動揺どころか何も反応しない時点で知っているようなものだろう

「じゃあ舞台袖に居る人達は一体どういう人なんですか？」

「おや？ 気付いていましたか。という事は、体育館外に待機させている彼らのこともご存知なのですか？」

「それを知るためにトイレから抜け出そうとしたらこの人に襲われましてねえ。その言い方だと認めたということではないんですか？」

「構いませんよ」

松戒さんが言い終わると前に居た男性が四本の腕を伸ばして俺を捕まえようとする

「そんなんじゃあ捕まるわけじゃないじゃん」

横に回避しながら脚にモップを差し込み転ばせる。すかさず背中の腕を脱臼させると、あることに気づいた

「おいおいおい！ 本当にこの人死んでるじゃん！ 何ゾンビ？ バイオハザードかよ！」

体温が無く、冷たい。さらに脱臼したのにうめき声の一つもあげないとかおかしいだろ

「裸！ 舞台袖に居る人が来ます！ 準備して下さい！」

「分かった」

燈が襖に指示を出すのと同時に、松戒さんの手を二回叩く音がすると60人程の無表情の人が現れた。石を凍らせた人も居る………いや、

「舞台袖にそんなに入るわけねえだろ!」「何だ!? 肩車でもして居たのか!」「形態変化でもしてたのか!」

と、体育館中から何処か間違えている発言が飛び交う。ここは普通怯えて我先と体育館から出て行くのが普通の反応ではないだろうか? あ、そういえばこの学校でマトモな人なんてあまり居なかったわ。

でも、まあ、一応マトモな反応をしている人は何人かチラホラ居る。大半が先生だが………

「雪! 出口の確保をお願いします! 前の方は私達でどうかします!」

「了解!」

俺の足元で倒れて居る人の足元からモップを持ち、死人に意味があるかわからないけど首を一回転しておく

体育館の出入り口まで移動すると15人の人が居る。それぞれが手やら脚やらに人が水が纏っている

「こんなもんか。それじゃあやりますか。行くぞ白雪!」

Side 燈

「さて、では雪が出口を確保してもらっている間に私たちもやりましょうか。禊はどうします?」

「前に行く」

「分かりました。雪の方が終わるまでに、出来るだけ敵の数を減らしてください」

「分かった」

禊に指示を出すと松戒さんの方も準備ができたみたいです。さあ、どうなりますかね
「全員行きなさい!」

松戒さんの言葉とともに無表情の人々が一齐に動き出す。中にステージから降りる人、ステージに残りながら手から雷や氷の塊を飛ばす人で別れている

「これはどうしたものか…と考えていると

「おー!なんか分かんないがこっちに来るぞ!しかも後ろから雷が飛んで来るし、はは

はーみなぎってきたー!

「お…おい…逃げた方が良いんじゃないか?」

「あ?なんだお前?怖いのか?」

「!アイツらなんか怖かねえ!野郎野郎オブクぶつラツシヤー!
殺してやら!

「ははは!良いな!そうでなくちやあな!」

「くらえ!チヨーク爆弾!」

「お前何チヨークになんてもん付けてる!周りのことも考えろ!爆裂手裏剣!」

「アイエエエエエ!ニンジャ!?ニンジャナンデ!」

つてお前も周りのこと考えろ!

「なっ!?なんだあいつらの動き!?まるで無駄のない無駄に洗礼された無駄な動きは!」

「うおおおおお!燃えろー!俺の中に眠る何かー!」

「うおおおおお!写輪眼!」

「九頭龍閃!」

「ふっそれは残像だ」

「貧弱貧弱!ウリイイイ!」

「いや、お前それ、ダメージ絶対入ってないと思うよ?むしろお前の方が貧弱貧弱言われて倒される方だと思うよ?」

「何だアイツ！敵がゴミのようだ！」

「ほら！アイツだよ、2―Bの命雛 禊！何でメリケンサック持ってんだ？まあいつか。良いぞ！やれ！」

「……………これならかなりの数を減らすことができるでしょう。雪が居るならば必ず「カオス過ぎるだろ……取り返しがつくレベル超えてるだろ……頭痛くなってきた……………」と言っているでしょう

「ねえ燈。大丈夫なの？その……………この状況。禊が最前線で暴れてるけど……」

「そうよ。それに雪君が一人で出て行ったけれど外にもあの人達みたいなのが居たら……」

「居ますよ、15人程……いえ、居ましたよ。の方が正しいですかね」

「15！雪が化け物並に強いとしても何も持っていないのにそんな数に勝てるわけないじゃん！先生に言わないと！」

「待つてください。蓮子さん、今先生方が向かったとしても足手まといになるだけですし、意味はありませんよ」

「それってどう言う……」

——意味？と言う前に体育館の出入り口から女性の声が響く

「おーい、燈……こっちは終わったぞくびったし15人だったぞ。よく判ったな、この人

「走る音つて自分で言う奴と、そんな所初めて見た」

「速さが足りない！」

「……………何なんだ…この学校の生徒たちは…」

——全員早く反応して体育館を出て行く。最後の言葉は2年の学年主任です。襖は誰よりも遠くにいたのに誰よりも速く体育館を出て行った。襖の後に蓮子さんとメリーさんが出て行き、生徒達が出て行ったら先生方が皆出て行った。私は最後に出て行きました

「雪は行かないのですか？」

「あー、燈は先に行つてて良いよ。俺は少し松戒さんと話があつてな」

「そうですか。気をつけて下さいね」

「ああ、そつちもな」

体育館内に雪以外の生徒がいない事を確認し、校門に向かって走る

雪が言った時は好奇心が強く出ている気がしました

Side 雪

燈が最後に出て行ったの見届けてから未だにステージで立っている松戒さん（恐らく偽名）に中央まで移動してから話しかける。周りに暴れる生徒達のにやられた人たちが転がっている

「逃げなかつたんですね」

「いや……あの……その、翠利高校の生徒は凄いですね。一応中にはレベル紫が居たのですが……」

「それは能力の有無じゃ勝敗は決まらないということが分かったから良かったんじゃないですかね」

周りに転がっている人達に同情してしまいそうになる。少なくともあんな奴らと戦わせられた時点で無事なんて事はそうそう無いだろう
「ところで博咲君はどうしてここに残ったのですか？」

「その話し方がイラつくから変えてもらっても？」

さつき、何で俺と燈と禊の色が変わんなかったのかをアンタ達が雲隠れする前に訊いておこうと思いましたがね」

そう。俺が此処に残った理由は能力の事だ。どうしてこんなことをやっているのか

はどうでも良い。それよりも、俺と命雛兄弟のモニター？の色が変わんなかったのかが分からなかった。それが判つたらさっさと此処から立ち去るつもりだ

「ああ、そのことか。まだ判つてないことが多々あるが、恐らくレベル紫の更にその先だと考えている。そうだな…判んなかったらと○る魔術の禁○目録のレベル0〜レベル5のものだと考えれば想像しやすいか？」

「物凄く判りやすい。ていうことは白は0、水色は1、青は2、緑は3、紫は4、その…俺達に出て来たのは5ということか」

「そういうことだ。しかし、俺の考えではお前達…色は変わらなかつたから黒にしようか…中には既にその先に行っているものもいるだろう」

「ふーん…（燈と禊は確定してるだろうな）」

その黒の先というのはどういう条件で到達するのかは判らんが命雛兄弟は行っているだろうな。そうなると二人とも一方〇行を超えているということか

「あくあともう一つ。そこら辺で転がってるゾンビ？は現代でできることなの？」

「それは森とかで転がっていた死体を素体にして、俺に協力してくれなかつた能力持ちから能力を奪…ゲフン！提供してもらつたものを与えただけの事だ」

「提供してもらつたんだ。良かったね。その人が今そこら辺で転がっているような気がしてならないけどな」

「良い勘だな。お前のいう通りそこから転がっているのは能力を提供してくれた奴だ」

「良い趣味してるのな」

「それはどうも」

成る程成る程、つまりコイツは中々のマッドサイエンティストか。でも、コイツがここまでやる理由がわかんないんだよな。どうでも良いけど

「で、お前は訊いたがこれからどうするんだ？」

「ん〜もう用は無いから此処から離れるつもりだけど？」

「何だ。自分の能力の事を知るために俺たちと戦うや、これ以上は見過ごすことはできないとか言って戦うと思っていたのだが、違ってたんだな」

「まあな。もしかして、上条さんみたいなこと言うような展開を期待してた？」

「まあ俺としては紫の先の力というものが気になっていてな。是非ともそんな展開になつて欲しいものだが」

「残念ながら俺は『自分に攻撃して来ない限り、戦わない』性格でね。外の人達は俺が構えた瞬間に攻撃して来たから今頃上半身と下半身がお別れになつてたりマミってるのもあつた様な気がしたな」

「そうか。なら、仕方がないな。ここは諦めるか」

松戒さんが『諦める』と言って背を向けたら、周りから雷やら氷やらが俺に殺到して

来た

「へくまだ動けるんだ。もう死んでるから痛みとか無いのかな？」

「そういうことだ。ではまた会う機会があるなら会おう。さらばだ」

チツ
そう言つてすぐに消えた。あの野郎……俺にコイツらの処分させる気だったのか。

S i d e 燈

雪が体育館の中央に移動している時、私は校門に着いていた。生徒の皆さんはそれぞれで固まって話をしています

「あー！黒棺やれば良かった！」「鼻フックデストロイヤーハリケーンやりたかったな」「アイツら相手に鼻フックは頭がおかしいだろ」 e t c ……

など……個性豊かな人達ですね

「雪は？」

「彼なら中で好奇心で何かやっているのではありませんか？もし、戦っていたとしても問題は無いでしょう」

「……………みたい」

此処から微かに見える体育館のドアからは雪の斬撃が見えます

「確かに、あれならば大丈夫でしょう」

「ねえ雪君」

「どうしました、メリーさん？」

「その…どうしてあんなに冷静でいることが出来たの？」

「……………そうですね。個性豊かな皆さんが愉快に騒いだお陰かもしれません。もし、

絶叫でしたら先ほどのように落ち着いているか私にも分かりません」

「そう…でも、燈君なら常に冷静で居られると思うわ」

「そうでしょうか」

「何であの二人付き合っていないの？」

「さあ？」

「メリーが告白すれば燈ならOKすると思うけど……」

「どうだろうね」

二方向で話をしていると体育館のドアから雪が出てきました。どうやら怪我はない

らしく衣服には何処にも血が付着していません

「あー逃げられた。なあ燈。あの人達、死んでる体に能力を与えたら動いたって言ったんだけどこの話信じるか？」

雪はこちらに歩きながら話しかけてきます。雪からは嘘を言っているようではないようなので此方も思ったことを言わなければなりません

「到底信じる事が出来ませんが、雪は嘘を言っているわけではないようですね。そもそも、松戒さんが嘘を言っている可能性は如何でしょうか」

「あーどうだろう。そんな感じはしなかったけどな」

「雪がそう言うのならばそうなのでしょう。では、その話は本当なのかもしれません」

この話はすぐに蓮子さんの介入により中断されることになりました。しかし、本当に死体に能力を付与した場合、動くなんて……松戒 廣戸…彼は一体何者なのでしょう…

その後、各自警戒をしながら教室に戻り自分の荷物を持って下校ということになった。明日の学校は会議によって決めるらしい

「何なんだアイツは！ハハハ！強過ぎる！30人の能力者相手に刀一本で突破するとは！本当に高校生か!？」

「一度落ち着いて下さい。こちらで生徒のピックアップをしておきました」

「ほう、仕事が早いな。で、何人だ？」

「先程言っておられた、博咲 雪、彼は異常です。無意識の内に靈力を扱っていました。しかし、能力を使っていたようには見えません」

次に命雛 禊、彼は最前線で戦っておりまし。誰よりも速く、誰よりも強く行動しておりました。恐らく能力を無意識の内に使っているのでしょう。

最後に命雛 燈、命雛 禊の兄である彼は特にこれといった活躍はしておりませんが、あの状況下で暴れていた生徒以外、彼を除いては怯えていました。しかし、彼は常に冷静でいることができ、的確な判断の指示をしておりました。

「この三人です」

「ご苦労だった。全員がレベル黒か。そうだな、命雛家は無理だろうな。となると、博咲家だな。近日中に博咲家を襲うぞ」

「了解しました」

第4話 前日の話し合い (?)

Side 雪

あの出来事から次の日、俺は今、命雛家の家に居る

前日は金曜日なので今日は土曜日だ。学校の会議では『来週の日曜日まで学校での全活動は禁止とする』という事になった。つまり部活ができないという意味なのだが俺達は帰宅部なのでいつも通りになるだけ

そんな訳で燈からメールで『前日の事でお話ししたいことがあるので家に来て下さい』と送られた。好都合なので『了解』とだけ返して命雛家まで来たのが1時間前。チャームを押すと燈が出迎えて来て部屋まで案内された

部屋では襦がスプラトゥーン2のガチを相手と大差をつけて勝っていた。俺が部屋に入ると襦はすぐに本体を片付ける

で、燈がお茶を3人分をお盆に乗せて持ってきて来た

まあ、ここまでは普通だろう。よくある光景だ。問題はここからだ

燈がお茶を二人が向かい合って勉強ができるくらいサイズの広さのあるテーブルに置いていると襦は何処からかジェンガとランプを持って来たのだ。訳も分からずに静かに

していると燈がトランプをきり三人分に分けて、襦がジエンガの準備をしていた。それから今に至る

「なあ燈」

「どうしました？あ、揃いました。何か訊きたそうな顔をしています」

「何で俺達はジエンガやりながらババ抜きやつてるんだ？揃わなかった」

「危ない」

「？」

「いや、『雪は何を言っているのでしょうか？』みたいな顔をするな。1時間前のメールは何だったんだよ。仕返しにここに置いてやる」

「そうですね。まずはババ抜きを終わらせてからにしましょうか。しかし、そこでは自分の首を締める事になりますよ？」

「え？ちよつ禊待て！そこにやつたら！」

「えい」

「……………終わった……………で、でもここならまだ…チャンスは…………」

ガラガラガラと俺が真ん中あたりの部分を半分出した時にジエンガの塔が崩れたのと俺の精神が一部崩れるのがほぼ同時だった

「これで雪が2連敗ですね。いや、ババ抜きを入れれば4連敗ですか」

「そこ、言い換えなくてよろしい」

「組み立てガンバ」

ジェンガの組み立てながらババ抜きをやっていると燈が上がった。と、ちょうどその時、家のチャイムが鳴る

「おや？誰でしょうか。私は出て来ますね」

「分かった。その間にババ抜きは終わらせてやるよ」

「勝つ」

「勝つのはこっちだ」

そこからは速かった。燈が立ち上がると同時に俺が褌の手札からカードを取ってこっちの手札に同じ数字がないかを見て、揃うとすぐに捨てる。この間約1秒。次に褌の手札からカードを取って1組を捨てる。その間約1秒。これを繰り返してから約10秒。俺の手札には♠?の8。褌には2枚の手札。さつき??の8と♦?の8が燈によって捨てられている。となると、褌の手札は♣?の8とjoker

今は俺がカードを取るターン。俺は剣術をやっているので相手の僅かな動作には敏感だ(と思う)。試しに褌の顔を見ながら右のカードに手を伸ばす。反応はない。次に左のカードに手を伸ばすと僅かに、本当に僅かに目が見開かれた

(勝った！)

勝ちを確信し、右のカードを取ろうとした時一週間前のことを思い出す。あの時は襦が畏として行動した。この事を思い出して手を止める

どうする？ 襦の行動が畏だった場合はjokerは俺に来る。なら左のほうにするか？ だがそれを見越していたら？ だったらこっちはその裏をかけば♣？ は俺に来る

(いや、深く考えるな。ここは目を瞑って自分の感覚で取るんだ)

手をテーブルの上に置き、目を瞑る。その時、襦がカードを入れ替えたような音がした。俺の読みだと右が♣？ の8、左がjoker。それを入れ替えたということは逆になったということ

そこからは反射的に左のカードを取った

「joker? どういうことだ?」

さっきの読みは反対だったということか?

「ひょい」

俺がカードを手札に加え、カードを襦に見えない位置でシャツフリしながら考えているが判らない。少しシャツフルしてカードを襦が取れる位置まで持つていくとすぐにjokerを引く

「またjoker」

「この場合長くなるのが定番だよな」

それからしばらくお互いがjokerを引き続けるようなことが起こった。長く続いたババ抜きが終わったのは階段から二人分の足音が聞こえ、今居る部屋のドアが開く音と同時にだった

「やつほー。昨日ぶり！」

「よっし、5連敗阻止！」

「蓮子とメリー。いらっしやい」

「お邪魔します。二人は何やっていたの？」

「ババ抜き。今やつと勝てた」

「そのジエンガは？」

「ババ抜きと一緒にやっていた」

「同時に？」

「うん」

「(器用(だ)ね〜)」

蓮子がドアを開くと同時に俺が♣?の8を取る

メリーからの質問に答えていたけど第三者から見れば『広いテーブルで横に崩れたジエンガを放っておきながらババ抜きをやっている二人』という事になるのか。いつもの事だ、気にするな

「どうでしたか?……その様子だと雪が勝ったみたいですね。良かったじゃないですか。5連敗を防ぐことができて」

「何、煽っているのか?」

「どう受け取るのかは雪の自由ですよ」

二人分のお茶をお盆に乗せて燈が持つて来たところで煽られた

「それにしても二人の家って広いんだね。あまり想像していたのと違うな」

「そうね。そういえば雪君の家にも行ったことがないような」

「雪の家は私たちの家よりも広いですよ。道場が有りますし」

「え!?本当?じゃあ明日メリーと一緒に雪の家に行くね!」

「別に来てもいいけど。お前から秘封倶楽部?の活動は良いのかよ」

「別に一日くらいは大丈夫だよ」

「それがキツカケで不思議が一つ消えた。みたいな展開になって欲しいものだな?」

「そういうこと言わないで!」

そんな雑談をしながらジエンガを組み立てていると、燈がカードを集めてきり始めた

「では、せっかく5人集まったので7並べでもやりますか」

「となると1人10枚くらいか?良いと思うけど他は?」

「やる」

「何だかんだ私たちちつて揃ってこういうのをやる事が無いから私はやりたいなくメリーはどうするの?」

「私も蓮子と同じ理由でやるわ」

「では配りますね。jokerは無しの3回までパスの使用ができます」

燈が手際よくカードを配りながらルール説明する

「ところでさ」

「どうしました?」

「ジエンガ、どうするの?」

「もちろん真ん中に置いてやりますよ?」

「崩れた時の損害が……」

「その時は場にあるカードを並べれば問題有りませんよ?」

「うん」

そんなこんなで7並べが始まった。手札は普通である。裸エプロン先輩みたいな角のカードの寄せ集めじゃなくて良かった

「では、♣?の7を持っていたお方から7並べを開始し、その反対側のお方がジエンガを始める。時計回りで周回するという事でよろしいですか?」

燈の提案により順番が決まった。♣?の7を持っていたのは蓮子だった。その反対

側に居るのが俺。7並べの順番は、蓮子↓燈↓俺↓襦↓メリー。ジエンガは、俺↓襦↓メリー↓蓮子↓燈で開始される

「でき、2人はどうして来たの? (まずは一番下の真ん中を取るの定石。そうだな、じゃあ一番上の右に…と)」

「昨日の事を話し合いたいと思ったからね。燈達の家の場所は知っていたからね」(??の6を置く)

「四月末くらいに尾けられていた感じはしていましたが貴女達でしたか」(??の5を置く)

「そういえばあった」(下から二番目の左のパーツを抜き取り一番上の右に置く)

「え? お前達そんな事やってたの?」(◆?の8を置く)

「私はやっていないわよ。蓮子だけよ」(下から二番目の右のパーツを抜き取り一番上の真ん中に置く)

「ストーリーじゃん」(襦が◆?の6を置く)

「そ…それよりもさ、昨日の事話そうよ!」(下から三番目の真ん中のパーツを抜き取り一番上の真ん中に置く)

「そうですね。何から訊きたいですか?」(下から四番目の右のパーツを抜き取り一番上の右に置く)

「それじゃあ、雪君は私たちが外に出た後体育館に残った時に何していたの?」(◆?の5を置く)

今7並べとジエンガが一周した。まあまあの出だしだと思うが燈の手札次第では一抜けしそうだ。燈だったら思い通りにカードを自由に配る事が出来そうだし。やらな
いと思うが

メリーの問いには答える事は簡単だがその後の質問と蓮子の食いつきが一瞬で予想
できてしまった

※ここから7並べとジエンガの経過は会話の後の表示はしません

「斬った」

「どうやって?」

「刀で、こう真つ二つに」

「その刀は何処から出したの?」

「……………(言っちゃいけないよな)ノーコメントでお願いします」

「えー?何でー?私達の仲じやないか」

「生憎これは誰にも話せない事なんでね」

「それは燈君達にも?」

「私達は知っていますよ。まあ雪の口からは訊かされていませんが」

「じゃあどうやって?」

「2人が遊びに来た時に父さんが言っちゃったんだよ。何でかね」

「これは秘封倶楽部としては知りたい事だね。まあ明日雪の家に行くからその時知る事にしよう」

「父さんが言うかね」

そんなこんなで秘封倶楽部の2人が明日俺ん家に来る事は確定した

7並べはまた一周して燈が??の3を出し、ジエンガでは2段ほど積み重なったところだ。ジエンガの方はペースが早い気がする

「これから学校どうなると思う?あ、パスで」

「普通に考えたら休校になるだろうな。あと警察がずっと立っているとかありえそう」

「今朝禊と学校に行ってみましたがkeep outのテープは張られていませんでしたよ」

「パス」

「もしかして学校は警察に通報してないのかしら」

「まあ普通に考えたらどんな言い方したらまともに取り合ってくれるかね。『大人数の超能力を持った人達が襲って来た』なんて言ったら病院を勧められそうだな」

「まあ、警察側…もつと言えば政府の方達が超能力の存在を知っていて、尚且つ認めてい

る。となると話は別ですけどね」

「確かに、それに生徒だけでどうにかなったしね！下手に警察が沢山来てもパニックになつて拳銃をぶつ放してどうにかなるとは思えないし」

「ある意味パニック状態でしたけどね」

「でも、蓮子の意見には同意するかな。あの後残つてたけど床に転がつてた人達全員起き上がったて来たし」

「バイオ○ザードみたいな展開ね」

「まあ死人が動いているって言つてたな。中にはレベル紫？だっけ。5人くらい居たみたいだぞ」

「実質雪はその人達全員を斬つたと言う事ですな」

「そう言うことになるな。あくそうそう。俺たちのレベルの事なんだがな、どうやら機械は正常に動いてたみたいだぞ」

「どう言う事？確か3人はモニターの色が黒のまま変わらなかつたけど」

その事は簡単に説明した。蓮子とメリーはまだ理解しきれていないみたいだけど双子は分かつたみたいだ。一方○行を超えているなんて有り得ないなんて言われただけだな

7並べは?と◆?のところは揃つた。蓮子と禊が一回パスしたが

ジエンガは下の方がヤバイ。あと2、3回取ると崩れそうになっている。しかも右寄りに傾いているし（やったのは燈）。今は俺の番で何とか成功した

「そうだ！明日雪の家にここに居る全員で集合して松戒さん達のアジトを探さない!？」

「……………（絶句中）」

「マジレスをさせてもらいますと、不法侵入等をする事になりますのでやらない方が賢明かと」

「ふっ！そんなのは些細なことよ！法なんて気にしていたら不思議なんて解明できないでしょー！」

「……………ねえメリー」

「何かしら」

「今までに不法侵入等した回数は何？」

「手足の指じやあ数えにれないわ」

「通報」

「雪。君はこんな言葉を知っているかな？バレなきや犯罪じゃないんですよ」

「燈どうする？このままだとコイツ等「私を含めないで」明日やりかねないぞ。しかも俺の家の前から出発しそうだ」

「私達がストッパーになりましょう」

メリーの言葉によりスマホを取り出し1を二回、0を一回押そうとしたら禊が無言で首を横にゆっくり振るからやめた。代わりに燈に相談してみたところ俺たちも行く事になった。ちくしょう

蓮子がなんか饒舌に話しているとジエンガがガラガラと崩れた。この時の番はメリー

「やつとジエンガが終わったな」

「ええやつとね。7並べと一緒にやるのは大変だと分かったわ」

「あ、私は上がりますね7並べ」

ジエンガが崩れた後燈が♣?のキングを出して一抜け。その後は俺↓禊↓メリーの準備で終わった

燈がトランプを、禊と俺でジエンガを片付ける

この日は5人で遊んだ。特に何事もなく平和な1日。俺はこう考えてしまう
(明後日大丈夫かな。俺たち)

明日が心配な俺の考えは幼馴染には筒抜けらしく同情された

「能力者の数は？」

「レベル紫が10人、レベル緑が15人。計25人です」

「2日ではそんなものか。しかし、博咲 雪の父親、博咲 隼（はくぎき みぞれ）に勝てると思うか？ 博咲 雪は空間を歪曲させる奴を平然と斬るような奴の父親だぞ」

「それは此方の作戦を実行すれば博咲 隼が人間離れしたものを持つていなければ、此方の被害を出さずに成功すると思われませう」

「……………ほう…これを行動おう。一応失敗した時のものを後で渡してくれ」

「分かりました」

「それと、実行日は何時やるのだ？」

「月曜日です。その後は2日後の水曜日になるでしょう」

「そうか。それにしても俺たちがやったこととはいえ翠刹高校はどうなっているんだ。休日に学校の活動は全て停止されるだけで月曜日には通常登校なんて有り得るか？」

「現実に起こっているのだから………」

「……………そうだな」

金曜日に松戒達による騒動は確実に1人の人間の人生を狂わせる

第5話 壊れた日常

S i d e 雪

只今の曜日は月曜日。登校日だ

蓮子達との探索？何も見つからなかったよ。まあ蓮子が如何にも呪われそうな年季の入った廃墟に入ろうとしたのを羽交い締めで止めるのが大変だったことしか大きなことはなかったな。疲れたよ

「じゃあ行つてきまーす」

「行つてらっしやい」

家族と何気ないいつも通りの時間、会話をして玄関を出る

そう、何気ない、いつも通りの時間、会話をした

はあ~~~~~………長えよ。長過ぎて欠伸をした回数が数えきれないんだが……

と、3時限目の授業の（経過する体感）時間が長すぎるので頑張つて睡魔と戦つていると、肩を二回小さな物で叩かれた。まあ、俺の後ろの席は燈だけだからゆっくり後ろを向くと燈の顔がドアアップで映る

「どうした？あと、顔が近い」

「いえ、それが…なんと言いますか…何か良からぬことが起きているような気がします」

「良からぬこと？……………まさか俺ん家の事か？」

「まあそうですけど……………」

「心配してくれるのは嬉しいんだがな、父さんがそうそうやられる事は無いぞ」

「それはそうなのですが……………」

なんか煮え切らないような口調で燈が言う。燈のこう言う事は今まであまりなかったはず

今日は早めに家に帰ろうかな。と放課後のことを考えていると先生から教科書の問題を出された

「くくくです」

「そうだ。つまりここは……………」

なんとかかすぐにわかる問題で助かった

「今日は走って帰る事にするよ」

「では、私達も付いていきますね。隼さんと少し話したいことがあるので」

「父さんと？まあ禊がいいって言うなら良いけど」

後ろを向きながら燈と話していると、机に小さなメモが置かれた。そこには襦の文字で『大問題(略)』と書かれていた。因みに意味は「大丈夫だ。問題ない」という意味だ。つまり死亡フラグを立てたのだ………襦ならへし折りそうだが……

「どうやら襦も良いみたいだ」

「ではそういうことなので授業に集中するとしますか」

「俺は燈と話している方が良いがな」

前に向き直って退屈な授業を聞く事になった。暇ないつもの時間。暇ってある意味最大の敵だよな

それにしても燈は父さんと何を話すんだろ？

〈同時刻 博咲家〉

「ここが博咲家か。住宅街から少し離れている。此処なら学校から全力で走って……そう

だな、奴（雪）なら10分程で来そうだな」

「しかし今は学校の3時限目の最中でしよう。急に体調が悪くなったなどの事がない限りは此方には来ません」

「万が一のことも踏まえて二人ほど時間稼ぎとして残しておけ」

「分かりました。ではいつ突入しますか？」

「今だ。時間を伸ばしている時に気付かれるかもしれない。奴（雪）はバケモノだからな。父親もバケモノだろうな」

「記録にはあまりありませんが、レベル紫が10人、レベル緑13人配置につきました」
「そうか。作戦通りにやるぞ」

「……………暦」

「ええ、気付いているわよ。何者かしらね？」

「分からん……………が、数と此処からでも分かる威圧。逆に分かりやすいがな。こちらに来るのは13人、離れた場所に2人」

「どうする？ここは速攻で決めるのが一番楽だと思うけど」

博咲家の台所で父親 霏と母親 暦が松戒達のことについていた

「…曆は此処に居ろ。俺がアイツらを斬ってくる」

「分かったわ」

雲は台所から玄関までゆつくりとした動きで向かう。途中、本物の日本刀を腰にさして

「ああなつちやうと止まんないからなく私も用心しておこうと」

雲が玄関を出ると突撃しようとしていた松戒率いる能力者13人が待ち構えていた

「よう。お前が博咲 雲で間違いないな？」

「そうだ。お前達は何者だ？」

「松戒 廣戸。御宅の息子さんは話していないのか？先週の金曜日の事を」

「そうか、雪が言っていたな。」

なんか自分のエゴを話してから能力測定だかをしてから大人数の死人を操ったが生徒達のキチガイ力と数の暴力に圧倒された上に俺に全員斬らせて帰ったクソ野郎

とな」

「ひでえ言われようだ。事実だからあまり強く言えないが」

松戒は苦笑いをしてから右手を挙げる

「お前の息子はバケモノみたいな奴だったが、お前はどうかだろうか？」

「フツ……確かに雪には10歳の時に越えられたさ。アイツは強い。雪には劣るがお前らに引けを取るつもりはないぞ」

「そうか、そうかそうか！ならば、一応訊いておくが最期に言い残すことはあるか？」

「それはこちらのセリフだ」

雲が言い終わると同時に松戒の右手が下に落ちた

「……………これは……」

「今、お前の右腕を斬った。次は首だ」

「行け」

目にも留まらぬ速さで松戒の右腕が落ちたが、松戒は悲鳴をあげずに顔を歪ませずに短く指示をする。と13人の能力者が雲に向かう

「炎……氷……雷……これが能力か？」

「そうだ。新しい経験だろうか？」

雲に向かう炎たちが当たるところで雲は全て斬る

「居合……か。ならばこれはどうだ？」

「同じものか？」

松戒が雲の居合術に目を見開くと左腕を複雑に動かすとさつきと同じ量の炎が雲に

向かう

霰に炎が当たる瞬間、さつきと同じように炎たちを斬ろうとすると、急激に動きを変えて炎たちが霰を襲う

「……クツ……グ……」

「ハハハハ！どうした！雪は今のを初見で防いだぞ！」

「雪が今のを？此方が対象を斬ろうとした時に動きが変わるものを!?なんて奴だ。我が息子ながら恐ろしいものだ！」

炎たちは霰の異常な反射神経で一部斬られたが大部分が吸い込まれるように全身に当たる

「なるほど……空間を歪曲か軌道操作か……」

「ほう……今ので分かるのか。雪は今のを前の攻撃だけを斬ってから前に進んで無双していたな」

「全く……歳とはとりたくないものだな」

「全くだ」

若い頃の霰だったらもしかしたら、思いついていたかもしれない事だ

「さて、全身傷だらけのところ悪いとだが、後ろを向いてくれないか？……ああ、安心して。後ろから攻撃なんてやらないから」

信用できるものか。と心の中で呟き、後ろを向き終わる前に気付く

(台所に暦が居ない!?まさか後ろにいるのは!)

最悪の予想を否定するように全力で後ろを向く。背後からの不意打ちのことなんて頭から抜け落ちていた

そこには夥しい量で作られた血だまりの中で倒れている妻の姿がある

「……暦?」

「そうだ。さっきの攻撃の時に一緒に空間を歪曲させておいた。俺の右腕が斬り落とされること以外は作戦通りだな。父親がこれなら息子も出来るか?」

「よ……くも……」

「あ?なんか言ったか?」

「よくも……」

「すまないが声が小さすぎてちゃんと聞き取れないんだ。もつと大きな声で言ってくれないか?」

「よくも!」

「おーちゃんと聞こえたぞ。なるほどな、最愛の人を殺されても特攻してこないのか。本当だったら特攻したお前を倒すのが作戦だったんだが……まあ良い。俺たちの勝ちだな」

激昂している震だが、まだ攻撃をせずに居合の構えのまま動かない

「真楼の居合 奥義……」

「！まさか切り札を使うのか？ それを使われたらおそろく俺達は死ぬだろうな。だが、まあ悪いな」

「むらく……」

「やろうとしているところ悪いのだが……無意味だ」

震が博咲家の初代が編み出した奥義を放とうとした時、ポトツと、音を立てながら震の両腕が落ち、ドスツと、音を立てながら震の心臓が鋭利なもので貫かれた

「グゴボガ……」

震は血を吐きながら前に倒れた。そして、博咲家の玄関に一つの血だまりが出来上がった

「始末したことだしさっさとコイツ（震）の死体を持ち出せ。どうだ？ この状態だと何日できる？」

「これだと、そうですね………予定通りに水曜日にはできるかと」

「そうか。引き上げるぞ。雪の奴は帰ってきている様子はないが目撃されると面倒だ」

「あの死体はどうしますか？」

「ん？ 母親か？ そのままでいいだろう。雪の奴に目撃されるようにな」

それだけ言って、霊の死体は持ち出され、暦の死体はそのまま放置された
この惨状を3時間後に宅配の人が見つけ、警察に通報された

S i d e 雪

後2時限♪長く感じた午前中が終わり、さらに今は5時限目が終わるところでテンションが無駄に上がっている(↑自覚症状あり)

そんな時に教室のドアが勢いよく開き、名前を思い出せないが教師が叫ぶ
「博咲は居るか!」

「え、俺? あ、はい。俺ですけど……」

切羽詰まったような様子で話すのだが……俺なんかやったっけ?

しかし、そんな事はなかった。いや、そうであるならばなんとかなるレベルの事なのだ。先生の呼び出しは……

次に先生が言ったことは俺の予想から大きく外れた事だった

「母親が家の玄関の近くで殺されてたらし……ガッ」

先生が、最後まで言う前に体が勝手に動いていた。気が付いたら窓側から廊下側まで移動していて、先生の胸ぐらを掴んでいた

「今の話は本当か？」

「ほ……本当だ！さっき警察から電話が……」

「先生早退します」

「あ……ああ」

胸ぐらを掴んでいた先生を放すと、そのまま走って家まで帰る

「どうする？」

「このままだと雪が敵本拠地まで特攻して行きそうなので私達も行きませんか」

「だよね」

「先生。私達も早退します。このままだと雪が無茶をしそう……いえ、するので」

「あ？ああ……わかった」

「雪の荷物……」

「……とりあえず教科書などは机の中でいいでしょう。鞆だけ持っていけば問題はないはずです」

命雛兄弟は雪の鞆だけを持ち後を追いかけるように学校をあとにした

「退いて！ 邪魔！」

「なんだ……雪君か……みんな道を開けてあげて！」

俺が家の前まで行くと野次馬がたくさん居る。近くにいた近所の人々が俺に気付くと可哀想な人を見るような目でこちらを見ると大声で叫ぶ。すると周りの野次馬が全員こちらを見て近所の人と同じような目で見てくる。けど、今はそんなものはどうでもいい。この野次馬から本当に母さんは死んだんだろう。警察の人が keep out の黄色いテープの前に立っている

「中に入れてください」

「君は？」

「博咲 雪」

「君が息子さんか。少し待ってくれ。警部、家族の人が来ました」

警察の人が家に向かって言うと、玄関から警部と言われた人が出て来た。がっしりした体格の人で顔に古傷がある。雰囲気から武術をやっている事はわかる

「雪君だね？」

「はい」

「悲惨な光景だ。君は見る覚悟はあるかい？」

「無かつたらとつくに敵地に突撃しているところですよ」

「！君は相手の場所がわかっているのか!？」

「いえ？知りませんよ。とりあえず怪しい場所をかたつばしから斬るだけですよ」

「……………」

俺がやりそうな行動を言っただけで警戒して、無意識のうちに構えた。が、すぐに解く

「あの、見てもいいですか？」

「え？あ…ああ…」

警部さんの横を通り過ぎてビニールシートをめくり、中を見る

そこには動かなくなつて異臭を放つ冷たくなつた血だらけの母さんが居る

「そういえば警部さんの所にももう一つ血だまりがありますね。誰のものかわかりますか？素人目にもわかるくらいの血の量ですけど完璧に致死量ですね」

「これは君のお父さんのものだ。君の言う通り致死量に達している。おそらく……」

「死んでいますかね。ゴキ〇リ並みの生命力持っている父さんでも、ね」

「動揺していいの？」

「……どうでしょうか。自分でもよくわかりません。まあ今はやった（予想はつくが）奴をどう殺るのかを考えています」

「君は危険だ」

「安心してください。俺に危害を加えない限りはこちらからは何もやるつもりはないので」

さて、やったのは多分松戒達だろうな。父さんを持って行ってどうするつもりだ？

………どうでもいいか……アイツならまた仕掛けてくるだろうな。その時に父さんを使つて来ても斬るだけだ

「雪。鞆持つて来ましたよ」

「ありがとう。2人とも早退したのか」

「まあね」

「それとハンカチです。涙を拭いてください」

「え？涙？なんで？」

いつのまにか目から涙が出て来ていた。燈から受け取ったハンカチで涙を拭くと燈

に返す

「これからどうします?」

「悪いけどそつちの家に行ってもいいか? この家に居たいんだけどどうせ入れないんだろっし」

「わかりました」

「そうだ。警部さん」

「なんだ?」

「何か手がかりを見つけたら知らせてください。警察が下手に動かれてやつらが雲隠れでもされたら面倒なので」

「一般人にそんな事はできない」

「言い方を変えましょう。警察は邪魔になるので情報を伝えてくれたらいつも通りの仕事に戻ってください」

「!お前、警察を舐めているのか!」

「では、警察は超能力の相手に殺さずに捕まえる事はできますか?」

「超能力? ふざけているのか?」

「信じる信じないはそちらの勝手なのですが、少なくとも俺達はその次元に立っていて、超能力の存在を信じていない人は邪魔になるだけなのです」

警部さんは黙り込んでしまった。これ以上話していても時間の無駄だと判断して命
雑家に向かう。その道すがら

「では、これからどうしますか？」

「さっき答えたけど？」

「いえ、あの時は警察が近くにいたので本音を隠していると思いますか？」

「敵わないな。そうだな〜とりあえず相手が攻めて来たら全力で迎え討つ。絶対に逃さ
ずにぶった斬ってやる！」

「変わりませんね」

「2人はどうする？これは……なんて言ってもお前達なら勝手に首を突っ込むだろう
な」

「勿論です」

「手伝う」

「ありがとうな」

3人で並んで話す。いつもと変わらない口調で

相手が攻めて来たのはこれから2日後のことだった

第6話 戦闘開始

Side 燈

雲さんが行方不明、曆さんが亡くなつてから2日後の水曜日。雪は私達が預かることになった。葬式はまだ行われず、雲さんを見つけてからになるそうだ

「雪。次の授業が始まりますよ」

「あ？え？もう休み時間終わったのか。早いな」

このようにあの目を境によくボーとする事が多く、授業はずっと窓の方を見ている。皆さんは雪に気を使っているのか、あまり話すことなくしている。空気をあまり読まないことが多い蓮子さんもあまり話さない。ただ、話しかければ普通に応えてくれるので私と裸はいつも通りに接しています

「……………」

今も授業中なのに窓の方を見て人差し指の先でシャープペンを5分間ずっと回しています

長い付き合いだからなのか雪が悲しみ、喪失感、怒りなどがひしひしと伝わります

「はあ……………早く攻めてこないかな……………」

「物騒なことを言わないでください。雪は巻き込まれ体質なので、本当に攻めて来そうです」

「まだ認めていないからな。俺が巻き込まれ体質なこと」

「何を言っているんですか。夏休みに行った遊園地で殺人事件に巻き込まれたではありませんか」

「いや、それはアレだよ。歩く殺人現場の異名を持つコロン君が居たんだよ。きつと」

あれは今年の夏休みのこと……3人でパ○パ○に行った時に、少し私と禊が雪から離れた時に殺人が起こったのです。亡くなってしまった人がちょうど雪の前の人だったので、真っ先に雪を含む5人ほどの人が疑われました。雪は白雪さんを所持していたのですが、見つからずに（普通は見つかりませんが）、殺害する動機が無くすぐに疑いが晴れました。調査の時に雪が一言言つてすぐに犯人が判明したという事件。その他にもありますが、数え切れません

そんな時、学校にいる人の中で何人の人が気づいたのでしようか。私がわかる中では3人。1人は私、1人はずっと窓の方を見ていた雪、もう1人は弟の禊。後はグラウンドで体育の授業をやっている先生と生徒でしょうか。私達が気付いた時に放送が流れる

『あーあーあー繋がっているかな？ああ繋がっているな。えー翠利高等学校の皆様。先

週の金曜日以来ですね。松戒 廣戸です。気付いていない方もいるかもしれないのでまずはグラウンドの方を見て下さい』

放送が流れるよりも先に気付いていた私達以外の生徒たちが不思議そうに窓の方を見る。此方を覗いているのかタイミング良く放送の続きが始まる

『見てわかるように今、グラウンドには20人程の超能力者が居ります。まあ金曜日の協力者達ですね。その先頭に居るのが知っている人は知っているかもしれないですね。一昨日私達の手で殺された博咲 雲。2—Bの博咲 雪の父親です』

2—Bの人全員は知っている出来事

「で?こんな回りくどいこと言っているけど何がやりたいのかな?親子の殺し合いか?」

『まあそれもそうです。後は……:……:そうですね。翠利高等学校の生徒の超能力を持っている人の能力の開花ですかね』

雪の何気ないつぶやきが相手が答えた。その時、クラスの中がポカンとマンガだったら書かれていてもおかしくないくらいに全員が口を開けていた

そして——

「なんでわかるんだよ!」「他のクラスからすればいきなり変なこと言う変や奴だと認識されるぞ!」「つか放送室に居るのか!?」だつたら今から全員で攻め込むぞ!」「つか死体

が動くってなんだよ！」「警察を呼ぶぞ！」

などなど、この人達はブレないですね

『騒がしい人達ですね。まあそれは良いとして、それでは……雪君。君は父親を斬る事はできますか？』

「まさか！自分の父親をなんの理由もなく斬るわけがないだろう！」

『つまり、理由があれば斬ると』

「どうだろうな〜」

軽口で松戒さんと話している雪。口には笑みが浮かんでいて目は既にグラウンドに向いていた

『では、理由を作りましょうか』

松戒さんの一言でグラウンドから斬撃が此方に翔んでくる

「あー理由を作っちゃったね」

また軽口で白雪さんを出し、斬撃を翔ばす。斬撃同士がぶつかり相殺される

「……強化されている」

『では、警察が来る前に通信は切断しておきますね。今日1日は私は今いる場所を動きません。では、武運を』

そう言つてプツンと通信が切れた

「燈、襖。急いで学校にいる人達を避難させろ。もしかしたら加減を間違えてこちら一帯に被害出しちゃうかもしれないから」

「……わかりました。出来るだけ被害を出してはいけませんよ?」

「分かっているつもりだよ。襖は先に脱出経路を確保しておいてくれ」

「わかった」

「それと、そつちに何人が行くかもしれないから各自対処して事よろしく」

「わかりました」

「分かった」

「じゃあ行ってくるよ」

私たちに軽く指示を出し、窓から飛び降りる。因みに此処は地上3階です。雪はよく襖を人外人外言っています、大概雪も人外です

雪は窓から飛び降りると、雲の後ろに居た人達が一斉に動いた。10人ほど裏口に向

かい、もう10人は校舎に向かって行く

「させるかよ！真楼の居合 翔」

居合の構えから素早く抜刀し、斬撃を翔ばす。斬撃は的確に敵に向かって行つたが、横から炎を纏つた斬撃がぶつかり、金属音を響かせて相殺された

「チツ……邪魔しないでくれるかな？燈！そつちにほぼ全員行つた！」

燈は雪が窓から飛び降りた後、すぐにクラスの人たちに指示を出す

「みささんは急いで裏口に向かつてください！襖が居るはずです！私は他の教室にも伝えてきます！」

早口で言うのと隣のクラスの2―Aに向かう。と、その時に雪の音が聞こえる

「燈！そつちにほぼ全員行つた！」

「雪は霰さんが足止めをするでしょう。その場合は雪がこちらに来るのは遅くなるでしょう。その場合は褌が筆頭に個性豊かな人達が戦うでしょう。今動いている気配から、校舎に10人、裏口に10人向かっていますね。裏口には褌が向かっているから問題は無いはず……問題は校舎側……私が注意を引き付けている時に皆さんに行ってもらいましょうか) 皆さん! 急いで裏口に向かってください! 褌が裏口を確保しているはずです!」

「え!? 一人で!? ……いや、褌なら問題ないか。じゃあ燈はどうするの?」

2—Aの教室のドアを開け、指示を出すと蓮子が質問する

「私は放送室に向かいます。それで裏口に向かうように言います。10人ほど能力者の方達が校舎に入りましたので注意しながら向かってください」

「…燈君、気をつけてね」

「承知しました」

2—Aの教室から放送室まで最短距離を脱兎の如く走る

放送室の途中で裏口が見え、褌が能力者と戦っていた

「褌! 気をつけて下さい!」

「b」

褌の攻撃で能力者が向かいの壁まで飛ばされる。その光景を見ながら燈は放送室に

着く

「確かこのスイッチを押せば……翠利高等学校の皆さん。2―Bの命雛 燈です。今、校舎に能力者の方達が10人程侵入しております。可能な限り遭遇しないように裏口まで向かって下さい。裏口は襖が確保しています」

燈は手短に必要な事だけを放送し、放送室から出る

「さて、襖程ではありませんが私も戦いますか。職員室に2人、2階の教室に2人、3階に続く階段に4人、あと2人は……私の足止めですか」

燈は的確に敵の場所を特定し、目の前で立っている2人の能力者が構える

「すみませんが手早く終わらしてもらいますよ。皆さんの手助けをしなければいけないので」

燈もすぐに構え、能力者に突撃する

目の前の能力者と戦っている燈

裏口で脱出口の確保をしている襖

グラウンドで父親と戦っている雪

翠利高等学校の3箇所で戦いが始まった

第7話 三箇所の戦闘

翠利高等学校の放送室前の廊下では能力者である身長が170cmある男性2人が燈を挟むように対峙していた

「クツ…連携が取れています…か…これはやり辛いですね…」

燈の運動能力は裸に劣るが平均を大きく上回っている。しかし、男性2人は燈よりも速く動いているので攻撃がなかなか当たらない

「攻撃は当たっています、堪えた様子がないという事は…痛覚を遮断されているのでしょうか。それに、打撲などの怪我もあるはずなのですが…」

燈はそつと目を閉じ、1秒だけ思案するとすぐに理解する

「治癒能力…でしょうか」

燈が目星をつけ、呟くと同時に肯定するかのように男性2人が動き出す

男性2人は燈に接近し、左の拳をアッパーカットをするように動かす

（完璧にシンクロしていますね。これなら簡単に避けられます）

前と後ろからの攻撃を右に回避する燈。アッパーカットは空を切るがすぐに左腕を引つ込め、次は右の拳で的確に燈の顔に当たる軌道を描く

「そう来ると思っていましたよ！」

両側から全く同じ速さの攻撃を左に回避したことにより、前から来る男性1の攻撃の方が僅かの差で速い。男性1の攻撃をそのままの速さで右手で受け流し、半身を後ろから来る男性2に向け、僅かな差で遅れて来る拳を左手でそのままの速さで受け流す

結果、男性1の拳が男性2の胸にめり込み、メキメキツと音を立て、男性2の拳は男性1の顎に当たるが、男性1の拳が先に男性2に当たっていた為、少しだけ後ろに押し出されていたので骨を砕くまではいかなかった

「計算通りです！」

燈は男性2人の拳を1回ずつ半身になって受け流していた為今は男性2の方を向いている

男性2人は痛覚が無いためすぐに攻撃するが、男性2は肋骨の骨にヒビが入っている
燈はそれをすぐに理解し、すぐに男性2の襟と袖を掴み——

「はあああ！」

——男性2を背負い投げをする。後ろで攻撃しようとしている男性1の上に倒す
(いくら痛覚が無くても首の骨を砕けば動かなくなるはずですが。しかし、脳は動く……
では脳を潰せば問題ありません)

燈はすぐに行動に移る

男性2の額に全力で拳を振り下ろす。ゴキヤツと音を立てて男性2は動かなくなつた

「お次は男性1ですか」

動かなくなつた男性2に押しつぶされている男性1は身動きが取れずにいた。燈は、すみません、と一言眩き拳を振り下ろす。男性2と同様に男性1は動かなくなつた

「急いで残りを……まさか皆さんが倒してしまふとは……」

燈は戦闘に集中していて気付かなかつたが、今は上の階から

「柔道部舐めんなあああああああああ」
「能力者がなんだ！タネがわかればなんて事ないじゃねえか！」
「黒棺！」
「二重の極みアアアアア！」
「怪我をした奴を運べー……！」
「いつまでも生徒に任せきりにできるか！」

などの声が聞こえてくる。それと同時に打撃音なども

「これなら裏口に行くことができるでしょう。私も乱入しますか！」
燈は一番苦戦しているであろう一年の階に行く

「皆さん大丈夫ですか!？」

「燈先輩が来たぞー……！」

「コイツらがどうしても倒せません！どうすれば良いですか!？」

一年の階に着くと2人の能力者と一年の生徒が対峙していた。治療能力ではないの

か、所々怪我が見られるが何もないように動く

燈が来ると能力者と対峙している2人の男子生徒が質問して来る

「彼らの脳を破壊することです！」

「分かりました！燈先輩は1人お願いします！」

「わかりました」

「佐藤が倒してくれ！俺が抑える！」

「わかった！田中気を付けろよ！」

佐藤と田中が1人と対峙するともう1人は燈の方を向いた

「さあ来なさい。すぐに還します！」

男性3は一步で燈まで距離を詰める

「！（速い……ですが！）反応できないわけではありません！」

男性3に体勢を低くしながら右足で足払いをすると男性3は上に跳ぶ。その時を燈は見逃さずに右足を床に落として軸にし、左足で男性3の足の骨を砕く

男性3は横になりながら床に落ちるが気にせず燈に攻撃するが見当違いな所にいき、空を切る

「はあああ！」

燈は横になりながら落ちている男性3に右足で踏み込み、力の限り拳を振り上げる

男性3はなんの抵抗もできずに燈の拳を受け、脳を破壊されながら天井にぶつかり床に落ち、動かなくなつた

「ふう……そちらは……終わりましたね」

「はい。他のところに加勢しに行かないと！」

「大丈夫ですよ。此処で最後です。禊が確保した裏口に向かって下さい。私は雪の方に
行きます」

「わかりました！」

佐藤と田中は裏口までの最短ルートを脱兎の如く走る

「私も行きますか」

2人を見送つた燈はグラウンドまでの最短ルートを走る

翠利高等学校裏口。そこには禊と能力者10人が戦っている

「……………多い……」

襖は能力者に囲まれている状態だ。能力者の中には治癒能力者、空間操者、身体強化能力者などが居る。しかし、ほとんどが死人ではなければ死んでいる怪我を負っている。「治癒能力者を先に……」

言うのが速いか治癒能力者に接近する襖。襖を囲んでいる能力者は誰も反応せずに、治癒能力者は襖に頭を掴まれ向かいの壁に叩きつけられる

頭からメキメキバキツと鳴り、治癒能力者はピクリとも動かなくなった

「次は……空間操作」

襖の中で優先順位をつけ、高い順に倒して行く

空間操作者は手を動かさないと能力が発動しないと襖は目星をつけ、空間操作者が前に手を出した時には襖が目の前に移動しており両腕を折られる。そのまま頭を地面に思いつき叩きつけて空間操作者が動かなくなった

その時——

「裏口まで来たぞ！速くみんな移動するんだ！」

「2—Aと2—Bの生徒」

——先生を先頭に2—Aと2—Bの生徒達が校舎の廊下の角から顔を出した

「襖が囲まれているぞ！みんなで加勢する……え？」

2—Aの生徒が襖に気付き声を出したが、既に目の前には身体強化者が移動してい

た。生徒が気付いても遅く、身体強化者の蹴りが生徒に向かっていた。「少し離れていて」

身体強化者の蹴りが生徒に当たる前には禊が後ろに移動して、後ろから頭を持ち床に叩きつける

「禊…今どうやって…」

「急いでこつちに来た」

裏口に居る他の能力者は急いでその場を離れ、グラウンドに向かう

が――

「行かせない」

―― 禊が目の前に移動しており、能力者全員が一瞬で頭が地面に埋まっていた

「これで終わり」

禊はその場で適当に手を払い裏口に向かう。いつのまにか他のクラスの生徒が集まっていた

「禊、大丈夫か？」

「うん」

「禊君。燈君はまだ来ていない？」

「まだ」

「この後はどうするの？」

「みんなが行ったらグラウンドに行く」

「それなら此処は俺たちに任せてお前は行っていいぞ！いつまでもお前達に任せられないからな！」

「待て！まだ他の奴がいるかもしれないだろう！生徒が一人で行動するなんて危険過ぎる！」

「先生は何言ってるんだよ！禊は一人で裏口を確保したんだぞ！一人でも問題はない！」

「禊が一人で!?そんな訳ないだろう！10人を一人で倒せる訳ないだろう！」

「証拠がこの場にあるだろう！」

生徒と先生が言いあっていると横からメリーが「あの…」と言い、グラウンドの方に指を向ける

「禊君ならもうグラウンドの方に行きましたよ」

「え？」

「2人が言い合い始めたらずぐに行ってたよ」

「行動力え」

「く！俺もグラウンドに行く！生徒だけでは危険だ！」

「あのさ、先生。今グラウンドに行っても意味無いと思いますよ？」

「宇佐見、お前まで言うのか！」

蓮子は先生を諭すように言う

「まず能力者のうちの半分はこの場で禊にやられている訳ですよ。校舎には燈が居る。なら、今グラウンドには誰が戦っていると思いますか？」

「……………博暎か？」

「そうです。先生は確か…：剣道部の顧問でしたよね？なら、雪がそう負ける訳ないと思いませんか？」

「だが相手は真剣を所持しているんだぞ！何も所持していない博暎は危険だ！今から俺が模造刀を持ってグラウンドに行く！」

「この際ハッキリ言いますね。あれは家族内の戦いだ。雪にとつてこれは父親と最後になるんだよ。好きにさせろ」

「お前……！」

先生が蓮子に掴みかかる前にグラウンドの地面が抉られた

「アレを見ても行きますか？アレを対処できますか？」

「チツ」

先生は舌打ちをして生徒に指示を出す

「雪君…：大丈夫だと良いけど…」

「大丈夫でしょ。雪なら」

翠刹高等学校のグラウンドでは金属と金属がぶつかり合う音が1秒間に数回鳴り響いている

「クツソ！確実に強くされてる……薬品とか使ったのかよ！」う……はあ！」

霰の力や反射神経が生前よりも確実に強化されている。さつき雪は痛覚が無くても足の機能を奪つちやえば一気に優勢になる。と考えて、最初から足を狙うが刀でいなくか躲される

「ふう……真楼の居合・散！」

霰から距離を取り、抜刀している白雪を納刀し、すぐに抜刀し、斬撃を飛ばしたらすぐに納刀する

斬撃は霰の前まで行くと、細かくなり霰に殺到する

霏は刀に炎が纏わせ、横薙ぎに振るうと斬撃は消えた

「父さんに能力を埋め込んだのか？あの野郎！」

霏は雪の知る限り氷を使った事は知っているが炎を使った事はない

（大丈夫ですか？やはり霏を攻撃するのに戸惑っているのですか？迷いを感じます）
（あいにくと俺は模造刀では斬ったことあるがお前で斬った事はねえんだよ）

白雪は雪に話しかける。雪は霏の攻撃をいなし続けながら白雪に答え返す

「それにしても、炎を使うときは炎髪灼眼になればシヤナかよ！で言ってるのにな」

無駄なことを考えていると霏が納刀する

「…ヤバッ……う……おおお！」

霏が高速で抜刀すると真空波と斬撃が同時に雪を襲っていく。雪は白雪で斬りあげるようにし、真空波と斬撃をそらす。衝撃が腕に伝わり、腕が痺れた

（ヤバイ……腕が……）

雪が腕を痺れているときに刀を地面にさし、雪に向けて振り上げる

斬撃と大小様々な石が雪を襲う

「月牙天衝と土流閃かよ！しかも……」

痺れる腕を動かし、斬撃と大小様々な石をそらすと、すぐに後ろに跳ぶ。跳んでから一瞬、地面から炎が吹き出す。雪がその場に留まっていたら丸焦げになっていただろう

「真楼の居合・瞬！」

雪は素早く抜刀し、もの凄く小さい斬撃が霰の肩を斬り裂く。肩から血が流れ一部に氷が付いている

「（良し……あとは……）おいおい……マジか……真楼の居合・時雨」

肩を斬り裂かれても気にせず、霰は空に向かって斬撃を無数に飛ばす

雪は上から雨のように降る斬撃を納刀した状態から高速に動かし、全ての斬撃を地面にそらす

ザクツと霰の方から刀を地面にさした音がすると地面から炎が吹き出す

「白雪！」

雪は叫ぶと白雪を抜刀し、自分を襲う炎だけを凍らせた

炎はすぐに消える

「これは……」

雪がグラウンドを見回すと目を見開き眩く。だが霰から突き刺さるような殺気を感じ、雪は霰の方を向く

「……………」

「……………わかった。それが望みなら最後に叶えてやるよ。だからさ、それで家族殺しに關してはチャラにしてくれよ」

霽が小さく、声が聞き取れるかどうか分からない程小さな声がする。雪はなんと言つたかは分からなかったが、霽の性格からなんとなく察する。それと同時に学園都市第4位のセリフを思い出す

(あー、なんとなくだけでも、一方〇行と麦野の気持ちがあわかつたかもな……あのセリフは名言すぎる)

霽は刀を納刀し、構える

雪も白雪のつばをあげ、居合の構えをとる

2人が動かずにしばらくすると昇降口から燈の視線と、グラウンドから裏口まで行ける道の校舎の角から襖の視線を感じると同時に2人が動く

霽が今までよりも速く抜刀すると雪がいる場所の空間が裂ける。が…雪はそこには居なかつた

「今までありがとう。父さん」

「……………」

雪は霽の背後に移動しており、霽に一言言うと、霽の口が僅かに動く

その意味を理解したか、雪は口の端が緩み、霽の首を斬つた

今の翠利高等学校のグラウンドには動かなくなった雫の体と呆然と立ち尽くす雪が居る

雪が雫の首を斬るところを見ていた燈と禊が雪に駆け寄る。が、
「これは……本当に凄いいお人です。雫さん」

燈はグラウンドに雫が最期に残したメッセージの意味を汲み取る

「雪。これからどうしますか?といてもわかりませんが」

「乗り込み」

「そうだ。相手の場所はわかってるんだ。無駄に時間を潰す必要は無い」

「私たちも行きますよ?」

「いや、2人は学校みんなのことを頼む。そっちが終わって俺が帰ってこなかったら好きにするさ」

「釘を打つのが早い」

「2人のことはよく知っているんでね」

「それにしても雫さんは凄いいお人ですね」

「ああ。じゃあ俺は行ってくる」

「お気をつけて。私たちが行ったら死体でした。なんて事にはなっていないことを願っています」

「そう思うなら速く来ることだな。あと、禊。悪いんだけどスマホ貸して」
「わかった。気を付けて」

雪は白雪を納刀し、敵の本拠地の場所が記されたグラウンドを見ると
雪の姿が消えた

く敵の本拠地く

「まさかもう死んでいるとはいえ、父親を斬るとはな……」

「博咲 雲はグラウンドに我々がいる場所を記したようでもうすぐ此処に来るか」と
「そうだな。俺達も準備に取り掛かるぞ」

松戒達が話していると2人がいるこの空間に電話が鳴り、松戒が出る前に勝手にスピーカーになり人間の声が響く

『松戒 廣戸。今能力者の量産はどうなっている』

「今はレベル紫を越える者が出ました。そしてソイツを焚きつけ、今からこちらに乗り込んで来るでしょう。話してみますか?」

『そうだな。ソイツと話してみたいな。しばらく待とう。どれくらいで来るのだ?』

「おそらくソイツがどれだけ速くても30分はかかるでしょう」

『わかった』

電話先からは男だと思われる低い声と松戒が話していると、モニターに近くに人がいるということを知らせる音が響く

「……………対象の博咲 雪が我々の本拠地の前に居ます……………」

雪は松戒達が居る建物の前に移動していた。松戒の推測では翠刹高等学校から此処までは車でも30分はかかると言っていたものを一瞬で移動していた

『どういうことだ?』

「ハハハハ……………規格外だな!コイツは!どうやったんだ?!能力か!まあいい!それは今からわかる!」

「此処か……………教えてやるよ。身内の死体を弄ぶのは最も人を怒らせる行為だということ

を！
」

第8話 雪VS松戒

Side 雪

隣町外れの二階建ての工場みたいなところだった

「乗り込むか」

襖のスマホを録画モードにし入り口だと思われる自動ドアを破壊して堂々と乗り込む

入り口から右の手前にドア、右奥に扉があり、左は右と同じだった。更に奥には左右に廊下があり、ここからだとはよく分からない。俺は何となく右手前のドアを蹴破つて中に入る

「ここは仮眠室か？」

おそらく研究員とかが使うところか？こんな手前の部屋に？

それから他の部屋に入るが特にこれといった重要なものが無かった

「特に無し。次は奥の廊下か。白雪どう思う？」

（見たところ一階よりも上に続く階段を探したほうがいいと思われる。雪の目的は松戒 廣戸と会うことですから。余計な寄り道はしないほうがいいかと）

「それもそうだな。後は燈や襖と警察の仕事だからな。でも、こういうのは上の階よりも地下とかがお約束じゃないか？」

（では地下へ続く階段を探しますか？）

「……………可能性を潰すために上に行くこうか」

（分かりました）

そんな訳で二階に行く為の階段を探すことになった訳だけど……………

「見つからないな」

（見つかりませんね）

一階の部屋とか全部探したけれど全く見つからなかった。隠し通路でもあるのか？と考えるとまあほど探した気がする

こうなると考えられる可能性は、二階に続く階段は無く（悪魔野学園？）、空を飛ばないといけない。もしくはホログラムか何かで二階を映しているだけで実際は二階は存在しない

「よし、天井斬るか」

（それしかありませんね）

スパツと天井を斬る。二階と思われるところは暗く、全く見えない。四角のコンクリートを避けて、落ちて来たコンクリートの破片を天井の穴に投げる。すぐに二階の天

井に当たる音がする

「二階が存在することは確定したと」

すぐに二階まで飛んで入るとすぐ横からすぐ横から光が飛び込んで来る

「ッ！照明？」

「やー。よく来たな博咲 雪。さつきは父親を斬ったようだが感想はどうなのか聞いてよろしいかな？」

「最悪の一言しか出てこないね。それにしてもよく俺の前に出て来たな。殺される覚悟くらいはできているよな？できてなくても殺すがな」

「おお、怖い怖い。俺が殺される前にお前と話したい人がいるんだが？」

「お前のバックにいる奴か？」

「そうだ。よく分かったな」

「お前だけであんな大掛かりなことではできないだろ」

「そうだな」

松戒は適当に言うのと、俺と松戒の丁度間の天井に付いているスピーカーから男の声が

聞こえる

『君が博咲 雪か。君と松戒の会話を聞いていたんだが、本当に性別は男か？』

「初っ端から失礼な奴だな！」

『失礼。私が知りたいことは君の能力についてだ。君は先程隣町の学校からここまでどうやって来た？』

「……………あれ？どうやって来たんだろ…………？多分歩いて来たと思うけど」

「その場合は1時間半はかかるぞ」

『つまり、その1時間半の時に君は無意識のうちに能力を使っているんだろう。推測するに君の能力は『時を操る能力』だと思われる』

「ふ〜ん」

『反応が薄いな。何か引つかかる事があるのか？』

「いや、別にそう言う訳じゃないけどな。確かに俺が今まで不思議に思っていた事が時を操っていたなら納得ができる」

俺はでも、と一度区切り

「俺が松戒を殺すことに能力の判明なんて必要にならないよな？」

松戒を殺すのに能力の有無なんてどうでもいい。ただ、『松戒を殺した』という結果が欲しいだけだ。時を操る？それが何だ。松戒が対策を講じていたら意味ないじゃないか

『君、狂っているな』

「警部の人に言われたな。そんなこと」

『私からはもう無い。さらばだ』

スピーカーからプツツと音が鳴ると男の声が聞こえてなくなつた

「さて、じゃあ始めるか?」

「そうだな。さっさと殺してやる」

雪と松戒が向かい合っている部屋には、トレーニングルームと仮戦闘の2つに分けられており雪が居る場所には物はあまりないが、松戒の周りにはトレーニングマシンが多々ある。2つの境に薄い強化ガラスが張られている。そして、雪の足元に雪が下から来る時に斬つた四角の落とし穴があり、他には周りに使えそうなものはない。しかし、松戒にはトレーニングマシンの至る所にボタンが1つずつある

「さて、周りには物は無く邪魔になりそうな物は特に……アイツがこつちに来てくれたら楽なんだけどな。でもこつちには来ない。だったらこつちに来させればいい!」

先に動いたのは雪だった。真つ先に下の階に降りてから、目測で測った松戒の場所に斬撃を飛ばす

斬撃は松戒のいる場所を的確に飛び、松戒の足場を破壊した。しかし松戒は落ちずに二階の穴から声がする

「オイオイ、いきなり無茶苦茶だな。お陰でトレーニングマシンがほとんど破壊されたぞ」

「チツ今のに当たっていれば終わってたのにな!」

「とうるか最初に動いた奴は負けるみたいなの無かったか?」

「あ?そんなの先に動いた方が良いだろ! (時と場合によつてだが) じゃあお前は座標移動相手とやっている時に『先に動いたら負ける気がするので先に動いてどうぞ』って言うのか!」

「ふーむ時と場合によつてだな。いや、その前に例えが極端すぎるぞ」

「知るか!」

2人は話しているがその間にも雪の下からの斬撃を松戒は軽々と避けている

(クツソ!どうなつてやがる? こんだけ攻撃してるのにかすりもしない……………それはそれで良いんだが……………アイツは全く攻撃してこない……………何を企んでいる?)

(やはりバケモノじみているな……………10分間は霊力を使いながら動いているが疲れた様

子を見せない：しかもまだ決定打を出していない感じだ……こつちには攻撃手段がほとんど無くなってきた。さつきからスキを見つけようとすることが全く出さない……それにしても禁書目録を知っているから例えがわかりやすいな)

この時点では他のことを考えていられる松戒の方が有利だが、攻撃手段を破壊されていられる

その時、松戒の脳内に直接言葉が送られる

(そちらに武器とレベル紫を送りました。私にはもうお役に立つ事ができないと思うので此処から出ます)

(ご苦勞だった。ここから安全に脱出するんだ)

短く返答するとテレパシーは切れた

「?何だ?拳銃か?それと何人かの能力者」

「ようやく来たな。さあここからは反撃と行こうか」

雪のいる広間のようなところの左右の廊下から3人の能力者が現れた。一回の天井はほとんどが破壊されており、二階の様子を容易に見る事ができる

松戒に届けられた物は二丁拳銃で、H&KMP7だ。さらに弾薬も無数に届けられた
「はっ…ふざけんな!」

雪はすぐに危険だということを理解し、上の銃撃よりも目の前にいる能力者3人を先

に斬るように行動する

「さーて、これをどうやって避ける!？」

松戒は二階から能力者3人と交戦している雪に向かって乱射する。弾丸の雨は的確に雪を捉えるが雪は横にいる能力者の股の下を通り銃撃を回避する

「危ねえ……（どうする？目の前には3人、3人の後ろからは弾丸の雨。これを打開する方法は……ある!）」

雪は今起こったことを正確に把握し、打開策を考え、実行する

「どうした!次だぞ!」

松戒はまた雪に向かって乱射する。その全てが雪を捉える。雪は目の前にいる能力者の首を素早く飛ばす。首は綺麗の上に飛ぶ

「真楼の居合 衝!」

雪が叫ぶと斬り飛ばされた首が二階の天井に向かって加速し、反射して松戒の拳銃に当たる

「!しまっ——」

「この隙があれば……」

松戒が拳銃を一丁落としてしまい、そちらに意識が向いた瞬間に、弾丸の雨をさつき首を斬り飛ばした体に隠れながら残りの2人を居合で胴体と首を素早く斬る

「まあこんなもんかな？」

「やるじゃないか！今の一瞬で3人はやられ、俺は絶体絶命まで追い込まれたぞ！」

「どうした？ついに頭がおかしくなったか？」

「いや、そういうわけではない」

そう言つて松戒は後ろに移動し、トレーニングマシンのボタンを押す。雪は直感的にこの場にいるのはマズイと思い、二階に跳躍する

すると、一階の廊下が針によつて埋め尽くされた

「危ねえ…サイコロレイクか？あとちよつとあそこにいたら死んでた」

「今のを避けるのか…直感もバケモノだな」

雪によつて二階の床はボロボロになっており、今雪が立っているところと松戒が立っている周囲の床は壊れそうになっているが立っただけならば問題ない

「それにしてもお前の攻撃を避けているうちに床が壊滅的になっていくんだが…どうしてくれるんだ」

「………戦闘においてはやつちまった。お前に対してはザマア」

「いい性格してるよなホント」

2人は側から見たらさつきまで殺しあっていたなんて思わない程軽い口調で話し合っている。が、心の中では――

（取り敢えず二階には来れたが……これはやつちまったな。足場がほとんどない……松戒の奴が空を飛べるなんて事がなければ問題は無い。拳銃は跳んでいなければ回避できる。あとは追加の武器くらいか？もしかしたらまだあるかもしれない。トレーニングマシンはもう全て破壊したな）

（チイツー二階に来たか……どうする？もう武器の追加はない。トレーニングマシンの仕掛けが生きているものはもう無い。周りに残骸が散乱しているくらいか？弾薬はまだあるが、コイツには意味はないだろう）

——それぞれで策を考えていた。雪は二階と自分の今の状況を冷静に把握している。対して松戒は最初は焦ったがすぐに冷静になって周りを把握する

「そうだ。まだ訊いていなかった事があったな。どうして父親を斬ったんだ？死んでいるとはいえお前の親だった奴だぞ」

「……はあ、簡単だよ。学園都市第四位が言っていた事だ。相手を綺麗に終わらせるために自分の手を汚せ。ってやつだよ。例えば俺を殺したとしてもその後はお前達に使われる。だったら俺が誰の手も届かないようにするだけだ」

「だが、それはお前のエゴを押し付けただけだろう？」

「そうだが、まあこの世はエゴにまみれているからな。そう気にすることはないさ」

雪はそれだけ言うのと静かに白雪を構える。それを見た松戒も静かに拳銃を上げ、雪に

狙いを定める

これはさつき松戒が言っていたことだが、先に動いたら負けると言っていたが、居合を得意とする雪と、狙いを定め、指に少し力を入れれば弾丸が発射するこの状況ではどうなるのか

「真楼の居合 瞬！」

「クツ……」

雪の素早い斬撃を松戒は自分の直感で寸でのところで回避をすると右手に持っている拳銃を雪に乱射する。全て雪を捉えるが、雪はそこには居なかった

「なっ……どこに——」

「後ろだ。あばよ、クソ野郎！」

素早い斬撃を放つてから雪は松戒の背後に移動しており、松戒が後ろを向く前に両腕とアキレス腱を斬る

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

悲痛の叫びをあげながら松戒はその場に前から倒れる。雪はそれを見下ろす

「今お前は腕が無く、立って移動することもできない。さらに腕から噴水のように出ている血からお前はもうすぐ死ぬだろうな」

「グッ……な、何故今…殺さ……ガア……ない……」

「お前を殺せればそれでいい。つまり、俺が殺したという結果だけが欲しいんだ。だつたら少しでも苦しんで、恐怖しながら、自分の行いに後悔しながら、死んでも、俺が殺したことに違いはないだろう？」

松戒は本物の化け物を見るような目で雪を見上げるが力が抜け、その場に崩れ落ちる松戒の最期を見た雪はポケットにしまっている褌のスマホを取り出す

「あれ？録画が止まつてる。どこからだろう」

雪は褌のスマホを操作して録画しているところの最初から流す。『乗り込むか』くく『時を操っているなら納得ができる』のところまでだった

「どうして勝手に止まったんだ？まさかスマホに意思があつたりして……なんて無い……よな？」

雪は首をかしげるがそんなことよりもやっておかないといけない事がある。もう一度録画モードにして――

「あー聞こえているか？まあ録画していること前提で話すけどさ。まず、松戒は出血多量で死んでいるから。次に松戒を支援している奴がいるから。それに関しては一個前の録画してあるやつ聞いてね。そんなとこかな。褌のスマホはわかりやすいとこに置いておく様にしてあると思うけどさ、あとはよろしくな」

それだけ言うと雪は録画モードを止める。と、同時にその場に倒れてしまう

(雪!? どうしましたか!? 大丈夫ですか!?)

(ヤバ……白雪の声が遠くに聞こえる……いきなりどうしたし。俺の体全く動かないんだけど……これ寝たらあの世にいましたみたいな展開かな? まあ、こっちは人殺しているから文句は言えないけどな)

その時点で雪は意識を手放す

第9話 雪の消失

S i d e 燈

「ここですか。しかし、思ったよりも時間をかけてしまいました……雪が肉塊に変わっていないことを願いますが」

「不吉なことを言わないで」

私と禊は雪に言われた通りに生徒の4分の1ほどの数を家に帰る所を見届けて隣町の廃工場みたいなところまで走ってきました。時間は大体45分ほどでしょうか

「警察の到着を待つ？」

「………いえ、既に玄関と思われるところは破壊されているので、玄関の前のところまで行きましょう。そこからでも分かるものがあるかもしれません」

「分かった」

一応此処に到着する前に警察には言ったのですが信じてもらえないか分からないんですよね……来てくださると思います。私たちが来た時点での報告くらいは、中の様子をのぞいてもいいと判断しました

「これは………」

「雪が思っていたよりも暴れましたね……天井がほとんどありませんよ……」
「あそこ……血が……」

「本当ですね。一応撮っておきましょうか……雪の血ではないようで何よりです」
「?なんで分かったの?」

「……?何故でしょうか?」

玄関から中をのぞいてみましたが、まず天井の殆どが破壊されています。更に襖は言いませんでしたが一階のエントランスの中央に能力者と思われる人達の無残な死体が3つ、鋭い刃物のようなもので斬られ、転がっています。もう私達のS A N値は減りません

二階から血が落ちており、ポツポツと音を鳴らして1階の床に血溜まりを広げています。私は直感的に雪のものではないことに気づきました。何故でしょうか?私の能力かも……

「ねえ」

「何でしょうか……それは『この施設には4人の人間の気配しか感じられない』、というものでしたら私も気付いています」

「一階に3つ、二階に1つ」

「おそらく二階は雪によって殺された松戒さんですかね」

襖は気付いていたみたいですね。人間の気配……死体に気配はあるのでしょうか……は4つしかなく、1階に倒れている死体以外に二階に1つ。先程私は二階から落ちていた血は雪のものではないと言いましたがそうになると松戒さんとなる

しかし、そうなる——

「雪は何処でしょうか？この下に地下施設はないみたいですが……」

「……分からない」

「中に入つて確かめましょう」

——そう、天井の殆どを破壊したのは雪でしょう。そうになると雪がいなくなつたとになりませ

玄関からのぞいているだけでは雪の居場所がわからないと思い、中に入ろうとすると

「おい、君達！此処は立ち入り禁止されている場所だぞ！何しているんだ！」

——後ろから自転車に乗っている警察の人の声が聞こえる

「それが、私達が此処に来た時に玄関が破壊されているのを目撃しまして、気になつて中をのぞいていたんです。それと、この施設には立ち入り禁止はされていませんよ？」

「？この施設は……あれ？立ち入り禁止されていないな。すまない。勘違いしていたみたいだ。それで玄関が破壊されていると言っていたが、中はどうなっているんだ？」

警察の人がこちらに歩いて来て中を覗くと、うわあああああああ！と叫び急いで無線で他の警察の人に連絡を取り始めました

やれやれ、これから大変な事になりそうです

「……………で、君達は此処まで走って来たのか」

博咲家の事件の現場に居た警部さんからその場で事情聴取を受けた。何故その場でやっているのかは気になります。が面倒くさくなると思われるので聞いていません。襦袢は私の横で暇そうに周りを見えています

「それで雪はどこに居るのか手掛かりはありますか？」

「いや、そもそもこの惨状はあり得ないことが多すぎるからまだ整理してないんだ」

「そうですか……………」

「…………お前達は冷静なんだな。職業柄こういう悲惨な現場は見て来たが、俺でも気分を害しているんだがな」

まあさつき来たところでもまずは現場検証などを行うでしょう。私はどうやら焦っているようですね。横に居る襦袢にも落ち着いてと言われました

しかし、(おそらく)雪がやったこの現場は本業の人から見ても悲惨なんですね。私と

襖は雪の方の心配でそれどころでは無いということですね

「警部。二階から四肢と腱を鋭利なもので斬られた遺体があります。おそらく刀で斬られたものだと思います。身元はただ今調べています。その遺体の近くにこのスマホが落ちていましたか……」

「ん？誰のものだ？」

「あ、それは襖のスマホですね」

「そうなのか？」

「そう」

遺体……おそらく松戒さん……の近くにスマホが落ちていた？これは雪からのメッセー
ジでしょうか？

「すみませんが少し操作させてもらえませんか？もしかしたらこの施設で起こった出来
事が何か分かるかもしれません」

「……分かった。本来はダメだが今は少しでも情報が欲しい。そういうことなら良いだ
ろう」

「ありがとうございます。では、襖、お願いします」

「分かった」

警部さんに襖のスマホの操作の許可をいただいて、襖に「雪の事ですから、おそらく

録画モードにしているでしょう」とアイコンタクトをとると禊は理解してくれたのかまぐにロツクを解除し、録画モードにする

「……さつき、だいたい45分前と20分前に録画されている」

「今すぐ再生してくれ」

「あ、45分前の方からで」

雪が録画したと思われる2つのものから1つ目のものを禊が再生する

『乗り込むか……』~~~~~『そうだな。さつきと殺してやる』

~~~~~ここで急に途切れています

「おいおい、雑音だらけじゃないか」

「まあ、ブレザーの胸ポケットに入れて動いているみたいなので仕方がないと思われませんが……」

「それとこの『白雪』ってのは誰だ？1人で話しているみたいだが……」

「それは後で話します。他に疑問に思うことはありませんか？」

「この松戒とその背後にいる人物に心当たりはあるか？」

「松戒さんは先程翠利高等学校に死んだ人を動かして襲撃させた人物です。背後にいる人物には知りません」

「ねえ」

「?どうしました?」

「この人の声と一緒に海の波打つ音が聞こえる」

「なっ……!」

「そうですか。しかし、どこの海かはわからないみたいですし、特定は難しいでしょう。私はもうここまでは大方わかりました。次に行きましょう」

「分かった」

「もう分かったのか?説明してくれ」

「全て聞いてからです。わからないところは全て答えますよ」

雪の性格、行動、言動でこの施設で起こったことは大体わかりました。しかし、念のためもう一つの方を見て確証を得ましょう

禊がもう一つの方を流す

『あー聞こえているか?まあ録画していること前提で話すけどさ。まず、松戒は出血多量で死んでいるから。次に松戒を支援している奴がいるから。それに関しては一個前の録画してあるやつ聞いてね。そんなとこかな。禊のスマホはわかりやすいとこに置いておく様にしてあると思うけどさ、あとはよろしくな』

それだけ過去の雪が言って録画が終わる

「……分かった?」

「はい。分かりました。しかし、ここで起こったことは分かりました……」  
「説明してくれ」

「その前に、襖。雪は2つ目の録画を開始してから動いていませんよね？」

「足音が全くしなかった」

「そう……ですよね。そうなると雪はどこに行ったのでしょうか？」

雪はその場から動かさずにどうやってこの施設から出たのでしょうか？スピーカーの  
声の人が言うには雪は時を操る能力と言っていましたでしたがそれだと、時間を止めていたと  
しても施設から出た痕跡は残るはずですよ。しかしその痕跡は無い。と、なると瞬間移  
動、もしくは移動されされた？その場で……？

「それで、お前が分かったことを全て話してもらおうぞ！」

「……分かりました」

私は警部さんの質問に対して私の知ることを（一部隠して、何も知らない人が聞いた  
ら納得するように）話します

その後私達は家に帰る。学校はしばらく休校になった

雪……貴方はどこに行ってしまいましたか？

## 第9. 5話 オリキャラ設定

名前 博咲はくさき雪せつ

性別 男 年齢 17歳

性格 何事も理屈で考える 気分次第で変わる

能力 unknown

能力レベル 黒

武器 白雪（日本刀）

見た目 白髪、黄色目 一方通行の髪型 目つきが悪い 身長160cm

設定

今作の主人公。幼少期から剣術をやっている。10歳の時点で師の父親（雲）を超え、代々受け継がれる刀：白雪を受け継いだ。剣術に関しては何となくで行なっている事が多い。家系には興味が無い

理屈でものを考える事が多く、他人から訊いた事は自分で確かめるまでは確信しない。しかし、楽観的に考えることもある

命雛兄弟とは幼少期からの幼馴染で、すべて同じ学校、クラスになっている

燈曰く、巻き込まれ体質らしい。行くところ行くところに何かしら面倒ごとに巻き込まれる

見た目が中性的で声が女声なので初めて会う人の約90%が間違える

自分からは人に危害を加える事はないが、他人から攻撃されると危害を加える。尚、明らかに故意ではない時は不可抗力としたり、小さな子供だった場合などは危害を加えない

翠利高等学校では『超高校級の剣士』と2つ名がある。が、本人は気にしていない

名前 命雛めいすう 燈あかり

性別 男 年齢 17歳

性格 明るく優しい 誰に対しても礼儀正しい 怒ると怖い…らしい

能力 unknown

能力レベル 黒

武器 基本的に無所持

見た目 黒に近い茶髪 黒い瞳 耳を覆い、眉と目の間くらいの長さの前髪 後ろ

は短め 超整った顔立ちのイケメン 身長168cm

設定

命数兄弟の双子の兄

誰に対しても礼儀正しく、敬語で話し、くさんと人を呼ぶが雪と禊は呼び捨て

雪とは幼少期からからの幼馴染で、すべて同じ学校、同じクラス

テストは必ず学年一位。スポーツテストなども上位の容姿端麗、成績優秀、品行方正

の3つを備えている

小学から高2までにラブレターを100通以上貰っている（雪、禊が100通超えた

時点で数えるのを諦めた）が、一度も付き合った事はない

人の思っている事がわかる事が多い。雪、禊に関してはほぼ100%わかる

名前 命雛めいすう 禊みそぎ

性別 男 年齢 17歳

性格 無口で常に冷静 背を気にしている

能力 unknown

能力レベル 黒

武器 メリケンサック2つ 改造モデルガン二丁

見た目 黒髪、腰に届くほどの長さ 黒い瞳 顔は整っている 身長 145cm

設定

命数兄弟の双子の弟

学力では燈に劣るが、運動に関しては燈を上回り、どんな競技であろうと必ず一位を取る

無口でそつけない態度をとる事が多く、質問に対しては必要最低限に答える

禊を身長でからかうと地面がコンクリートの道路だろうが御構い無しにプロレス技を行う。病院送りになった人数が50を超えるとか……また、声が幼い

不良に絡まれる事が多く、休みの日、もしくは必要な時にカバンに武器を持っていく



体術に長けており、動体視力や、状況処理能力、臨機応変は良い

名前 博咲はくさき 雫みぞれ

性別 男 年齢 40歳

性格 冷静沈着

能力 無し

武器 刀だったら何でも

見た目 白髪で短髪 黄色の瞳身長179cm

設定

主人公の父親

暦とは幼馴染でよく暦の世話になった事がある

剣術に長けており、雪に10歳で超えられたが修行は毎日欠かさずにやっている

化け物並の感覚を持っている

名前 博咲はくさき 曆こよみ

性別 女 年齢 40歳

性格 楽観的な視点で物事を捉える ノリが良い

能力 無し

武器 我が肉体

見た目 水色の一方通行の髪型 黄色の瞳 身長160cm

設定

主人公の母親

霏とは幼馴染で霏の世話をしている

格闘技に長けており、霏とまともに戦う事ができる

硬い思考の霏とは正反対の性格をしている

名前 松戒まつかい 廣戸ひろと

性別 男 年齢 三十代前半

性格 研究熱心 好奇心旺盛

能力 不明

能力レベル 緑

武器 銃器全般

見た目 黒髪の短髪 黒い瞳 身長175cm

設定

翠利高等学校にて騒ぎを起こした張本人。背後に誰かいるが行方不明死体を使うなどサイコな行動をする

超能力の研究に熱心で、超能力による世界平和を目指していた  
いろいろなところで超能力の検査をしている

## 第1章 異変中に幻想入り

### 第10話 幻想入りして感じたのは浮遊感

#### S i d e 雪

真つ白な空間。なんといいば良いかよくわからないが、白雪と俺の精神世界の狭間といえれば良いのか……まあそんな空間に俺と、白と水色を基調とした和服を着ている白髪で背中くらいまである髪、極限まで薄めたような水色が入っている瞳（ぱっと見は白目）で、俺の胸あたりくらいしかない身長の子供が小さいテーブルに向かい合って座っている。しかも俺も白雪も険しい顔でゲンドウさんポーズしている

「さて、雪」

「なんだ白雪。今は今の状況に関して全力で現実逃避している最中だ。このことに関してはノータッチで行こうではないか。それとも松戒のことか？」

「私が話したい事は前者のことです。後者に関しては、雲が殺害されましたので私も今はスカッとした爽快感があります」

「お前つてところどころひどいよな」

「そんな事はどうでも良いです。今の状況を話さなければなりません」

「なんですかー。もうね？俺はなんでこうも面倒くさいことばかりに巻き込まれるんだ？呪われているの？だとしたらさっさとお祓いに行こうよ」

「そうなるか起きなければなりません」

「最悪すぎる。ふて寝したい」

「実際どうにかしないといけない事ですよ。もしかしたら今、此処にいる雪は霊体で身体は粉々に粉碎されているかもしれないのですから」

「辞めて（切実）。そんな事があり得そうだから、今全力で逃げているんだからさ」

「では、どういたしますか？今の雪が霊体で無かつたとしてもじきにそうなる可能性が高いですよ？」

「起きるしかないのか……終わっていてくれ終わっていてくれ終わっていてくれ終わっていてくれ終わっていてくれ終わっていてくれ……」

白雪の説得により、今起こっている現実を受け入れなければならなかった。切実に終わっていてくれと願いながらも意識を覚醒させる

まず、意識を覚醒してから感じたものは浮遊感。さつき目を覚ました時には色鮮やかな球体の物体がうねうね動く植物から出てくる（ように見えた）光景が倒れていても分かったが、今は全く見えない。下から何かの衝突音が聞こえない事はないが、気のせいだ（と信じたい）。今の視界には綺麗な青空が見える

「落ちてる……落ちてる……嘘だろ……ドウシテコウナッタ」

「浮遊しているという事は当然、俺には舞空術などの空を飛ぶ事ができないので落下するだろう。ジェットコースターである圧迫感を感じる。そんな事はどうでもよく、下を見なければいけないので空中で態勢を整えて下を見る

「終わってなかった……」

眼前に広がる光景はなんか向日葵がうねうね動いて伸びていたり、向日葵から色鮮やかな球体が飛んでいたりと、白いシャツに黄色のリボン。シャツの上に赤いベスト、赤いスカートの緑髪の女性2人が傘を武器のように使い（神楽か）、バゴンツ！ズドン！と特別製の傘なのか普通だったらすぐに破壊していきそうな音を出している。夜兎の傘と言われても納得できる

今の説明にあれ？と思った事があるだろう。『女性2人が』と、俺はさつき言った。まあ双子だろうと思うのだが、今すごい説明口調で今起こっていることを理解しようとし

ている間に片方の女性の傘がもう一人の方の女性の腹に深く食い込んだ時に、後ろに吹き飛び地面に当たる代わりに影に入ったのだ

何を言っているのかわからないと思うが俺も何を言っているのかよくわからねえ。超スピードとか超能力……あり得そうだな。ポル○レフみたく言おうと思ったが超能力だったらあり得そうだと思います、無理だった

と、まあ色々と普段ならここまで説明口調で整理しようと思わないが、今思ったことを叫ばせてもらおう

「まるで意味がわからんぞ！」

これをいうのと同時に地面に墜落しそうになったので（どうやら下は花畑みたいだった）花畑の花を踏まないように着地する

花畑に着地すると同時に額に汗が少し浮かんでいる女性が近づいてきた。さっきまでは上から見ていたので頭しか見えなかったが正面から見ればかなりの美人さんだ。まあ美人だからといってどうということではないが

「アナタはさつき打ち上げられた人よね？」

「やっぱり打ち上げられたのかよ……あいにくとこつちは寝ていて（正確には精神世界に行っていたのだが）そこらへんはよくわかりません」

「そうなのね。私と私の偽物が戦っている時に急に転移されたみたいに見れたからどう

しようかと思っていたけれど、まさか打ち上げられるとは思わなかったわ」

私の偽物？なんだそれ。ドツペルゲンガーかよ。ていうか打ち上げられたとかどんな戦いしたらそうなるんだよ

「着地する時の身のこなしからアナタは出来る人はみたいね。50メートルは打ち上げられてたわよ」

「はい？え、そんなに打ち上げられるものなんですか？」

「そっちに驚くのね。それと敬語は良いわ。普通に話して」

「わかった。ところで、ここはどこなんだ？さっきまで戦ってた施設から程遠いところにいるんだが」

人間って50メートルも上がるものなんだな。どんな方法かは知らないが二度とそんな目にあいたいとは思わないな

普通に話していたが目の前にいる人は誰なのだろうか……それに打ち上げられる前は俺は松戒と戦っていた施設で倒れていたはずだが……もしかして瞬間移動させられたとか？

「とりあえず私の家に来てちょうだい。戦った直後で立ち話なんて嫌だし、汗かいて着替えたいから」

「……ああ」



(雪……まさかその女性を……)

(?なんだその間は)

なんかよくわからんが女性の家に行くことになった。名前も知らない人について行くなどという子供の頃に親から散々言われることを思いつき無視する

白雪は何か言ったがよくわからん。少し間を置いたのは後方から誰かの視線を感じたからだ。振り向かず、正確の場所を特定しながら歩き出した女性の後を追って俺も歩き出す

………どうでも良いことだが、女性は暑いのか傘をさして回している

雪が視線を感じた方向の太陽の畑の周囲にある林の草木に隠れるようにしている人物がいた

「こちらリグル・ナイトバッグ。風見 幽香が撤退しました」

『そう。貴女は速やかにこちらに戻って来て』

「少し報告しておく事がありました」

『報告しておく事？何かあったの？』

「それが白髪の……人間が出現しました」

『人間が？里の人間かしら。服装はどんな感じ？』

「里の人間が着ているものではないと思います。おそらく外来人かと……」

リグルと名乗る者が通信で誰かと話している。柔らかな話し方で話す女声の持ち主は少し間をおいて言葉を出す

『そう。最近は博麗大結界が不安定なのでしようね。結界が緩んだ時に迷い込んだのでしよう。その人物は危険分子かは貴女に判断を任せるわ』

「……私に気づいたような素振りをしなかつたので我々の脅威になるかはまだ判断しかねます」

『そう。ならばばらくは様子見としてその人間の監視をしてちょうだい』  
「わかりました」

リグルは言い終わると同時に通信を切る。そして雪の監視を続けるために気配を消す

「あの人間が我々の脅威になるようなら一人になったところを襲撃する」

## 第11話 異変説明からの～

S i d e 雪

周りが向日葵だらけの畑を歩く女性の後を歩く。ここだけを見たらただのストーカーだな……

しばらく歩いてしていると立派な二階建ての洋館が見えてくる

「あそこが私の家よ。詳しい話は後で話すとしてアナタ着替えあるかしら。その服所々汚れているわよ」

「ん？あー本当だ。全然気付かなかった」

言われてみれば服（白いシャツにその上を紺色のブレザー、黒い長ズボン）が袖とか汚れている。畑に落ちたんだから汚れるのは当然だ

「こちらで適当な服を用意しておくわ。それと、何人か家に居るから挨拶とかしておいて」

「……なんか悪いな。手伝えることがあるなら言ってくれ。ある程度手伝う」

「そう。ありがとうね」

そんなこんなで家についたわけだが……なんかスゴイ（小並感）。広い、綺麗で住みた

いと思うが仕方がないことだよ。そういえば外に移動式屋台があったな。この人の趣味か？

「私はシャワー浴びて来るからその部屋にいてね。子供達の相手をよろしくね」

「え？子供？」

……マズイ……マズイぞ……俺は子供が苦手なんだ。何をして来るか予想できないところがありすぎて逃げ出しそうになったことがががが……こんな時に燈が居てくれれば任せることができるのに……

（うわー……行きたくないんだけど。なんかこの部屋から子供複数の声が聞こえる）

（先ほどの雪はできることは言ってくれみたいなこと言っていたので……頑張つて下さい）

（白雪がやってくれよ。実年齢はともかく、見た目なら子供なんだから）

などと本日二度目の現実逃避をしていると勝手に目の前のドアがこちら側に開いた。もちろん現実逃避していた俺は半歩後ろに下がったが左足親指にドアの角が直撃する。これは痛い……

全力で痛みに耐えているとドアを開いた子供が俺を見上げる

「アナタは誰なの？どこから入ったの？」

「俺は博咲 雪。玄関からこの家の家主の人に案内されて入ってきた」

「そうなんだ。幽香は大丈夫みたいね、良かった。私はメデイスン・メランコリー。よろしく」

「よろしく」

なんだこの子は。金髪で薄紫色の瞳。身長は白雪ほどか？パツと見て人形みたいだと思った。それで名前がメデイスン・メランコリーか。外国人か？それにしても日本語が上手いな

「どうしたのメデイスン。ってその人は誰なの？」

「この人は雪さん。幽香が連れてきたって」

「そうなんだ。私はミスティア・ローレライです。よろしくお願いします」

「俺は博咲 雪。よろしくな」

ピンク髪で大人しそうな子、なんだけど……なんだアレは……雀みたいな羽根が背中にあるみたいになっている。さらに、顔の側面……耳があるところは丸くなく、エルフの耳に雀の羽があるように見える。なんだこの子はミスティア（だっけ？）多分コスプレしているんだろう。にしては良く出来ているな

「こんにちは。私はリグル・ナイトバグです」

「俺は（ry）」

次にミスティアの横にいる緑髪の女の子……男だつて言われても納得できる。まあ

いいや。リグル（だっけ？）の頭から虫の触覚が2つある。なんの触覚だ？ 蛭か？ よく分からん。マントを羽織っている。リグルは確か蠢くだっけ？ ナイトは夜でバグはコンピュータとかのバグではなければ蟲だっけ？

もうわがんね（理解放棄）

「ん、リグル？」

「どうしたんですか？」

「お前って同じ名前の人って知ってるか？」

「？ いえ？ 私と同じ名前の人は知りませんが……それが？」

「いや、この方向の茂みに隠れて俺かこの家主さん……幽香だっけ？ まあこつちを見てたんだよ」

今立っているところから南南東の方角を指差しながらリグルに言う目の中にいる3人は目を見開いてから、玄関に駆け出しそうになった

その時に幽香が紅茶を2人分と……和服？ 裾の短い銀○の銀さんみたいな物を持ってた。なんであるの？

「コレが着替えなんだけど……ふむ、似合うわね」

「まだ着てないんだが？」

「何となくわかるのよ。私は和服なんて着ないからね。紫に渡された時はどうしようか

迷ったんだけどね。ちよūdと良かったわ」

「俺は天パじやないぞ?」

なんて幽香と話しているわけなんだが。3人は幽香が来るとその場に止まっている。何があつた

「それで少し会話が聞こえたんだけど、リグルと同じ名前の人があつちの茂みに隠れているって本当かしら?」

「ああ。同じ名前を使うとかなりすましかなかか?」

「ある意味そうかもね。話は座りながらするとして、その3人も一緒に来なさい。今行つたつて逃げられるだけだわ」

幽香が3人に向けてどこか威圧的に言うのと、黙つてさつきまでいた部屋に入る

逃げられるとかなんとか言つてたけど何のことだ?話してくれるみたいだが俺の第六感が警報を鳴らしている。わりと本気な方で。これ以上関わると面倒な事に巻き込まれる、と。誠に残念な事に俺のこういう事に関しては良く当たるのだ

「それでアナタの不思議に思っていることからにしましょうか。知りたいことは何かしら」

「……何で研究施設みたいなどころから畑にいたのか。そもそもここはどこなのか。何で幽香が使っていた傘は壊れてもおおかしくないような音を出しても壊れていないのか。

博麗大結界つてなに？ どうして俺はこうも面倒な事に巻き込まれるのか」

「最後は分からないわ」

知ってた

〜4人説明中〜

「つまり、話をまとめると俺はその、幻想入りした外来人で、畑にいた理由が博麗大結界が不安定になってきている時に偶然と……。そんでもってここは太陽の畑で、この世界を総じて幻想郷。忘れたれたものの行き着く最後の楽園。幽香の傘は特別製と妖力をまとっているから早々壊れないと……。ついでに4人は人間じゃないとね。はあ……またか」

「アナタの見込みが早くていいわね。妖怪なんて外来人はそんな簡単に信じないわよ」

「こっちは世界の神秘とかにめっぼう詳しい奴がいるからな。それにしても夜雀に付喪神に蛍の妖怪に花の妖怪ね〜」

「ど……どうしたの？」

4人の説明で俺がここに居る理由は大体わかった。妖怪は今まであったことがないけど目の前にいるんじゃないや仕方がない。現実を受け止めよう。白雪とか居るしな

付喪神つて長い年月（正確には99年）存在するものに意思が宿るもので、夜雀つてどっかの県に出る妖怪で夜の山道を歩いているとチツチツとか鳴いてついて来るんだっけ？ 蛍と花の妖怪は知らん



「ミステイアがなんか怯んでいるような声を出した理由は多分、俺がミステイアを見て  
いるからだろう。正確には羽根だが」

「いや、その羽根は本物なんだって事。コスプレだと思っていたから」

「そう…」

妖怪だと分かっているながら見るも本物にしかみえなくなってきた。少し触ってみた  
いと思ったり

「それでさつきリグルと名乗る妖怪が茂みに隠れているってことの話んだけどそれは  
多分ドッペルゲンガーね」

「ドッペルゲンガー？それって同じ姿の人物が現れて本物と会おうと殺されて入れ替わ  
るってやつだけ？あれって実際は殺しあうんだろ？同じ姿の内の1人が生きてい  
たってどっちが本物かなんて分からんよな」

ドッペルゲンガーの俺が知っている知識を言うと幽香達は頷く。ちなみに今、俺の脳  
内にはボカロ曲の拜啓ドッペルゲンガーが流れている。なんか白雪が歌い始めたんだ  
が……しかも上手い

「そう。幻想郷は異変が起こるって言ったわよね？」

「あー言ってたな。暇つぶしなんだろ？妖怪達が自分の存在を知らしめるなんてことも  
あるみたいとかなんとか」

「そう。その異変が起こっているのよ。今の異変を簡単に言えば幻想郷の住人全員にドッペルゲンガーが現れるってやつ」

「あーなるほどな。さっきの幽香が2人いたのは、影に消えた方の幽香がドッペルゲンガーでコッチは本物って事だな」

「そう。ドッペルゲンガーの特徴は危険になると影に消えるってところ。面倒なのが実力が本人と全く同じなのよね。さっきは不意をついたから何とかなつたけど」

「(ドッペルゲンガーって影に消えるんだっけ?)で、茂みに隠れてこつちをみているリグルはドッペルゲンガーって事だな」

「そう。ドッペルゲンガーを倒すともう一度現れることはないよ」

「じゃあ入れ替わっていたらどうするんだ?」

「まだそんな報告は無いわね。ただ単に把握していないだけかもしれないけど」

「いくつかの避難場所とされているところがあつて、幽香の家も避難場所になっているわ。他には博麗神社、紅魔館、人里、守矢神社、永遠亭、命蓮寺、マヨヒガ、その他諸々。この全てに共通する事が実力者がいるって事ね。基本的には1人になったところを襲撃されるから必ず2人以上が一緒に居る必要があるみたいね」

「ふむふむ。だから隠れているリグルは1人になったところをくなんて言っていたのか。それでこの中で一番安全なのが博麗神社か」

「そう、博麗神社には博麗の巫女が居るからね」

「その博麗の巫女のドツペルゲンガーはとうなつたんだ？既に倒されているとか」

「いえ、まだ倒せてないみたいわ」

「残念。それで俺のドツペルゲンガーは出るのか？」

「さく？異変が起こつた時点で雪は幻想郷に居なかつたから今後出ないかもしれないし、出るかもしれない」

「はく大変なんだな」

話を聞くだけでも面倒な事だ。俺のドツペルゲンガーが出ないことを願うがな。いくつかの避難場所を言われたんだが此処を出る時はその場所に行く事にしよう。場所分からんけどとりあえず人里を目指すかな

「幽香！永遠亭が襲撃されたわ！結界を張っているから出ることはできないだろうけど貴女も来て！」

「永遠亭が？幻想郷の中でもトツプクラスに強い奴が多く集まっているところを襲撃するとはね。そこを落とす事ができれば今後が楽でも思っているのかしら」

「（メリー？いや、違うな。髪長さとか）まるで戦争だな。ある意味暇つぶしになるだろうけどな。でも良いのか？此処も避難場所なんだろう？幽香が行っている間にドツペルゲンガーの方の幽香が此処を襲撃するなんてこともあり得そうなんだが」

「?!? え? 嘘でしょう? …… やっぱり幽香はここに居て。貴方名前は?」

「? 博咲 雪。外人」

「幽香の代わりに来てもらおうよ」

「は? 何でだよ」

「良いから来なさい!」

「はー!? ふぎけるなー! うわああああ!!」

なんか分からんがいきなり目が大量に存在する悪趣味が極まっている空間からメリーにすごい似ている美人が出てきた。訳もわからず質問に答えていくと腕を掴まれてあり得ない贅力で悪趣味が極まっている空間に投げ飛ばされた

## S i d e 幽香

紫が私の目の前で雪をスキマに無理矢理入れた。雪が無理矢理行かされたところは永遠亭。月の住人がいる場所で人間が弾幕ごっこ以外で勝てる見込みは皆無と言って

も良いような人達がいる。ドツペルゲンガーは本人と全く同じ強さだから、戦ったって巻き込まれるだけでいかせても無駄だろう。挽肉にされるのがオチだ

「紫！なんで雪を行かせたの!? 永遠亭の人達の戦いに巻き込ませたら死ぬわよ！」

「いえ、彼が私の知っている博覧の血を継いでいるなら死ぬことはないはずよ。もしかしたら一人で終わられてくるかもしれない……」

「……貴女がそこまで言うなんてね。雪はどんな奴なのかしら」

私は思っていたよりも大きな声で紫に問い詰めたが、紫の冷静な態度で頭が少し冷えた。椅子に座っている3人は雪がスキマに入れられて呆然としていたが、私の大きな声でビクツと肩が上がった

紫は近くの、さっきまで雪が座っていた椅子に腰を下ろすと口を開く

「そうね。それじゃあまずは彼を初めて見たときの印象を教えてくださいましょうか」

「……………私はいきなり現れたかと思えば打ち上げられた不憫な子（幽香）」

「私は少し目つきが悪いお姉さん」（メディスン）」

「私も」×2（リグル・ミスティア）」

私達は雪の第一人称を言った

「じゃあ彼と話してどうだった？」

「理解が速くて楽観的な考え方をしていたわね。後は妖怪とかの知識があるくらいかし

ら……あともう一つ。雪からはほんのかすかに血の匂いがしたわ」

「そうなの？ 私達は気付かなかったけど……」

雪と話している時に本当に少しかだけ血の匂いがした。日常的に血を流したり、殺しているわけではないみたいだけど……最近人の死体があるところに行つた事があるのかしら

「じゃあ彼について話すと長くなるからこれだけは言つてあげるわ。永遠亭の戦いを戻ってくる事ができたのなら私達に強大な戦力が加わる事になるわ」

「じゃあ、私と雪はどっちが勝つと思う？」

「雪よ（即答）」

「分かつたわ。貴女がそこまで言うならここに居ましょう」

「……それで、話す前に聞きたい事があるのだけど」

「何かしら？」

「なんで彼が銀さんの服を着ていたの？」

「貴女が渡してきたけど私は使わないから試しに彼に着せてみただけよ」

「似合っていたわね」

「そうね」

## 第12話 〈異変現場へGO〉

迷いの竹林内に存在する永遠亭という幻想郷の医療施設がある。迷いの竹林と言われるだけあって一度入ったら妖精でさえ迷ってしまう。永遠亭までの案内人をしてい  
る藤原 妹紅や竹林内で生活している者は迷いの竹林内を熟知しているので迷わない。  
永遠亭を中心として、半径100メートルの結界が張られている。永遠亭の医師である  
八意 永琳は目の前にいる同じ姿をした自分のドッペルゲンガーと対峙していた

「全く……！自分と同じ姿と実力と戦うのはいつまでも慣れないわね！」  
「そう思うならさっさとやられてもらいたいわね！」

お互い考えることは同じなのか弾幕の色、量、軌道、威力が全てにおいて同じだった。  
弾幕がお互いの中心距離にて相殺される

（このままだといつも通りでギリ貧。何かあつちの私の気を引かせるようなことが起き  
れば……！）

永琳が心の中でそう願った時に視界の隅にスキマが開いた

スキマからは微かに土の匂いがあることから太陽の畑の幽香の家からだろうと推測  
する。そして、現在起こっている異変で避難場所とされている幽香の家に居る者は家主

の幽香、リグル、ミスティア、メディスンの4人。その中で今の戦闘に参加できるのは、幻想郷でもトップクラスに強い幽香しか居ない。よって、幽香が来るだろうとその場に居る全員が思った

——しかし、違った。ついさつき幻想入りしたなんて知るよしも無い全員は唾然として

スキマから出てきたのは、雪のように真っ白な髪と肌で、前に妖怪の賢者が永琳に渡したが丁重にお断りされて四季のフラワーマスターに回された和服を身にまとい、何も持たずに出てきた見た目は中性的な人間。スキマの高さが約5メートル。そこから落ちてきたのだから普通の人間はそのまま地面まで直行で落ち、当たりどころが悪ければ気絶する高さ。その人間は1メートルほど落下したところで空中で態勢を変え、無事に着地した。立ち上がるとおよそ160cm程の身長だとわかる

(誰!?なんで幽香の家から人間が出て来るの!?)

少なからずその場に居る当の本人以外のドツベルゲンガー含め、そう思っただろう。それを知るためのスキマも、人間を放り出したらすぐに閉じてしまっている

スキマから放り出された人間はその場を一通り見回した。その後、その場に居る全員に注目されているが気にする様子はなく、無関心そうにため息をつき、呟いた

「はあ………。どうやって境界から出よう」



S i d e  
雪

なんか知らないけどいきなり紫って美人にありえない膂力によりスキマというところに入れられた。いきなりの事で為すがままだったけどスキマを出たら本日二度目の浮遊感を感じた

けれど、高さは50メートルとかじゃない、5メートルほど。頭から落ちたら気絶は確定するかも……くらいの高さ

50メートルから落ちても問題ないから5メートルなんて楽勝。難易度イージー。その場で態勢を変え、地面に着地する

(なんだったんだろさつき力。どこからあんな力が出て来るんだ？ 禊も似たようなものだからそこまで驚かなかったがな。世界は広い)

(先ほどの女性は私の記憶が正しければ八雲 紫です)

(へえ。よく知ってるな)

(私も話したことがあるので)

(そうかい)

白雪と軽く雑談しながら周囲を見渡す

パツと見たただけでわかることは全員が俺を見ていること。なんだなんだ、どうした？俺は何か目立つようなことをやったか？……………今のですね。分かっています。これも全部八雲 紫って奴のせいなんだ。だから文句は紫に言っつね

しばらく見ていると分かることがいくつもある。一つは同じ姿の人物が二人いて、同じ姿の人物同士で向かい合っていること。なんで同じ姿の人物同士で戦っていたんだと思うけど、別の人を狙うとかダメなの？それだったら早く終わりそうだが…………。もしかして同じ姿の人物じゃないと倒せないとか？それともドツペルゲンガーは自分がその姿の人物を倒さないと入れ替わることができないとか

二つ目は全員が美人だという事。俺も男だ。そういうことに目が行くことは仕方がない事。当然のことだが俺は誰が誰なのかは全くわからない。事前に情報をもろうこと無く移動させられたからな…………。後で紫を締め上げるか

俺から近いところに弓を持った長い銀髪を三つ編みにしている女性。服が奇抜で片方が赤、反対側が青でスカートは赤と青が逆になっている服を着ている。すごいデザイ

ンだ。外でもないだろう服。欲しいとは思わないな。二人いる模様。二人とも目立った傷はないが疲労しているかな

次に銀髪の人から10メートルほど離れた場所に薄紫の髪で踵まで届くのではないだろうかと思うほど長い髪の少女。白いシャツに赤いネクタイをしており、ベルトを巻いている。青いミニスカを履いている。頭にウサギの耳があり、一瞬コスプレかと思つたが先ほどの妖怪とか付喪神により、ウサギの妖怪だと思われる。実際はコスプレ大好きな人かもしれないけど……この少女も二人いてどちらも傷があり、疲労もうかがえる。さらにうさ耳少女から一気に遠くにいるのが、多分俺が今まで生きた中で一番美しいと思う人物。大和撫子かな?と思つたね。この人は真つ黒な髪を背中まで伸ばしており、ピンクの羽織と、赤い袴を着ている。袴には竹や紅葉の模様がある。この人も二人いる。銀髪の人と同じく傷はないが疲れている

最後にここからは見辛いけど髪を肩まで伸ばした黒髪でパフワンピースを着ており、首から人参のネックレスをさげている小柄の少女。この少女にもうさ耳があり、さつき少女の違いがあるとすれば耳の先が丸いことかな。こちらも二人いる。どちらも傷はないようだが疲れているな

まあ総じて思うんだが……誰も倒せてないんだな。同じ実力なのだからそうなるかもしれないから、近くの人の援護をしようとしたところを攻撃されるよな。てか、全員

俺を見ているけどその隙に攻撃しようとは思わないのか？やり方が卑怯だろうがチャンスはちゃんと使ったほうがいいと思うが

(どうするのですか？このまま戦うこともできませんが)

(どつちが本物か分からないのか？間違えて本物倒したらさらに面倒臭いことになるだろ。そもそもどいつも初対面だぞ？その人が知っている知識なんて知るわけないし今初めてみたんだが間違いない探しはできるが本物との違いなんぞ知るか)

(……と、いうことは)

(ああ)

俺は白雪と話しながらこの場のことはどうでもよくなったのでため息をつきながら  
呟く

「はあく……。どうやって結界から出よう」

この場から去ることだ

「さーてとく。出口ってどこだ？そもそも結界に出口つてあるのか？」

(あるものはあるんじゃないですかね？私は結界に詳しいわけではないので何とも言えません)

「だよな」

その場を回れ右して結界から出るために歩き出す。俺の知識の中で結界は正しい方

法で解除するとか、チート並みに強い奴は軽く叩いただけで破壊するとかしか知らない。こういうのは大体空間が歪んでいたりして行っても行っても先が見えなくて戻ると迷うか歩いた距離と関係なくすぐに戻ってこれるかの二択くらいだろうね。最悪斬れば問題ないな

そんな考えで回れ右した俺に誰かの声かけられる。位置的に弓を持った銀髪の人かな

「アナタ誰かしら。私はアナタと会ったことはないのだけれど……」

「そうだね。俺もあんたと会ったことはないな。外来人と言えればわかるか？ 幽香の家から紫とか言う奴のスキマからここに放り込まれた人間」

振り返って、簡潔に名前を知らない美人に早口で答える。できれば早くここから立ち去りたいんだが……面倒ごとには巻き込まれそうだからね

「ここから出るには条件があるんだけれど……」

「へ〜（興味なし）」

「興味なさそうね」

「ないよ。まあドツベルゲンガーとやるなら勝手にやってね。俺はこれ以上面倒ごとに巻き込まれたくないから」

そう言ってまた回れ右して歩き出す。と、同時に首を横に倒す。何故かって？ 『うさ

耳の少女から赤い弾丸みたいなものが出て、俺の脳天に当たりそうだった』からだ  
赤い弾丸みたいなものは俺の耳の横を通り抜けて直線にある竹に当たって竹が折れた

俺は再度振り返って赤い弾丸みたいなものを放った人物に目を向ける。放った張本人は指鉄砲のような形をした手を俺に向けていた。目を見開いているな。俺が今のを避けたからか？ 残念ながら父さんからこんな難易度イージーな攻撃を必ず避けられるようにされたからな。まあ、これで俺が攻撃する理由ができたな

残念なことに面倒ごとが起こりそうだ

「今のは完全な不意打ちのはず……」

「はあく!? 今のが完成な不意打ち? ぬかしおる」

そう言つて右腕を水平に軽くうさ耳の少女に向けて挙げると、うさ耳の少女の脚が凍りつく

「なっ……何これ!? いきなり凍り……」

「はいはい。さっさと凍ってね」

『弓を持った銀髪の人からうさ耳の少女の目の前まで移動する』

「いつのまに……はあ!」

一瞬で目の前に来た俺に殴りかかるが、俺は片手で抑える。と、同時に掴んだ部分が

どんだん体に向かって凍っていく。脚の方も同じく

身長は俺と同じくらいだな

「い…………や…いや…何これ…いやあああああああああ!!!」

うさ耳の少女が悲鳴をあげるがどうすることもできずにしばらくすると完全に凍りついた。今すぐ解凍すればまだ死なないと思うけど放っておくと死ぬんじゃない？まあどうでもいいことだけだな

「さて、どうしようか…………つと…」

今更のように銀髪の美人の方から矢が飛んで来た。俺の心臓を的確に捉えている…………すごい腕だ。俺はその矢を避けた。さらに言えば矢が飛んで来た方向からは目の前で凍っているうさ耳の少女の前にいる位置にいるから…………あとは分かるな？粉々に壊れたよ。ガラガラ音が鳴ってるよ

因みに俺の目の前で壊れたうさ耳の少女と同じ姿（本物かどうかは知らないけど）のうさ耳の少女は唾然として、口を開けている

また振り返ると銀髪の美人の一人が俺に向けて弓を構えている

「あくあ。まだ助かるかもしれないなかったのに殺しちゃうなんて…………かわいそうに」

「アナタがやったことでしょうか？」

「一応助かるチャンスあげただけだね。それをアンタが棒に振っただけだよ。まあ

本物かドツペルゲンガーかは知らないけど一人消すチャンスだったから行動としては良いのかな？それとも今ので俺を殺せると思った？」

弓を構えている方の銀髪の美人に精神攻撃を与えながら足元に転がっている氷の塊を軽く蹴る。弓を構えている方は表情を一切変えていないが、弓を構えていない方は表情が暗い

他の人は呆然としている

「まあ次こうなるのはアンタだけだな？」



## 第13話 v s 永遠亭のドッペルゲンガー2人

雪と弓を構えている永琳までの距離は約50メートル

雪は永琳をまつすぐ見据えているが、周りからの不意打ちに注意している

永琳は弓を構えながら脳内に響く声に意識を傾けていた。雪からの攻撃に反応できるように半分ほどだが

『(そちらはどうなったの?)』

(こっちは座薬……優曇華がやられたわ)

『(優曇華が?どんな風にやられたの?)』

(氷漬けにされた後粉々に崩れたわ。相手は氷を操るみたいよ。できれば紫あたりに来て欲しいのだけど)

『(……それができないのよ)』

(?!:どうして?何者かが結界内に進入できないようにしたのかしら?)

『(ええ。恐らくまだ本物の紫ね。外からは一切干渉できないようにされているわ)』

ということの内側からなら問題無いかしら。と、永琳は思考を巡らす。内側から矢で攻撃すれば結界は破壊できるとして、その隙に相手にやられるかもしれない。そんな

考えが月の頭脳と呼ばれる永琳によぎる。それほど、永琳は雪を警戒していた

一方、雪は――

(さて、1人いなくなったから、残り7人か。ドツペルゲンガーだけなら3人か4人。本物も戦うなら7人。さつき崩れたやつと同じ姿しているうさ耳少女はそこでへたり込んでるから戦意は今の所無し。今は矢放った銀髪の人を倒す！)

(具体的にはどうするのですか？この中では一番強いと思われませんが)

(そうだな。相手は弓矢ならや利用はある。が、少し不安は否めないな)

雪はそう考えた。お互いどう出るのか伺いながら睨み合っている

ピュッ！と矢を放つ音が響くと同時に雪は体勢を傾け、矢を横から掴み、体を半回転させながら矢の先端に氷を付け、お返しとばかりに投げる

「お返しだ！」

「(あの氷に触れるのは危険だからはたき落とす!) ふっ！」

永琳は矢を弓ではたき落とす。矢は地面に刺さった

雪は矢を投げ終わってから全力で永琳に向かって駆け出していた。永琳が矢をはたき落した時には残り10メートルまで距離を詰めていた

「覚神 神代の記憶」

「は？神代の…なんだって？」

永琳が急に唱えた言葉に雪は思わず聞き返してしまった。その時に、雪の周りに外側が青くなつていて、中は白い物体が現れた

「なんだこれ……」

突然現れたその物体をみているとその物体から細長い弾幕が星の角の位置に伸びるかのよう飛び出た。さらには、小さく、細かい弾幕を雪を襲う

「これが弾幕……だっけ？これって遊び用じゃないの？当たったら即死するような威力なんだが……」

雪は弾幕の合間を縫うように永琳まで進む。その顔には余裕がある。弾幕は通常、当たってもかすり傷か、服が少し破れる程度なのだが、今行っているのは遊びではない。なので、弾幕一つ当たればその部位は吹き飛ぶだろう。人間である雪からすれば冗談ではない

「抜け道があるのはそういうルールだから仕方がないとしても、今は自分が生きるか死ぬかの瀬戸際なんだからそういう配慮は必要ないと思うんだが、アンタはどう思ってるのかね？」

雪は弾幕をかいくぐりながら永琳に問いかける。それに対し、永琳は雪から少しでも距離を取るよう後方に下がりながら答える

「そんなことしたら、入れ替わった後に後悔するからよ」

「甘いな。優しいじゃなくて、甘い。今は殺すか殺されるか。生きるか死ぬかの場面だ。そんなことを気にしている暇があるなら確実に相手を倒すことを考えなきゃいけない」  
雪は率直に自分の考えを述べる。ふっと笑い、まあ、けど。と、次の言葉に繋げる  
「その甘さ。嫌いじゃあないぜ（殺し合いじゃなけりやあな）」

どこぞの過負荷の代表格の言葉を言うと同時に永琳の懐に飛び込むように接近する  
永琳は先ほどの雪の言葉に少しの間頭の中が真っ白になっていた。言っていることは矛盾している故に

その隙を雪は見逃さずに永琳の着ている奇抜な服の裾に手を伸ばした瞬間に、雪の体がくの字に曲がり、近くの竹まで吹き飛び、竹に叩きつけられてズルズルと地面に落ちる

「永琳。大丈夫？」

「ええ、私は大丈夫です。ありがとうございます」

「あの人は私達で確実に倒すわよ」

「はい」

蓬萊人であ、月人の姫蓬萊山 輝夜（ドツペルゲンガー）が雪の横つ腹を思いつき蹴ったのだ。輝夜と永琳は不老不死なので先ほどの鈴仙・優曇華院・イナバ（ドツペルゲンガー）の様に氷漬けにされたとしても解凍されれば復活する

月人の蹴りを人間がまともに食らえば普通の人間ならほぼ、即死する。上半身と下半身が離れていてもおかしくないほどの威力なのだが、雪の体は繋がっている

その光景をみていた永琳（本物）と輝夜（本物）は雪をかばう様に立つ

「鈴仙！その人を診て！その後は永遠亭に運ぶ！」

「え？あ……は……はい」

「（こ）は私と永琳が抑えておくわ！」

永琳の指示を受けた鈴仙はすぐに竹の近くに座って竹に背中を預けている雪のもとに行く。服をはだき、患部を診る

（患部は横腹の腫れ、内臓に損傷があるかもしれない。呼吸は少し乱れている。なんで姫様の蹴りを受けてまだ生きているのかしら）

患部を診終わった鈴仙は雪を抱えようと手を伸ばすが空を切る

「えっ？」

鈴仙は思わず声が漏れた。それもそうだろう。輝夜の蹴りを食らって竹に叩きつけられ、身動きを取れない……いや、取っていないかった者が予備動作なく鈴仙の『視界から消えた』のだ

患部を診れるほど近くに居て、自分が全く動かない状態から動こうとすれば必ず気付くほどの至近距離にいたのだ

雪はどこに行つたのか……その答えはすぐに鈴仙の耳に届く

「「え？」」

背後……永琳達が居る場所から4つ（本物、ドツペルゲンガー含めた）の同じ疑問を持つ声と、ザシユツという首を鋭い刃物か何かで斬つたかのような音が。永琳は弓矢を使う。輝夜は素手が弾幕なので刃物はあり得ない。では、今のところ空気になっている因幡　てるか……しかし、彼女も刃物は使わない

では、誰だろう……

その答えはすぐに1人の人物の声でわかる

「これで2人目」

鈴仙が振り向くと着物姿の輝夜（ドツペルゲンガー）の目の前に、鈴仙の目の前で竹に背中を預ける様にしていた雪が右腕を水平に挙げていた。輝夜の首は体には繋がつておらず、ポトツと地面に落ちるが、その場の全員は輝夜の首を見ていない

何故ならば……『雪の掌から一振りの刀の刀身の半分が出ていた』からだ

その場の雪以外の全員の理解が追いつかないまま、そんな事は知らない雪の掌からはスーと、音を立てずに一振りの刀が全身を現す

雪は輝夜の横に居る永琳（ドツペルゲンガー）を横目で見ながら一言だけ言う

「キールターイム」

「鈴仙（ドッベルゲンガー）が粉々に砕けた時、ある場所では」

「どうなったの!? 鈴仙からの通信が切れたわ!」

「結界により、結界内の通信ができません!」

先ほど、鈴仙が雪に弾幕を放ったのはここに居る人物達により指示だった。通信ができないのは結界が原因なのと、通信相手が通信できなくなってしまったからだ。後者の事を知るよしもない者達は混乱していた

そんな光景を少し離れた場所で見ている者がいる。その人物は何処か懐かしそうに、哀しそうな目で遠くを見つめる

「まさか貴方が来たの? 雪<sup>せつ</sup>」

その言葉は誰の耳にも届く事はなく、虚空に消えた

## 第14話 竹林の戦い決着

「輝夜が雪を蹴って、雪が輝夜を斬る前」

Side 雪

「なあ白雪」

「何でしよう雪」

真つ白な空間。と、言っても10歳<sup>最</sup>に<sup>初</sup>来た時は本当に何もなかったような。簡易のテーブルと椅子くらい。それが今やベッドに本棚にカラオケをやるために必要な物一式。白雪が欲しいと思えば基本的になんでも出てくるし、空間が拡張される。まじで何なのこの不思議空間

そんなものは良いや。今更こんなこと気にしていたら蓮子の奇行や、襖の身体能力とかに比べたらなんて事はない。あの2人は可笑しい

ちなみに俺と白雪は将棋を指しています。白雪めっちゃ強い

「さつき俺気が付いたら蹴られていたんだけど……あれってどうなったらあーなるんだ？」

「?そんなものはあの女性が雪の下まで私達に気付かれずに移動して、雪を蹴り飛ばし



ただけでしょう」

「それなんだけどな？俺とお前に気付かれずに移動するにはどれくらいの速度だと思う？まあ単純に白雪が気付いていうよりも早くに移動する、なんて事もあるな」

「マズいな。角とられちゃったよ。飛車をとるけどな」

俺はともかく白雪の感覚はあり得ない。俺だつて銃弾くらいは避けられるが白雪はそれよりも遥かに上をいつている。どこぞのマツハ20で動く教師の速さにも対応できると思う。その事を考えればどれくらいだ？マツハ20を超えるとなる

「おそらく須臾だと思われます。私はおろか、雪の先祖様でもその域で行動する事はできませんでした」

須臾つて確か10000兆分の一を示す漢字文化圏の数の単位だったよな？時間の最小とかなんとかか。その域で行動できるつて事は移動系の能力か、須臾を操るみたいな能力か？何者だよ。あの大和撫子

「……だが、裏を返せば……」

「つまり、須臾一步前だったら行動できるつて事だよな？バケモンの集まりだな博咲家は」

「それつて自虐ですよね？貴方はまだその才能が完全に開花していないだけで、開花すれば先祖様を超えるほどですよ？ただ、雪とは實際にやってみないとわかりませんが

……」

「雪<sup>せう</sup>って確か、博暎の始祖だよな？ そんなに強いのか？ 俺の先祖は」

「強いなんてものではないですよ。今の雪の……そうですね。10倍ほどでしょうか」

「バケモノオ」

しまった。つい木○ボイスが出てしまった。何でそんなに強いんだよ

つか、俺の才能が開花すれば先祖を超えるって……フィクションの世界かよ（※フィクションの世界です）

マズいな……角がなかった

「対抗策はあるんですか？」

「あるぞ。2つくらいな。まあ1つ失敗すれば面倒だけどな。どれだけ速く動いたとしても、それよりも速く布石を打てば良いだけだ」

「悪人顔ですね。あ、王手です」

ヤバイ……これ負けたかも……

どれだけ速く動いたても触れたらアウト。見られたらアウトみたいな条件には囚われる。そこをつけば勝てる

というかそんなに悪人顔だっただろうか？ 個人的には微笑程度だと思っただが……

まあ自分の顔が見れないので何とも言えないが……ね

「……さて、現在外は先程雪が悪役がやりそうな方法で粉々になった少女と同じ姿の方が貴方に向かつて来ていますが、どうしますか？」

「(クツソ：また負けた) 個人的にはこのまま寝ていたいんだがな。でも、そうなるのを蹴り飛ばした奴が逃げそうなんだよな。須臾の域で動く奴が今後俺に危害を加えようとするなら今のうちにどうにかしておかないとだよな」

ため息をつきながら将棋盤の片付けを開始する

「さて、面倒だが行くと思いますか」

「気をつけて下さいね。当たりどころが悪ければ即死なんてあり得そうですし」

「ありそうで怖いな」

軽口を叩きながらも意識を覚醒する。目は閉じているが先程までは痛みなんて無かったが、今は全身が痛い。竹に叩きつけられたんだからしょうがない。内臓とか大丈夫だよな？

須臾の域で行動する奴だから俺が意識を取り戻した事を知ればすぐに襲いかかるだろうな。だから意識を覚醒しても、声を上げず、目を上げず体をピクリとも動かさずに状況を把握する

声とこの結界内にいる人物の立っている位置は大体把握した。俺をかばうように立っているのが奇抜な服装の銀髪美人。その横に立っているのが大和撫子か。その向

かい側に立っているのが俺を襲った奴等。そんなもって俺の近くに屈んでいるのがうさ耳少女。かなり離れた場所ので俺たちをみている小さいうさ耳少女か

これで立っている位置は把握した。さくて、暴れるか

俺がとつた行動は至極簡単。向かい合っている4人の間に瞬間移動する。次に突然の俺の登場に目を見開いている大和撫子の首を『右手の掌から刀身が半分出した白雪』で斬る

「まず一人」

「『え?』」

「え?」

最初はまだ状況を理解していない4人。次に俺の近くで屈んでいたうさ耳少女からそんなものはどうでもいい。だから適当な調子で言う

「キールターイム」

その場には雪を中心に冷気が漂っている

(何が……いきなり現れた人間が姫の首を切り飛ばした? どうやっていどうした!?)

(私の首……いや、ドツベルゲンガーだけど……どうやって? 瞬間移動? 何で手から刃が?)

永琳のドツベルゲンガーと、本物の輝夜が今起こったことを頑張って理解しようとする

が、

「はい次ー」

「クッ」

適当な調子で手に持つ一振りの刀で横に棒立ちしている永琳のドツベルゲンガーの首を確実に捉えるように振るう

永琳はギリギリのところ得上半身を倒す形で回避する。斬撃が勢い余って先にある竹を斬り飛ばしている。混乱していたし、今のは言え、今の当たったら確実に輝夜のドツベルゲンガーと同じ末路を辿っていた事は確かであろう攻撃を避けた

「へー今の避けるんだ。あ、その3人は離れている。巻き込む」

「( )の……」

雪が輝夜と永琳、鈴仙の本物たちに離れているように指示をしていると永琳のドツペルゲンガーが素早く弓を引き、射つ。その矢を下から上にかけて真つ二つに斬る

「ところでさーこの人の能力何かわかる？」

「私の能力はあらゆる薬を作る程度の能力よ！」

「ついでに私の能力は永遠と須臾を操る程度の能力よ！私たちは蓬莱人だから首を斬り飛ばしたところで死なないわ！」

「は？蓬莱人？何それ？」

雪が永琳のドツペルゲンガーを視界にとどめておきながら大声だけで離れている所にいる本物に自分たちの能力を訊く

永琳の能力はあらゆる薬を作る程度の能力。そのままの能力

輝夜の能力は永遠と須臾を操る程度の能力。永遠とは変わらないという事。須臾は前述の通り。それらを操る輝夜は幻想郷の中でもトップクラスの強さを誇っている

それらの意味をすぐに理解した雪はその後輝夜の口から出てきた『蓬莱人』という単語に聞き覚えのない雪は問い返すと、驚きの返答が帰ってきた

「蓬莱人は不死者の事よ！」

「は？不死者？それって…や——」

「神宝 ブリリアントドラゴンバレッタ！」

「何その厨二…ゴフツ」

雪が不死者の意味を理解した瞬間、輝夜の首を斬り飛ばした程度で死なないとわかつて振替えようとする、雪の背後から輝夜のスペカの針状と球体の弾幕が全て背中に当たる。あまりの厨二名のスペカに雪が何かを言おうとした時には、前方の永琳のドツペルゲンガーにぶつかると、より正確には永琳の豊満な胸に頭から

「え？きやあああああ！」

「グベラツ」

甲高い声とともに永琳のドツペルゲンガーから強烈（普通の人間なら首が吹き飛ばほどの威力）な平手打ちを頬に食らう。真横に飛ばされる。その際、白雪の刃が永琳の腕に掠ったが、すぐに傷は塞がる

（あれ？これって不可抗力だよな？）

（不可抗力ですが、あの女性の反応は間違っではいけませんよ）

心の中でこの状況はおかしいと思う雪だが、さっきの平手打ちが強烈すぎて軽い脳震盪を起こしているのか、体が思うように動かない

「どうしましょうか。どうやってあの人間を殺しましょうか」（ドツペル永琳）

「永琳に任せるわ」（ドツペル輝夜）

「いや、今のは貴女が悪いでしょう」（本物輝夜）

「何でだろう。私が被害を受けたわけではないけれどあの人間には同情できないわ」（本物永琳）

（これはひどいい。とくにさいご）  
（これはひどいですね）

4人からそれぞれのコメントを頂く雪は心の中で涙を流す

現在空気になってる鈴仙はコメントしづらそうにしている。てゐ？離れた場所で見ているよ？声が届かないだけで

「そろそろとどめを刺しましょうか」

「そうですね」

ゆっくりとした足取りでドツペルゲンガーの永琳と輝夜が雪に歩いていく

「そんな事させないわよ！」

「……………」

さつきまでのギャグはどこかへ行ってしまったらしい。急なシリアス展開についていけない雪。永琳は少し戸惑っているようなしてないような曖昧な顔で弓を構える

「い……………や……………もうお前らは終わってんだよ」

脳震盪がギャグ空間が展開されている間に回復した雪は最初はかすれていたが、最後ははつきりとした声で言い放つ



ドツペルゲンガーの輝夜と永琳の死刑宣告を

「え？何でいきなり倒れて」

「生物は脳で伝達した行動をする。なら、脳を凍らせてしまえば不死者だろうが殺すことはできなくとも、行動不能くらいにはできる」

急に倒れて痙攣一つもしなくなつた2人に鈴仙の近くにいた輝夜が言う

それに対して、雪は簡潔に答える……倒れたまま

「とりあえず動くのがめんどくさいから寝る。お休み」

「自由ね」

S i d e 本物の永琳

今起こつた出来事をまとめればいきなりスキマから現れた（突き飛ばされた？）人間（名前不明のため、人間呼び中）が私と弟子の鈴仙と私達永遠亭に住んでいる者が仕える

姫のドツペルゲンガーを倒した（ドツペル鈴仙は粉々）

当の本人はドツペルゲンガーの私の平手打ちによって軽い脳震盪を起こしたのち、そのまま寝てしまった

「………これは撤退ウサー！」

「あー待つウサー！」

此処から何十メートルも離れているところにいたてゐのドツペルゲンガーが今の惨状を見て一目散に影に入ってしまった。それを追おうとした本物のてゐはすぐに足を止めた

「あの……師匠。師匠達のドツペルゲンガーはどうしますか？私のドツペルゲンガーは粉々になっているのでどうとでもなるのでいいのですが……」

「その人間によれば脳を凍らせているらしいから、脳を破壊したら再生するし、解凍したら脳が通常通りに動くからそのまま封印するしかないかしらね」

「それが一番でしょうね。その前にこの結界を解かない？紫からこの人間のことを聞き出さないとだから」

「そうですね。では、解きましょうか」

鈴仙にその場に倒れている自分たちのドツペルゲンガーの今後を教えるとさっさと今の結界をすぐに解く

空気に溶けるように結界が消える。しかし、結界を解く前に自分たちのドツペルゲンガーを封印すれば良かったと、後から考えされる

「や〜と、邪魔な封印がなくなっただわ〜。あらあら、不死者の2人が死んだように動かなくなるなんて。やっぱり雪（せつ）の子孫は凄いわね〜」

背後から聞こえる声に何処からともかく現れた女性が掴み所のない口調で話し出す

「貴女は幽々子!?!のドツペルゲンガー」

「そうよ〜。じゃあ私はさっさと2人を持ち帰るわね〜」

「待ちなさい!」

「あ、早く動かれる前に言っておくわね。私に攻撃しようとする横に寝ている人間は死ぬわよ?」

「……………」

「じゃあね〜」

幽々子は私と姫のドツペルゲンガーを担ぐ。それに反応した姫が動こうとすると、横に寝ている人間を殺すという幽々子なら赤子の手をひねるよりも簡単なこと

その脅しに硬直してしまった姫の一瞬の隙に幽々子は影の中に入っていく

「まあ嘘なんだけどね。私が雪の子孫を殺すわけじゃないじゃない。例え、それが、私達を壊滅させることになっても……………ね」

去り際に言つて

幽々子達が完全に影に入ってしまった

雪とは一体誰なのか。分かることといえはそこでねてしまっている人間の先祖だという事だけ。というか人間は寝息をたてながら安らかに寝ている

「紫。居るんでしょう？出て来て話してもらおうわよ」

「分かっているわよ」

目の前にスキマが現れ、妖怪の賢者が顔だけを出す

## 第15話 話し合いの前には荒事

Side 紫

そこで寝ている雪を軽くつついてみたが起きる気配は無い。これはそのまま連れて行かないといけないかも……

まあドツベルゲンガーを1人でも倒してくれたから助かったわ。それにしても狂気を操る鈴仙をどうやって倒したのだろう？

「てゐーこの人間をベットに寝かしておいて！」

「わかりましたウサ。みんなー！あの人間を連れて行ってー！」

永琳の指示にてゐるはポケットから竹のホイッスルを取り出して、ピーー！と甲高い音を出しながら竹林に住んでいる兎達に指示を出す。この兎達はてゐ以外には基本的に言うことは聞かない。特に鈴仙は舐められている

「それじゃあさつきとあの人間について話してもらおうよ。私達と全く同じ実力の者達を1人で倒せるなんて霊夢か魔理沙でもできるか分からないのよ」

「永琳ー。私は自室に戻っているから。後でその人の話を聞かせてね」

永琳は雪の事を聞こうと迫るが、姫様はあまり興味はないらしく、永琳が何かいう前

にさっさと永遠亭の中に入ってしまおう。おそろく寝るのだろう

「そうね。私だけだと説明不足になるから彼が寝ている部屋で話しましょう。私達よりもはるかに彼らの事を知っている者がいるから」

「人？ 外の世界から呼び出すの？」

「いえ、その者は彼の中にいるわ」

「彼の中？ あの刀のことかしら」

「そのことも含めて話すわよ」

流石は月の頭脳と言われた永琳。少ない情報でよくたどり着いたものだ。この場に幽々子もいて欲しいけれど、彼女が暴走しそうだから却下で

## S i d e 雪

俺は目を覚ました

寝る前のことはちゃんと覚えているのでここは病院…永遠亭だっけ？…にメリーに

似ている紫とかいう美人に強制送還された。そこでなんだかんだあつてうさ耳少女を粉々にして大和撫子と奇抜な服装の美人を倒した。その後は寝た

ここまでは覚えている。俺が寝ている間は何が起きたのかは分からないが……わか  
ることはベッドの上で寝ていることだ。誰が運んのかは分からないが感謝はしよう。  
心の中で

目を覚ましたらまず何が見えるだろうか？上を向いているなら天井。横を向いていた  
なら窓か机とか……まあ家具類か壁だろう

だが、今は違つた

「あら、起きたのね。おはよう……と、言つても時間的にはこんにはなんだけどね」

目の前には俺を永遠亭此処に強制送還させやがったメリーに似てる八雲 紫が顔を覗き  
込むようにしていたのだ

まず、やることと言えば——

「バッドモーニング」

「ちよ……イタタタタタ。な、何するの!？」

「俺を面倒なことに巻き込んだことに關して弁明はあるかな？八雲 紫さん？」

目覚めの挨拶をされたのでこちらも目覚めを挨拶をしながら、満面の笑みを浮かべな  
がら俺を覗き込むようにしている美人の顔をミシミシミッ！と握り潰すくらい強く

驚掴みにする

「あ……ああああ貴方だったら月人の永琳や輝夜にも大丈夫だと思つたのよ!? 1人倒してくれたことには感謝しているわよ? ありがとう! だから離してー!」

「月人? あー月の住人だっけ? 実在したんだ。まあそんなことはどうでもいい。吹き飛ばー!」

「え?」

驚掴みにしたままこつそり窓を開けておいた、窓の外に投げ飛ばす

「ちよつと何するのよ!」

「あ? 自分に何が起こつたのか分からないのか?」

「投げ飛ばされたことに関して訊いているのよ!」

「人を戦闘面倒に巻き込みやがつたことに関してだ。妖怪なんだっけ? ならある程度殴つても問題ないよな?」

「え? いやいや、妖怪は人間よりも頑丈だけど! 殴られ続けたら死ぬわよ! え? ちよつと待つてー! その拳を下げて……」

その後に何が起こつたのかは一言で言えば病院で治療するほど、顔が腫れた。と、だけ言つておこう。はつきり言つて少しスカツとした



「あの……貴方のことに関して話したいことがあるのだけれど……良いかしら?」

「ん? さつきまで空気だった奇抜な服の人にか?」

「あの……空気とか言わないで」

「本当にさつきまで空気だった銀髪三つ編み美人がさつきまで俺が寝ていた部屋の椅子に腰掛けている

つか、まだ名前知らないんだよな。分かっていることと言えばあらゆる薬を作る能力、月人、服がすごいことだけか

「まずは名前からね。私は八意 永琳。永遠亭の医師よ」

「俺は博咲 雪。そこで顔が腫れているやつに強制送還された人間。剣術をやっていた外来人」

自己紹介しながらベッドに腰掛ける

「今起こっている異変については説明する必要があるかしら?」

「いや、幽香達から訊いている。ざっくり言えば幻想郷住民全員 vs 幻想郷住民全員のドツペルゲンガーの戦いだろ? すごい暇つぶしだな。ハハハハ」

「……………すごい人ごとのようにいうけど貴方もこの異変に関わっているのよ?」

「そうだけどさ? 俺のドツペルゲンガーは居ないからこれ以上俺が戦う必要はないから

な」

俺がこの異変で戦った理由は成り行きと相手が攻撃したからだ。それ以上でもそれ以下の理由もない

後はさっさと幻想郷から出るだけ。外だと俺どうなってるんだろ

「いや、あの……その……貴方はこれからずっと戦うことになると思うわよ?」

「……………アンタ等のドツペルゲンガーを倒したからか? そんなのそっちが攻撃してきたから反撃しただけで、さらに言えばあの……名前がわかんないな。うさ耳コスプレ少女。それと他のドツペルゲンガーは俺を殺そうとしてたんだ。殺されても文句は言えないだろ?」

「つまりは貴方に危害さえ加えなければ良いのかしら」

「そ。と言うわけでさっさと幻想郷此處から出たいんだが、どうすれば良いんだ?」

ベッドから腰を上げて立ち上がりながら永琳に訊いてみるが……

「そうね。自力で脱出は無理ね」

「博麗大結界があるからか? 確か博麗の巫女がいるとか。そいつに頼めば良いのか?」

「まあ、それもあるわね。今は異変中で博麗の巫女……博麗 霊夢のドツペルゲンガーが倒されたなんて報告はまだ聞かないわね」

「あーうん。そうなんだ」

博麗の巫女は幻想郷の弾幕ごっこだっけ？それで最強とか出ないといけないとか。大変なんだな（人ごと）

ドツペルゲンガーは危険になると幽香（のドツペルゲンガー）みたいに影に逃げるんだから、あっちの方が有利だよな

「人里の子供にもドツペルゲンガーが居るらしくてね、まだ撃破報告はなし。私の知る限りでは鈴仙のドツペルゲンガーは初ね。つまり貴方は大金星でもあり、あちら側からすれば貴方は最重要撃破人物になっているはずよ」

「クツソ……どうしてこうなるんだよ。それで、博麗の巫女……えっと、霊夢？以外にはないのか？」

「あるわよ。さっき貴方が顔が腫れるまで殴っていた妖怪の賢者様くらいかしらね。しかも今は気絶しているし」

「なあバケツは何処にある？」

「まさかバケツに水を汲んでからかけるなんてことはないわよね？」

「は？かけるわけないだろ。モーニングコールしてから顔を洗ってやるに決まってるじゃないか」

「いつもならやってちようだいくらいは言っているけれど、今は幻想郷のトラブルメーカーの力が必要不可欠だからね」

「いや、知らないし」

紫はさつきまで俺が寝ていたベッドで若干痙攣しながら寝ているな。バケツは欲しいところだが、いつ起きるかわからないのを待つのは面倒なので、バケツは辞め、まず一枚写真をパシャリ。次に永琳から借りた油性のペンで落書きをしてからもう一枚パシャリ、と

「じゃ俺はやることはやったから、此処から一番近いところに行くとするよ」

「外に帰らなくて良いの？」

「それに関しては良いさ。紫が起きればすぐに俺のところに来るだろうし。その時まで適当に幻想郷を巡るとする」

「そう。此処から一番近いのは人里よ。それとこの周りの竹林は迷うから誰か1人案内役として付けましようか？」

「いや、こういうのは1人でやるのが楽しいってというのが定番だからな。最悪すぐに出る方法はある」

「じゃあ気を付けてね」

「じゃあな〜」

持ち物なんて持っていないのですぐに玄関らしきところから靴を履いて外に出る。視界いっぱいには竹しかない。目を凝らしてみるが竹しか見えない。まあ頑張って幻

想郷を巡るとしますか

S i d e 永琳

「そっういえば彼の能力とか訊いていなかったわね。今から追いかけるのは面倒だし、紫に訊けばいいかしらね」

今更ながら彼の：雪の能力を訊くのを忘れていたことに気付く。過ぎてしまったことは良いとして、顔面が腫れまくっている紫を治療しなくてはならない

「おい。その2人どうした？」

「あら、自分と戦ってきたのかしら。お疲れ様。戻ってきているって言うことはまた失敗したみたいね」

「うるせー。それで、その2人はどうしたんだ」

ドッペルゲンガー達が集まる言わば、影の世界

先程雪に戦闘不能にされた永琳と輝夜のドッペルゲンガーを担いで戻ってきた幽々子は一息ついて近くにあった椅子に座っていると、自分と戦ってきたのか服が所々破けてしまっている白髪ロングで赤い目をした藤原妹紅が倒れている2人に関して訊いてきた

その問いに簡潔に話すと妹紅は2人の頭を炎で吹き飛ばした

「これで脳みそが凍っていても問題ないだろ」

「大胆なやり方ね。不老不死だから再生するとしても…ね」

「はいはい。じゃあ私はソイツとやってくる」

「少しは休憩したらー?」

「必要ねえよ」

「じゃあ少なくとも服は着替えましょうね?」

「……………そうだな」

妹紅は服を着替えるために幽々子の元から離れた

「あー……これは妹紅もいなくなっちゃうかもしれないわね」  
幽々子は仲間が1人いなくなってしまうのに軽い口調で呟く

# 第16話 迷いの竹林は不死者と遭遇しやすい

## S i d e 雪

現在、永遠亭っていう病院から出てから30分は歩いただろうか。走ることに比べれば徒歩ははるかに楽……というか疲れない

ただ、体は疲れないが、どれだけ歩いても竹、竹、竹。これは精神的に来る。事前に迷いやすいと言われているので、この竹林の中で迷子になっている事は理解した。S A N 値がいくつか減った気もするがな

「もうここら一带の竹を斬れば出られる気がする」

（もう少し頑張ってください。そんなこと行ったら本物のみなさんから狙われますよ）  
 「そうなたら返り討ちにすれば問題ないが……。はあ。完璧に俺が悪いな。しゃーない、もうちょい頑張るか」

少しでも愚痴らなければ精神が持ちそうにない

別に竹を斬る必要は無いけど……。こう、目印みたいなものがあれば今後（無いだろうけど）永遠亭に行くようなことがあれば無いよりはあつた方がいいと思つてな……

「あー竹林ぶつた斬ろうかな。なんか歩くの飽きてきた〜」



（諦めないでください！もう私を使えばいいじゃないですか！お願いですから！）

「どうした白雪。お前がそこまで熱くなるなんて……今から炎でも飛んで来るか？」

（そこは雨か槍か雪じゃないですか？）

「3つ目に関してはお前ならできそうだな。雨は……降らないかな。槍は普通はあり得ない。能力ならありそうだがな」

H A H A H Aと2人で笑っていると背後から高熱を感じた

いやまさかこんな早くフラグを回収するなんて事はないよな？

横に飛びのいて接近する高熱を発するものの直線上から脱出する

俺を通過したものは球状の炎で当たったら俺は全身を焼くことになりそうな程の大きさと火力だ。そんなことになったら適当に走り回ってこの竹林を燃やすことになるだろう。そのあとは歌いながら脱出するだろうな

「今のを回避するのか。だがまあ今ので輝夜と永琳を倒したとは思えないが」

「oh……フラグ回収早すぎだろ」

「おい」

「で、えーと……どちらさんかな？」

「私は藤原ふじわらの 妹紅ももこうのドッペルゲンガーだ」

「自分から言うのか」

白髪ロング、赤い眼の白いシャツに（何故か）何枚もの札を貼られた赤いモンペの見た目俺と同じくらいいの少女。人間かどうかわからない。妖怪かもしれないし

「私は見ての通り炎を使う。お前は情報通りなら氷を使うみたいだな」

「じゃあ何か？ 炎は氷に強いから勝てるよって理由で来たのか？」

妹紅は足元から炎を出して纏うようにする

炎 vs 氷だと炎が勝つとか本気で思うなら愚の骨頂。まあ相性的には氷は炎に弱い。

こういう時には名瀬さんは羨ましい。だがまあやりようはあるっちゃある

が……まあ、馬鹿正直に相手の土俵で戦う必要はない

「そんなことはどうでもいい。さっさとお前を消してから1人でも多くの本物を消さないといけないからな」

「まあいいや。やるならさっさとやろうか。あ、そうだ。戦う前に訊いておくけどさ、お前って不死身か？」

「ああ。私は輝夜と永琳と一緒に蓬莱人だ。能力は老いる事も死ぬ事も無い程度の能力だ」

「能力説明どうも。つかさ、輝夜とか永琳の能力に程度ってついてるけど、程度つてもんじゃないな。お前に関してはチートだろ」

「チツ……んなことは良い。さっさと始めるぞ」

「はいはい。なんていうかお前っていつも不憫な役割ばかり受けてないか？」

はあ、とため息をつく

だつて、ねえ？

「今から心を折られるとか……もうなんか同情しそうだよ」

まあ戦うなら仕方がない。同情しそうだろうがしまいがぶつ倒す

雪と妹紅（ドツペルゲンガー）が向かい合っている場所は迷いの竹林。自然の力の集  
合体の妖精でさえ迷うほどだ

四方八方は竹で、地面には所々にてゐる仕掛けた罠が多数ある。一度ハマったら早々  
抜け出すことはできないだろう

「……………」

「……………」

お互い無言で相手の出方を伺っている

(白雪さんよ)

(なんでしよう)

(さつきフラグを高速回収したからなんかやる気がないんだけど)

(頑張ってください)

先ほどのフラグによつて雪はやる気はほとんどなくなつてしまつている

(なかなか動かないな。こちらから動いて初手を叩き込むか？相手は氷。炎の私は相性はこちらが勝っているが炎が氷に勝つとは限らない。やはり、相手が何かを仕掛け終わる前に倒せば良い！)

妹紅は心の中でそう結論付けると全速力で雪に向かって駆け出す

雪はろくに構えを取らずに立っていたのですぐ近くの竹に隠れるように移動する

「ハッ！そんな竹で私の炎をどうにかできるものか！」

妹紅は鼻で笑い、竹ごと雪を焼き尽くすほどの火力の炎を放つ。ポオツ！と竹が燃える。が、人の形をしたものは燃えていない。ついでに悲鳴もない

「どこに行つた？その竹に隠れていたはずだが……う？」

雪はその場にいない。では、どこに居るのだろうか？

答えは……

「痛てて……なんで落とす穴があるんだよ。しかも5メートルはあるぞ。誰だよこんな

落とし穴作ったやつ」

竹の近くにあつた落とし穴に落ちただけ。腰を打つたらしく腰に手を当てている。そんなものを見た妹紅は無言のまま落とし穴を埋め尽くすほどの炎を雪に放つ

「あー、もう！面倒くせえ！」

雪は手のひらから鋭い氷を炎に向けて放つ。氷は炎のを突き進み、そのままの形のまま炎を通過する

「チツ……私の炎よりもアイツの氷の方が強いのかよ！」

「そうだな。だつたらこのままお前をぶつ潰せるな」

妹紅の頭上から先ほどまで、てゐの仕掛けた落とし穴に入っていた雪の音が聞こえた（どうやってあそこまで移動した!? 私の炎は破壊されたようなことは無い！待てよ……アイツの声がした高さからは炎の中を通過した氷と同じ位置？ いや、それよりもアイツから離れないと！）

「はい、終わりー」

妹紅の周りがある竹の全てから鋭い氷が妹紅を襲う。妹紅は思考を止め、本能的行動によりその場でしやがむ。氷は妹紅の頭スレスレでぶつかり合つてその場に残る

「ハ……のー」

体から炎を全力で放出して頭上にある氷を溶かそうとする。炎が少しずつ氷を溶か

しているが、そんなことはどうでも良いように無数の氷が妹紅の全身を貫通するように突き刺さる

「が……」

「はいはい。氷漬け氷漬け。終了終了」

もうこの戦いが面倒くさくなつたのか適当な口調で戦闘終了宣言をする

宣言通りに妹紅の体を貫通している氷が妹紅を少しづつ凍らせていく

しばらくしてから全身が完全に凍りついた妹紅。それを見た雪ははあ、と自分の肺活量を知るような長いため息をつく

「早く起きてくれないかな紫。俺がやったことだからあまり文句を言えないんだよな」

(でしたら永遠亭に戻れば良いのではないのでしょうか。そうすれば良いと思います)

「残念ながら俺は今まで歩いてきた道を覚えてないんだよなこれが」

本当にどうしよう……もう白雪の力で迷いの竹林から出ようかな。と考え始めた時にある異変に気付く

「まだだ………！まだ終わってねえぞ！」

「まーだやるのかよ。そのままなら珍しく見逃したのにな」

体の中から炎を出して解凍している妹紅。すぐに自分の活動の伝達をする脳を、次に心臓を……と次々に解凍していく

その間、雪は妹紅の復活をゆっくりと見守る。若干暇そうにしていそうだが

「やつと終わったか。まあお前の火力でも白雪の氷でも解凍できるのか」

「さあ、次だ！行くぞ！」

「血の気の多いやつだな」

（さて、まだ動くのか。不老不死って本当にすごいな。氷漬けにしたのに。コイツの不死性の核はどこだ？脳とかじゃ無いことはわかっている。セルみたいな小さな核があつて土の中とかだつたら地面を氷漬けにするか？いや、核はからだの中にないと再生はできないと思う。じゃあ何が核だ？）

雪は妹紅をすぐに倒すために不死性の核はどこにあるのか、どんなものなのかを考え。色々な可能性が脳裏をよぎるが、直感的にそれは違うと思う

（あ………いや、まさかな？セルみたいな形のあるものじゃなくて、魂とか存在とかが核って事じゃないだろうな!?)

雪の考えは正しい。妹紅に限らず、蓬莱人は魂が核となっている。核を斬るなんて事は早々できない。できるとしたら死神などだろう

普通の人はこれを想像したら目の前の敵に背を向けて逃げるのが正しいだろう。だが、雪の考えは違う

（魂が核って事は斬り放題じゃん。やる気は今の所全く上がらないけど……まあ仕方が

ない。控えめに百万回ほどぶん殴れば良いか。なんとなく百五十二回程で終わりそうだが。核を斬ればすぐ終わると思つたんだが……これはサンドバッグコース決定だな

雪はどこぞの破壊臣が扉を破壊する時のような事を思う。雪にとつては不老不死を殺す方法がない事はないが、面倒なので、断念した。だったら、殺す必要はない

「お前今からサンドバッグな」

「ハッ！ やれるもんならやってみろ！」

「それってやつても良いって事だよな？」

雪は近くにある竹を先端が鋭くなるように蹴りで斬り取る

「まずは張り付け」

雪は片手で竹を持つとやり投げをするように妹紅に向けて投げる

「そんなものが私に効くと思うなよ！ 時効 月のいはかさの呪い！ 不死 火の鳥 —— 鳳

翼天翔——！ 藤原 滅罪寺院傷！ 不死 徐福時空！ 滅罪 正直者の死！」

「♪これはすごいな」

妹紅は飛んでくる竹なんてものは気にせず5つのスペカを同時に使用する

雪の視界は種類たくさん、形色々、色鮮やかな弾幕で埋め尽くされている。本来はスペカは抜け道があるはずだが、これは弾幕ごっこではなく殺し合い。生死をかけた勝負。5つのスペカによってそれぞれの抜け道はほかのスペカによって埋め尽くされて



いる

これを幻想郷住人が見たら妹紅を非難するだろう。だが、雪はそれを非難しない。殺し合いで抜け道を用意する意味がわからない。相手を確実に殺すなら当然だろ。そう考えている

「抜け道は無し。当然だよな。だけどまあ、抜け道がないならそのまま作りながら攻撃すれば良い」

そういうと背後に巨大な氷の氷柱が何十本も現れ、躊躇なく大量の弾幕の中に突っ込ませる

「これが！私の全力だー！！！！蓬莱 凱風快晴 —フジヤマヴォルケイノー——！！！！」

妹紅は何十本もの氷柱から全身に最大火力の炎をまといながら、真正面から激突する。少しづつだが、氷柱が破壊されて行く

「おいおい、なんて火力だよ。不老不死じゃなかったら燃え尽きてるだろ。これ、漫画とかだったら主人公だよな。そうなる俺は悪役か」

適当な調子で呟きながらゆっくりとも妹紅と氷柱が激突しているところまで歩く

「さて、まずは一太刀」

そう言っただけゆっくりとした動作で白雪を体から取り出して腰にさす。と、同時に抜

刀。結果は妹紅が縦から真つ二つにされる

「が……」

「さーて、これからお前は何回で戦うのをやめるかな？ 辞めようとするかな？」

それからしばらく、何かを斬る音や打撃音が竹林の一部で鳴り続けた

### S i d e 雪

「いやー、不老不死を倒すのは骨が折れるなー。152回殴ったりしても全然元気だったし。やっぱり生きている奴と扉を比較しちゃいけないな」

（いや、これはやりすぎだと思うのですが……目も当てられないくらいですよ）

「しゃーないしゃーない。不老不死を倒す方法は思いつく限りでは、存在を消す、不老不死になったという事実を消す、心を折る、核を潰す、再生する前に再生できないように別の空間とかに移すくらいだからな。4つ目は無理としても3つ目が一番現実的で面

倒なんだよな。心まで不老不死とかだつたら諦める」

(もう彼女の目に光がなくなつてませんか?)

152回殴つた時点で数えるのをやめたから何回かは分からないけど、心を立て直すようなことがなくちゃあこれ以上は戦えないな。それくらい殴つたり斬つたり関節技を決めたり少し格闘技の実験台になつてもらつたりしてもらつた。途中で影に入つて逃げようとしたが、氷の糸で引き寄せたりした。白雪が全力で引くほどだつたから相当なんだろな。裸だつたら一撃で吹き飛ばすことくらいできそうなんだよな。だからまあラツキーラツキー(?)

ついでに会話に出てきている妹紅は地上20mほどの高さの竹に竹を突き刺されてぶら下がっている。不老不死つてこの場合は竹を体の中に吸収するようになるなんてことはないんだな。この目で不老不死の性質を知ることができるなんてそうそう無いだろうから良い経験になつたかな

「さーてと速くこの竹林から出ないと……場所はもう分かつたからゆつくり歩いて行こう。あー服は幽香の家だつてな。早めに行つておいたほうがいいよな——」

ぶつくと竹林の出口に向かって歩いて行くと突然浮遊感に襲われる

またか

竹林の中に焦って走るような足音が響いている

「妹紅！」

足音を出している人物は寺子屋で教師をやっている上白沢うわしらさわ 慧音けいね。妹紅の親友であり、頭突きが不老不死であっても悶絶、もしくは気絶するほど。すごい石頭である。この慧音はドツベルゲンガーであり、まだ本物と入れ替わっていない

慧音は地上20mほどの高さで竹に竹を突き刺されているのを目撃するとさらに一層速く走る

「はあ！」

慧音は妹紅が突き刺さっている竹を叩き折るとすぐに妹紅を救出する。竹を抜いたら急速に妹紅の傷が治る

「……………」

「妹紅どうした？何があったんだ？」

ゆっくりと泣いている子供をあやす様に妹紅に話しているとポツリポツリと妹紅が

口を動かす

「アイツが……」

「アイツ!? アイツって誰だ!」

これ以上の言葉を話さない妹紅に慧音は急いで永琳（ドツペルゲンガー）に診せよう  
と考えてすぐに影に入る

（妹紅をこんなにした奴は私が絶対に倒す!）

## 第17話 落とし穴の先は

## Side 雪

俺は何処にいるのだろう。さつきまで妹紅（ドツペル）を倒（サンドバッグ）してから竹に竹で刺したんだけど……それから竹林から出ようかななんて考えていたら急な浮遊感に襲われ、落ちていくのを自覚した。またかよ

普通ならこんな事を考えるだろうな

「あ……えつと……その……ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「とりあえず俺をここに連れて来やがったやつを連れて来てくれ。話はそれからだ」

同じ姿の猫の耳みたいな髪型の女性の太陽みたいな柄で後頭部二箇所を強打した。いや、尖っている柄が頭に刺さったような気がしたけど……気のせいだよな？ ギャグ空間でも展開されていたのか

「バイ……。マゴドにズビバゼンデジダ」

「ったく、どうしてこうなるんだろうなあ？」

猫耳のような髪型の女性に連れて来た張本人を呼ぶように頼むと、嬉々として出て来やがった

あとはやることは決まっているので右手で顔を鷲掴みにする。そのあとはまあプロレス技を嫌という程やった。結果として豚語になるちよい前になるまで顔が腫れた

顔が腫れる前は元は長いだろう髪を2つの輪のようにして、簪で刺して固定しているみたいだ。顔は整っていて、美人だろう。現在は腫れているのでなんともいえないが。服装は真っ白な薄い水色のワンピースに真っ白な羽衣背にしている。現在正座中。名前は霍かく青娥せいが。仙人らしい。邪仙の間違いじゃね？

「で、能力か何かで俺を連れて来たみたいだけどき、なんで俺なんだよ。他にいるだろ。博麗の巫女とか」

「それが今博麗の巫女の霊夢は他の方に行ってしまったよう、八雲 紫は永遠亭で気絶中みたいですし、そこで藤原 妹紅を圧倒しているあなたを偶然見つけたので急遽来てもらう事にした。らしいです」

「紫は俺がやったから。妹紅を圧倒していた時に視線を一切感じなかったぞ。コイツ日常的にストーカーでもやってるのか？」

「あながち間違っつてはいませぬね」

そんな感じで豚語しか言えない（↑言えないようにした張本人）青娥の代わりに解説

にてくれた猫の耳の髪型の女性の名前は豊聡耳とよさとみみ 神子みこ。赤と青が表裏反対に色付いているマントを羽織り、長さが50センチはありそうな杓を持ち、薄い橙色のシャツを着て、青のスカートをはいている。あとは『和』と側面に書かれているヘッドフォンを付けている。なんと正体は本物の聖徳太子らしい。幻想郷スゲエ。能力がそのまんまの10人の話を同時に聞くことができる程度の能力。程度ってなんだろう？1400年前に眠りについたとか……見た目と年齢が釣り合わないなホント。尸解仙という仙人の中では下の方だとかなんとか。尸解仙……チャイナ服……魔神……う、頭が……！丁寧で礼儀正しい振る舞いをする。燈が性別転換したみたいな感じだと思えば良いかな。猫耳みたいな髪型を除けばな！

「太子様……またドツペルゲンガーが攻めてきましたぞ！今は屠自古が応戦してくれていますー！」

「またですか!?!分かりました！青娥、雪殿行きますよ！」  
「バイ」

「え、ヤダよ？俺は今すぐにもこの場から離れたい所存なのだが……おい、手を引つ張るな！HA☆NA☆SE☆」

銀……いや、白髪の少女が慌てた様子でバタバタせわしなく襖を開け放つて神子に報告する。名前は知らないが歴史上の人物である可能性は高い。1400年前だと、物部と



か蘇我辺りか？歴史は苦手なんだ。間違つてたら笑うな。やつぱ銀髪だった

報告を受けた神子はすぐさま立ち上がって指示を飛ばす。青娥は腫れた顔を頑張つて治しながら外に出るが俺は拒否の反応を示すと問答無用で手を引つ張られて外に

「うわあ……今すぐ回れ右したい。いや、するべきそうするべき。てな訳でアラホラサッサー」

「逃がさないぞー」

離してほしくないな！逃してほしくないな！逃げさせてくれないかなー!?

外の光景を見た俺はすぐさま回れ右をして逃げ出そうとする。男としてそれはないだろう、だつて？ふざけるな！なんか雷とか弾幕とか何故か皿が飛んでんだぞ！あんなとこにいたら皿の破片で切り傷だらけになるわ！そんなとこに自ら行こうとは普通思わないだろ

回れ右をしてから右足を出そうとすると背中になにか乗つかう感覚が……しかも冷たいんだが……もしかして死んでいるのですかねー？そんなことはないだろう、とそんなことを思いながら振り返ると腕を伸ばしたまま抱きついてきているなんかキョンシーみたいな服を着た少女。額に札が貼りついており、そこには『雪を逃がさないように抱きつく』と書かれている。取つてやろうかその札！

「逃げるなー」

「同じことしか言わないなキョンシーみたいだな奴！つかゾンビは褐色がいいのが最近の流行りなんですかね〜!?」

「戦え…多々買え…」

「意味絶対違うよな!?!龍騎かよ!」

「こうなりや振り払えば良いような気がしてきたけどそんなことしても意味ないよな。ちくしょう」

「………逃げな!」

「ひよいつと」

急に雷と皿が飛んできたので軽々回避。後ろ向いていたけど誰がやったのかはすぐにはわかる。さつき神子に慌ただしく報告してきた少女と緑髪で脚が白いニヨロニヨロ……亡霊か何かだろう。………行つてはなんだが……服が緑で脚が白い物だと大根のように見えなくはないんだよな……本人に言ったらギャグ空間が展開されて感電するんだろうな。死なないと思うけど

「あー、アンタ離してくれない?逃げるつもりはないからさ」

「本当かー?」

「本当本当。攻撃されたら戦う。それが俺が戦うための理由だからな。つか離してくれないとこっちが死ぬんだが」

「分かったぞー。離れるぞー」

さて、キョンシーみたいな奴は離れたしこつちも戦闘態勢に入りますか。右手に白雪を抜き身のまま取り出し、左手から鞘を出す

「悪いけどさ、今日は戦つてばかりなんだ。だからすぐに終わらせるぞ」

「お前は私たちが残るには一番邪魔な存在なんだよ。消せるチャンスがあるなら逃す手はないだろう」

「うむ。我は太子様に加勢したいのだが、太子様の邪魔をするお主には消えてもらうしかないだろう」

「物騒だな。俺は鈴仙を消して妹紅の心を折つただけだぞ？そもそも殺そうとしてきたんだから殺されても文句は言えないだろ。まあ文句があつても殺すけどな」

白雪を地面にさしてから言い放つ

「今からお前ら2人は殺す。祈りくらいはしとけよ！」

パリンパリンツ！ズガツ！キンツと皿の割れる音と雷が地面にあたり弾け飛ぶ音、刀が皿を斬る音が神霊廟の一部で鳴り響く

「こいつマジかよ……雷の速度で動くのかよ……今のところスペカは全て被弾無しかよ……」

「まだじゃ！諦めぬな屠自古！」

「隙ありー」

ズバンツと雪は屠自古に気が向いた一瞬の隙をついて布都の右腕を斬る落とす

「う……くっ」

「布都！」

「こつちに来たな。ずっと遠距離から攻撃していたのにこつちに近付いて来たな」

屠自古が布都に近付いたところを当然のように標的を変えて屠自古の目の前まで移動し、胴体を一文字に斬る

「そういえば霊体に斬撃って効くのか？普通に戻ったりは……しないんだな。これって白雪のお陰か？」

（そうですね。私は霊体でもなんであろうと関係なく斬ることが出来ます。斬ることができるだけであって不老不死にはあまり効果はありません）

「いつ訊いてもチートだよなそれ。きれぬものない！なんて五右衛門の斬鉄剣かよ」

斬られた屠自古は地面に転がるとそのまま霧散した。白雪の力が強すぎる。と、雪は再認識した

「屠自古……！」

「はい2人目ー」

雪は振り返りながら横に一振り。それによって布都の首が2メートルほど飛び、消えた

「んー…ドツペルゲンガーって他人が倒しても消えるのか？それとも白雪の性能が凄いだけなのか……」

（それだったら私の性能でしょう。人里などの戦いに向かない人間ではすぐに妖怪が倒しているでしょう）

「つまり、俺はドツペルゲンガー達にとつては草薙剣並みに天敵って事か。タイミング最悪な時に来たって事かよ。これは無双チャンスか？……待てよ？紫は白雪の事を知ってるんだよな？……アイツ確信犯か」

（そうですね。訊かれなかつたので言いませんでした。恐らくこれは確定事項なのでしょうが、本物は自分のドツペルゲンガーしか倒せなく、ドツペルゲンガーは自分の姿をしたオリジナルしか倒せない。つまり――）

「適当に弱らせたところを最後に本物が討てばいい。その逆も然り。それが今までできなかったのはお互い2人以上で行動する。ドッペルゲンガーは危なくなったら影に逃げれば良い。何だこれ。ドッペルゲンガーの方が有利だな」

（本当ですね。これまでこれが今まで……私達が幻想入りするまで続いていたのでしよう。そんな中、本人でも本物でも無い私達が問答無用で倒せることがあちら側に知られたら？ 私達が来たことよって本物の方が有利になつたら？）

「ドッペルゲンガー全員が俺を殺しに来るだろうな。あつちが攻撃して来たら反撃すれば良い。反撃するまもなく殺されたらそれまで。殺し合いなんか殺すか殺されるか。生きるか死ぬか。こんなもんだろ？ こんなの8歳で理解したぞ」

（理解するのが早すぎですね。全く……未恐ろしい……）

「はあ……うおっ」

「は〜い」

屠自古と布都を倒した雪は白雪と本物とドッペルゲンガーの倒し方などについて、自分たちのこれからについてなどを確認して、やることはやったし速く此処から出るか……出る方法あるよな？ などと考えていると、雪の足元に穴が開き、重力に従い穴に収まる

さらにはその穴からさつき顔が腫れるまで散々プロレス技を叩き込んでやったはず

だがコイツの顔には傷は多分無い。治癒した後ドツペルゲンガーになりすましてさっきの報復でもやろうとするのか、青娥が顔を出した

「青娥！今すぐドツペルゲンガーを追ってください！」

「分かりました！」

「こつちだー来てくれー。雪が穴にハマってるー」

「私は此処だぞー」

「芳佳殿！我も参加するぞー！」

「芳佳は戦ってないがな。人間が戦っているんだ」

穴の外から青娥と神子と芳佳と屠自古、布都の声が雪の耳に届く。穴の中からも芳佳の声が響く

つまり、穴の中にいる青娥と芳佳はドツペルゲンガー。それを理解した雪ははあ、とため息をついて青娥に指差す

「今からサンドバッグな」

雪は宣言からの行動は早かった。糸くらいの細さの氷が二本、青娥と芳佳の肩につく

「そくれー！」

雪は腕を振り上げ、氷の糸で穴から出す。2人はなすすべもなく空中で静止する

「芳佳ちゃん。この氷を食べてー！」

「分かったぞー。ガジガジ…お腹いた…」

青娥は芳佳に付けられていた氷の糸を食べるように指示を出し、芳佳はすぐさま行動に移す

まずは自分の氷を食べ、少しの間を置いた後に体の内側から凍っていき、一瞬で凍りついた

飛行能力を失ったキョンシーはそのまま地面へ真つ逆さまに落ちて砕け散る  
「ざつざつと終わらせるぞ」

空中に留まっていた青娥はものすごい膂力によって地面に叩きつけられる。更に上空に上げられてまた地面に叩きつけられる

「が……これは撤退しないと…」

青娥は次に叩きつけられると同時に影に逃げようと考えた

「今！」

地面に激突すると同時に影に入ること成功

が、そんな事を雪が許すはずもない

「どこへ行くというのかね？」

影に入った青娥を力技で無理矢理引きずり出し、そのまま思いつきりの右ストレートそれから飽きてきた雪は白雪で首を撥ねとばすと、青娥の体は消えた



「私以外全滅……した？しかもたった一人の人間に？」

雪達から離れた場所で本物とドッペルゲンガーの神子同士が西洋剣で競り合っていた時に神子以外の神霊廟に住んでいる（青娥は不明、芳佳は命蓮寺の墓場）全員がやられてしまった

それを認識すると同時に脳内に直接無線機のような雑音が流れ、紫の音が響く

『神子、此処は引いて戻ってきて頂戴。今の貴女では離れている人間一人にも勝てないわよ』

「承知しました」

紫の指示を受けた神子はそのまま影に入った

「逃げられましたか。仕方がありません。今は布都達のドッペルゲンガーがいなくなつた事を喜びましょう」

神子はそう呟くと西洋剣を鞘に納め、マントを翻し雪達の方に向かった

現在時刻は午後6時頃。もうすぐ暗くなる。幻想郷のほとんどは妖怪なので活発になる。そんな危険な時間に歩かせるはずもない神子達は雪を説得し（野宿でもなんでもするから問題ないなどとほざくので）、一晩雪は神霊廟に泊まることになった

その際、布都や屠自古などから嫌という程白雪のことを聞かれた

く影の世界く

「おい、これはどういうことだ。何人が居なくなっているみたいだが」

幻想郷住人のドツペルゲンガーの殆どが集まっている人里の広場。そこに驚いた低い声が響く

「隠極様」

「何かあったのか？ドツペルゲンガーはその姿をした本物にしか倒せないはずだが……」

「それが今日の昼頃に突如幻想入りした1人の人間によって、鈴仙・優曇華院・イナバ、

物部 布都、蘇我 屠自古、宮古 芳佳、霍 青娥がやられ、交戦した藤原 妹紅が戦意消失です」

紫の報告を受けた陰極はあり得ないといった風に言葉を出す

「おいおい。ただだけ強いんだよ。ドツペルゲンガーを倒せるのは本物だけのはずなんだが……」

「それに関しては彼の所有している刀の性能ですね。まず、彼を倒すのならその刀を奪わないといけません」

「そうか。確実に奪える奴は……咲夜、頼めるか？」

「分かりました」

「それだったら紅魔館に招待しましょう。本物と私たちが同じ空間にいれば分からないでしょうし」

「やり方は任せるが……死ぬんじゃないぞ」

「分かっているわよ」

陰極はその言葉を聞くとブツブツと何かを呟きながらその場を去る

## 第18話 紅魔館へご招待

## Side 雪

「ふう、泊めてくれてありがとうな」

「いえ、ドツペルゲンガーを倒してくれた事は我々本物たちからすればありがたい事ですから。ドツペルゲンガーがいなくなった事で私は無理ですが、布都達が応戦に向かうことができるので。出来ればこれからもお願いしたいです」

「攻撃されれば反撃するだけだ。それが本当か偽物かどうかはされ置いて、な」

幻想郷に来てから一晩がふけた。現在、時刻は朝の7時。神霊廟の出口の前で神子に見送られる

「じゃあな。お前のドツペルゲンガーが攻撃して来たら倒しておくよ」

「それはお願いします。私としては、自分で倒しておきたいですね。それと、射命丸 文という女性はマスコミなのですが質問にはあまり答えないことをお勧めします。有る事無い事書き込まれますよ」

「その場合は程度によって変わるな。あまりにも酷すぎると殺しはしないがトラウマ不可避免なくらいになるかもだけどな」

「ハハハ」

神子は苦笑いを浮かべる。それはしようがないだろうな。俺もそんなことを目の前の奴が言ったら同じ反応をするだろうな。つか、したことあったな

俺は神霊廟を出る。近くは確か人里だったか。紫はまだ起きていないのか……そこまで強くやっつてはいないと思うんだが。禊なんてほぼ無傷だったんだよな。アイツの能力は一体なんだろう

人里は最初の目的地だから青娥は（戦闘に巻き込みやがったが）良くやっつけてくれたよ。先に出たら近くが人里を教えてくれたら少し顔が腫れる程度にして置いてやっつたが「人里か。何処かに見知った奴がいらないか……つと」

神霊廟から出て、適当に人里を歩いていると白髪赤目の特徴的な赤いリボンの少女がポケットに手をつ突っ込んで目の前を通過する

「妹紅発見」

「あ？お前誰だ？」

妹紅発見で呟いたらあつちもこつちに気付いた。目付きが悪いのはドツペルゲンガーと同じみみたいだ

「お前のドツペルゲンガーにトラウマを植え付けた外来人だ」

「マジかよ。私が倒そうと思ったんだが…」

「まだ倒しちやあいないぞ？竹で刺して放置しただけだからな。今頃どうなっているのかは知らない」

「何処だ！」

「竹林の何処か」

「分かった！私の手で吹き飛ばしに行つてくる！」

「気を付けてな」

うおつ……妹紅足早いな。飛ばないのだろうか？

人里を一回り歩いてみてドツペルゲンガの事について聞き回つてみたが、白雪と話した内容とほとんど同じだった。これに関しては俺たち『外から来た奴』の推測が、『現地の意見や見解を知ることができた』から僥倖としておこう。とは言つても色んな可能性を考慮すれば聞き回つた人里の人間は全てドツペルゲンガと替わっていることだつてあるし、そもそも人里の人間は戦闘しないらしいから他のバンバン戦っている人（人外も）からも聞いておきたいな

「さて、と色々聞いたし博麗神社に向かうとするか」

（情報では、博麗の巫女は妖怪にも人間にも無関心で喜怒哀楽が激しいらしいですね）

「つまり俺が幻想郷から出たいといえはこの異変が終わり次第即刻帰らせてもらえる

と。異変解決まではそこで匿ってくれば安全を確保できるし無駄に戦わなくて済む。えっと……博麗神社はあっちの方角だよな？」

（人里の皆さんはそう言っておりましたね。偽情報ではないと思いますが）

「もう面倒だし氷柱飛ばそうかな」

白雪と人里の親切なみなさんからの情報を照らし合わせながら博麗神社の方角を確かめ、右手に手のひらサイズの氷柱を作り出して投擲態勢に入る

「アナタが昨日幻想入りした外来人ですか？」

突然背後から凜とした女性の声が聞こえる。少なくともその場に現れるまで俺は心配を感じる事はなかった。後ろにいるやつのは能力は瞬間移動系か？黒子か!?そんな事だったらほぼ勝てる見込みはないのだが……

が、そんな事は気にせずにそのまま氷柱を投擲……しようとしたけどやったところで連れ戻される未来しか見えないので氷柱を消して後ろの人物と向かい合う

綺麗な銀髪に黒い瞳青と白のメイド服を着ているという事はメイドなんだな。すごい美人

「違います。幻想入りした人だったらさつきその角を通って行きました」

「あ、そうですか。すみません助かりました」

「いえいえ」

俺が質問に対してちゃんと答えると思ってるなら大間違いだ。なんだかまた面倒ごとに巻き込まれると俺のサイドエフェクトが言っているので適当な嘘を言う。名も知らぬメイドは俺の嘘を信じたのかそそくさと走っていく。瞬間移動しないのかよ

「いや、アナタでしょう！」

「ほう、なんの根拠をもとにそんなことをほざくのかな名も知らぬメイド」

「申し遅れました。私は十六夜いざよい さくや 咲夜。紅魔館のメイド長を務めております。先ほどの質問に対しては八雲 紫から報告を受けておりましたので」

「へえアイツ起きたのか。さっさと来てくれないと困るんだが」

紅魔館のメイド長を務めている咲夜は丁寧な口調で話す。ノリがいいな。燈と話したらお互いが敬語だけで話していそうだな。そんな場面を想像したら猛烈にその空間にいたくなくなつて来た

突然だがここで咲夜の心情を言いあてよう。『コイツはちよろいわw』みたいなことだろう。そもそも咲夜の言っている紫は本物なのかドツペルゲンガーなのかは言っていない。言つたところで信じないが

「で、メイド長さんは何の用だ？紅魔館に招待でもされるのか？」

「その通りです。主人のレミリア・スカーレット様からご招待するように申せられたのでお迎えに参上しました」



即答で俺が行くと思うか?と言いそうになるのを喉元で食い止める。はつきり言っ  
て行きたくない。目の前にいる咲夜は攻撃してくるかもしれない

が、俺の第六感が告げている。例え面倒ごとに巻き込まれるとしても、それを差し引  
いても、こちらが得するようなことがあると

「分かった。行くことにする」

「では、私について来てください」

そう言つて咲夜は浮遊する。おそらく俺が浮遊するのを待っているのだろうそのま  
まの位置で止まっていると、俺が浮遊しない理由が分かったような顔をする

「もしかして飛行できないのですか?」

「あいにく俺は空を飛ぶ訓練をしようと考えた事はあつても試そうとしたことがない  
な。外の世界だと能力はもちろん、飛行なんてしたら面倒なことになるからな」

「では、徒歩で向かいますか?」

「誠に申し訳ないのだがそうしてもらえると非常に助かる」

別に飛ばうと思えば飛ぶ事はできるのだが……白雪の能力の使い方はできるだけ控  
えたいんだ。相手に手の内を教えるのもあるのだが、白雪を使うと疲労が溜まるんだ。  
もしもの時に思うように動けなくなるのは回避したいから

「紅魔館の主人さんはどんな人なんだ?その前に咲夜は人間だよな?」

「私は人間です。そして、レミリア様…私はお嬢様と呼ばせてもらっております。お嬢様は吸血鬼です」

「吸血鬼って日に当たるのに弱いとか、十字架とか銀が弱点だとか。幻想郷はどこにあるのかわからないが、西洋の妖怪とかも居るもんだな。咲夜っていつから紅魔館に居るんだ？」

「幼少期からメイドとして雇わせてもらっております」

「って事は咲夜は日本人じゃないってことか？」

「そうですね。今の名前はお嬢様につけてもらった名前です」

「レミリアは和名が好きなのか？」

咲夜と会話しながら森の中を歩いて行く。一応警戒はしておくが、今のところは攻撃する気は無いみたいだ。あと、言っていることに嘘は含まれていないみたいだ。多分だけだな

「紅魔館は吸血鬼と人間以外の種族は居るのか？」

「そうですね。魔法使い…いえ、魔女のパチュリー・ノーレツチ様。パチュリー様の使い魔の悪魔、小悪魔。紅魔館の門番で妖怪、紅ホン美鈴メイリン。ですね。あとは妖精が多数。メイドをやっておりますが…その、仕事をするのがなくて」

「うん。大変なんだな」

「本当ですよ」

同情するしかないな

紅魔館にいる種族は大体わかった。名前もついでに教えてくれたし、助かった。咲夜の情報をまとめれば人間1人、吸血鬼1人、魔女1人、その使い魔の悪魔が1人、名前からして中国人の妖怪1人、妖精多数と

少なくともコイツらのドツベルゲンガーは1人も消えていないのか。レミリア達の場合は分からないが咲夜の能力は厄介だ。これは咲夜に任せるしかないな

「着きました。あそこに建っておりますのが紅魔館です」

「赤いな。目に悪そうだ。精神が弱い人が見たら気絶するんじゃないか？あれって絵の具？血だと言われても納得するぞ」

「慣れてしまえばどうということはないかと。館内もあのように赤いです」

「まさに”紅”魔館だな」

森を抜けると真つ赤な館が見える。湖の近くにあり、大きさはかなり大きい。二階建くらいかな

森の途中から霧が発生して、咲夜の解説によれば霧の湖らしい。吸血鬼外に出られないじゃん。水といっても多少程度なら問題ないのだろうか

「では少しこちらで待っていてください。門番に言ってきます」

「分かったが寝ていないか？あれ」

門のあるところまで移動すると咲夜が門番に許可を得ようと歩き出すが、俺にはどうしても寝ているようにしか見えないベレー帽にチャイナ服の赤髪ロングの美人が鼻ちようちんを作り頭が上下に行き来している。門番だから美鈴かな

まてよ……あれ？俺たちのこと気付いてね？

と思つたと同時に音も無く美鈴の頭にナイフが生えた。生えたというか急に出現したというか……まるでナイフを瞬間移動させたみたいな

「咲夜さん、私起きていましたから！あちらが今日のおお客様ですよね!!」

「そうよ。起きているなら疑われないようにしなさい」

「はいー」

咲夜の低い声で美鈴が綺麗な敬礼をする。恐らく口の端が引きつっているだろう。だつて咲夜が怖かつたから

咲夜は怒らせないようにしよう。俺は心の中で決心する

「では、お入りください」

「あ、はい」

「ようこそ、紅魔館へ」

門番の美鈴に合掌してから紅魔館に足を踏み入れ入る。咲夜に促された際に敬語に

なつてしまったのはさつき的美鈴の光景が恐ろしいからだろう。だが、燈が怒ればこんな生易しいものじゃない。アレはヤバイ。耐えられないよ。無言の圧力つてどうすれば回避できるの？

紅魔館内部を一言で言えば外装と変わらずに真つ赤。赤い箱の内部と言われても疑問は抱かない。あと、外から見た広さと中の広さが一致しない。空間を拡張されているのかな？ 魔女のパチュリー辺りが有力候補。他の人（？）の能力を知らない所以他かもしれないけどナ

「（）ちらです」

真つ赤な館の中を咲夜の後が続いて歩いている（時折メイド服の背中に羽みたいなのがある女の子がチラホラ見えた。というか角から見られていた。あの子達が妖精メイトかな、働かないという）と、一つの扉の前で立ち止まる

コレって一人で動いたら迷うやつだよな。それ程大きい

咲夜は扉を3回ノックすると、中から「どうぞ」と幼い少女の声が聞こえる。まさか子供が主人とかじゃないよな？

「失礼します」

「マジで子供だったよ」

咲夜が扉を開くと長テーブルの誕生日席に紫の髪を肩くらいまで伸ばした赤い瞳の

幼女。服は縁が赤く、大部分が白のワンピース。服を貫通しているのかわからないコウモリみたいな羽。うん、なんというかザ・吸血鬼みたいだ。可愛いが、どこからか惹きつけるようなオーラみたいなものを感じる。だが、神子の方が強いと個人的に感じる。さらにその近くに本に目を落としているこれまた紫髪を腰まで伸ばして星がついたナイトキャップを被っており、長い髪を様々な色のリボンで結んでいる女性。真っ白なパジャマみたいなものを着用している。美人さん

その隣に座っているのが赤い髪を腰くらいまで伸ばしており、白いシャツの上に黒いワンピースを着ている女性。頭の背中に悪魔の羽みたいなものが左右に生えている。悪魔みたいな見た目しているからこの人が小悪魔か。その隣に座っているパジャマ姿はパチュリーか

パチュリーの向かい側に座っているのがレミアと似ている顔立ちだが、髪の色と背中に生えている羽が違う。まず髪は金髪。羽が木の枝みたいになっており、枝からぶら下がっている色んな色の結晶みたいなひし形。咲夜からの情報では吸血鬼は1人だと言っていたような……言ってねえな。姉妹か何かだろう。小悪魔の向かい側の席が一つ空いている

この光景を見た俺は思わず呟いてしまった。人里以外だと男性を見てはいない。なんなんだ幻想郷は

「いきなり失礼なことを言うわね。まあいいわ。とりあえず座りなさい」

「あーハイハイ（お前と同じくらいの見えた目なんだが……人外だったら見た目が幼いままでもおかしくないのか?）」

（吸血鬼の見えた目はそうそう変わらないからではないでしょうか。1000年くらいしないと成長が始まらないのでは……）

（もしかしたらもう成長期が過ぎたのかもな）

「アナタ今すぐく失礼なこと考えていたでしょう」

「何言ってるんだお前（なんで分かるんだよ。読心能力でもあるのかよ）」

レミリアと向かい側の席に座る俺。というか咲夜に促された。それと同時に紅茶が注がれたティーカップが人数分一瞬にして現れる。これって瞬間移動でできるものか？座標移動みたいな能力か、それともそれ以外か。それを行なったであろう咲夜はいつのまにかレミリアの少し後ろで立っている。席が一つ空いているからそこに座ればいいと思うが……

贅沢を言わせてもらえば、俺は紅茶よりもお茶の方が好きなのだが、まあせつかくだ。飲んでみよう

久しぶりに紅茶を飲もうと、ティーカップの取っ手を掴み、紅茶を口の中に含む瞬間に部屋の扉が盛大な音を立てて開かれる

「待ちなさい！そいつらはドツペルゲンガーよ！その紅茶には毒が……」

扉を開けた張本人、レミリアはものすごい形相で叫ぶ。内容が紅茶に毒が入っているとか言っているが――

俺の体は机に向かって倒れる

――急に言われても重力に従って落下する液体がそんな急に飲むのを中断できらぬわけがない。噴出すほど多く口に含まないようにしているから口に残る

これはまあ、しようがないな



## 第19話 紅魔館の戦闘

Side レミリア（本物）

私は前日までこの戦いは本物とドッペルゲンガーが誰一人として欠けることなく続く運命が見えていた。しかしそれが昨日で変わった。それも急激に。どれだけ見ても、どれだけ操つても断固として変わるこのなかつた運命

妖怪の賢者である紫ですらも続くものだと言っていた

たつた一人のイレギュラー<sup>外\*</sup>により私たち本物達の勝利の運命が見える

それがさつき少し図書室でドッペルゲンガーの書物を探していたら運命がまた変わった。私の行動一つで私たちが劣勢になる。それを阻止するために親友のパチエに怒られながらも客室まで全力で走って向かう

客室の前まで来るとドアを破壊する勢いで開ける。中には私たち紅魔館に住んでいる住人が座っており、私のドッペルゲンガーの向かい側に座っている白髪の男？が紅茶が淹れてあるカップに口をつけていながら私の方を見ていた。何よこいつ……運命がまったく見えない……。どうやら『ここ』が運命の分かれ目のようだ。飲み物というところからおそらく毒物だろう、それも即効性のある



確かにさっきまで机に倒れていた人間が背後に回ってドツペルゲンガーの私の首を斬っていた

どうして生きているのかは、口に含んだ紅茶を凍らせたらしく、舌を出して示す  
そしてそのままの勢いで近くにいる咲夜のドツペルゲンガーの首を狙って刀を振りする

「クッ……」

「ん？ナイフか」

白雪の刃が咲夜の首を捉えていたが、回避と同時に雪の視界を埋めるほどのナイフが雪に放たれる

それを先程斬ったレミア（ドツペルゲンガー）の首を掴み、後ろに下がりながら視界を埋め尽くすナイフの中に投げる。それと同時に雪の全方位を囲うように氷の分厚

い壁が形成される。分厚い壁にナイフが何本も突き刺さる。雪によって投げられたレミア（ドツベルゲンガー）の首にもナイフが刺さっており、すでに消えて刺さっていたナイフはその場に落ちる

「……………つーよくも私にお嬢様に攻撃を……………」

「敵にそつちの感情を押し付けられてもな……………（……………咲夜の能力は瞬間移動じゃないのか？瞬間移動が能力ならばつちやけもう死んでいるものだと思っていたが……………それ以外なら……………ナイフが一度に視界を埋め尽くすほど出すとなると時止めか……………）D I O かよ！」

「……………」

雪は氷の壁の中で咲夜の能力を考える。そして出た答えが時を止める能力。これはジ○ジ○を発売されている漫画を全て読んでいるのですぐに思いついた。それを除くなら、ドツチボールで例えよう。襦袢が体格に似合わない速度で雪をボールを投げるとしよう。雪に当たる前までの間に雪が時を止めたら、雪だけはボールに限らずに全てが止まって見えるだろう。雪が横にずれたらボールはさつきまで雪が居た場所を時を止めたとしてもその場に落ちずに通過する。つまり、同時にナイフが動くならそれは時を止めたことになる。瞬間移動は対象の上に移動させないと意味がない

この事を考えて雪は少し落胆した

（なんだ、時を止めるだけかよ。でも時を止められるなら空間くらいは操れそうだな。もしかして紅魔館が外から見た時よりも中が大きいのは咲夜の能力か？）

この時に雪は前日のことを忘れている。初めて生きた人間を殺める前に言われた言葉を

「時を止める能力ならこれが一番簡単だ」

雪が言つて、白雪を床に突き刺そうとした時に、雪の全身を駆け巡る悪寒が起こる

雪が咲夜から真反対を顔、目をまったく動かさずに観る

そこにはフランが雪に右手を突き出して、手の中に球体が存在する

雪は防衛本能に従つて行動に移す

「な……………え？あれ？」

フランはきよんとした表情で右手を見る。本来はないのが当たり前だが、無いなら無いでおかしい事がある

フランの能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を持っている。この能力はそのままの意味で右手の中に出した球体を破壊すると、球体の対象を問答無用で破壊する事が出来る

それが発動しない。右手の中に球体が無いなら能力が発動して雪の体が吹き飛んでいるはずだが、全くもって無事だ

では何が起こったのか

「危ない危ない。今の中には肝が冷えるどころか死ぬかと思ったぞ」

雪は氷の壁の中から斬撃を飛ばし、『フランの手の中にある球体を粉碎した』。その球体を破壊したら雪の体が吹き飛ぶ可能性があった。雪はそんなことは些細なことだと思ってもなく本能で動いた。結果として雪は五体満足で動く事ができる

（危ないことをしますね。一歩間違えれば死んでいましたよ！）

（確かに。でも、さつきやつてこかないと100パー死んでた。結果オーライ結果オーライ）

（妹様（フラン）の能力が攻略された？今のままで勝ち目は無い。パチュリー様は詠唱中。小悪魔は戦えるのか不安。美鈴を今すぐ連れてきて加勢してもらおう？それなら数の有利でこちらが勝てる。お嬢様の本物は私たちを攻撃することにはためらっていらつしやる。今この状況で雪が一番警戒しているのが私。この戦いは私が少しでも生き残る必要がある！）

雪は白雪と氷の壁の中で自分の身を守っている。咲夜の考えの通り、雪は撃破順位を咲夜↓フラン↓その他は分からない。攻撃してきた順で倒す。ということになっている

咲夜がその場にいる限り雪はその場から離れないだろう。咲夜の能力が分かったと

してもそれに対処できるかどうかは別だ。できないことはないが少し不安がある、程度だが。常に視界の一部をフランに向けている

「さて、と。さっさと倒すか」

ふう……と息を吐き、目を閉じ、白雪を納刀して居合の構えを取る。一気に自分の世界に入る

(イメージは咲夜を能力を発動させる前に斬り、その時にフランが能力を発動するだろう時に球体と一緒に斬る)

(仕掛けてくる……美鈴を呼んでこないと！)

咲夜は目を閉じた雪を見た瞬間に時を止めて自分だけ動ける世界で門番の近くに隠れている美鈴を連れてこようとする、ばったりと本物の咲夜と鉢合わせになる

「なっ……」

「疲れているみたいね。今がチャンスかしら？」

能力を解き、2人の咲夜がお互いのナイフをぶつけ合う

(……！咲夜の気配が無くなった。それと同時に咲夜の気配が増えた。近くの廊下で戦っているな。それ以外には一階の本がたくさんあるところ……図書館？……にパチュリーと小悪魔の気配、図書館？の地下にフランの気配。つまり、この場にいるドッペル

ゲンガーはレミリア以外ということになるか)

自分の世界で紅魔館内の気配を全て把握する。咲夜は放っておくとしてこの部屋にいるドツベルゲンガーは倒しておくか、と考え――

「真楼の居合 瞬！」

パリッ！という氷の壁の中から斬撃を放って氷を破壊する音と、ズバンツ？というフランの腕が斬り離される音が同時に部屋に響いた

「あ……アアアアア！」

「フラン！退却するわよ！」

フランは腕を斬られて痛みにも苦痛の声をあげ、パチュリーはそれを見て詠唱を止めて影に入るように指示を出す

「逃がさないぞ」

雪はフランが入る前に斬撃を飛ばす。が、フランはフラフラと紙一重で回避して影に入る

「チツ逃げられたか。まあ良いや。図書室行こうと」



## 第20話 一難去つてまた一難

## Side 雪

つい先程の戦闘はレミリアを倒し、フランに負傷させただけで終わった。咲夜ズに關しては、片方の気配が消えたからドツペルゲンガーの方が逃げたんじゃないか？

もうその場にいる必要はないと判断した俺は一階の図書室に行くために行動を開始した。そこへ近くにいる紅魔館の当主様が声を上げる

「どこへ行くつもりよー！」

「あ？ 図書館だよ。それとも咲夜の加勢に行かないのかみたいなのをいうんじゃないよな？ それだったらドツペルゲンガーの方が逃げたぞ」

言うだけ言うときさっさとこの場から移動しようとするが、まだロリ吸血鬼は聞いてくる。移動しながらはダメなのか？

「なんでアンタはドツペルゲンガーを倒すことができたの？ ドツペルゲンガーはその姿をした本物しか倒せないはずなのに」

「それは白雪……この刀のおかげだ」

質問に答えて今度こそ移動を開始する。どうやらまだ俺に聞きたいことがあるらし

く俺の後ろに付いてくる。詳しく表現するなら生まれたての鳥が親についてくるみたいなものだ。あ、アヒルが適切か？うろ覚えな俺の知識涙目

「ねえねえ図書館の場所わかってるの!？」

「それだったら問題はない。さつき知った」

「咲夜ー！パチエに人間が図書館に行くって報告しておいてー」

「かしこまりました」

レミリアがパチユリーに俺が行くことを報告してくれるみたいだ。有り難いのだが、なんだか騒がしくなりそうな予感がしてきたぞ

それにしても何処からか現れた咲夜はすぐに消えた。時を止めるとかチートすぎる。時止めを使うやつと対等に戦うには同じく時止めを使わないと。やっぱり承太郎とD I Oのバトルは熱かったな

「ここか。扉デカすぎねえか？」

俺の目の前には、背丈の2倍はありそうな高さの扉がある。これが入り口ってどういうことだよ。中は紅魔館以上にでかいって事はないよな？

「何やっているのよ。さつきと入るわよ」

「待てよ、ロリ吸血鬼」

「誰がロリよ！」

「お前だよ。この場においてお前以外はいいいだろ。何言ってるんだ」

これに慣れていいのかロリ吸血鬼ことレミリアはさっさと入る

「何とか予想通りだ」

やはりというか、まあそうだろうなというか。やっぱり紅魔館規模の大きさだった。奥の方には長机と椅子がたくさんあってそこで本を読むスペースになっているんだらう

その中央奥の方に大量の本が積み重なっている大きな机がある。そこにパチュリーが座って本を読んでいる

「パチエー連れてきたわよー」

「……………へえあなたが咲夜が言っていた人間ね。あつて早々で悪いんだけどこれを飲んでみて。私の魔法の薬だから。害はないわ」

「あつて早々頼むようなことじゃないな。ちなみにそれを飲んだ場合どんな効果が現れるのかを簡潔に説明しろ」

「…………筋力アップ」

「そうか。ちよつと貸してくれ」

初対面のパチュリーからなぜかコップに入れた魔法の薬（仮）を渡された。見た瞬間に飲んではいけないという危険信号が全身をせわしなく駆け巡るので一応の効果を聞

いてから渡してもらおう

パチュリーはゲンドウさんポーズをしながらじつくりこちらを見ているが、一つだけ  
言わせてもらおう。俺は飲む気は一切ない

なので近くにいるロリ吸血鬼に飲んでもらうことにする

「おい、レミリア。背中に何か付いているぞ」

「え？何処に？」

適当な嘘をついて（実際にはコウモリみたいな羽があると言おうと思ったが、後々が  
めんどくさくなりそうなのでやめておく）レミリアを後ろに向かせ、適当な埃を手を取  
る

「ほら。???あれって何だ？」

埃を取ってから上に何かあるような仕草をする。実際はシャンデリアがあるが。ポ  
ケオンにそんな名前のやつがいたような

「ん？どれ…ウグゴゴ」

「照明器具があるな」

レミリアが上を見た瞬間にコップに入っている魔法の薬（仮）を飲ませる。無理矢理  
にやったから抵抗とかありそうだったけど何故かない。もしかしたら気絶したのか？

「ゲホツゴホツ！何するのよ！パチエの魔法の薬はあまり成功しないのよ！」

「そうか。俺の代わりに実験台になってくれてありがとう、礼を言ったよ」

「誰があんたの代わりに実験台をやったよ！無理矢理飲ませただけじゃない！」

「レミリア、どうした？動かないぞ」

「あれ？動けない」

レミリアが咳き込みながらこちらを向く。それから暫く言い合っていると、レミリアの頭以外が全く動いていないような気がしてきた

一応、レミリアに聞いてみるが全く動かないらしい。これはまさか……………

「おい、パチュリー。これって筋力アップじゃなくて筋力ダウンじゃないか!？」

「あら？何処で間違えたのかしら？」

「良かったー飲まなくて」

「いや、安心してないでこの魔法をときなさいよ！」

「俺魔法とかかわからないからパチュリーよろしく」

「暫く実験台になってもらおうかしら」

うわ、こいつゲスだ

「じゃあ次はこれをあなたが飲んで頂戴」

「失敗したのを目の前で見せられたのか？答えはもちろんノーだ。お前が飲め」

「いやよ。こういうのは他の人が飲んでくれないと」

それから暫く、レミリアが空気のまま言い合っていた。痺れを切らしたパチュリーは身を乗り出して無理矢理俺に飲ませようとするが、

「あれ？また浮遊感？」

幻想郷に来てから何度目のかの浮遊感。しかも、下は悪趣味が極まっている空間が広がっている。スキマだ

「そうはさせるか！そりゃあー！」

ギリギリでスキマの縁？を掴んでぶら下がっている。そのままでは紫に引きずり込まれるのは目に見えているので一気に紅魔館の図書館内部に戻ろうとするが、手を小さくスキマから伸びる綺麗な手によってチョップされ、思いの外痛く、下に落ちていく

紫 貴 様 覚 え て ろ

俺の渾身の叫びはスキマ内に何度も響いた

そして、落下の終わりが見えてきて

先程まで全力で戦っていた命蓮寺の尼、ひじり 聖 びやくれん 白蓮相對していたドツペルゲンガーの自分の向き合っていた。しかしそれは一触即発のものではなく、頑張って探していた人が目の前に急に現れて走り去っていったのを黙って見てしまったときのものだ。あれだ。現状把握ができていなくて、無意識のうちに近くに居る人を見てしまうあれだ。流石は同一人物。同じ行動をする

では、2人は何をしてしまったのか、それは――

「どごどごどご、どうどうしししましよしよしよしよう！私は人間を殺してしまっただ！」

「落ち着いて私！あれは不慮の事故です！全力の一撃どうして決着がつくかと思つたのにいきなり本人に悪意が全くない状態で間に入ってくるなんて誰が分かるものですか！」

「とりあえず2人とも落ち着いて！」

――聖の魔法で強化された拳（全力）を、お互いがぶつかる時にタイミング良く（悪く？）スキマから吐き出された雪が落ちて、二つの岩をも軽く破壊してしまう拳が魔力や魔術で全く補強されていない人間の頬にめり込んだのだ。インパクトの際の音がドンっ!!!なんてなま優しいものではなく、ドブグシャアツツツ!!!なのだ

本来なら頭が粉碎していてもおかしくないのだが、雪は方が赤く腫れるだけです。インパクト後、雪の体はその場で10回転ほどして、命蓮寺の門まで回転していく。こんな光景を見てしまった命蓮寺の人物達は戦意なんてものはなくなり、ただただ、  
啞然とした





殴られた後はよく覚えてない。唯一覚えているのはシヨック死してもおかしくないほどの衝撃を食らったことくらいか

「早くこれ治したいんだが……」

「え？あ、はい分かりました。ではこの湿布をどうぞ」

「ザ・怪我人みたいな顔になるな。気にしないが」

そんなわけで白雪の座っている側の机の引き出しから湿布を取り出して俺の腫れた頬にシワを作らずに貼ってくれる

「うーん。これでいいですね。では、気をつけてくださいよ？瞬間の出力ならばこちらと同等ですから」

「分かっている。流石に二人から同時に攻撃されることはないとは思えないとは限らないからな。二人と戦うことになったら上手く立ち回るさ」

「お願いしますよ。貴方が死んでしまったら私も道連れなんですから」

へいへい、と適当に答えて意識を覚醒する

すごく今更だが、現実の怪我とかが精神世界にも反映されるっておかしいと思うが……まあ実際に起きているから言っても無意味だよな。そうなると外だと頬に湿布が貼ってあることになるのか

「あの、本当に動かないのですが……姉さんまさか本当に殺して」



とあと周りの野次馬精神旺盛な奴らが集まって起きるタイムリングを失いそうだから立ち上がると水兵服の黒髪シヨートの少女が引いたような顔をする。辞めてくれ

「あ…あの…聖の拳を食らっていたみたいなのですが、大丈夫なのですか？」

「ん？大丈夫大丈夫。こういうのは稀に遭ったことがあるから。その場で10回転くらいは初めてだったけど」

心配そうに話しかけてくれる金髪と黒髪が混ざったような、虎といえれば分かりやすい少女。手にはなんか長い棒みたいなのを持っている

「ご主人。聖の拳を受けているなら一度永遠亭に連れて行ったほうがいいだろう」  
「そうだね」

虎みたいな配色の少女にネズミの耳!?とネズミの尻尾が生えている幼女が話しかける。待て、いつからここは夢の国に (ry

「わわわ！私好みの人なんだけど！」

「ぬえ？貴女のタイプはあんな人なのですか？」

「男だったら今すぐ告白してる！」

俺は男だがいつもは訂正するのだが、今はしない。いやしてはいけないような気がする

ついでに今の声は背中中に青の矢印？と赤の鎌？みたいなものを3つ付けていて黒髪

シヨートで手に蛇みたいなものを巻きつけている少：幼女が聖とかいう髪が頭に近い方が紫で、伸びている方が金髪しやなくてオレンジ色の普通はあり得ないだろ、髪染めてるだろうと言われる配色の女性が話している

ちなみに視界の隅ではフードを被ったような見るからに尼であろう青髪ロングの少女が両手に輪っかを手をぶら下げて立っている。なんか人の顔がある茶色に近い赤の色をした雲？みたいな奇妙な生き物？が漂っている。どうやら2人（1人と1体？）が様子を伺っているようだ

「あのさ、取り敢えず紫呼んでくれない？本物でもドツベルゲンガーでもいいからさ、取り敢えず制裁を加えたい」

「ダメですよ！前ならばいざ知らず、今は貴重な戦力なのですから！」

「それは寺の住職が言っているいい言葉なのか？」

「はっ！」

つい口に出してしまったようなそぶりをする虎髪の少女。天然か

「というかドツベルゲンガー組がずっと待っていてくれてるな。すごい親切だ」

「あ、私たちのこと忘れられてなかったみたいだよ」

「流石にね？忘れて良いわけないでしょう？敵同士なのだから」

「それもそうね」

「ていうかあれって陰極様が言っていた最優先抹殺対象じゃない？」

「そうね。さっきの一撃？で倒してくれていたら楽だったのねー」

「お前ら寺の住職が言っているいい言葉じゃないよなー！」

「取り敢えずさっさと倒しちゃいましょうか」

ドツペルゲンガーのぬえが適当な調子で言うのと同時に、ぬえのドツペルゲンガーから左斜め前に立っている雲居 一輪が雲でできた妖怪の雲山でスペルカードを使って雪に攻撃する。近くにいる虎髪の少女：寅丸 星や、ネズミの妖怪のナズーリンには目もくれない

「拳符 天網サンドバッグ」

「なっ……攻撃してきた！」

「いや、普通だろ。つかなんだこれ。雲の妖怪か？よつと………入道？大きさも変わ

るから、見越し入道か？」

「妖怪に詳しいね」

「少し興味があつてな」

雲山の雲でできた連打は雪だけではなく、近くにいる星やナズーリンにも拳は届く。3人は苦もなく回避する

雪は外の世界で白雪から聞かされた妖怪に興味を持ってあれやこれやと他の妖怪の知識を蓄えた

尚、マンガやラノベなども読んでいるので正しい知識と合わさったりしている

「つかぬえって……晴明とかってオチじゃないよな？あれってぬら孫のオリジナルだよな！」

「私は安倍 晴明って事はないよ」

「いつの間にいたんだよ」

「ついさつきだね」

いつのまにか雪の横にいるぬえが補足として命蓮寺メンバーの能力と名前を教える

「くくく。分かった？」

「サンキュー。取り敢えずお前の能力はめんどくさいってことがな」

「正しい認識だね」

話していると左右から雲山の両拳がぶつかると迫る。が、妖怪の知識を持つ雪は、妖怪の退治方法を知っている。見越し入道は見上げれば見上げるほど大きくなつて行き、見上げすぎると喉笛を切られるという妖怪だ。だが、一言で撃退する方法がある『見抜いた』

一言。一言で雲山の両拳が止まる

「ほえー驚いた。こんなことが出来るんだね」

「……いや、せめて身近な人？のこことくらいは調べておけよ」

雲山はもう動けない。後は一輪だけなのだが……

「オロオロ」

雲山が動かなくなったことで戸惑っているみたいだ

「スルーでいつか」

「そうだ…危ねえ！」

一輪を視界から外そうとすると雪の真横から音を置き去りにするようなスピードで接近して右ストレートを叩き込もうとする

雪は異常なほどの第六感で危険を察知し、ぬえを引き寄せて一緒にその場に伏せる

「今のを躲しますか。やはり貴方を先に倒したほうがよさそうですね」

「買いかぶりすぎるだろ。肉体強化をどこまでやればそうなるんだ？」



「極めればこうなりますよ」

「あんたを先に潰したほうがよさそうだな」

雪は白雪を手から取り出して構えを取る

と、同時に聖のかかと落としが雪に迫る

「クツソ…」

「はあ！」

「ヤバ…」

かかと落としを身をひねり回避するが、そのまま踏み込み、岩をも砕く拳を容赦なく雪に叩き込む

これは回避できない雪は白雪で受け流す。すぐに態勢を整えるために立ち上がり距離を取る

「戦闘特化型尼」

「超人 聖 白蓮」

聖がスペカを唱えると同時に妖怪であるぬえでさえ捉えることのできないほどの速さで雪に拳を、蹴りを叩き込む

「ゴハッ」

雪は抵抗できないまま、殴られ続け、左腕の骨と鎖骨、肋骨をやられた

「バケモンだろ」

## 第22話 雪の能力

聖のスペカをまともに受けて左腕の骨と鎖骨と肋骨をやられた雪はその場に脚の力だけで立ち上がる。此処までやられたら気絶するのが普通なのだが……襪に散々やられたことに免疫がついている雪はこれくらいはどうということはないといった風に右腕のみで白雪を構える

「マツハ並みじゃないか今の。俺じゃなかったら死んでるだろ……………襪は平気そうだけど」

「何故立ち上がれるのですか？」

「……………お前まさか温情か何かで脚を攻撃しなかったのか？」

立ち上がれる聖は雪に質問をするが、質問で返されて少し戸惑ったような様子を見せる

「さっきの攻撃で腕を折ったのはいいい判断と思う。まずは敵の得物を破壊するか扱う箇所を使えなくするのは普通だ。更に脚を折れば今の俺は立ち上がれなかっただろうな（白雪に応急手当てをしてもらっていたと思うけどな）」

「アナタは今までどんな人生を送ればそういう思考になるのですか？」

「ん？出かければどこでも厄介ごとに巻き込まれてその度に何かしら疲れたり、マフィアを一部崩壊させたりマンガの影響だったり、考えれば考えるほどどうでもいいことに気づいたり的人生だな。つってもまだ17なんだがな」

聖は雪が狂っている人間にしか見えなくなってきた。と同時に早期決着で勝たなければこちらが危ないことを察した

ならばやる事は1つ

「超人 聖 白蓮」

先ほどと全く同じ速度で雪の脚に狙いを定める

「だろうな」

聖の脚が凍りついた後に雪の声が聖の耳に届く

すぐに聖は雪の顔を見ると、雪の瞳が無くなっていた。いや、よく見れば血管が途中で途切れているように見えているから瞳は存在している。つまりは『雪の瞳は真っ白になっている』

「目が……」

「ん、これか？白雪の力を少し強めに使うと白くなるんだよな。にしても俺の挑発通りに脚を狙ってくれて助かったよ。お陰でお前を捉えることができた」

（雪……………それ、誤解を生む発言ですよ）

(なんでだよ)

雪は右腕の力のみで白雪を横にひとなぎする

が、聖は氷を一瞬で破壊してしやがみ、白雪の刃を回避してから迷うことなく雪のみぞに拳を叩き込む

「ゲボツ……ガ……ゲホツ……迷いがないなこいつ」

「天符 釈迦牟尼の五行山!」

軽く10メートルほど上空に吹き飛ばされた雪は肺の空気が無くなったような錯覚をし、咳き込みながら空中で体制を整えようとするが、間髪入れずに聖の背後から巨大な黄金の手が現れて、雪に向かって手を揃えて側面でチョップをするように叩きつける

「休みがねえなあ!」

「なっ……いつの間に……」

先ほど聖が氷を破壊した場所に雪が瞬間移動したように出現し、迷いなく聖の首を捉えた白雪が迫る

が、忘れてはいけない。この場には雪と聖(ドツペルゲンガー)だけではないのだ

「聖危ない! 光符 アブソリュートジャスティス!」

離れた場所から星の持っている宝塔からレーザーが発せられ、的確に雪の右手を当てる

珍しく全く予想していなかった雪は白雪を手放してしまい、白雪は空中で5回転ほどして地面に突き刺さる

「白雪！」

レーザーが当たって腫れた右手なんて気にせずにはぼ、無表情だった雪は本気で心配している顔で白雪に駆け出す

今の雪は聖に背を向けている状態だ。これを見逃す事はない

「はあー！」

「ウグッ……」

背中に大きな岩が上空から落ちてきて直撃したらこんな感じなんだろうな〜みたいな一撃を背中に受けた雪は背骨にヒビが入りながら白雪を追い越して地面を何度も叩きつけられながら転がる

（雪！大丈夫ですか!?!）

（いや、これは大丈夫なんてもんじゃない……手加減のできなかった禊と組手の練習していた時と同じくらいだ）

（不味いじゃないですか!）

（どうするか………素手で戦ったら100パー勝てない。だからと言って白雪までの距離は全力で動けばすぐに取りれるが、それを素直に待つてくれるとは思えない……万事

休す……いや、絶体絶命の方があつてるか)

雪と白雪の距離は約5メートル。右手が腫れていて、みぞを思いつきり殴られて肺の空気がほとんど残っていない。さらには聖は白雪との距離は2メートルという現状

雪の思つた通りに絶体絶命だ

「これが陰極様が言つていた我々を本物以外で葬ることのできる刀ですか。幽々子さんに訊いてみれば情報が出ますかね?」

「は?幽々子つて確か博咲家の始祖に当たる雪(せつ)が仕えてたやつの名前じゃないか………幻想郷に居るのかよ」

聖は白雪の前まで移動するとじつくり眺めるように白雪を見る。聖は刀に通じているわけではないので、綺麗な刀だなあぐらいにしか思わなかっただろう

白雪は人を惹きつけるような雰囲気醸し出しているので聖は手を伸ばして柄を握ろうとすると、『前方から殺気を感じるよりも早く、岩のように固く握られた雪の拳が聖の右頬にめり込んで、そのまま2メートルほど殴り飛ばす』

「は………何が……」

「おい、テメエなに勝手に白雪を触ろうとしてんだよぶつ殺すぞ」

「ひっ………」

何事もなかったように平然と立つ雪は白雪を握らずに聖にゆっくりと歩く

聖は威圧的な言動に驚いたというよりも、『雪の目が白から赤に変わっていて』、『それは目の前の獲物を殺しつくすまで止まらない』という眼光が訴えている

「立てよ、2度と立てなくなるまでぶっ飛ばし続けてやる」

この時点で聖は逃げるべきだった。だが、本能が目の前のバケモノはそれを一切許してくれないと分かっている。なら、殺される前に殺す

「超人 ガルーダの翼！」

超高速で動くスペカで一気にかたをつける方向で雪を一気に倒すが、

「ガッ……」

『聖が雪に衝突する寸前で動きを止め、動くことができなくなった』

これに聖は動揺して動くことができない。そこに雪は容赦をしない

「お前のターンは終わったか？なら次は俺のターンだなあ!!!」

それから命蓮寺には打撃音が鳴り響き、雪が白雪で聖を斬るまで続いた

他の命蓮寺メンバーのドツベルゲンガーはどういうわけか同時に、一瞬のうちに消された



く影の世界く

この世界は異変が始まった時点で幻想郷にいる生物のドッペルゲンガーが拠点としている、幻想郷と瓜二つの影の世界

1人の外来人が来たことにより、一気に形成が悪くなった事に打開策を練らねばならなくなつた

「現状で私たちドッペルゲンガーがやられたのは、紅魔組ではレミリア、永遠亭組は鈴仙、人里では消されてはいないが妹紅が戦闘不能、神霊廟は神子以外全滅。命蓮寺は聖以外は瞬殺されて聖も含んで全滅。無事なのは魔法の森とマヨヒガと博麗神社と白玉楼と天界と太陽の畑と妖怪の山ね」

「おかしいだろ！これだけの数をどうやって……」

「落ち着いて魔理沙。あくまで5、6人を相手にして勝っているから」

「それでも十分おかしいぜ、アリス」

紫が雪によって撃破された住民を言っていく。それに反応した白黒のエプロンを身にまとい、魔女のような帽子と箒を持った金髪ロングの少女が声を上げる

それに反応したのが、周りに似ている人形を漂わせている金髪ショート少女、アリス

「そう。魔理沙の言った通りこれはおかしい事よ。私は紅魔館で隙だらけのところを命蓮寺の住職の聖同士の拳同士がぶつかるところに移動させたのだから、その時点で死んだと思ったわ。でも」

「普通に生きていた……という事ね」

「だから私たちは聖戦で深手を負った今を一気に攻め立てて彼を撃破するわよ」

紫がこれからの行動を示した。それにはその場の全員が了承する。と、思われたが、2人ほど了承しなかった

「私はパスするわ」

「幽々子様がそう仰るなら私も参加いたしません」

紫の近くで座っている幽々子と、二本の刀を椅子に置き、礼儀正しく座っている白髪のオカッパみたいな髪にカチューシャをした少女が参加を辞退すると言った

「なんで!」「なんでですか!」

ここで家族を消された咲夜と神子が2人に迫る。2人とも家族を失った悲しみが側から見てわかるほど疲弊している

ただ、前に出たのが2人というだけで他の人も同じように目で訴えている

それでも幽々子は先ほどと態度を変えずに言う

「だって、彼に勝てるとは思えないもの」

「貴女の能力だったら……」

「無理ね」

咲夜のセリフに被せるように幽々子が言葉を紡ぐ

「彼を殺すことはできないわ。例え私が消されたとしても……ね」

「そうく？なら私が行ってもいいかしら」

幽々子達から少し離れた場所から声が上がると、幽々子がそちらに視線を向けると青い髪を腰くらいまで伸ばして桃を乗せた帽子をかぶり、白い服に青いスカートを履いた少女。天人の比那名居 天子が声を上げる

「アンタがやらないなら私がやるわよ。良いでしょ！」

「貴女でも単独だと撃破されるかもしれないわ！」

「大丈夫よ！なんなら衣玖も連れて行くからさ！」

天子の好奇心にあふれた目を見て紫はため息をつく。言った通り彼女でも1人では

やられてしまうかもしれない。付き添いに衣玖がいれば問題ないか、と判断して了承する

「やったわ！衣玖行くわよ！」

「分かりました（ダジャレ?）」

天人の2人がいなくなつて紫は幽々子とは逆に座っている少女に目を向ける

「天子達でもダメなら次はあなたが行ってちょうだい」

「分かつたわ。メンドくさいけど幻想郷の為だからね」

お茶をすすりながら澁々と了承する

幽々子は解放された

「妖夢。貴女は一度彼と手合わせしたくて仕方がないって感じじゃない?」

「ええ……………こちら側をこれほどまで追い詰めることの出来る人とは戦つて見たいで

すね。でもよろしいのですか?」

「何?」

「その人は幽々子様が惚れた人の子孫なのでしょう?」

「そうよ?でも、今は貴女の成長が見たいのよ。大丈夫。危なくなったら私が助けに行

くから」

「分かりました」

妖夢は少し早めに白玉楼に戻り、鍛錬を始めた

## 第22話 療養は難しい

Side 雪

「衛生兵！衛生兵——！」

「あ、ちよつと待ってください。あとちよつとでバイ〇ハザードをクリアできそうなのでそのベッドで横になっていてください」

現在気絶中である（と思われる）俺は白雪と俺の精神世界の狭間の真つ白で色々なものが置かれている世界で肋骨なら鎖骨やら何か色々と負傷している状態で居る

前述の通り俺は肋骨やら鎖骨やらが折れている状態なのに、この場で何でも出せる奴がバイオのナイフのみの縛りやつてるしよ？しかも何処からかいきなり出てきたベッドに寝ているというしよ？

なんかもうふて寝したい気分だよ

「それにしてもこんな雪を見るのは久々です。そんなに強かったですか？」

「物理攻撃特化怖い……………」

「まあ連戦続きだったので仕方ないとは思いますが。それよりも最後のアレは何ですか？」

「最後のアレ？何だそりゃ」

白雪はバイオをクリアしてから手早く応急処置をしてくれる。それでもまだ痛むので病院に行かなければならないかも……そうなるかと永遠亭か？

というかなんだよその最後のアレって

「まさか頭に血が上りすぎて覚えていないのですか？たしかに雪は激怒してましたからね」

「マジか……」

俺が激怒？そんなの2日前にやっているじゃないか

「さっさと病院に行きますかね」

「そうして下さい。私がやれる事はやりましたし。永琳さんにやつてもらえば確実に」と

「そうしますか」

体に包帯を巻いたまま起き上がって意識を覚醒させる。俺の体は何処に落ちているんだ？

「あ、起きた！」

「……………」

「黙って寝ないで!？」

目を開けると視界いっぱい到大妖怪封獣　ぬえの顔が写される。まだ眠かったので二度寝をするために目を閉じる。俺は低血圧なんだ。静かにしてほしい

「聖——起きたよ——！」

「静かにしてくれませんかね……………。今何時だ?？」

ぬえはドタバタと寝起き（負傷中）の人には優しくない足音で部屋を出て行く。今気付いたが、外ではなくて建物の中みたいだ。それで、和室……………なんか香の匂いがする……………（思案中）……………あ、そういえば此処、『命蓮寺』ってあったから寺か。それに聖は尼とか言ってたし

と、考えているとなんか犬の耳？が生えている緑髪ショートの少女が水を乗せたお盆を両手に持って部屋の戸を開ける

「あ」



「あ?」

俺が起きていることについての『あ』なのかわからないが、『あ』と言ったまま動かないので一応同じ言葉でそのまま返す

「おはようございます!!!」

「ありがとうお陰で目が覚めたよ」

まさか寺どころか周りの木まで揺らすほどの大声を出すとか初見では見抜けないよな? そのおかげで目は覚めた。お札に頭をわしやわしや強めに撫でる。殴ろうとは思わない事はなかったが、本人は悪意を持ってやっていないからな。流星に殴らない。悪意ありならあんな喜界島みたいな狙った方向に兵器じみた声の大砲をやる訳ないだろ。実際俺の耳はヤバイ。モスキートーンが両耳を支配していると錯覚するほどのうるさい

「あはははは! 元気そうですね」

「骨が何本か折れているがこれだけ動いていることから大丈夫だと分かるな」

思い出したかのように激痛が襲ってくるがこんなのは慣れっこだ。何故なら父さんの修行が地獄すぎて何本の骨を折ったことか……………

「元気そうですね。良かったです」

「出たな戦闘特化型厄」

「……………ではこちらへ来て下さい。1人で歩けますか?」

「大丈夫だ。問題ない」

ひじりん怖い

「アナタ大丈夫なの？」

「今すぐ永遠亭に行きたいです。応急処置だけでは心許ない。次のやつが襲って来たら俺は死ぬかもしれない」

台所だろうか。食卓テーブルに正座して待っている少女達が俺が入ると同時に全員がこちらを見る

その中でネズミのコスプレみたいな姿の幼女が心配そうに問いかける

「私たちが応急手当をしましたが、やはり永遠亭に行ったほうがいいでしょう」  
「なら方角と距離を教えてください。後は自分でいける」

「ダメに決まっているでしょう！そんなの死に行くようなものだよ！」  
「そうじゃのう。ぬえの言う通りじゃ」

いきなり背後から声をかけて来た人物がいる。誰だよ

背後を振り返ると眼鏡をかけた茶髪の人間の女性が立っている

いや、

「アンタ人間か？」

「ほう、初見で儂を人間ではないと見抜くとはな。なんの妖怪だと思う？」

「キツネか狸辺りが妥当だな。もしくは鶴みたいに恩返しをするために姿を変える奴とか天邪鬼みたいに人の皮で姿を変えるやつとかも居るから………：分かんないから口調的に狸で」

「ほお、お主詳しいな。口調で当てられるとは思わなかったが……：儂は狸じゃ。二ツ岩 マミゾウじゃ。よろしくの、お前さん」

「マミ……：マミンなよ。俺は博咲 雪。とりあえず早く永遠亭に行かなければならないから紫を手つ取り早く呼ぶ方法とかないか？」

「じゃあこう言ってみなよ」

ぬえが耳元で囁くように言う。たしかに白雪から1000年以上は生きているみたいな事は訊いているけど………：良いのかこれ

ぬえの顔が悪巧みをする子供の顔になっている。これ言っちゃいけないやつだ

「紫はBBA「何か言ったかしら？」ってぬえが耳元で言ってた」

BBAと言った瞬間に紫がスキマの中から微笑したまま出てきた。はつきり言つて怖い

紫はぬえを追いかけに行つたとき。腰には気をつけて、と心の中で注意を促す。聞こえているわけがないがな

「騒がしいけど俺は永遠亭に向かうことにするよ。方角はあまり関係なかったっけ」  
「そうですか？何か移動手段でも……？」

「ある。しかも俺専用のな」

言うだけ言うときつさと命蓮寺を出ようと歩き出す

「ではお体にお気をつけて」

「ああありがとうな」

玄関まで移動して靴を履き、戸を開けると同じくらい目の青髪の少女が立っている。至近距離だが何となくの輪郭はわかる。まず、俺と同じくらいの背の高さで腰くらいまで伸ばした綺麗な青髪ロング。顔立ちは整っていて可愛い部類に余裕で入るだろう。さらに帽子をかぶり、桃を乗せている(?)。飾り物かどうかと審議しようと思ったが、どうでも良くなった。あとすごい好戦的な目をしている

名前を知らない青髪の少女の背後に存在感をほとんど出していない長い羽衣……どう表現すれば良いのかわからない……あれだ、ワ○ンピースの人魚の世界(名前忘れた)の人たちが付けているものを付けており、黒い帽子に赤いリボンが後ろに流れるようにしている。紫の髪でショートの大らかな美人と言えいいのかよく分からないがそんな人だ。俺にファッションとかそう言うのを求めることはオススメしない

「アンタが博咲 雪ね！私と勝負しなさい！」

「この場で自分の首を粉砕してくれたら考えやることを検討しよう。じゃあな」

出会い頭に（至近距離で）大声で勝負宣言をする名も知らぬ少女。骨を折っている現状の俺が戦うわけもなくさっさと永遠亭に向かう。側から見たら命蓮寺から永遠亭（俺が戦った場所）に移動したように見えただろう。これは白雪の能力の一つで、白雪から作り出した氷などなら結界とかで阻まれたりしない限りはそこに瞬間移動することができる。戦闘の時に何度か使っていたけどこれは使い勝手が非常に良い

「助けて永琳ー！」

「元氣そうだから問題ないわね」

永遠亭の玄関の前まで移動して医師を呼ぶが、1秒後には目の前に居て問題なし通告される

「骨をやられているわね。なに？鬼と戦ったの？」

「鬼までいるのか。これは神が居ても驚かなくなってきたぞ」

「居るわよ？妖怪の山に」

「行きたくなかった」

軽く雑談しながら診断を受ける。幻想郷に存在しない種族はないんじゃないか？と思ったりするが、ゴッドイーターまではさすがに居ないだろうと高を括る。フラグにな

らないことを願う

「なるほど、聖にやられたのね」

「戦闘特化型尼が凄かったよ。こんなにされるのは幼馴染の弟以外には居ないだろうと思ってた」

「人外じゃないその弟さん」

「それな」

絶対とまではいかないが、とりあえず無茶をせずにしろと言われた。料金は異変を解決しろとのことだ。そういえば財布は学生服の中だから幽香の家にあるのか。通貨の違いとか知りたかったが、まあ良かったと言えるだろう

「ありがとうな」

「2度とくるんじゃないわよ」

「極力善処はしてみよう」

曖昧な挨拶をして玄関の戸を開けると命蓮寺と同じような展開が起こる

「またか」

「アンタどうやって移動したのよ！」

「それを言う必要はないな。そこを退いてくれ、俺は幽香の家に行かなければならないんだ」

「その前にここでアンタを倒すわよ！」

何処から出したのかは分からないが緋い刀というか竹の筒から炎？が出ているみたいなものを取り出して攻撃してくる

「絶対安静とか無理だな」

## 第23話 戦闘しているときは名前を聞くタイミングがあまりない

S i d e 雪

「絶対安静とか無理そうだな」

目の前の名も知らぬ青髪の少女の剣を、永遠亭に来るときに使った移動を使って移動アンド回避をする

剣は永遠亭の玄関を斬り裂くように破壊する。これって俺が悪いつていう事になる理不尽な言いがかりをされないだろうな？……………そうなったら逃げるしかないな

「なっ……………いつ移動したのよ!」

「空気の流れる感じることなく移動したことから瞬間移動の類かと……………」

「空気の流れて……………つまりは空気系の能力って事か?」

青髪の方の能力は知らないが、紫髪の方は空気系か。空気に関する事全般を操ることができるなら厄介なんてものじゃないな……………危険だから先に倒しておくか?

「衣玖は私のサポートをして!私は突っ込むわ」

「分かりました」



紫髪の方が衣玖で青髪の方が頭領娘？青髪の方は違うな

10メートルほどある距離を一瞬で詰めて斬りかかる。それを白雪で受け止める。ついでに刃に白雪の水をつけて置こうとするが、

「!?水がつかない。いや、溶かされて水になったのか?」

「アンタって攻撃していつって水面下で小細工をするタイプの人でしょ!だったら私のこの緋想の剣には無意味よ!対象の弱点となる属性になる効果があるわ!」

「なるほどな。つまりは氷に対して火、もしくは高熱という事か。だからと言って素手の白兵戦は四肢を失うかもしれない。めんどくさい事この上ないな」

刀を受け流すようにして急な力の変動に少し体勢を崩したところで足払いをして、体を宙に浮かし、斬りあげるようにして攻撃する。それを青髪の少女は緋想の剣でガードする。俺の力で少し後ろに飛ばしたようなところで着地をする

「背後にはお気をつけてください」

「口に出してから攻撃してはいけないと思わないかね?」

いつ背後に移動したのか、正拳突きをしてくる。白雪の鞆底で手首あたりを当てて軌道を上にはズラす。完璧に死角だったのか全く反応できずに驚いた顔をしている。無防備な腹に斬りつけようと思ったがワントンポ遅れるので蹴りを入れる

もしかしたら空気に溶け込むとか、影を薄くするみたいなものか?

「天地 世界を見下ろす遙かなる大地よ！」

「技名長いな……うおっ！地面が揺れてる………こいつもしかして大地を操るみたいな能力か？つか見下ろす大地って……」

5メートル先でスペカを使用する青髪少女。地面を揺らして、なんか隆起し始めた地面を蹴ってその場を離れる

「魚符 龍魚ドリル！」

右腕の羽衣？がドリル見たく形を変え、躊躇なく脳天を刺しに来る

「真楼の抜刀 剛」

右腕の力のみで本気で白雪を上から下に振り下ろす。確実に破壊するために白雪の刃が当たった瞬間に羽衣が凍りついて、そのまま羽衣が粉碎される

「なっ……」

「グッバーイ」

「全人類の緋想天！」

衣玖の近くにある粉碎された氷の破片に移動する。今起こった出来事に目を見開いている衣玖の首を的確に軌道に乗せて白雪を振るうが青髪少女から緋い極太レーザー(?)が発射している

「嘘だろ！」

俺まだ空中にいるからこの極太レーザーは避けようがない。氷の破片なんて一瞬で破壊されている。これじゃあ白雪の能力は意味ない。衣玖はいつのまにかどこにもいないし

「チツ！おおお！」

極太レーザーに巨大な氷の壁を作り出して防ぐ

「はっはっはー！吹き飛ばべ！」

さらに出力を上げる。が、今はそんなものは問題じゃない

「上からくる気をつけろ！」

「え？」

そもそも少し極太レーザーを防ぐことができれば氷の壁の上に移動すればいいんだよな。青髪少女の後ろに小さな氷を作っておいてすぐに移動する。上からくるって言ったのにいる場所が違う？いつから俺が上からくると思っていたんだ？

「させません！珠符 五爪龍の珠！」

衣玖が俺と青髪少女の間に入り、五筋の稲妻が星を描いて突き進む

突然ことで俺は反応できずに体に思いつきりくらう

「ゲホ！ガボ！あ……クツソ……血が……」

「衣玖助かったわ」

「いえ、先ほどの戦闘の傷が響いているみたいですね」

「倒すなら今がチャンス……ね」

ヤバイ……血が止まらない………永遠亭の誰かが応援としてきてくれたら助かるんだが……

しょうがない……短期戦だ

「光明 光龍の吐息」

「気符 無念無想の境地。土符 不浄土壤の剣」

衣玖はフリー○のデスポールみたいな電気でできた大きな球体を作り出している。青髪少女は緋想の剣を地面にさして遅い速度で隆起させていく。ただ、揺れがすごく足場がかなり不安定になった

「全く、俺はいつでも悪役みたいな役目になるな。側から見たら2人が主人公側で俺は敵の強キャラみたいにな立ち位置じゃないか」

俺はため息をつく。そして

「おせーよ。真楼の抜刀 紅の舞」

衣玖と青髪少女の間に氷を作り、移動して2人を舞うように斬る

「な……」

青髪少女はあり得ないと言ったような顔をして消えた。衣玖は何も言わずに消えた

「は〜！痛っ！血が足りなくなる前に永琳に助けてもらおうかな」

（先ほどの2人は確か天人だったような……………）

「天人と戦ったのか。幻想郷は貴重な戦闘経験を得るにはうってつけだな」

また永遠亭のお世話になる。というわけで

「助けてー！永琳ー！」

「くるなって言わなかったっけ!？」

## 第24話 戦闘のない平和な時間

## Side 雪

「全身が軽い……………永琳マジで何者だよ」

（10分で雪の全身の筋肉がほぐれましたね。今なら雪が編み出した『塵』<sup>わう</sup>を難なく使えると思いますよ）

「ほんとなー。ホントだよなー。次のドツペルゲンガーに使ってみようかと本気で考え中」

（やめた方がいいんじゃないですか？その一帯が斬撃跡しか残りませんではないですか）

「そんなこと言ったら空間とか地面とか残らないってことなんじゃ……………」

1時間前に青髪少女達（青髪の方の名前を知らない）を倒してから1時間以内に2度永遠亭に來た事を永琳に長く小言（30分）を有難くもなく言われながらマツサージをされたり傷に傷薬に包帯などで手当てされた。なんだかんだでやってくれる永琳マジ天使。ツンデレか…

「うおっ！」

(……………矢が飛んできませんでしたね。しかも手紙つきですよ)

「どうやって飛んできたんだよ。ここから永遠亭まで絶対針の穴ほどの隙間なんてあるわけないんだが……………」

(……………謎の解明のためにもう一度飛んて来させますか?)

「……………永琳マジ天……………なんで後ろから!?!」

次は後ろから。でもなんとなく風を切る音で竹にあたりながらきているわけではな  
いらしくターンを繰り返しているようだ。おかしいだろ、どういことだよ……………な  
んだ? 弓の達人ともなれば軌道を曲げることもできるのか?

(これ以上はやめておきましょう)

「だな。これ以上は命に関わる。いやマジで」

(というか太陽の畑の周辺に私の氷を付けてませんか?)

「通称マーキングだな。したな。でも今はこの状態で歩きたい気分なんだ」

竹林を抜けてもまだ歩く。一応マーキングの場所の反応はわかるのでそこに向かっ  
て歩いていけばいいのだが、目の前には木が生い茂っている。間違いなく森林だ。跳ぶ  
か?

(瞬間移動すれば良いのでは?)

「それ以外の方法で行きたいのだよ。よし、突っ切るか」

草木を踏みしめながら森林の中を進む

しばらく歩いてみると瓜二つの少女が歩いていることがわかる。背はそこまで高くない（これと同じくらいか？）赤とか白の入っている髪に……表現がめんどくさい。特徴的なのが小さな角があることか

「はっはっはっ！ 私たちが組めば幻想郷をひっくり返すこともできるだろうな！」

「そうさ！ 天邪鬼である鬼人 正邪様が2人いればできるさ！」

「はっはっはっ！！」

「大変仲がよろしいことで」

関わりたくないオーラがひしひしと伝わって来るこの現状に俺はそっ逃げしたい。つか、したわ

天邪鬼って確かなんでも反対（嘘）で事で答える妖怪だっけ？人間の皮を被ってその人そっくりになることができるとか人の心中を察することが得意だったか。能力は反転させる能力とかだろ。俺が戦いたくない奴ランキングトップ3に余裕で入るよ（本物とドッペルゲンガーがあのようなようになるとは……幻想郷住民が見習った方がよろしいと思います。無用な争いを回避できます）

「あー確かにな。あの2人が天邪鬼ってこともあるのかもな」

妖怪の知識を2人で披露しながら森林を歩いていると大量のひまわりが咲いている



景色が広がる

「やっとな着いた。思ったより歩いたな」

（まあ途中で幹につまずいたり、ツチノコらしき影を見たり、雪の苦手な蛾が集団で木に群がっているのを見てプチ発狂してこ凍らせてしまったりしていたのが原因でしょうね）

「辞めてくれない？その人の傷口に塩を大量にぬりに来るスタイル」

（カンナムスタイル）

心に大ダメージを負いながら太陽の畑の中を歩いて行く

「暑い……………暑いや水とか飲んだ記憶がないな。あと朝食」

（水分補給してはいませんが、朝食は取りましたよ。神霊廟で神子さんたちと楽しく食べただけではないですか）

「すごいやそうだったようなそうじゃなかったような」

今日の出来事があまり思い出せなくなってしまった。季節的にも暑くもなく寒くもないはずなのだが妙に暑い。まさかスタンド攻撃!?【太陽】のスタンドか

そんなどうでも良い（↑自覚済み）事を考えながら歩いていると風見邸に到着した

「幽香ー。居るな」

「あら、外見は無事みたいね」

「外見はな。上半身は包帯とか色々巻いているが正直キツイ」

「それで何しに来たの？」

「俺の制服と荷物はどうなっているのかと思つてな。幻想郷と俺がいたところの通貨の違いとか知りたいし」

「荷物？あるわよ。多分捨てていないよな」

「多分？多分つて何だよ。不安にするような事を言わないでくれないか？」

幽香はウソをつかないつてイメージが勝手にしているから荷物が無いなんて言われたら本当に信じじちやうかもしれない。棄てられていたらここら一帯を塵で斬撃跡を残すとするかな

二階に上って行く幽香はしばらく降りてこないだろう。ここで俺はその場で待つこともできるが暑いので上がらせてもらうことにした

く10分後く

「あつたわよ。つて何やっているの？」

「助けて」

10分前の俺はどうかしていた。確かに家の中は涼しかったが、ここは現在進行形で行われている異変の避難所となっていた。前回ここに来たときは子供が3人ほどいた事を忘れていた

つまりはめんどくさい事（子供に関わる）になってしまったという事だ。ちくせう

「じゃあな」

「気をつけてね。次来たときはひと勝負よろしくね」

「考えておく事を検討しておくよ」

幽香邸から出てどこに行こうかなと考える

「どうしようかね。後は幻想郷で行つてないところは妖怪の山と人里辺りか？後は知らん。情報を一切もらっていないからどうしようもないね」

（人里で情報集めしましょうか。あとリストに博麗神社が入っていません）

「……………あ、本当だ」

早くドツペルゲンガー全員が一斉に攻めて来てくれたら楽なものになー

## 第25話 魔法の森の戦闘

〈影の世界〉

「なあ、天子もやられたんだろ？じゃあ次は私がいつて来ても良いか？」

「次は魔理沙が行くの？別に良いけど、貴女は減らされているこちらの貴重な戦力だから危ないと思ったたら戻って来てよ」

「分かっているぜ！じゃあ行ってくるぜ！」

「……………魔理沙が心配だから私も行ってくるわね」

「流石アリスね。こちらが言いたいことを理解してくれるなんて」

「視線がそう訴えていたのよ！私でなくても分かるんじゃないかしら？」

「私もこちらを倒して行く奴の技とか見たいから行ってくるわね」

「霊夢も？霊夢なら大丈夫ね。もしもの時は助けてあげてね」

「魔理沙とアリスだけで勝てるとは思えないからね」

## Side 雪

「は……は……くしゅん！くしゅん！くしゅん！」

（どうしました？風邪でも引きましたか？）

「いや、これは噂の方じゃないか？というか今の時間が昼の3時くらいか。濃い1日だな」

（というか昼食を摂りましたか？）

「そーいや食べてないな。しばらくは大丈夫だろ」

（それはフラグに入りそうですか）

現在太陽の畑を出てから人里までの道を歩いている。季節的に秋なので気温は昼寝をしたら気持ち良いだろうと思うほどだ。眠い

と、欠伸しながら歩いていると森を発見する。中に入れば何か食用のキノコとかあるだろうかと思ったが此処からでも分かるほどに入らない方がいいような気配がする。具体的に言えば、気分を害する類のもの

「原生林か？ぱつと見でわかる事とすれば気分を害するのと日光が届かないことか」

（そうですね。原因まではわかりませんが、中に入れば食品はあるかもしれませんが）  
「入りたくないんだが……」

（何か食べましょうよ）

えー、あの中に入りたくないんだけど……少し行ってみるか？

「うわ………ゲホッ、凄いなここ。キノコとかの胞子か？キツイな」

（私の能力を使用すれば問題はないですよ、これ）

「え？あ、本当だ」

胞子って寒さに強いっけ？冬にあまり飛んでいないから弱いのか。こういう時に燈が居てくれたら助かるんだが……幼馴染（兄）は博識すぎるんだよな。どうでも良いけど眼鏡かければ文句なしのイケメンなんだよなアイツ

「コレが胞子を出しているキノコか。凶鑑とかで見た事ないが………なんだ？幻想郷にしかないキノコか？見るからに毒みたいだが……うーむ」

（雪……囲まれていますよ）

「ん？ああ気付いているぞ。でも人間じゃないよな。一つ一つの間隔が短いし、荒い。動物か。でもこのキノコの胞子は人間以外にも影響を及ぼすな。でもその中でも普通に行動できるってことは妖怪か」

（補足を付け加えるならば、知性を持たないものですね。つまり妖怪ですか。幻想郷は

なんでもアリですね)

「本当にな。数は10か」

白雪を出さずに掌から出す出力だけで問題ないな。それだけで勝てるんだから白雪の力は強すぎる

「はい、しゅーりよー」

(容赦無い……)

結果だけを言えば凍らせてから適当な木を切つてから倒して後は勝手に砕け散る。

この無双感が時々癖になるんだよな。あまりやりたくないんだよな。矛盾

「はあ出ようかな。人里に行くのが楽かな」

(どうしますか?)

「んー、もう少し奥に行こうかな。探索欲がまだ少しあるし」

(そうですか。何か食べれそうなキノコを摂ればどうでしょうか?)

「あ、この時間じゃ無理だ。無理に食べたいとは思わないんだよな。夕食を食べる時に

中途半端になる」

(中途半端に生真面目というか半端なものが嫌いなのか)

「はっはっはっ」

(何わろとんねんですか)

「何だその日本語」

奥に進んで行くと戦闘音がなっている。戦闘音といっても何かを射出していると言えれば良いのか、幻想郷ならではの戦闘音かな。あれだ。弾幕ごっこの音だ

チラツと木の陰から音の方を見ると、瓜二つの箒に乗った少女と、周辺に人形を漂わせている金髪少女がそれぞれ戦っていた

箒の方はザ・魔法使いみたいな帽子と白と黒のエプロンを着ている。手には八角形の物体を持って縦横無尽にお互い動いている。時折こつちに弾幕が飛んでくるが隠れている木が削れていくだけでこちらに被害はない。あと可愛い

人形の方は……………フアツシヨンは全然わからん。なんて言えば良いのかわからない。ただ、なんか黒い本を持っている。ハツ……………ネクロノミコン……………！そんな訳ないか。あと同じく可愛い

「クツソ！博咲って奴を倒しに来たのになんで本物とかち合うんだよ！」

「博咲？誰だかわからないが、年貢の納め時だぜ！」

「全く……………これで博咲って人が離れて行ったらどうするのよ……………」

「行って上海！」

「ドツペルゲンガー把握した。それにしても来て3日くらいで人気者になったな。不本意にもほどがある」



（箒の乗っている方はパワー型で、人形の方は本来中距離で援護するみたいですよ。あの人形は爆発するみたいなので気をつけて下さい）

「なぜ爆発するし」

（爆薬でも搭載しているのでは？）

「物騒な」

いやー凄いなー。弾幕ごっこってこんなのかー、と傍観者を気取っていたら隠れている木が倒れた。別のところに移動するのを忘れた結果が

「あ！お前いたのか！」

「誰だ？」

見つかっちゃったよ

「先手必勝！恋符 マスタースパーク！」

「は？」

ドッペルゲンガーの方の箒に乗っている少女の持つ八角形の物体からさっきの青髪少女よりも大きなレーザーが飛んでくる

## 第26話　V S 白玉楼の庭師

雪にドツペルゲンガーの魔理沙が放ったマスタースパークが木々を吹き飛ばしながら迫る

「ほいつと。何だこれ。この森抜けていったんじゃないか今のレーザーみたいなの。さっきの青髪少女よりも強いとか笑えてくる」

マスタースパークの威力が雪の考えていた以上に威力が高いことに苦笑いを浮かべた。実際雪が言ったように現在戦っている魔法の森のほぼ中心部から外まで突き抜けた。幻想郷において火力がトップクラスのものを人間にぶつかったら身体が吹き飛んでしまうのは火を見るよりも明らかだ

「は〜逃げたい。何もみなかつたことにして今すぐに逃げたい。でもこれって絶対に後で不意打ちされるから今のうちに消しておくか」

「チツ避けられたか!」

「油断大敵だぜ! 魔符　スターダストレヴァリエ!」

本物の魔理沙が箒に跨り、ドツペルゲンガーの自分に星屑と共に突進する

「うおっ! 危ねえ!」

「まだまだ!」

所変わってアリスサイド

アリスたちはお互いに牽制しあっていて魔理沙たちとは違って動きがない

「あっちスツゲエ牽制しあってるな。いや本当に俺ってここにいない方がいいと思えて来た

(雪気付いていますか?)

「ああこの森に入ってから妖獣以外の視線がずっと注がれているからな。こりゃあ気付くだろう」

(誰ですかね。少なくとも妖獣なんて比にするなんてとてもできないほどの強さである事は確かですが)

「うまくこつちに来てくれないかな」

雪がこれからどうしようか。ここから去ろうかと本気で考え始めた時に背後から気配がする

「貴方が博咲 雪さんですか?」

「違うって言えば信じてくれるか?」

「先ほどの会話を聞いていたので信じていることができません」

「盗み聞きかよ。良い趣味とは言えないな」

雪の背後には先ほどまでいなかったはずの少女が立っていた

少女は雪の顎くらいの身長でおかっぱ白髪で黒いカチューシャを付けている。白いシャツにフリルツイーンワンピースで身をまとっている。少女の周りには透明で魂みたいなもの、否魂が漂っている。腰には二刀の刀があり、長さが異なっている

少女は好戦的な目線で雪を見ると長い方の刀を抜刀し、中段の構えを取る

「我が主人の命により、魂魄　妖夢。貴方を斬り捨てます」

この光景を雪は黙って見ていた。いつもの彼ならば、めんどくさい、帰れ、逃げたい、などと考えるが、今は口ものを歪め寧猛に笑っている

「良かったよ。幻想郷に来てからは剣を使う奴がいなくて困っていたんだ。3日前が最後になったからな」

（雪……おそらく彼女は……）

「強かろうがどんな奴だろうが敵ならばぶった斬る。それだけだ。妖夢だっけ？」

「そうです」

「これは公式なルールなんて無い斬り合いだ。勝敗は立ち上がれなくなった方の前ってことで良いか!？」

雪が叫び終わると同時に白髪の剣士が一斉に動き出す

（速い!）

2人の剣士は、相手の早さに驚く

妖夢は中段の構えから走る際に脇構えの状態で走る。それに対して雪は白雪を出すも腰に刺したまま。鏢を上げて柄に手をかけて走る

妖夢が脇構えから手にしている長い刀……楼観剣を斬りあげる。雪は楼観剣の切っ先がギリギリ当たらない場所で急停止し、足に負担をかけるも一歩力強く妖夢に踏み出し手を素早く動かし、斬撃を放つ

「甘いですよー！」

距離にして1メートルも無いが、妖夢は短い刀……白楼剣で斬撃を防ぐ

「二刀流……か。そういうや二刀流の相手ののは戦ったことがないな」

雪はこの距離だと少し不利だと感じ一歩飛び下がる

「速いですね。外の人間だから侮っている人が多かったようですが、話を訊くのと実際に体験するのはやはり違います」

「そうかい。俺は今まで侮られていたのか。ハッ！前のやつらザマア！」

妖夢は白楼剣を納め、楼観剣のみを抜き身の状態で持つ

雪は白雪を抜刀し、脇構えの状態で構える

「隙がないですね」

「それはどうも。そちらもないじゃないか」

雪は妖夢がいる方向とは違う場所へと走り出す

「へ？」

唐突な行動に妖夢は放心状態になってしまった。妖夢はこれは剣士同士の一騎討ちで正面からの攻防だと思っていたが、先ほど雪が言ったようにこれは斬り合いでどちらかが倒れるまでやる。公式なルールがないこの勝負ではどの様な行為をしても良いのだ

妖夢が放心している間も雪は行動している。妖夢の周りにある木々が斬られていき、このままだと妖夢に全て当たってしまう

「クッー」

妖夢は倒れてくる木を全て真つ二つにし、雪を探すがどこにもいない。妖夢の顔に影が映り、どんどん大きくなっていく。上を見ると気が機関銃の乱射の様に雑だが妖夢に降り注ぐ

「なんて戦い方ですか！幽々子様からの情報で知ってはいましたがこれほどめっちゃくちゃなやり方をするなんて！」

自分に当たる木だけを斬っていく。それでも着実に足場は歩くなっていく。足元に注意していくと上空からの攻撃に対応がおろそかになっていく。だから言つて木だけを斬っていくと逃げ場がなくなっていく。では、上空の木に対応しながら周りの木を斬

ることにするか？だがそうすると雪の思惑通りになってしまふ。ならば飛びながら降り注ぐ木を斬っていくか？これが一番良いのでは？

(飛びながらここを脱出する！)

上空から降り注ぐ木を全力で斬りながら後退する妖夢だが、背中に激痛が走る

(何が……木？しまった！)

妖夢の読みは大部分が正解だが、1つだけ足りない。大量の木が進行形で降り注ぐならば当然、標的に当たらないものがある。それは地面に突き刺さるものもあれば、刺さらないものがある。最初の木は突き刺さったが、後からくる木が突き刺さった木にぶつかり倒れていったのだ。これが妖夢が自分に当たる木だけを斬っている間にも連鎖的に続いていた。むしろ全力で後方に飛ぶまでに当たらない方がおかしかったのだ

木と木がぶつかり合って、ちょうど横になったところに妖夢が自ら無自覚のうちに当たりに行つたことになる

妖夢は肺の空気が無くなるのを感じながら後方にある木に注意が向いている間にも、無情にも木が降り注ぐ

「キヤアアアアアアアア!!!」

激痛に耐えながらも木を斬り続けていた妖夢だが、あまりの量に耐えることができなくなり一本の木が腹部に直撃する。それでも木は収まることを知らずに降り注ぐ

この惨劇を演出した張本人である雪は妖夢から50メートルほど離れた場所に立っている。流石にこれ以上は良いだろうと思つて雑に伐採された木の上に立ち、遠くを見る様に額に手を当て、目を細める

「あーこりやあやりすぎたか？というか斬撃を飛ばすという発想はなかったのか？それをやれば何の問題もなく出れたと思うんだが」

（その場合はこちら側に場所を教えることになるのであまり意味はないかと）

雪は辺りを見回していたやあと額に手を当てる

「やりすぎた」

（辺り一帯が雑に伐採されていますから。どうするのですか？これ）

「必要な被害だったんだ。異変解決に必要なことだったからしやーないしやーない」

白雪はため息をする様に、はあく、と息を出す様な仕草をする

「けど、まあ、計画通り」

（それを言いたかっただけですよね）



## 第27話 邪魔者

「さて、さつさとここから出るかね。これ以上ここにいる理由はないし」

（魔法使い達は良かったのですか？）

「うんまあ、アレは故意的にやっつけているわけでもなかったし。俺が戦う理由がないんだよ。それにさつさとここから離れたいから」

（離れたいという意見には賛成します。何か嫌な予感がします）

「具体的には倒したと思った敵がまた襲って来るとかな」

魔法の森のほぼ中心部で魂魄 妖夢と戦っていた雪は雑に伐採された木の様な場所で切り株の上に腰を下ろしていた

雪が何気ない一言を発しながら腰をあげると背後から気配がする。それは先ほどまではなかったものだ。瞬間移動したかの様に現れた気配に雪はいくつかの候補をあげる

（1・紫。可能性が大だ

2・妖夢。紫の能力で転移した

3・その他。候補が多すぎて言い切れん）

音もなく何かを構える音がする気配を感じた雪は後ろを振り向く

「はあはあまだですよ」

「候補は2か」

所々に擦り傷を負った妖夢が中段の構えのまま息を切らせて立っていた

「早くその傷を直したほうがいいんじゃないか？それ以上怪我すると勝手に消滅する気が」

大怪我を負ったドツペルゲンガーは時間が経つと勝手に消えるかどうかは雪は知らないが、珍しく妖夢の身を案じている

「大丈夫です……………このくらい……………」

「言葉が途切れ途切れになっているのに何が大丈夫なのかね」

「行きますよ」

妖夢の言葉に雪はため息を吐いてしまうが、戦意は先ほどと全く変わっていないことに心の中でため息をつく

「今のお前を見てると6歳の時の俺を思い出すよ」

「人符 現世斬」

妖夢が一気に雪との距離を詰める。その速度は普通の人が見たらほとんどその姿を捉えることができずに棒立ちしていることだろう

だが雪はそれに反応する

「真楼の居合 瞬」

妖夢が動き出すのとほぼ同時のタイミングで居合の構えを取り、手首の返す力で妖夢よりも速い剣速で首を狙う

「はあ!」

「そら!」

雪の斬撃をスレスレで避け、楼観剣を容赦なく首を捉える。それに対して楼観剣を弾き、足払いをかける

「きやつ」

「それ!」

空中で横倒しになっている妖夢に躊躇なく白雪を振り下ろす雪。妖夢は素早く納刀している白楼剣で受け止めるが、空中だと地に足をつけているほうが有利に動く

「グツ……」

「おいおいこんなもんか? 一度引いたほうが良いんじゃないか? 死ぬよりも生きて打開策を考えれば良いんじゃないか?」

「! 貴方は剣士の誇りがないのですか!?!」

「そんなこと言われても俺は戦国時代の剣士って訳じゃないからその剣士の誇りっての

は分からない。お前のいう通り俺にはないんじゃないか？」

「そうですか……」

地面で横たわって白雪を片手で受け止めている妖夢は楼観剣を雪の足を切り裂こうとする

「はいはい危ない危ない」

楼観剣を左足で踏みつけて押さえつける

「剣士の誇りがない貴方に負けるわけには生きません！断命剣 瞑想斬！」

「うおお……うわっ……とと。なんだありや……強化か？」

急に強化された楼観剣は軽々と雪を吹き飛ばす。空中に投げ出された雪は体勢が悪いなながらも無事に着地する

「貴方は絶対に私が倒します！」

「死ぬよりも生きたほうが良いと思うがな。これは個人の意見だから他人がとやかく言えることじゃないかな」

「魂符 幽明の苦輪」

妖夢が使用したスペカは、半人半霊である妖夢の周りに漂っている妖夢の霊の部分（見た目は魂）が人の部分である妖夢の姿になるものだ。妖夢の横にもう一人の妖夢が現れる。妖夢が半人半霊であることを知らなければ分身したと思うことだろう

「分身した？なんだ忍者だったのか」

(アイエエエエエエエエ)

「いや、さつきまでであった？魂みたいなのが姿を似せたのか？」

雪の読みは間違えてはいないが正しくもない

「断命剣 瞑想斬！」

妖夢2人(本来は1人だけど描写の都合上2人とします)の持つ楼観剣が強化され、左右に分かれる

「チツ……」

2人の妖夢が別々の方向から攻撃が襲ってくる。少なくともこの戦いでは白雪の力は使わないようにしているため、単純な手数では妖夢側が有利だ

「一気に攻めますよ！」

「クツソ……速いな！」

左右からほとんど同時に攻撃してくるため、注意が散漫になり体感時間が対一の時よりも早く感じる

「ヤバイ……目が痛くなってきた。つか、なんで俺の動きがわかるんだよ……！誰からか情報をもらったのかよ」

「逃がしません！人鬼 未来永劫斬！」

「は、うおっと」

少し距離を取るために交代した瞬間に2つの刀から斬り上げられる。ほぼ反射的に白雪で受け止めるが強化された2つの楼観剣には白雪の力を使わない雪の筋力では押し出されるのは当然だ。雪は空中にいる状態で思考する

(どうする、空中だとまともに居合ができないぞ……抜刀術もだ。真樓の型は地に足をつけていることを前提としたものが多い。そもそも空中戦をすること自体を想定しない。だからと言つて使えないつてこともない……が、2人(?)には効果が薄いな。そのまま追撃されると削りきられる可能性がある)

雪の危惧していた通りに2人が一斉に動き出した。左右に分かれて雪に向かって一直線に跳躍する

「真樓の居合 停」

「なっ……斬撃をその場に残した!？」

真樓の居合 停は自分の全方位に霊力で濃縮に固めた斬撃を停止させておくものだ  
2人の妖夢が強化された楼観剣で攻撃するが金属音を鳴らすだけでヒビが一切入らない

1人の妖夢が離れたのか金属音が少なくなる

「そらっ!」

停止していた斬撃を全方位に飛ばす。突然の出来事に斬撃に攻撃していた妖夢は吹き飛ばされる

「はあ……やったか？」

（それフラグでは）

「断迷剣 迷津慈航斬！」

「フラグだった」

地面に着地するとともに、遠くにいた妖夢が楼観剣に大量の妖力をつぎ込んだ巨大な刀身を作り出して薙ぎ払う

「甘いな。真楼の居合 衝」

巨大な刀身を横から霊力が纏った白雪の刀身でそらす。白雪の刀身が当たって数瞬後に霊力が爆発し、巨大な楼観剣は雪の体を捉えることはなかった

「なっ」

「胴体がガラ空き」

隙だらけになった妖夢に一太刀浴びせると、妖夢の姿が消えた

「はっ？え？あ……うん。魂（？）の方だったか。妙にあっさりしたものだと思ったら

……ビックリした」

「やられましたか……ですが！転生剣 円心流転斬！」

呆気にとられてしている雪に高速で近寄り楼観剣で高速連続攻撃をする妖夢

「まだまだだな。真楼の居合 時雨」

雪はすぐに居合の構えを取り、妖夢の高速連続攻撃を全ていなす

「まだ！」

最後に高速連続攻撃の勢いを利用した横薙ぎをするが、

「読み通りだな」

雪はいとも簡単にいなしてしまふ

妖夢はすぐに距離を取り、雪の出方を伺う

「せっかくだ。とっておきを見せてやるよ」

雪が深呼吸をし、目を見開く

と、同時に妖夢の前にスキマが開き、中からピンク色の髪をした女性がゆっくりと出

た

「初めましてかしら？ 博咲 雪君」



## 第28話 話と取材と突き落とし

Side 雪

「初めましてかしら？博咲 雪君」

いきなりスキマから出てきたピンク髪で妖夢の周りにあるものが細かくなつたような白い塊(?)を宙に漂わせている着物姿の女性が妖夢との戦闘の邪魔をする位置にいる

「疑問形で聞かれても……俺はあんたのことを知らないが？」

「あら、白雪は私のことをあなたに話していないのかしら。悲しいわね」

「白雪から？」

急に白雪に話が飛んで驚く。白雪を知っていることは刀に通じているやつか、白雪と話したことがあるやつくらいか？でも刀に通じている人でも知らないことが多いが。ここまでまとめて分かった。白雪を知っていて、白雪が話していないのか、ということから出てくる結論……人名は

「アンタ西行寺 幽々子か？」

「なんだ、話しているじゃない。もしかして私の特徴を言っていなかった？」

「いや、一応訊いていたがどうせ会うことはないだろうって思ってた覚えがなかっただけだ」

「あら、そう。でも確かにそう考えるわよね」

「でもおかしいな。白雪から知った情報だと1000年前くらいに妖怪の木？だかを封印するために死んだって訊いていたんだけどな？」

そう。さつきから全く会話に参加してこない白雪からはすでに死んでいるということだ。死んだ後に何かしらの原因によって妖怪になった、という可能性がある。が、妖夢の周りを飛んでいる白いものが気になる

「そうよ？私は死んだの。だから霊体なのよね。この体」

「幽霊にしては自由に動いているな。地縛霊って事じゃない。亡霊か？」

「正解よ。貴方鋭いわね」

「そりやどうも。でも何でだろうな、素直に喜べない」

霊体ってことは白雪でも斬れないかもな。白雪に訊きたいがどうも呆然としているみたいだ

「それで？何の用だよ」

「そうそう。貴方と話すのが楽しくて忘れかけていたわ」

「いや、忘れていただろう」

「ピンチの妖夢を助けにきたのよ」

「だろうな。で、そのまま帰るのか?」

「そうね。素直に帰らせてもらおうわ」

そう言つて幽々子は俺に背を向けて妖夢の手を取る

「そうだわ。貴方次行くところないなら白玉楼に行つてみてはいかがかしら。良いものがあるわよ」

「気が向いたらな」

「次は勝ちます」

「次があることを願わないよ」

妖夢は睨め付けながら俺に言う。できればそんな機会はないかな

「じゃあね〜」

「では」

2人は影に入るように去つていった

「おい白雪。さつきから黙っているがどうかしたか?」

「……………あ、いえ、まさかもう一度幽々子様を見ることができるとは思いませんでしたから」

「ふーん。博咲筋の始祖、だっけ?雪<sup>せつ</sup>つて俺のひいひいひい中略爺さんが仕えていたつ

ていう」

「そうです。まさか亡霊となつているとは思いませんでした」

「ふーん。お前が普段俺にしか聞こえないようにしているのに、外に声が出るようにするほど驚いたんだな」

(あ)

「ま、しょうがねえんじゃねえの？1000年ぶりなんだから」

(はい)

そんなことよりも……だ

「どこどこだ？原生林(？)ってことはわかつてはいるんだが、そもそも未開の地に足を踏み入れている時点で目印とかつけとけばよかった」

(とりあえず先ほどの魔法使いの方々の方に行けばよろしいかと)

「あー、戦闘音……じゃなくて、弾幕の音？がしないから終わっているのか？」

耳を澄まして遠くで弾幕ごっこをやっているかどうかを確認してから記憶と白雪に従いながら歩き出すと急に目の前に何かが落ちて来た

「あやややや、やっと見つけましたよ！さあ博咲 雪さんですよね!?早速ですがこの清く正しい新聞記者、射命丸 文の質問に答えてください！」

「…………… (関わりを持つては行けない分類に入るやつがもしれない。早く立

ち去ろう)」

「あの……訊いてます?」

「あ、ドツペルゲンガー」

「ドツペルゲンガー!?!どこですか!?!」

適当に文の背後に視線を向けて眩くと綺麗な動作で後ろを向いた。と同時に白雪の力を使い、太陽の畑の近くの草むらに移動する

「今頃こつちを向いたらアレ、居ない! って事になつてそう」

(なんとなくの直感でしょうか。私もあれ以上関わって居たら大変なことになると思いました)

「だよな。さて、さっさと人里に行きますか」

草むらから出て人里までの道を歩こうとすると――

「ちよつ、いきなり消えるなんてどこぞのスキマ妖怪ですか貴方は!」

――上空から魔法の森で置いて来た文がものすごい速さで飛んで来た

「今度こそ取材させてもらいますからね!」

「どうとでもなれ」(諦め)

これから3時間、いつ終わるのか分からないほどの質問をされた。これに対して俺はこう語る。ジャーナリストを敵に回したく無いでござる

「ありがとうございます！」

「どういたしましてこれからは俺に一切関わらないことを誓えこの野郎」

「そういえばこれからどうするのですか？すでに夕方の6時ですが」

「6時って夕方なのか？まあいいや。特に考えてないな。最悪野宿でも構わないし。人里にでも行こうかなと考えていたりする」

「そうですか。なら私が送って行きましょうか？取材のお詫びという事で」

「大丈夫……って言いたいけど頼む」

「お任せ下さい！」

満面の笑みで答えてくれる文

だが不意に制服の袖を引っ張られるようにして後ろに下がってしまう。誰かが俺を引っ張っているようだ

「え、ちよつと雪さん？」

「文、やつぱり大丈夫だ。お前は新聞でも作ってる！」

「え？あ、分かりました！」

文に大声で叫ぶ

そしてされるがままに引っ張られる事数分。急に止まった

「なんだったんだ一体」

「急にごめんね」

急に目の前に黒い帽子を被った幼女が現れる

「私は古明地 こいし。地底の主人の妹だよ！よろしく！」

「いや、知らないんだけど」

「それよりも今夜泊まる場所がないんでしょ!?!だったら地底に来てよ！温泉があるから疲れを取ることができるかも！」

「温泉……だと…………分かった行こう」

最近風呂には入ったが温泉には入っていないんだ。俺は温泉はかなり好きなんだ。すぐく落ち着くというか、考え事をして長風呂をしてしまう。地底という不穏なワードが出たが温泉があるなら行ってみたい

「やったー！じゃあこっちだよ！足元には気をつけてね！」

「お前もな」

連れていかれること数分。それまでに森の中をずっとある歩いた。俺の住んでいるところにはあまり森となくて慣れていなかったが、父さんに連れられて漫画みたいな授業をやったことがある。滝行を実際にやるとは思わないじゃん？あれはヤバイ。最初は風邪をひいた。復活するのに1日使ったよ。

どうでもいい話その1：その日は父さんがたまたま出会った熊を白雪でぶった斬りま

くつてちょうどいい大きさに切りそろえた

どうでもいい話その2：小学校とかで山登りとかいうふざけた行事をやつて命雛兄弟は適応しやがった

まあそんな訳で俺は山登りとかはなんの問題はない。少し疲れはしたがそれは温泉で癒す事にしよう。そうしないと異変が解決するまでずっとふて寝する。つーかここまで来れば勝手に解決して来れそうなんだよな。博麗の巫女や妖怪の賢者達は作戦でも建ててるのか？

「ここが妖怪の山！名前の通りに妖怪しかいなくて、大部分が天狗だね！なんだかの川って言うところに河童達が住んでいるんだよ。さらに頂上には神様が住んでいる神社の守谷神社があるの！そしてええええ……妖怪の山の麓にあるこの大きな縦穴は私が入っている地底につながるところ！」

「……………水飲む？」

「ありがとう。ここまでずつとハイテンションで喋っていたから喉がカラカラだよ」

「すごいハイテンションだったな。まあお陰で妖怪の山のことは大体わかった。ありがとうな」

まあここまではね、順調に進んで来れたんだよ。ただこの縦穴の大きさが直径20メートルくらいはあって深さは視認できない。暗すぎて奥が全く見えない。見たとこ





## 第29話 地底入り口

## Side 雪

こいしによつて地底まで続く縦穴に突き落とされてからしばらく浮遊感に襲われていたが流石にこれ以上は強力なGを受けていたら身がもたない。内容物が飛び出るとかの意味で。出るものがないけどな

「よーいしょつと……」

とりあえずスピードを落とすために白雪を横の壁に突き刺してスピードを緩める。完全に泊まると同時にこいしが上から落ちてくる……いや降りてくるが正しいか

「雪お兄ちゃん無事だったんだね。良かった！」

「俺は飛べないって言わなかったっけ？」

「言っていないよ？ そういえばずっと歩いていたよね。飛んだほうが早いのに」

「……………困みに訊いておくれが、俺が飛べないって知っていたらどうやって降りた？」

「それは私につかまって貰うか、飛び降りてもらったけど……？」

……………前者は完璧に事案じゃないか。外だったら即逮捕だぞ。突き落とされ

て良かったかもしれないな……

「それじゃあ私につかまって！地底までもうすぐだよ！」

「事案発生を阻止させて貰うぞ」

壁に突き刺してある白雪を引き抜いてまた落下する。そして壁に足をつけて向かい側の壁の少し下を目掛けて跳躍して、上記の繰り返し

こいしは飛んだまま降りている。俺も飛ぼうとすれば飛べるのか？

「すごいやり方で降りてるね。普通そんな方法でしたまで行かないよ。みんなただ落ちるのと飛びながら降りるくらいだから」

「飛べないんだから仕方ないだろ。それと適度な運動をしておいて温泉で癒すとするよ」

「気持ちいい温泉になりそうだね」

さて、色々降りて来たわけだが、なんか蜘蛛の巣みたいなのが有るんだけど………超巨大な蜘蛛とかいたら衝動的に殺しそうなんだけど………↑蜘蛛が

苦手

「あれは自殺防止と間違つて落ちちゃった人を食べるための巣だよ」

「……………そいつって蜘蛛の類か？」

「土蜘蛛だよ！名前はヤマメちゃん！」

「できれば会いたくないな」

白雪を駆使して蜘蛛の巣の間を潜ってきつきのように跳躍しながら下に降りていく

「ほら！見えて来たよ！あれが地底の入り口！」

「やーとかー」

「とーちやーく！」

「よつと……」

到着したのは良かったが穴の下に小さな池？みたいなのがあったりして着地する場所を間違えるところだった。間違えていたらびしょ濡れだ。温泉の楽しみが1つ増えるところだったよ（皮肉）

「それじゃ行こー！」

「そういや訊いていなかったが閉館時間とか有るのか？時間によつちや急がないとだし」

「んー確かなかったと思うよ。いつでも誰でも自由に使つて良いってものだから」

「自由だな」

「それが温泉を営んでいるというか代表と言えば良いのか分かんないけど地底に住んでいる鬼の勇儀姐さんがやっているんだよ」

「指揮をしているみたいなものか？」

「うーん、間違っていないけど……指揮は少し違うかな。基本的には放置していて喧嘩さえしなれば良いって感じだから」

「……………権利者？」

「そう！多分それ！」

「ハッキリしないな」

「こいしと話しながら明るくて賑わっている里？みたいな所に向かって歩いていくしばらくすると江戸時代の高架橋があった

「へえ高架橋か。昔みたいなのがあるのか。良いな」

「あれ？パルスイが居ないな。勇儀姐さんと飲んでいるのかな？」

「パルスイ？」

「そう。パルスイ。水橋。パルスイ。種族は橋姫だったかな」

「橋姫って橋を守る神じゃないか」

「よく知ってるね！後さつき私たちが通った縦穴の番人をやっているよ！」

「番人をやれよと思ったがこれ以上はいまい」

「こいしの説明を受けながらも少しずつ繁華街（さつきこいしに言われた）に進んでいく。高架橋はしっかりとしていてなんの音もしなかった。いつから此処にあるんだ？」

く影の世界 博麗神社く

「ねえ霊夢」

「なによ」

「彼の戦闘を見てどう思ったの？」

「……………無茶苦茶な戦い方をしてくせに相手のとる行動の可能性を全て潰すような事をするし、単純な剣術なら妖夢を超えて、戦術を混ぜ込むとさらに手をつけられないくらいになる。白雪っていうあの刀だけで私たちと戦えそうなほど強い。これは今居る戦力つぎ込んで本物が乱入してくるかもしれないけど倒しておくのが良いと思うわよ」

「……………霊夢も私と同じ考えなのね」

霊夢と紫が話していると魔理沙とアリスが戻ってきた

「霊夢見たか？あの無茶苦茶な戦い方を」

「その話をしていた所だったわ」

「なんなのあの人……………異変解決する側の人間なのに多大な被害を出すなんて…………」  
「アイツにとつて幻想郷はどうでも良いんじゃないかしら。じゃなかったら魔法の森の木を雑に伐採しないだろうし」

霊夢がそこで言葉を切ると、鋭い目線が紫に突き刺さる

「今から博咲 雪の討伐作戦を立てるからいつものところに集めてくれる？」

「それが……………地底の鬼と萃香達が殴り込みに行くとかで不在よ」

「今すぐ連れ戻しなさい！」

「そうすると作戦に支障をきたしそうなのよねえ」

「じゃあ博咲 雪の居場所は？地底以外だったら良いけど……………でも紫が送るか……………」

「無事に戻ってきてくれることを願うしかないわね」

霊夢と紫が同時に肩を落としてため息をついた

## 第30話 地底の鬼

Side 雪

現在俺はこいしに連れられて地底の繁華街に足を踏み入れた。見た目は地上の人里みたいただが、徘徊している者達が違った。見渡す限り鬼、鬼、鬼、こいし、鬼、鬼、と………地底には鬼しか居ないのか！

「うわっ……むさ苦しい男だらけの繁華街とか地獄かよ……」

「ここに私が居ますよー」

「……例外を除いてを付け加える」

なんか頬を膨らませて目の前をぴよんぴよん飛んで自分の存在をアピールするこいし。正直に言つてやめてほしい

とりあえず押さえつけて居るとヒソヒソと俺の前方に固まっている鬼達が3人ほどいる。むさ苦しい………

なんて言っているのか知らないが時折俺を見ているところから厄介ごとに巻き込まれる事になるのは分かった

「こいし、少し早足で行くぞ」



「え？なんでなんでー？」

「良いから、くだらない事に巻き込まれるぞ」

それをいうのと同時に俺の肩に前方で固まって居た1人（1体？）の肘あたりがぶつかった。その際に大音量で、建物が巨大な一撃によって吹き飛ばされる音が流れる

「クツッ……いし！そこを動くなよ！」

破壊された建物の残骸が散弾のようにこちらに降りかかる

俺の肩に肘を当てた野郎を盾にしようとも考えたがそれまでに断ち物の残骸がぶつかる方が速い。なので白雪の能力で扇型の盾を作り、イナイレの主人公の必殺技みたいに残骸を俺とこいしの頭上に飛ばす。近くにいた鬼は知らん。自力でどうにかしろ

「なんだなんだー!? 久々に攻めてきたら見ない顔がいるじゃないかー！」

「ちよいと勇儀。あの白髪の間人って最近私たちドツペルゲンガーを減らしている奴じゃないか？ 紫が言っていたさ」

「そうなのか、萃香？ 私は聞いていなかったから知らないね」

破壊された建物の上に立つ大量の鬼達。その先頭に立っているのが、額から星のマークがついた赤い一本の角が生えている金髪ロングの白シャツを腹の少し上あたりで巻いていて青い足まである長いスカートの女性。何故か片手に巨大な盃を持っている。その女性の横に瓢箪を片手に持っていて、眉間のあたりから長い角が生えている幼女が

居る。何故か2人とも両手に鎖が付けられている。お互いの会話から盃を持っている方が勇儀。瓢箪を持っている方が萃香というらしい

「マズイよ雪お兄ちゃん。勇儀姐さんと萃香ちゃんが揃っているなんて」

「ヤバイ……………よな。こっからでも分かるからな。出来れば戦いたくないんだが……………」

「ここは逃げた方がいいと思うよ。山の四天王が2人も揃っているんだから」

「四天王が2人って微妙だよな。普通1人だろ、来るの」

「私についてきて。そうすれば勇儀姐さん（本物）が来るまでの間なら時間は稼げると思うから」

「建物破壊して文字通りに一直線に来るような性格だよなああの2人」

「雪お兄ちゃん早く！」

「いや、こいし、お前は先に行け」

「ちよつと何言ってるの!? ああの2人に単身で挑むなんて殺されに行くようなものだよ！」

「じゃあこう言おう。どうやら——

「アイツが私たちの仲間を消したっていうなら仇を取らないとな！」

「そうさ……ここまで私たちを追い詰めたんだ！相当骨がある奴なんだろうね！」

——  
アイツらの狙いは俺みたいだ。お前は応援を呼んできてくれ」

勇儀と萃香と雪との距離は約6メートル。大量の鬼達の先頭にいる勇儀と萃香以外の鬼はすぐに散らばり、先ほどの楽しそうな騒ぎから喧騒が起こる

雪は散らばる鬼達に目もくれず勇儀と萃香から目を離さずに白雪を納刀して拳を構える

「なんだ、刀をしまうのか」

「……………まずは拳こぶちでやって戦い方を考える」

「そうかい。私としては少しでも楽しめる方がいいんだがな」

「そつちが手加減してくれれば楽しめるんじゃないか？」

「それじゃあつまらないだろ」

「……………（思い違いしているな。まあいいや）そういやアンタらの名前は知っているが苗字を知らないんだよな。なんの鬼か分かれば少しは楽しめるかもな？」

「幽々子からの情報だと目星くらいはついてるんじゃないかい？」

「……………付いているっちゃついてるけど確定情報があった方がいいだろ」

「そんなもんかい」

「私は伊吹 萃香」

「私は星熊 勇儀だ」

「酒吞童子と星熊童子かよ！四天王ってそれか！」

勇儀と萃香のフルネームを聞いてつい叫んでしまう

酒吞童子は舟波の大江川に住んでいる鬼達の頭領であり、伊吹童子が本名だが、酒好きから酒吞童子と部下から呼ばれた

星熊童子は酒吞童子が頭領で、茨木童子が副頭領を務め、熊童子、金熊童子、虎熊童子、星熊童子の4人が鬼を従えていたうちの1人

そんな2人が同時に来るとなると今までドツペルゲンガーを倒してきた雪でも距離を取ろうとする

「さてさっさと始めようか。ハンデだ。この盃の酒をこぼさずに戦うよ」

「もつと話していたかったがな。(先にあの盃壊した方がいいか?)」

「そらっ!」

苦笑いする雪に萃香が足元にある建物の残骸を1つ掴みその体からは考えられないほどの速度で投げつける

「さて、どうしましょうかね」

萃香から投げつけられた残骸を右手首を使い進行方向を変える

「アンタ武道でもやっているのかい?」

「うちの母さんがやっていてね。剣術と一緒に叩き込まれたよ」

「剣術だけだと思っていたがこっちの方が楽しめるかもな」

「期待するなよ」

雪と勇儀が同時に動く

「オラッ!」

「遅えよ!」

2人の距離が無くなったところで勇儀の拳が雪に放たれる。雪は体を横に倒して回避しつつ左脚を軸にして首に回転蹴りを入れようとする

が

「私のこと忘れていない？」

「正直小さくて視界に入って……うおっ！」

—— 2人が同時に動いたと同じタイミングで萃香も雪の背後に移動していた。萃香は軸となつている左脚を持ち、そのまま持ち上げ、勇儀とは反対側の地面に手を離さずに叩きつける

「見た目によらず怪力だな！」

「鬼だからね！」

「なるほど」

雪は叩きつけられる瞬間に掴まれている左脚に力を入れて万力のような力を振り払おうとするが無意味に終わった

(ならっ)

左脚を曲げて萃香に接近し右足で蹴りを放つ

「甘いよー！」

「そつちがな。予想通りだ」

右足は萃香の左手に掴まれてた。が、その瞬間に萃香の手から鋭い氷が出てきた

「！」

「やっと離れた」

萃香は突然の痛みに両手を開いてしまう。それを機に雪は萃香の両手を思いっきり蹴り、距離を取る

「勇儀。あいつの氷は私の能力を超えるかも」

「そうか。なら気をつけないとな！」

勇儀が力強く雪に向かって走ると、足元から氷が砕ける音がする。気になり足元を見ると勇儀の周りの地面が薄い氷が張っていた

「勇儀前！」

「気を取られすぎじゃないか？」

萃香の叫び声に勇儀は前を見るといつもの間にか雪が迫っており、拳を握り、下から上に振り上げる

「ハッ！しゃらくせえ！」

その場で思い切り一度足を地面に叩きつけると放射線状のヒビが地面に広がる音と氷が砕ける音が響く

「はっ？」

「腹がガラ空きだぞ！」

地面の揺れにより攻撃を中断され、バランスを崩した雪の腹部に強烈な蹴りがめり込む。その際、雪はバランスを崩しながらも背後に跳び、衝撃を和らげた。そのおかげか、

気絶しそうなほどの痛みはあるが、意識は飛んでいない。背後に飛んでいなければ最悪死んでいたかもしれない

「ガツ……クツ……痛う……」

ざつと10メートルほど吹き飛び地面を転がる。何度か咳き込むがそんな暇を与えないかのように萃香が背後に現れ、雪を羽交い締めにする

「ゲホツ……クツソ……膝蹴り入れるな！痛え！」

「萃香は手をやられているからおあいこだよ！」

「知るか！」

羽交い締めになっている腕を凍らせ、雪だけが移動できる白雪が作った氷に瞬間移動できる能力を使い、脱出し、肘を萃香の顔面めがけて振るう

「そいっと！勇儀！」

「背中がガラ空きだぞ」

萃香との攻防のうちに移動していた勇儀が拳を握り、容赦なく叩きつける

「うおおお！」

雪は痛む身体を無理やり動かし、腰をひねり、勇儀の方を向き少し跳び、両足を曲げて勇儀の拳に乗せ、振り切るタイミングで足を伸ばして距離を取る

「身軽な奴だな」



「そっちは少し硬いようだが？最近酒ばかり飲んでろくに動いていないんじゃないのか？」

「そりゃあ鬼だし酒くらいは飲むさ。だが、運動はしているぞ」

「異変中だかね。それも私ドツベルゲンガーたちと存在の生き残りをかけた……ね」

「あつそ。そんなの勝手にやっていて欲しかったな。俺は幻想郷がどうなろうとどうでもいいことなんだ。ただ外の世界に戻りたいだけ。けど今は異変だから博麗の巫女もいるんだろ？それだと結界を緩めることはできないとかで解決しないといけないみたいだな」

「何もせずにゆっくりしていればいいじゃないか。部外者なんだから」

「そうしたいんだが、紫が現地に送って戦わされているんだよ！俺は手を出して来なきゃ戦わないのによー！」

「つまり今までのやつらは勝手にお前さんに手を出して返り討ちに遭ったつてののか？」

「そうだよ」

「そいつは残念だったね。同情するよ」

「そりゃどうも」

「だが、」

「それとこれは関係ないってか？」

「分かっているじゃないか」

「俺の事情とアンタらの好戦的な感情は別だからな。アンタらが俺の事情を気にせず  
戦うのは当然だからな」

「理解してくれる奴なんだな」

「本物の私たちの仲良くできそうだね」

「手を出さなければ普通に接するさ」

「お前面白いな」

3人の会話している時に萃香についていた氷は霧のように消えた。雪は何でそうなるのかを考えようとするが、それは出来そうにないと思い腹を抑えながら構える。それを見た萃香と勇儀も構える

「そろそろ終わらせないとこっちが死にそうなんでさっさとぶっ倒す!」「もつと愉しませてやるから駄目になるまでついてきな!」「霊夢達以来の骨のある人間なんだ!簡単に壊れてないですよ!」

## 第31話 温泉描写は無い!

雪と勇儀と萃香が同時に動く。姿勢を低くしたまま突進する雪に真つ先に萃香が前に出て注意を引く

「邪魔だどけ!」

「そういう負けにもいかないんでね」

雪は氷柱を作り出し、萃香の額にめがけて射出する

氷柱が萃香の額に当たると………と思つた瞬間に霧散する

「は?」

目の前にいた人物が文字通りに霧のように散つた光景は雪の人生に一度もなかつた。そんな光景を見て一瞬頭が真つ白になる

キンツという硬いもの同士がぶつかった音が耳に届いた瞬間に我に帰り、推型の盾を50センチほど前に作り出してそのまま走る

盾を作るのとほぼ同時に推型の盾にぶつかる音がする

「……地面を砕いて飛ばしたのか? 脳筋かよ」

「はっはー! まだまだ行くぜ!」

「横に飛ぶしかないじゃないか！」

「私の存在を忘れて居るようだね」

雪の背後からさつき霧散した萃香の声が聞こえ、振り向きざまに右手に先端の鋭い長い針を指と指の間に挟み、容赦無く突き刺す。が――

「残念♪」

「ウゼエー！」

萃香の体を通り抜ける腕を引き抜かず勢いを下げずに2人と距離を取る

「さつきから逃げに徹して居るが攻めて来ないのか？」

「ふう……一撃で体が吹き飛ぶくらいの一撃が何度も来るなんていう鬼畜仕様な状況なんだからそいつと同じくらい強さのやつが来ないとキツイよな？」

「……………つまり、お前は時間稼ぎをしていたと？」

「当たり前だろ。さつきこいしが近くにいる時点で留めておくんだったな」

「アンタは良いのかい？ 私たちを倒さなくて」

「倒せるなら倒すが俺以外の奴が倒してもこつちにはデメリットがない。お前たちは自分の偽物が出れば、自分で倒したいっていう奴だからな」

雪がそこまで言うとう上空から飛来してくる音と声が聞こえる

「その人間良く持ち堪えたな！ 後は私たちに任せておきな！」

間違はなく雪と対峙していた勇儀が落ちてきた。地面に大きな音を立てながら着地すると何処からともなく萃香がスウーと現れた

S i d e  
雪

「勇儀……これは引いたほうがいいんじゃない?」

「まだ暴れ足りないんだがなあ。だからと言ってこのまま戦えば倒れるだろうし」

「おいおいどうしたよ私!せっかく来たんだから私とも殴り合おうぜ!」

「私は無限ループが始まるからね。私の抑止力として居ることにするよ。今まで自分の能力は便利だけだ、いざ同じ姿、思考で使うところも厄介になるんだね」

「ドツペルゲンガーだからな」

本物の勇儀と萃香が来たことによりドツペルゲンガーの2人は逃げるかどうかを考



るやつだ。このまま寝たいな

「ちよいとアンタ。雪だっけ? 立てるかい?」

「勇儀か。立てるよ」

「アンタが雪か。紫から訊いているよ。なんでも本人じゃなくてもドツペルゲンガーを倒せるんだって?」

「それは俺の力じゃないな、萃香。白雪の力だ。だから白雪も使わずに戦うなら時間稼ぎしかねえんだ」

「まあ私たちは自分のドツペルゲンガーを倒したいんだけどね♪」  
「知ってたよ脳筋幼女」

立ち上がって少しふらつきながら勇儀と萃香と話し合う。誰かを忘れている気がするけど………まあ忘れるくらいならどうでもいいことか

「雪お兄ちゃん大丈夫!」

「完璧にこいしの存在を忘れていた」

そうだった。ここに連れて来てくれた幼女が居たよ。完璧に、完全に、本っ当に忘れていた

「その顔私のこと忘れていたでしょ!?!」

「イヤイヤ、マサカソナコトハコトハナイ」

「なんで片言なの！私のこと忘れていたね！」

こいしがワーワー騒ぎ出した

「まーまー落ち着けよ。忘れてはいたが鬼2人と殴り合ってたんだ。それに良いのを一発腹に食らって意識が飛ぶところだったんだ。許してくれたまえ」

「はあ、分かったよ。早く温泉に行こう」

「そうだな。さつさと行くか。あ、管理者さん。温泉を利用させてもらうな」

「あーハイハイ。一応壊れてないか私も見に行かないといけないからついて行くよ」

そんな訳で温泉でこの傷を癒そうと思って歩き出す。パーティに鬼が加わった。そういうえばこいしってなんの妖怪だ？妖怪の伝承とかで小石が使われているものなんてあったっけ？

「おー此処だ！」

「見事に無事だな。周りの建物は全て破壊されているのに。ご都合主義みたいなのでも働いたのか？」

「何言っているの？」

「さあ？自分でもわからない」

人間と鬼となんの妖怪か知らない幼女のパーティが目的地に着く。見た目は20メートルはあるのではないかと思うほどの高さで広さも十分ある。リゾートホテルと



いったほうがいいんじゃないかと思う

此処に来るまでに周りを見て来たがほとんどの建物が破壊されていた。その中でも此処は比較的ドツペルゲンガー達の侵略(?)の被害が少ない方なので奇跡的に無事のよう

〜風呂上がり〜

「?時間が飛んだような」

「また何か言ってる」

ふむ。何故か勇儀がこの場所に着いたところからの記憶が無い。なんだっけ? こういう現象のことを言うやつ……………燈が居てくれればすぐに答えてくれたのに…………

「そうだ!雪お兄ちゃんは今どこで寝るの?地底だからわかりにくいけど今は夜の7時くらいだよ」

「マジで?ここに泊まることは…………出来そうかな?勇儀に訊けばいいか」

「じゃあ私が住んでいる地霊殿に来てよ!一応地底の避難場所になってるから、ある程度は安全だよ」

「そうなのか。そういえば幽香がそんなことを言っていたような…………?」

「じゃあ行こう行こう！」

「おい！手を引つ張るな！」

幼女とはいえ妖怪であるこいしには勝てずに手を引つ張られたまま連れて行かれる  
そして着いたところが紅魔館くらい大きな屋敷。幻想郷には和風な所が少ないな

「こいが、ねえ」

「たっだいま〜！」

こいしが元氣よく正面の扉を開く。多分玄関だ。無駄にでかい

「おかえりなさいませこいし様」

「こいし様お帰りなさいい！」

こいしが中に入ると2つの声が聞こえた。ここからだと思えない位置に居るみたい

「どうしたの？雪お兄ちゃん！」

「あ、いやなんでもない」

中に入ると猫耳に2つの尻尾の妖怪で言うところの猫又？と右手に筒みたいなものを装着している右足が何か土みたいなものので覆われている少女？が居た

2人は訝しんだ目で俺を見る。当然だよな

「あら、こいし。そちらの人間は誰？」

「あ、お姉ちゃん！」

二階に上がるための階段のところから幼い少女……幼女の声が聞こえる。ピンクの髪で落ち着いた感じの雰囲気は漂っている。何か目みたいなのがコードにつながれている。これはこいしにもあるものだが、違いがあるとすれば色と目が開いているかどうかくらいだ

「あー、お邪魔します。俺はこいしに連れてこられた人間の博暎 雪です」

「貴方が雪さんですか。噂は八雲 紫から訊いています。貴方のおかげで私たち本物の勝利が見えて来たと言っていました」

「いや、あれは完全に防衛したら勝ったみたいなものだからな？ 決してこつちから手を出していないからな？」

「……………どうやらそのようですね」

こいしの姉さんは何やら相手の心理に関しては強いらしい。紫がそんなことを言うとは思えないが……

「その情報は紫から？」

「いえ、私の能力で知ったものです」

「へえ、そう言えば名前を聞いていなかったような……」

「申し遅れました。私は古明地 さとり。こいしの姉です」

「さとり、こいし……………か。なるほどね」

さどりの自己紹介によつて姉妹の種族がわかつた  
「2人とも悟り妖怪か」

## 第32話 決戦前夜

## Side 雪

「2人とも悟り妖怪か」

古明地姉妹の名前を聞いた時にふと思いついた言葉がソレだった

ソレを聞いたこの場の俺と白雪以外の全員が俺を見る

「……………何故、そう思うのですか？」

さとりがジト目で俺を見てくる。こいしに至っては俺から距離を取る

「何故……………ねえ。心を読めば良いと思っただが根拠を述べないといけないみたいだな。勝手に決めつけるなって言いそうだな」

さて、どうするか……………めんどくさいな

「まあ、最初はこいしと会ってなんの妖怪かわからなかったんだよな。妖怪とかの伝承つつうか、妖怪の伝説？に小石が使われているものがあつたかどうか考えていたんだ。その途中で鬼と戦ったがな。それで、今さとりが自己紹介してくれたから分かったんだ。こいし、お前の能力はなんだ？」

急に話を振られたこいしは戸惑った様子だが答えてくれた

「無意識を操る程度の能力だけ……」

「悟り妖怪なのに心を読めない点に関しては聞かないでおく。それで、悟り妖怪は心が読めるって事は比較的に避けやすいが、子供が無意識に投げた小石には当たった。つまり、無意識には心を読むことができない……というか気付けないんじゃないか？」

「それでは私たち姉妹が悟り妖怪だという証拠にはなりません。貴方がやったことはただの悟り妖怪の伝承を説明しただけです」

「いやいや、こういう前置きの説明は必要だぞ？さて、ここまで話したが、決定的なことを言うぞ？こいしの無意識とさとの名前から悟り妖怪だと言うことは分かりやすい。さて、さとり。お前は——」

「ひっ……え……」

「—— やつぱりな。お前、俺が、」父さんを殺した「って言葉に反応したな？」

「え！雪お兄ちゃん……」

「いや、正確には、動く死んだ父さんを斬った」が正しいんだが……まあ表現を変えただけで意味はそこまで変わらないな」

証明終了。さて、心を読むが何処までのことを言うかわからないが、納得しただろ

「これで証明は完了した。お前のその反応が証拠ってことで良いな？」

「……—っただけ答えてください」

「おう、答えられる範囲なら答える」

「貴方は父親を斬ってどう思いましたか？」

「……………そうだな。納得のいかない最期に憐れみとやった奴に対しての怒りだな」

「……………嘘……………は言っていない。貴方は正直者です」

「心理学に關しては燈も負けるだろうな」

「なんか分かんないけどこれで良かったよな？」

「貴方は私たちが悟り妖怪だと知ってどう思いますか？」

「心読めば早いだろ。人間は心に正直だしな」

「直接口で言ってください」

「……………幼馴染の兄弟の兄貴の方が俺の心情を察する奴がいるんだよな。悟り妖怪か！つて言ったこともある。だから今更俺の心情をわかる奴が現れたところでリアクションに困る」

「……………はあ、今日は泊まりに来たのですよね？」

「イエス」

「ごゆっくりと」

さとりは目を伏せてゆっくり遠くに行ってしまう。俺はどうすれば良いんだ？

「とりあえず許可は出たし行こつ！」

「あーはいはい。あ、2人とも今日だけよろしく」

「よろしく！」

「うにゅーよく分らないけどよろしく！」

「こいしに手を引つ張られ、部屋に案内される

「すごいな……………こんなベッド久々に見たぞ……………」

「気持ちいいよ！疲れているだろうしご飯になるまで寝てるさー！」

「そーいや今日は朝以外食べてなかったな。今日で同じことを2度も言ったな……………」

「こいしに案内された部屋は客室で綺麗に清掃されたところだ。1番目を引くのは

ベッド。白いシーツに座ると弾力性が良い

「こいしはいつのまにか居なくなっていた。無意識を操る能力の効果か？」

「さて、こいしのお言葉に甘えて寝るとしますかね」

（では、私と話しでもしましょうか）

「話ねえ」

ベッドに横になってシーツを被ろうとしたが辞めて代わりに目を閉じる

そして精神世界だかよく分からない場所に移動（？）する

「で、白雪。話って？」



「これからドツペルゲンガーはどう動くかどうかです」

「あー、そうだな。今までと同じく勝負を仕掛けてくるんじゃないか？ 振り返りにするけど」

「それならば良いのですが、雪は今まで何人倒して来ましたか？」

「さあ？ 20人くらいじゃないか？」

「仮に20人としましょう。本物と同じ実力で、同じ数。そしてドツペルゲンガーは影に逃げる事ができます。それのお陰か私たちが来るまで均衡状態だった」

「つまり、ドツペルゲンガーは今俺たちのせいで不利になっているから俺を消しに来ると。それも確実に勝率が高い大勢で」

「そうです。逃す事もあるでしょうが、ここで一気に異変の解決をすることができません」

「そうか……………結局俺はなんでここに来たんだろうな」

「……………確かに……………雪が夢幻になつてしまったわけではありませんし……………燈さんなら」 巻き込まれ体質なので仕方がない事です」と、笑顔でいいそうですね」

「本当にな。白雪は幽々子とまた会ったかどうかどうするんだ？」

「……………私が幽々子様のところ留まるかどうかという事ですか？」

「そ。まあ離れるってことはないと思うが一応な」

「幽々子様は雪（せつ）が仕えていた方で、私とも親しく接してくれて良い方です。が、私が一緒にいると決めたのは博咲家のみと決めているので、率直に言つて愚問です」

「だよな。あーマジで眠たくなつた」

「では一眠りしますか？」

「そうする……………お休み」

「おやすみなさい」

「……………きて。起き……………。起きて雪お兄ちゃん！ご飯の時間ですよー」

「ん……………幼女……………じゃなくてこいしか。おはよう」

「よく寝ていたよ。それだけ疲れていたってことだよね」

「そういうことにしてくれ」

白雪の声を最後に意識が消えてから、こいしの声で覚醒する。こいだけきいたらただ

とロリコンだな、俺

「早くー！お腹が空いて背中とお腹がくっつきそうだよ！」  
「そんなことは腸が無くならないと起きないから安心しろ」

〈影の世界〉

影の幻想郷。そこには幻想郷の住人のドッペルゲンガーが存在する場所

人里。人里の広場でドッペルゲンガーが集まって各々好きなように座っている。が、雪が幻想入りする前に比べたら圧倒的に少ない

そこに勇儀と萃香とモブの鬼たちが戻る

「やつと戻ったわね」

「すごいなあの人間は！一対一で本気で戦いたいくらい強いぞ！」

「白雪を使用して鬼と戦えるのはわかっていることだわ。つまり、私たちを倒せる白雪を奪い取ってから倒すってことで良い？」

「それなんだけどね、霊夢。アイツその白雪？つて刀を使わずに私たちと戦ったんだよ」  
「白雪を使わないで!？」

「正確には白雪の力は使ったが刀は使わなかったが正しいな」

勇儀たちの報告に紫と霊夢たちは目を見開く。単純な力比べだと幻想郷でトツペルの鬼が2人で挑んでも倒せなかった。が、それを察していたような雰囲気幽々子は少し離れた場所で座りながら扇子を口に当てて楽しそうに見ていた

「楽しそうですね幽々子様」

「ええ楽しいわ。これから私と戦闘ができないドツペルゲンガー以外を除く全戦力で雪に立ち向かうのだから」

「流石に化け物のような強さに強力な武器を持つ、まさに鬼に金棒を体現したかのような人でも勝てないと思います」

「そう。妖夢ちゃんはそう思うの……」

「幽々子様は違うのですか？」

「そうね。彼の能力をまだ知らないのに立ち向かうのはやめたほうがいいと思うわ。命蓮寺全員が文字通り一瞬で倒したのだから数で挑んだって無意味だと思うのよ」

「つまり、彼が能力を使用すれば勝てない……こちら側が実質全滅してしまう……と」

「そう。私の考察だけど、彼の能力は時を操るか、結果を出す能力だと思うのよ」

「前者に対してはそう思います。時を止めて攻撃したのなら一瞬で倒すことができます」とに説明ができませんが、後者の結果を出す能力は違うと思います」

「それはどうしてかしら」

「なんとも言えませんが、彼と剣を合わせた時にそのような感じがしなかったといえますか……」

「剣士によるもの……」

幽々子と妖夢が話しているとドスの効いた男の声が響く

「俺も出る」

「陰極様……しかし、貴方がやられたら私たちが消えてしまいます」

「それは分かっている。だから離れた場所から見て、そいつのドツペルゲンガーを作り出す」

「……それなら……」

今まで表に出なかったドツペルゲンガーのボスが出ると聞いた幽々子は先ほどの表情から険しくなる

「彼と同等の力を持つドツペルゲンガー………幻想郷が崩壊するわ」

「彼は何も思わないと思います」

次の日に長期にわたる異変が集結する。その結果、幽々子が言った通りに幻想郷が崩壊するか、それとも無事に解決するか……

## 第33話 決戦

S i d e 雪

連戦の日々（2日くらい）から一晩明けてから、こいしたちに別れを告げて地上に戻る

「そういえば土蜘蛛の妖怪と会わなかったな。忘れていた。会わなくてよかった……  
「あー、疲れが取れたー」

（雪、もうそろそろ敵が来るのではないでしょうか）  
（ああ、ちゃんと警戒している。むしろ縦穴の時に来るものだと思っていたがな）

俺は幻想郷に来て最大の警戒をする。声に出さずに心で白雪と会話しているから警戒度はMAX。大事なことなので二回言いました

「誰か来た」

（北北東から1人。すごいスピードで来ます）

しばらく歩いていると木の上を移動しながら移動する気配を察知。白雪を出して横目で後ろを見る

「その人間！……ここは妖怪の山だと知っているのか!？」

「……………あ、えつと俺たちは一昨日来てあちこち移動させられて異変の情報  
しかない状態で立入禁止区域とか知らないんですよ」

「いや、禁止とまでは言っていないのですが……えつと、とりあえずここから立ち去つて  
ください」

「あ、その前にーついいですか？」

「あ、どうぞ」

「ドツペルゲンガー？」

「ノー！」

急に現れた人物（？）は白髪で短髪、犬の耳が頭から生えていて、頭に文が乗つけて  
いた赤いポンポン？がある。紅葉の模様がある盾に日本刀を持っていて、なんかモンハ  
ンの片手剣みたいだな

なんかすつごい緩い会話してるけど、根はいい子なんだな。こっちが敬語で話すと  
あつちも敬語で話してくれる

「ドツペルゲンガーじゃないと。とりあえず人里はどここの方向ですかね？」

「あ、それならこの道をまっすぐ行って、分かれ道を左に曲がってから右に曲がってまっ  
すぐです」

「どうも。では……」



とりあえずドツペルゲンガーではないようなので（信用はしていないが）人里までの道順を聞くとあっさりと教えてくれる。本当にいい子だ

それじゃあ、行こうとする時に獣っ子の後ろにスキマが見えた。紫だということはすぐにわかったが、本物かもしれない。少し様子を見ると悪趣味が極まっている空間から白い手が獣っ子に伸びていく

「後ろー！」

「えっ……」

「チッ」

白い手に気付いていない獣っ子に全力で駆け寄りやがら叫ぶと、後ろを振り向いて一瞬硬直する獣っ子を左手で横に飛ばしてその場にしゃがむ

獣っ子を捕まえることができなかつた手は宙で動いてその人物の舌打ちとともに引つ込められる

その瞬間、俺の四方八方にスキマが開いて大量の幻想郷の住民のドツペルゲンガーが現れる

「は……ハハッ。ヤベエ笑うことしかできねえ」

出てきた幻想郷住民は視界に入っているだけで30。気配も合わせれば40は超える。しかもそれぞれが俺とまともに戦える奴らばかりで、明らかに前線で戦うやつと

サポートに向いているやつで別れて居るのでサポートに回っている奴らを倒すには前線の奴らを突破するしかない

「まったく、朝から千客万来だな！」

「よお、昨日ぶりだな」

「来るなって言わなかったか？ 忠告したのに来たってことはここにいる全員は倒してもいいってことだろ？」

「まあ、そういう事だな」

俺に最も近い位置にいる鬼の勇儀が、久しぶりに会う友人のように気さくに話しかける。対する俺は目の敵を見るような目でまっすぐ勇儀を見る

「つーか多すぎるだろ。なんだ？ たった一人の人間を殺すためにこんな大掛かりでほぼ全戦力をつぎ込むなんて、お前らのリーダーはアホなのか？」

「私たちのリーダーの好きな言葉が多勢に無勢らしいわよ」

「そりゃあいい言葉だな。確実に不穏分子を消すためにリスクはたくさんあるが実行する決断力。さっきのアホとは反対の意味の言葉になるが凄いな。下につきたいとは思わないが」

「散々言ってくれるわね」

「その前にお前誰だよ。紅白巫女」

勇儀に変わってそんな巫女服はないだろと思う服装の少女。細かいことは言わないが可愛いと思う。身長は160前後かな

「博麗 霊夢よ」

「お前が噂に聞く、他人に興味がなくて喜怒哀楽が激しい幻想郷最強の博麗の巫女さんかー」

「すつごくムカつく声で棒読みもどきで私のこと解説するのやめてくれない?」

「は?なんで?」

「私が嫌だからよ。そんなことも親に習わなかったの?ろくな親じゃないわね」

「あいにく両親とも幻想入りする前に死んでるよ。あと、俺もお前らがここにいること自体が嫌だから即刻消えてくれないか?できれば死ぬって意味で存在を消せ」

一氣にまくしたてるように言うとし息が切れる

ここまで言われて博麗の巫女さんは顔を真っ赤にしてプルプル震えていた。感情表現が豊かだ

「さて、この人数差であなたに勝ち目があると思う?」

「ねえな。はつきり言っただけで来ると勝てる気がしない。しかも須臾の中を動くことが出来る奴に対しては初見殺しでどうにかしたからこっちはお手上げなんだよな」

「じゃあ諦めて死んでくれるかしら?」

霊夢の次は紫だ。何か滑稽なことを言った気がするが気のせいだろうか？

「ごめんもう一回言つて。ちゃんと聞き取れなかった」

「諦めてここで死んでくれるかしら？」

「気のせいじゃなかったのか」

なんでだろう。こんな状況なのに笑いがこみ上げて来る

「俺はさ。戦争をモチーフにしたゲームとかで負けが確定している状況になると一人で突っ走つてできるだけ敵を多く殺した上で死のうとするんだよ。誰も倒せないところがあるがな」

「それが？」

「この状況でも同じだよな？本物と偽物が、オリジナルとコピーが存在をかけて戦う戦争。そして、俺はそんな戦争に巻き込まれた存在。実際関係ないけど、勝手にやつていて欲しかったが、こうなったら――」

――一人でも多く消していくのが俺なんだよ！

雪が叫ぶのと同時に大きく踏み込む

既に目は雪のように真っ白になっており、白雪の力を強く使うことを表している

大きく踏み込んだ足から氷が発生し、瞬きをした時には雪を中心に妖怪の山の一部が白銀の世界になった。規模は半径一キロほどで、近くにいた獣っ子こと犬走 権（本物）はドツペルゲンガーが出現したと報告しに行っているため、巻き込まれずに済んだ

（ここでも一番最初に狙うべき相手は、須臾の中を動く大和撫子だが、それよりも――

――

「お姉さまの仇！」

「お前だ。ロリ吸血鬼」

雪が妖怪の山の一部を凍らせる時に地に足を付けていたもの、木に触れていたものは

既に凍っている。既に半数以上が凍っている。そんな中、凍っていないものの中で一番最初に飛び出したのが、姉であるレミリアをやられたフランだ。使わないようにしていた、ありとあらゆるものを破壊する程度の能力、を使って雪を一瞬で倒そうとした

が、雪は一度破壊されたところを見てはいないが、既に一度能力を発動するために必要な予備動作を知っていた

飛び出さなかったとしても、最初に初撃で倒すと決めていたのでむしろ狙いやすくなつた

フランの能力の予備動作は手のひらの中に出てくる破壊の目を潰すことによつて対象を問答無用で破壊する厄介極まりない能力。通常なら破壊される前にフランを倒すと考えるのだが

「どこにも居ない!」

「まずは一人目」

フランの破壊の目はたしかに雪を捉えていたが、フランが破壊の目を出す前に瞬間にその場に簡単な動作ができる氷の像を作っており、本物の雪はフランの背後に瞬間移動（地面や木が凍っているため、氷内なら自由に使える）し、破壊されると同時にフランを一文字に斬り裂く

（須臾の大和撫子は何処にいる？俺が油断した瞬間、もしくは白雪の力の効果が切れた

瞬間に動くのか?)

雪が思考しながら次の相手に挑む

その光景を最も見やすい場所で眺めている男が一人

「まだ集まらないの!?!」

「まだよ!」

スキマのなかでは本物の幻想郷住民が集結して行った

## 第34話 逆転

妖怪の山の一角が白銀の世界になっている。その中では外来人とドツペルゲンガーが全力で戦っていた

「数が多すぎるだろう！これラノベとかだったら何人か端折られて出番ないまま後で本物が出て来て『あー、そういう居たな』程度の話が起きると見た！」

（何言ってるんだあいつ……）ドツペルゲンガー達の心の声

雪の意味不明な言葉（実際そうなる）を心の中で不思議がるドツペルゲンガー

雪は白雪を地面に突き立て、背後から迫って来る勇儀の拳を回避する。勇儀がさつきまで雪の居た場所に来ると地面から大質量の先端が鋭利な氷が突き出しす

「しやらくせえ！」

勇儀はそれを拳で砕く。そしてすぐに雪の方を見ると既にその場には居なく、別のところへ移動してしまっていた

（にしても、空中にいるやつがウザいな）

勇儀や萃香たちみたいに接近戦で雪を追い込み、距離をとったら空中にいる少女たちがじわじわと弾幕で雪の体力を削る



(どうする?このままだと削りきられて終わるだけだ。一気に状況打破できる方法は……あるけど、まあ、後処理は紫たちに任せようか)

雪は若干の躊躇はあるものの、ドツペルゲンガーを倒すことを優先し、実行する

(白雪、出力を一気にあげるぞ)

(問題ありません。とは言え、すぐに破壊されそうですが)

(三、四人倒せればいいさ。それに他にまだまだある)

雪は大量に展開されている弾幕を、白雪を上段で構えて全力で振り下ろす。斬撃は弾幕を破壊しながら延長線上にいる少女たちも捉えるが、紫のスキマに吸い込まれる。そして、一瞬だけ間が空く

「標高高い氷山の一帯!」

雪がそう宣言すると地面の氷が一気に上空まで分厚い氷の壁を作り出す

「なっ……!」

「真楼の居合 散!」

いきなりのことで動揺している少女たちに雪が無数の斬撃を飛ばす。斬撃は少女たちの目の前まで来ると爆発するように全体に小さな斬撃を飛ばす

「っ!二重結界!」

「マスタースパーク!」

「アーティフルサクリアイス！」

霊夢、魔理沙、アリスがそれぞれの弾幕で斬撃を相殺する。が、雪は既に霊夢の背後に移動しており、既に居合の構えを取っていた

雪の気配を博麗の巫女の勘で瞬間的に察知して、背後に勾玉を飛ばす

「チツ」

勾玉を瞬間移動で回避した雪は霊夢の代わりにアリスの背後に移動して一太刀。アリスは気づくことができずに消えた

「アリスー！」

「うおっ」

アリスを倒されたことに魔理沙がミニ八卦炉を構えるが、それと同時に勇儀たちによつて足場を破壊された雪は身を宙に投げ出される。足場の氷は綺麗に落ちていく

「捉えたー！」

「残念♪」

自分の体を疎にした状態で雪に近づき、密の状態して、全力で殴ろうとした萃香に、昨日のお返しをするかのように、歌うようにしながら白雪を左手に持ち替えて背後に刃を突き出す

萃香の腕と白雪の刀身のリーチでは白雪が優っているため、カウンターをされるとは

思わなかったのか萃香は自分の体を疎にすることができずに体に突き刺さる。そして、疎にするという思考が出る前に体の中から全身が一瞬にして凍りつく

「あばよー！」

雪は白雪を引き抜き、空中で体勢を変えて凍り付けの萃香の脳天に踵落としをする。パリーンと綺麗な音を立てて萃香が消えた

「つと、2人か。まあこんなもんだろ。萃香を倒すことができたんならそれでいいや」  
雪は着地しながら真横に飛ぶ

「チツ！萃香の仇！」

「危ねえ」

先ほどまで雪のところに強烈な勇儀の拳で地面が割れる

「…………マジ？」

雪にもこれは笑えなかった。一撃一撃は避けることができるが続けられると白銀の世界を保ち続けることができなくなる

「クツツ、ほんとクソ。いつ大和撫子がくるか分かんねえってのに一気に不利になってきたじゃねえか」

「オラオラオラオラ！」

「ジョースター家か！」

勇儀の目にも止まらないラツシユを背後に飛んで回避する。それと同時に氷の槍を勇儀の周りに展開し、突き刺そうとするが、勇儀は目の前からくるものだけを破壊してまっすぐ雪に向かう

「はっ、数が足りないんじゃないか!? 一方向を破壊してそこに進めば回避できるぞ!」  
「ちくししょう! 正解だよ!」

雪と勇儀は妖怪の山を駆けながら攻防する

それを見ていた一人の男は呟いた

「良し。やるか」

「みんな揃ったわね!？」

スキマ内にて、本物の幻想郷の実力者達がそこにいつでも戦えるように闘志をみなぎらせている

「作戦は、雪って奴を下がらせてから私たちが一気に攻めて偽物達を倒して行く。妖怪の山の奴らはもう動いているみたい。紫は自分の偽物を真っ先に倒して。1番の移動手段を消して」

「いや、1番の移動手段は影だろ」

「……………ゴメン、間違えた」

「みんなは自分の偽物を集中的に攻撃して、偽物がいない人たちは近くににいる奴らを攻

撃。これでいい?」

「問題ないぜ!」

「それじゃあ行くわよ!」

スキマが開き、妖怪の山から少し離れた場所に出る

「なんで……」

スキマを開いた紫は確かに、妖怪の山の一部で起こっている先頭の中心に開いたはず……なのに、現実には少し離れた場所に開いた。その事に驚いていると、前の草むらがガサガサと動いた

「誰?!」

その音に全員が振り向くと、1人の人間が出てきた

白髪で整った中性的な顔。体格は細く、背もそこまで高くはない。白ワイシャツの上に紺のブレザーを着ており、黒の長ズボンを履いている。本を読んでいるインドアな姿が容易に想像できるが、それらをひっくり返すような機嫌の悪そうに細い目。そして、腰には一刀の刀が携えられている

「雪?」

紫がその人物の名前を口に出すと、その人物はぼりぼりと頭をかいて空を仰ぐ

「あー、もうめんどくせえな」

「雪?なんで……貴方は戦っているんじゃない?」

「アレが博咲 雪」

雪の事を噂でしか知らない人物は警戒心はそこそこに観察していると雪は機嫌の悪そうな目を紫達に向けると、手首を軽く回す

「なあ、お前らさ、さっさと帰ってくれないか?」

「何言ってるの?この先にドッペルゲンガーがいるんだよ」

「そうだな」

「そのドッペルゲンガーを貴方が戦っていたんじゃないの?」

「戦ってないな」

「貴方は戦う気はないの?」

「ないな」

「じゃあそこを通して。ドッペルゲンガーを倒せないから」

「いや、そんなこと言われてもなあ。俺はお前らと戦う理由があるんだよ」

「どういう……」

「離れて紫!」

紫が一步踏み出すと、霊夢が結界を張る。そこ瞬間に斬撃が結界に衝突し、相殺される

「そうだな。いきなりバトつてるとこに飛ばされたり、色々とめんどくさい事に巻き込ませたりした事とかか」

まあ、と雪は一言区切つてから言う

「俺が博咲 雪のドツペルゲンガーだから、とかはどうだ？この先にいる仲間の所に行かせないためとか1番理由として成り立つと思うぞ？」

ドツペルゲンガーは本物と同じ実力を有している者たちを1人で倒して行った人物が、本物と衝突すれば、力のバランスが変わる

今度は本物が狩られる番になった



## 第35話 vs 雪（ドツベルゲンガー）

幻想郷に存在する妖怪の山で2つの存在をかけた戦鬪が開かれていた

1つは3日前に幻想入りした外来人と、異変開始時点から外来人が来るまで小康状態のまま、外来人が来てからどんどん倒されていつて少なくなったドツベルゲンガーの戦力達との勝負

もう1つは3日前に幻想入りした外来人のおかげで、異変解決されるまで目前となつた本物の幻想郷の戦力達と、3日前に幻想入りした外来人のドツベルゲンガーとの勝負

「ドツベルゲンガー雪 vs 幻想郷の戦力達」

「紫・そっちに行った！」

「くっ」

「残像だ」

こちらの戦闘では、雪（ドッペルゲンガー）は地面を凍らさずに細かい氷の粒を辺りに飛ばしながら戦闘をしている。白雪の力を使用するが、刀としては使用せずに己の肉体のみで戦っている。これだけを聞けば、ドッペルゲンガーとはいえ人間である雪は、人外魔境に飛び込んでいるようなものだが、白雪が生成した氷に自分専用で使用できる瞬間移動を用いて人外魔境の中を神出鬼没に攻撃しており、脅威以外の何者でもない。一撃でも触れられれば即倒されるのがさらに脅威になる

雪は紫の背後に瞬間移動し、それを直感的に察した霊夢は紫に伝え、紫はスキマを後ろに展開する。雪はそれを見て今度は紫の目の前に瞬間移動する

「メイド秘技 殺人ドール！」

「火符 アグニシャイン！」

「禁弾 スターボウブレイク！」

「紅符 スカーレットシユート！」

紅魔組の全員がスペルカードを使用して弾幕で雪の攻撃を妨害するが、雪は氷の壁で弾幕を阻みながら少し遠くに瞬間移動する

「鬼火 超高密度燐禍術」

「光鬼 金剛螺旋！」

瞬間移動した先の近くにいた萃香と勇儀による高熱のスペカを、雪は上空に瞬間移動して回避する

「あー、クツソ……めんどくせえさつきと消すか」

雪は落下しながら足元に巨大な針を無数につけた分厚い板を思いつきり踏みつける結果、氷の針が全て落下する。そして、落下した針のところにまた新しい針が形成される

「エントレス・アイス・シンウオール絶え間無く落下する氷の針壁」

上空からあくびをしながら作業するかのような攻撃に幻想郷住民は難なく対処する

紫のスキマで氷の針を雪の頭上に飛ばしたりして少なくなつたところに、超火力を打ち込む

「恋符 マスタースパーク！」

「元祖 マスタースパーク！」

ルナティックレッドアイズ  
「幻朧 月睨！」

「蓬莱 凱風快晴 ——フジヤマヴォルケイノ——！」

妹紅はスペカで一気に氷の針を溶かしながら雪の目の前まで出る。その瞬間に妹紅の隣に、仇敵である輝夜が現れ、離れたところにいる永琳がスペカを発動する

「不死 火の鳥 — 鳳翼天翔—」

「新難題 エイジヤの赤石」

「天網蜘蛛捕蝶の法」

3人の蓬萊人によるスペカは、はたから見れば逃げ道がなく防御するすが無ければ即死するであろう攻撃が雪に向かって集中砲火する。雪はふう、と一度息を吐き、拳を構えて3つのスペカに叩きつける

それと同時に大爆発が起こり、辺り一帯に爆風が吹きすさぶ

「やったか!？」

「まだよ!!」

爆発してしばらくすると、爆発地点から衝撃波が氷になつたらこうなるんだろうな、と思うほどの大量の水が打ち出される

それを回避できなかった妹紅と輝夜は身体中に突き刺さり、全身が凍りつく

「逃げ場をなくしてから、高火力で一気に倒すつて寸法だったのか。まあ初見殺しには違いなんだろうが俺にはあまり関係ないな。輝夜を倒せたのはデカイな、これでかなり楽になつた」

爆発地点から疲労の気配を一切出していない人間の声が響く。この場の全員は今の完全に倒したのかと思つたが、本人は意にも介していないようだ

「次は私が前に出るからみんなは奴が私から離れたところを攻撃して」

「それは良いが、私ともやらせてくれよ？本物には適当なこと言われているからできないだろうし、チャンスだと思うからな。それにアイツ自身私から離れているみたいだし」

「私も雪とはやってみたいからね。できれば本物でも良いんだけど鬼と同じ理由で戦えないだろうしね」

「分かったわよ」

煙が晴れた瞬間に霊夢が一気に前に出て雪の目の前でスペカを発動する

「宝符 陰陽宝玉！」

「おっと危ない」

手の先に停滞するエネルギー弾を、雪は軽く触れて、エネルギー弾を凍らせた後に右脚で蹴り碎く。そして、そのままの勢いで左脚で攻撃する

「空中だつていうのに身軽ね！」

「そっくりそのまま返すよ」

霊夢は雪に触れられないように細心の注意をしながら接近戦をする。札を投げては人間離れた反射神経で触れられ、凍らされてしまう

「鬱陶しいー！」

「じゃあ離れろよ」

雪の言葉に従って一旦下がる霊夢。その瞬間に視界を埋め尽くすほどの弾幕が雪に襲いかかる

「んー、さつきから思うけどさ。数撃ちや当たる戦法でくると多いけど、そういうのあんまり意味ないんだよね」

雪は1番前に出てきた弾幕にデコピンするかのよう爪で軽く弾く。するとその弾幕が一瞬で凍りつき、前方に粉々に砕け飛ぶ

「白雪の沢山あるうちの真骨頂。連鎖」

白雪の力によって粉々に砕け飛んだモノは当然雪に襲いかかる弾幕に当たる。その瞬間に氷に触れた弾幕が凍りつき、砕ける。またその砕けた氷に弾幕が触れると凍りついて砕けるの繰り返し。これが白雪の数あるうちの真骨頂の連鎖

「そして、その氷はこっちの戦力になるわけだから……」

数秒と経たずに全ての弾幕が凍りついた光景に啞然としている幻想郷住民に氷の向きを変えて、躊躇なく放つ

「こうなるわけだ」

雪の戦力となった弾幕に、霊夢と紫たちが結界を張って、他はいつでも弾幕を吹き飛ばせるように準備をする

そしてついに結界が破壊される

「ま、こんなもんだろ。つまんな」

その言葉が聞こえたのは紫の背後だった

白雪の作り出した氷に自分専用の瞬間移動をしたのだ。先ほどの結界を張った後、氷は後方が高火力で消してくれると思っていたので、紫と霊夢の頭は真つ白になった。後方の高火力組は一瞬の出来事で方向を変えることもできずに氷に向かって弾幕を放っている

これも全て雪の掌の上だった

雪は白雪を取り出しており、すでに紫の服の一部を斬り裂いている。それがスローモーションのように見えている住民たちは気づいた

一本の細長い氷柱が白雪に向かっていていることに……

氷柱は白雪に衝突すると綺麗に碎ける

「うおっ、マジか。タイミングがよすぎるだろ。つーか狙ってやった可能性があるぞ」

白雪を弾かれた雪はバックステップですでに遠くに避難している

「まさか俺のドツペルゲンガーができるなんてな。予想はしていたがタイミングに悪意を感じざるを得ないな」

『しかし、やることに変わりはありません。ドツペルゲンガーを倒してしましましょう』

砕けた氷から1人の人間が出てくる。先ほど幻想郷の戦力と対等に渡り合っていた人物と同一の人物。違うことを上げれば目が真っ白で、どこからともなく年端もいかないう少女の声が響いていることくらいだろうか

「雪ー！」

その人物に紫は驚きの声を上げる

「ハイハイ、本物の博咲 雪の登場だよ」

その人間は幻想郷の住民たちに背を向けてひらひらと手を振りながら自分のドツペルゲンガーと向き合っている



## 第36話 本物と偽物

幻想郷の妖怪の山に同じ容姿の人物が向かい合つて居た

しばらく黙つて居た2人だが、片方が口を開く

「なー、お前のことなんて呼べばいい？」

「ん？あー、そうだな」

本物の雪がドツペルゲンガーの雪に呼び方を訊くと、ドツペルゲンガーの雪は考える。その間何もすることがない本物の雪も考える。しばらくすると同じタイミングで2人の雪が右手を顎に当てて、考えるそぶりをする

そして、

「ふむ。安直に”ドツペル”で良くないか？”そそぎ”つて読み方に、”偽”とか”裏”つて読み方に無理があるものがあるからな」

「まあだよな。裏についてはお前は俺の裏つてことじゃないだろ。偽の方が合ってる」  
「俺もそう思った」

ドツペルゲンガーの雪改め、ドツペルは適当な返事をする

その光景を見ていた幻想郷の戦力達は小声で話し合う

「なにあの緩い空間。さつきまでの緊張感が一気に抜けたわ」

「それよりも早くここを離れてドツペルゲンガーの方に行くわよ」

「分かったわ」

「こう言う時に幽々子がいてくれたらもつと楽になったんだけど……」

紫はそうぼやくとスキマで自分たちのドツペルゲンガー達がいるところに移動する

現時点で幽々子と妖夢、天子と衣玖が居ない。幽々子はドツペルゲンガーと同じ思考で、妖夢は幽々子に従っている。天子は自分のドツペルゲンガーが居ないなら後は勝手に解決してくれ、と紫に言って天界で昼寝中。衣玖は天界から異変の顛末を観ている

本物の紫達がスキマに入るところを見ていたドツペルは思い出したかのように雪に話しかける

「そういえばさつきの登場のタイミング謀っていただろ」

「ん、ああさつきのやつか。別に謀っていないけど……」

「テンプレみたいなタイミングで来て、疑われないほうがおかしいだろ」

「……………分からないことはない……………か……………?」

ドツペルが感じたことはオリジナルである雪と同じ感性である事を、雪は理解しているので曖昧な様子で答える

「にしてもなんかへんな感じがするな」

「同じような存在が目の前にいて話すことがか？」

「いや、自分の同じ存在が正しいな。同じような存在だとレミリアの時とかであったから違うな」

「あー、なるほど」

「結局お前と殺し合わないといけないのか？」

「そうだな。というか、俺たちドツペルゲンガー側からすれば本物は全員殺したいところだな」

「……なんでだ？お前たちドツペルゲンガーを作り出した奴が死んだら本物が死んでも消えるからか？」

「そうだ。スワンプマンみたいなものだと思えば分かりやすいだろ？」

「まあな。というかこういうのは大体犯人を倒せば消えるのは定番だからな」

「テンプレ……」

「はあ……」

2人が同時にため息をつく、同時に2人の中心で激突があった

誰……と言われても2人は答えることはできない。何故ならば2人が白雪で競り合っている

「とりあえずお前を（消せば・殺せば）俺は安全だつてことだ！だからテメエはここで死ね！」

ギリギリツと2人の雪が白雪で競り合っている。そこから雪とドツペルが同時に距離をとる。全く同じ距離で着地し、全く同じ動きで無数の氷柱を生成し、全く同じタイミングで射出する

「つたく、こうなるとめんどくせえな！」

同時に悪態を叫び、同時に駆け出す。2人の間の距離が1メートルを切った瞬間に刃物とはものが連続でぶつかり合う

「真楼の抜刀 豪！」

全力で真横に振り切ると衝撃波が発生し、地面を抉る

今の状況では、2人は全く同じ実力でなにをやっても平行線で決着はつかないだろう。だが、地面は違う。一見平地だが、僅かな凹凸がある。その僅かな凹凸が形成を変え

「オラっ」

「甘えよ！」

少しだけ上にいるドツペルが力強く白雪を振り下ろすが、雪は受け流しながら体勢を横にし、ドツペルの白雪を思いつき蹴り上げる

それを予測していたが反応できなかったドツペルはお返しと言わんばかりに雪の白雪を蹴り飛ばす

2人の白雪はほとんど同じ距離で地面に突き刺さる

「っ！」

2人同時に息を呑み、白雪を取りに行こうとするが、それよりも目の前の自分と同じ姿をした奴を倒す事を優先した

「つかお前さつき俺からできたんだからそこまで実力の差はねえよな！」

「そうだよ。だから自分との勝負っていうテンプレ展開が起きてんだろうが！」

無手の状態で相手の攻撃を受け流しながら隙をつこうとしているが、同じ実力で思考も同じな2人は無手の攻防を断念して白雪を取りに行く

「真楼の居合 散」

同時に対象の目の前で爆発して斬撃を繰り出す技を使用する

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

2人が叫びながら自分の繰り出せる技を片っ端から使用する

！！！！

結果

妖怪の山の一部分が無数の斬撃痕を残すことになった

2人の戦闘の余波は遠く離れて戦っていた幻想郷組の方にも届いた

地面を抉るようにしてドツペルゲンガーと本物を分けるように地面が割れた

「一体何が……」

「横！」

叫ぶよりも早くすでに2人が両戦力の間にも2人が移動していた。白雪の瞬間移動を使用したのだらう

「良い加減くたばれ！」

同時に叫ぶと、白雪を体の中に入れて割れた地面の上を飛ぶ。そして同時に右足どう

しで蹴る。このまま空中で戦闘しても良いが、それだと割れた地面に落ちてしまう。ドラゴンボールみたくならないのを2人は分かっている、また瞬間移動をして別の場所で一撃、また移動して一撃、これを繰り返していく

「おおおお!!!」

2人が同時に拳で目の前の自分と同じ姿をした者を殴ると背後に吹き飛ぶ。木にぶつかった瞬間にまっすぐ進み、白雪を取り出して周りの木を全て切る

「吹き飛べエエエエエエエエ!!!」

白雪を逆手に持ち、刀身に氷を纏わせ、長さが50m程伸ばす

「真楼の抜刀 絶!」

巨大な物体同時が勢いよくぶつかり、ギチギチギチギチツ!!!と、大音量が鳴り響いた。そして二刀の刀の氷がお互いに碎け散り、静寂が訪れる

2人の立つ場所から半径1キロメートルほど木が全て倒れており、範囲内全てが凍っ

た

「まだ終わってねえぞ！」

そしてそんな中で2人がまた激突する



## 第37話 本物と偽物の決着

雪とドツベルの戦闘により、妖怪の山の一部が木が倒され、無数の斬撃痕ができ、その上に分厚い氷が覆っている

そして、その2人は今も息を切らさずに攻防を繰り返している

それをかなり離れた山の上で見ている幻想郷の戦力達。2人の《真樓の抜刀 絶》を放った瞬間にお互い、紫のスキマで退避していた

「どうなっているのよ。元から霊力が少ないはずなのに、あれだけ長時間戦闘をして残っているわけないわ」

本物の霊夢が呻くようにいうと、その隣で戦闘を見ている紫が説明する

「元から博咲家の人間の霊力は少ないわ。でも、白雪がそれを同じくらいの質の霊力でカバーしているの。そうすれば多少無茶苦茶な使い方をしても早々霊力が底を尽きることはないわ」

「それだけじゃないように思えるけど?」

「博麗の巫女である霊夢には気づくのね。博咲家の剣術は『より少なく、より強い攻撃を放つ』を目指しているの。それは代を重ねるごとにできてきたわ。でも、100パーセ

ントそれを体现することはできないわ。皮肉なのかそれを一番体现できていたのが、私が見てきた中で始祖の雪（せつ）よ。でも雪は同等以上に体现しているわ」

「つまりバケモノってこと？」

「さあね」

紫が博咲家のことを語っている間にも2人の攻防は激化していき、一部の地面がパツクリ割れてしまつて修復が難しくなつた

2人の戦闘が変化していく中でも、幻想郷側の方も変化する

「紫、ドツペルゲンガー達がきたわよ」

「みたいね。みんな！今日で異変を終わらせるわよ！」

「おおおおお!!」

雪とドツペルの拳がお互いの頬にめり込む

お互い吹き飛び木を折りながら転がる

「はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ、はあ」

2人が肩で息をしながら前方の自分と同じ姿したものを睨むと白雪の力で、お互いを攻撃しようとする雪とドツペルの間に巨大な氷の壁が作り出される

「お前つてさ、もしかして他の奴とテレパシーみたいなことできるのか？」

「テレパシー？ああ、出来るぞ。俺はお前の記憶+他のドツペルゲンガーの情報がある」

「ふ、ははは、偽物は本物には勝てない、つてよくテンプレセリフなんだけど、俺は違うと思うんだよな」

「まあ超電磁砲のシスターズはオリジナルには勝てなかったがな」

「……………第2位も同じようなこと言ってたな」

「だな。それで？なんでそう思うんだ？」

「……………お前ならわかってるだろ」

「まあ分かるが……………言ってみろよ」

「こういう、別の世界みたいなどに急に転移した奴の偽物は大体情報とか、本物になるものを得た状態で誕生することがあるからな。だから俺は本物よりも偽物の方が強いと思う」

「まあその偽物が本物と同スペックであることが前提だけだな」

出来上がった氷の壁の上で語り合う2人

しばらくすると別のところで消えていく気配があることに気づく2人。その瞬間にまた激突する

ここで、2人の勝負は決まった。2人は同じ思考をしている。つまり、いつもは敵にはわからない策を実行していたとしても気付かれているし、やっている。ここまでは同条件だ

ならば、このいつまで経っても終わらないような戦闘に終わりを告げる方法はあるだろうか

答えはある

が、これは賭け。2人の幸運は同じだ。だが、2人の違いは、”自分が本物か偽物かの違いによって決まった”

ドツペルが雪に優っていることは情報量。ドツペルが誕生するまでに培われた雪の体験、記憶などドツペルゲンガー特有のテレパシー

では、雪が優っているものはなんだろう？2人の戦闘においては技術面に関しては同格だが、情報量で負けている。（その情報が役に立つかどうかは別の話）ならば、全体に目を移すとどうだろうか。”圧倒的に本物の方が、ドツペルゲンガーよりも多い”。こ

れが雪の大きなアドバンテージ。先程ドツペルが本物の幻想郷の戦力達と戦闘した時にもっと数を減らしていれば、結末が違ったかもしれない。しかし、ドツペルがどれだけ足掻こうが、情報以外で同格のスペックを有する本物が目の前にいる限り、幻想郷の戦力の本物を倒すことができない

では、この戦闘に終止符を打つのに必要なのは幻想郷側の方で誰だろうか

それは幸運を（人間限定で）運ぶことのできる『因幡 てゐ』。本物は隠れながら周りを見回していたことで2人のメッセージに気づいた。偽物はこの日の最初、雪に戦闘をしかけた時に妖怪の一部が一瞬で凍りついた時に避けることができず今は凍りついている

これを踏まえた結果は

「うさ、誰か！手の空いているなら2人の方に弾幕を放つうさー！」

てゐの指示に反応したのは最も近くにいた博麗 霊夢だった。すぐに2人の方をみると、氷の壁のところを”弾幕をこっちに撃て”と浮かび上がっていた

「霊符 夢想封印！」

霊夢のスペカが2人の戦闘に乱入する。霊夢の勘がドツペルを的確に見抜き、弾幕はドツペルを狙う



いんだよ。早く消えろ」

「は、ははは、白雪の力使っているっていえばわかるよな?」

「あー、傷口を氷で塞いで延命してるってどこか」

「そういう事」

ドツペルはゆつくりとヘタリ込む。もう戦闘続行する気は無いようだ

ゆつくりと息を吐き出すドツペルは一瞬だけ何かを考えるようにすると氷の地面を軽く叩く

「この異変を解決したいか?」

「どうでもいい」

「でも、今やっておかないとまた戦うことになるけど?」

「……………」

「考えたってことは、結局行くパターンだ。お前はそういうやつだ。後に起こることの元凶を殺れる時に殺る。夏休みの宿題を早くやり終わるのと同じようなものだ」

「はあ、そうだな。今やっておいた方がいいことには変わりない」

ドツペルは自嘲すると空を仰いで言う

「なあ、本物。分かり切ってることだが、もしかしたら短時間の間に考え方が変わっているかもしれないから一応聞いておくけどさ」

「なんだよ」

「目の前で自分と全く同じ見た目のやつが血まみれの姿でどう思う？」

「……………そうだな。自分がこうならなくてよかった。くらいか」

「全く変わらないな。でも、聞いておいてよかったよ」

「……………同じ姿をしていたとしても、考え方が同じでも状況によって感じ方が違うってことか？」

「そう。俺とお前で殺しあつて、俺は負けた。心臓を一刺しだ。だから」今の状態の俺  
”と、”無事な俺”の考え方は違うからな。だから参考程度には聞いておいたが、見事  
なまでに参考にならない」

「悪かったな」

ふ、はははははは！と2人が同時に笑い出す。こうして笑うことができるのは自分の  
ことをよく知っているからできるものなのだろう

「さて、本題だ。俺たちドツペルゲンガーは自分の影に入ること、もう1つの……………まあ  
ドツペルゲンガーとその創造主だけが行ける幻想郷に行ける。俺はそこにつなげるか  
らお前が行つてこの異変を終わらせる」

「元凶がそこにいる可能性は？」

「ほぼ100%。どうやらさつき俺を作る時に思っていた以上に魔力を奪われたらし



い」

「魔力……ねえ」

「まあMPみたいなもんだ。この異変を始めた時に幻想郷の住民のドツペルゲンガーを作り出す時は魔力を集めるのに時間をかけたらしいから。1人作るのはかなり疲れるらしい。しかも強ければ強いほど魔力を使う」

「なんで知ってるんだよ」

「愚痴られたから」

「マジか」

ドツペルは自分の影を三回軽く叩くと雪が影に近寄る

「んじやまあ行ってら」

「おう。行ってきます」

そしてなんの躊躇もなく雪は影に入ってしまった

「はあ、いつでも攻撃できたんだけどな」

1人仰向けになって空を見上げているドツペルは愚痴をこぼす。雪ならばここで不意打ちでもしていた。だが、ドツペルはそれをしなかった。何故なら

「父さんはこんな気持ちだったのか……？目の前にいる頼れるやつに今起こっている事

件の解決を託すつてものは」

先程一瞬考えたのはこれだった。本当ならば攻撃していたが、幻想郷に来る前の雲の行動が頭によぎり、雲がやったようなことをやった

「あの時燈も言つてたが凄えな、父さんは」

目を閉じて幻想郷住民達の攻防の音を聞きながら鼻歌を歌うように軽く言う

「この状況だからできた行動ができた。勝者<sup>勝</sup>はできるかどうかは知らないが、これはこんな風になった敗者<sup>敗</sup>の特権だな」

## 第38話 影の世界の戦闘①

Side 雪

「あ、ヤベエ、最近忙しすぎて忘れていたけどアプリのログインが出来ない。どうしよう」

（諦めた方が良いのでは？そもそも電波が届いているのかわかりませんし）

「だよな。にしても長いな」

先程ドツペルと戦闘を終え、元凶（幻想郷風というなら黒幕かな）のいる所へ行くための真つ黒な道を落下している。道って落下するものだったかな？

「お、終着するみたいだ。行けるか？白雪」

（問題ありません）

黒い道の中に少しだけ光が見えた。多分終着点なんだろう

光がどんどん大きくなっていく

光を抜けると見たことのある風景が視界に広がる。多分人里の上空……かな

「やつほー☆昨日ぶりかしらね？」

………人里に着地したのはいいが、まさか幽々子が居るとは……最悪すぎる

「さて、捜すか。特徴とか訊いておくの忘れていたな。手当たり次第探すか。……つと」  
ドツペルに訊くのを忘れていたが……さて、どう探すか。目の前にいる幽々子？ヤ  
ベー奴に関わりたくないから視界に入れないようにしてますが何か？

あたりを見ていると何処からか石が投げられた。そちらを見ると子供が家の影から  
こちらを覗きながら伺っていた

「ふうむ。さてさて、どうしたものかな。子供を攻撃するのは気がひけるんだけどドツ  
ペルゲンガーなんだよな」

はあ、とため息をついた時に、全方向から大量の小さな物体が襲いかかってくる  
石かな？と見ると大量の弾幕だった

「マジ？！」

こんなことができるのは幽々子が妖夢くらいだろうな。でも妖夢はやらないだろう  
な。根拠は昨日の戦闘でわかっている。アイツは正面から勝負を挑む武士道精神旺盛  
の剣士だからな

となると誰だ？幽々子か？

「君たちは少し下がっていてくれ。ここは私がやる」

「えーと、誰だ？」

水色の髪で長髪の女性が現れた。服装がなんていえば分かるかわからないけどワン

ピースかな？

「君が博暎 雪だな？」

「そうですねー？」

「私は上白沢 慧音だ。寺子屋の教鞭をとらせてもらっているものだ」

「自己紹介どうも。それで？何しにきたんだ？」

「この人……いや、何かのハーフか？詳しくはわからないが人間と他の種族の気配を感じる

第一人称としては律儀な人だな……くらい

「一昨日くらいに親友の妹紅がお前と戦闘したみたいだな？」

「妹紅？ああ、竹で串刺しにした奴か。アイツはどうしたんだ？最後に見たときは見るも無惨な風貌で目が死んでいたが」

「そこまで言うとは慧音から膨大な量の霊力が出て来る。もしかして逆鱗に触れたのか？」

「お前は人をなんだと思ってるんだ!？」

逆鱗に触れたみたいだ……

「あのさ、妹紅を傷つけられて憤りを感じるのはいけど、それは流石に理不尽じゃないか？妹紅は少なくとも俺を殺そうとしていた。そして、俺は迎撃した」

「それは分かっている！ならば何故あそこまでしたのだ!？」

「念入りにやっておかないといけないから。心を折るくらいはやっておかないと後々不死者が殺しにくると思うと怖くてな」

「妹紅は人間だ!」

「……………そうなのか？ 出会って早々喧嘩売ってくる奴なのにか……………いや、関係なかったな。へー妹紅って人間なのか。不死者になると人が使えるのか」

「いや、妖怪を退治していくうちに妖術を使えるようになって行つたんだ」

「……………藤原ってことは1000年くらい生きているってことになるな」

不死者と人間の違いに関しては、死ぬか死なないか。人間から不死者になると知り合いが死んでいく辛さを感じるんだろう。俺は知らないが。それと同時に理解者も減っていくんだろう。俺は経験したことないが。というかどっかで見たことあるけど、不死者は肉体は衰えないけど精神は衰えるって記事を見た記憶があるんだが……………いや、燈が教えてくれたんだ。そもそも不老不死の薬で不死者になったんだっけ？ 不老不死の薬は精神も含めてそのままに留めておくことが出来るのか？

「まあ話が逸れたが、慧音は心がポツキリ折れた妹紅の仇を討つために俺と戦うんだよな?」

慧音はコクリと縦に首を振る

「じゃあさっさと始めよう。逃げられると面倒臭いからな」

「私は逃げも隠れもしないぞ」

「……………ゴメン。この異変の元凶ってつけるの忘れていた」

雪は乱雑に頭を搔くと適当に白雪を横に振るう

「ふんっ！そんなものいくらでも見たわ！」

「へえ」

白雪の斬撃を、姿勢を低くして回避しながら人差し指と中指に挟んでいるスペルカー

ドを使用する

「国符 三種の神器 剣」

慧音のスペカが一振りの刀に変わる

「！」

慧音の持つ刀を見た瞬間に雪の背中に悪寒が走り、全力で背後に跳ぶ

それと同時に慧音の刀が雪の髪を擦りながら斬撃が空気を裂く

「チツ」

「三種の神器の剣って草薙剣か？素戔嗚尊が八岐大蛇を倒した時に尻尾から取った霊剣

か？」

「詳しいな」

「まさか他の三種の神器を持っているなんて言うなよ？」

「……」

「否定しないのかよ」

慧音が一気に距離を詰めてくる

「こつち来んな。《真楼の居合 瞬》」

雪は草薙剣を警戒して距離を近づかせないように遠距離から、手首の返しを利用した瞬速の斬撃を繰り出すが、慧音は避ける

「やれー慧音先生やっちゃえー！」

「草刈り鎌でやっちゃえー！」

(……………ん？は？今遠くにいる子供はなんて言った？草刈り鎌？草薙剣を？……三種の神器もこんな使い方があったんだな。そういえば白雪も草刈り鎌みたく使われたとかブックサ言っていたような)

遠くの家の影から慧音を応援する子供の声に雪は絶句する

「固まっているとは余裕だな！」

「うおっ」

慧音が雪に接近して横に振るう。それを雪は白雪で受け止めてから、草薙剣を持っている手を蹴り上げる。草薙剣は上空に飛んで行った



「なっ」

「アンタはめんどくさいからさっさと消えろ！」

雪の靴の底から先端の尖った氷が突き出る。慧音との距離は約50センチ。それを防ぐことはもちろん、避けることも厳しいだろう

だが、慧音はまだ能力を使用していない。その事にまだ雪は気付いていない（草薙剣を使用したことから考えられることは、神器を扱う能力とかなる。この距離なら防がれることはない……よな）

雪は既に慧音は能力を使用しているものだと思っていたのだ。それゆえに勝利を確信した。雪らしくもない慢心。慧音は普段他人と触れ合うことから、人の心情を察することがある程度できる。目の前に迫る尖った氷がひどくゆっくりに見えた。その視界の隅には雪の顔があり、雪の心情を瞬時に察した慧音は自身の能力を使用する

「勝利が確定するまでは油断するな！」

「は……！」

雪が驚嘆の声をあげた。その理由は、慧音の手に、『先程雪が蹴り上げたはずの草薙剣を持っている』からだ

慧音の能力は歴史を食べる（隠す）程度の能力と、歴史を創る程度の能力。前者は人間時で、後者はハクタク時。今は人間時なので前者の能力を使用できる

慧音は、『雪に草薙剣を持つている手を蹴り上げられた』という歴史を食べ（隠し）た事によって、その事実が『無かったこと』になり、慧音の手に草薙剣が存在したのだ

その事を知らない雪はその現象のことを一瞬で考察する

（なんだ今のは！スペカを使用したわけではない……はず。コイツの手元はちゃんと見ていた……なら今のはなんだ？能力がそもそも考えていたのとは違ったのか？そうなるもどんな能力なんだ……現象を巻き戻す能力……いや、巻き戻すなら俺の体制がさっきのままになるはず。なら、離れたものを操る能力か？でも俺の視界にはそんなことは起きてなかった……どっかの大和撫子みたいな高速移動の能力……いや、座標移動みたいな点と点の移動か？それなら現象の説明はできる）

そこまで考えて、いや、考えている事に集中しすぎた事により判断が遅れた

「痛っ！」

雪の脚に鋭い痛みが走る。それでようやく、目の前で慧音が草薙剣で自分の脚が斬られていることに気づいた。草薙剣は丁度雪の脚の筋肉を斬る位置に戻ったようだ。刃は雪の脚の肉を斬って行き、骨にも達しそうだ

剣士にとって、片足を失うことは腕の次に、起こしてはいけないことだ。さらに、【真楼の型】は踏み込みを重視しているために現状は一大事なのだ

（雪！）

内側から白雪の声を聞いた瞬間に雪の目が真つ赤になる

第三者から見たら、瞬きをするよりも早い、まさに刹那、瞬間といった言葉が使われるほどの一瞬で、

慧音の両腕、両脚、胴、首が斬られていた

S i d e 慧音

「な……………ん——」

私は何をされた？

私は確か、能力を最大限に発揮して奴の脚を斬っていたはずだ……………なのに、今は首から下の感覚が全て無くなってしまっている

「なに……………を」

「は……………はあ、痛……………後ちよつとで骨まで行ってるな……………これは戦えるか……………？」

今の状況が飲み込めないが、奴はうづくまって私に斬られた傷の深さを見ているようだ。そして、視界が横転する。そしてコロコロと地面、家、空、家、地面が繰り返し返して視界に映る

どうやら私は首を斬られたらしい

ドツベルゲンガーが消えるときは細かい粒子のようになり、一瞬で消えるらしい。だが、私はまだ消えていない。首を斬られたからといって、すぐに思考が停止するわけではなく、しばらくは脳が働くと聞くが、それが起こって私が消えていないのだろうか

だからと言って私が消える事には変わらない

ならば、最期に行っておかなくてはならないことがある

「すまない……妹紅」  
仇を討つと決心した理由となった親友に向けて消え入りそうな声で謝罪すると同時に視界が真っ暗になる

S i d e  
雪

（雪、脚は大丈夫ですか？）

「……………今すぐに手当てをしたいが……………包帯もないし、氷で箇所を冷やしておく

らしいかできないな」

先ほど草薙剣に斬られた箇所を氷で凍らせて流血を防ぐ。白雪の氷は冷たさがある程度まで操ることができると、白雪と一緒にいるからか寒さには強い血統の博咲家なので凍傷になることはないのと神経を麻痺させておく為。これなら真楼の型を使うときに支障は出るが、戦えないということは無くなる

傷口を氷で覆うと同時にザツと目の前で歩みを止めた音がする

まあ、堂々と戦おうとするのはあの庭師くらいか

「その脚で戦うことはできませんか？」

「んー、まあ問題ないな」

問題あるが、妖夢の前で弱音を吐くつもりはない。コイツとはちゃんと戦って勝たないといけない。何故かそんな使命感みたいなものが心の中で燦る

「そうですか」

ホツと安堵の息を漏らして剣を抜く妖夢を見て俺も白雪を構える。これは真楼の型を使わないと勝てないな。そう思うほどに妖夢のプレッシャーが伝わってくる

俺はふう、と息を吐き出すと、目を閉じる

風と人里から遠ざかっていく人の気配。俺と妖夢の近くで一人だけ座っているのも気がつく。幽々子だろう

幽々子は手に持っている扇子を閉じる

パチン。というわざと鳴らしたであろう音がその場に響くと同時に2人の白髪  
の剣士が同時に動く

## 第39話 影の世界の戦闘②

人里の道で、雪と妖夢が同時に地を蹴り、肉薄する。白雪と楼観剣がぶつかり合う  
「くっ………！」

「ふっ！」

白雪と楼観剣が競り合い、ギリギリと音が鳴る。妖夢が素早く白楼剣を抜き、横振りに攻撃する。それを雪は体勢を低くし、足払いをする

「下！」

妖夢は素早く後方に飛び、足払いを回避する  
が、

「空中に飛んじやあただの的だぞ」

雪は踏み込みのしにくい空中にいる状態を逃さず、白雪を鞘に収め、肉薄する

「真楼の居合 豪！」

雪の腕を靈力で強化し、力任せに下から上へ、妖夢を斬りあげる

「う………がっ………」

妖夢は楼観剣でギリギリ受け止めたが、あまりの強さに軽い身体は吹き飛ばされる



妖夢は近くの木造の家に着地し、油断なく雪を睨め付ける

「チツ」

(雪。屋根の上まで跳べますか?)

「出来ない事はないが……別に跳んで相手のところまで行く必要はないな」

雪は白雪を地面に刺す。その瞬間に妖夢が立っている木造の家が一瞬で凍りつく

「な……」

妖夢は白雪が地面に刺さった瞬間に後方の家に跳ぶ

「危ないところでした……」

妖夢が一息つくと、先ほどまでいた場所から人の気配が動かない

「なぜ動かないのでしょうか……」

少し思案しているとパキパキと周りの建物がゆっくりと下から凍っていく。しかし、この建物だけは目の前の一部だけ凍っており、それ以外は氷は見えない。一部の氷から雪が現れ、抜刀したまま一步踏み出す。雪が現れた氷は消えていた

「さあ、ここなら一対一にできるな」

「……周りの建物を凍らせたのは一対一で戦う為ですか。これなら邪魔される事はないですが、貴方が別の建物に逃げる可能性がありますか?」

「そこは俺を信じてくれとしか言えないな」

雪はため息をついて周りを見る。雪の視界に空中で止まっている幽々子の姿が映る。雪の視線に気付いたのか、ひらひらと手を振ってくる

それから雪は視線を妖夢に戻し、手首を回す

「そろそろ終わりにしようか」

「そうですね」

2人が剣を構え終わると、先に妖夢が動いた。楼観剣を下段に構えて斬りあげる。雪はそこから一歩も動かずに上段から白雪を振り下ろす

キンツと金属同士がぶつかり合う音が鳴る

「おおおおおー！」

「はああああー！」

競り合う事なく、一旦妖夢が距離を置いてから、すぐに距離を詰め、近距離で両者が両手に持つ剣を振る

キンキンキキキン！と何度も音が鳴る。瞬きも許さないほどの攻防に妖夢は少しづつ息が上がっていく。それに対し、雪は無表情で妖夢の剣を受け流していく

そこに雪は少し強めに白雪を振り抜く。妖夢は楼観剣で受け流そうとしたが、あまりの強さに手から剣が飛んでしまった

「しまっ……」

「詰み……じゃないな」

楼観剣を拾おうとしたが、それを雪が許すはずがないと妖夢は白楼剣を引き抜き、低い姿勢のまま斬りあげる

「よっと」

「なっ」

一歩引き、白楼剣を回避する。そして白雪の柄で妖夢の手を叩き、白楼剣を飛ばす。白雪を家の屋根に突き立て、妖夢を力任せに引き寄せ、そのまま背負い投げの要領で妖夢を持ち上げ、自分も跳び、全体重をかけて、妖夢を屋根に叩きつける。部屋にヒビが入る

「かはっ」

「これで詰み……チェックメイトだな」

「……お、同じ意味なのは……」

「言ってみただけだ」

「そうですか」

意識が飛びそうなほどの衝撃を食らっても、妖夢は踏ん張って意識をつなぎとめる  
雪は手を離し、一歩分の距離を取る

「で、俺はもう行くけど何かある？」

「なぜ私を倒さないのですか？」

「時間短縮」

それだけ言うと雪は人里の端のところに瞬間移動する

「妖夢、負けてしまったわね」

「幽々子様。申し訳ありません、負けてしまいました」

「良いのよ。戦うつもりもない私が貴女に非難の言葉なんて言えるわけないじゃない」

妖夢の側にふよふよと飛んでいだ幽々子が静かに降り立つ

「陰極様は大丈夫でしょうか」

「どうかしらね。雪は今日でたくさん戦っているからそれなりに疲れているでしょう

し、分からないわ」

妖夢は呟くように言うと幽々子は平然と答える

「ここで決着がついてしまったら私たちは消えるのですよね？」

「そうねえ」

妖夢の寂しそうな言葉に幽々子は明るく答える。自分が消えても特に気にしていな

いと言った風に

「偽物は消えてしまう定めなのでしょうか」

「んー少なくとも彼が来るまではそんな事はなかったのでしょうか。何の偶然か知らな

いけれど、彼が来てしまった。それも偽物とは言え、剣で人を斬っても何も思わない状態で、ね」

「そうですか」

妖夢は幽々子の言いたいことを察したようにして、立ち上がる

「もし、できることならば、私は生きたまま彼と剣で競い合いたかったです」

「そうですね。私もそう思うわよ。でも、死ぬまでは話す事はできるんじゃないかしら」

何故、と妖夢が聞き返す前に、静かに何者かが妖夢の側に降り立つ

妖夢がそちらに目を向けると先ほどまで戦っていた人物と同じ容姿をしていた。違うところを言えば、心臓部が真っ赤に染まっていることだけ

「博咲 雪のドツペルゲンガーです初めまして」

「……………なるほど、これならしばらくは競え合えますね」

「嫌だよ。心臓刺されたんだから戦いたいと思わないよ」

「いいじゃない。しばらくは貴方消えないんだから」

「やだよ」

雪のドツペルゲンガーは妖夢から少し距離を取ると、その場に座る

「貴方はどちらが勝つと思いますか？」

「どうでも良い。って言いたいけど本物が勝つんじゃないか？根拠は俺の知っているマ

スターの情報と自分自身の情報からすれば本物が勝つだろ」

「冷静ねー」

「当たり前だろ」

「にしても少し寒くはないか？」

「貴方の本物がやったことなのですか？」

「知らんな」

## S i d e 雪

「クツソ……どこだ？ 幻想郷の地理に明るくないやつにこれはキツイぞ」

（一応幻想郷全域に薄く氷を張って探してはいませんが見つかりません。建物の中に隠れている可能性があるか、表の方に出たのかも知れませんが）

「後者じゃないことを願ってるよ」

人里から離れてから一番高いと思われるところに立って幻想郷全域を見渡せるようなところで、目を凝らしながら探している。とはいえ、俺の両目の視力は1・5以上なので、どれだけ目を凝らしても見える範囲に限りがある

さつき白雪が氷を張っているって言ったが、具体的には冷気を漂わせるが正しい（あの………：そういえば黒幕にあたる人物はどのような容姿をしているのでしょうか？）

「……………：そういえば知らねー」

（本物の幻想郷住人の皆さんも姿を見たことがないと言っておりますし）

「これもしかして詰んだ？」

（いえ、まだ不審な動きをしている人物を手当たり次第に当たればいいと思いますが）

「時間制限ないのが助かるなあ」

白雪と話している間にも冷気は幻想郷のすみずみまで浸透していく。それでもまだ見つからない

「幽々子達から容姿だけでも聞いてきた方がいいか？」

（それが一番妥当ですね）

「さて……………」

雪が人里の中にある氷に瞬間移動しようとした瞬間に足首を掴まれる

「なっ……」

そのまま地面に叩きつけるように重心が後ろに傾き、地面に背中から倒れこむ。と、思ったがなぜかその衝撃がこない。代わりに妙な浮遊感と、視界が見たことのある、悪趣味極まった目の空間に区切られた空が小さくなっていくのが分かる

「ヤバっ」

どうにか空中で反転して地面に着地する。地面といっても360度目だけがあるだけはどうなってるのかは知らないが

「お待ちしております、博咲 雪」

「お待ちしてなくてよかったです、名も知らぬ女性」

その空間で待ち構えていたように立っている狐みみたいな女性が話しかけてくる

「私は八雲 藍。紫様の式神です」

「式神？マジか初めて見た」

式神と聞くと色々であるが、魔法陣から飛び出たり……あれ？アレって魔物とか召喚するから式神じゃないよな？妖怪とかが契約したら式神になるんだっか……ふうむ、分からん

「紫様から貴方を足止めするように言われているのでここで私と戦ってもらいます」

「なんか最終決戦前の前座みたいな事になってきたな」



早々に決着を付けるために、白雪を居合の構えをとったまま、藍と肉薄する

「早いです……が！」

「うおっ！」

雪が藍に一瞬で肉薄すると同時にあらかじめ発動していたのか、藍が雪から逃げるように真横に跳躍すると、雪の視界が色とりどりの弾幕で埋め尽くされた

雪は体勢を低くして白雪を振り上げた。白雪の刀身に当たった弾幕が一瞬で凍りつき、氷が砕ける音とともに綺麗に散る。綺麗に散った小さな弾幕を覆う氷に、後方から追撃してくるように迫る弾幕が当たった瞬間に弾幕が一瞬で凍りつき、氷が砕ける音とともに散る。これが続き、藍の弾幕が全て散った

「まだですよ」

「させるかよー！」

藍が構えたと同時に、白雪を納刀し、居合の構えを取る

（真樓の居合 瞬！）

白雪の刀身全体に薄く、靈力を纏わせ、抜刀すると同時に靈力を針のように小さく細くし、相手に気づかれずに攻撃する。本来は相手の喉元を狙い、一瞬で勝負を終わらせる技だが、雪は藍の指に挟まれているスベカを狙う

「しまったー！」

「そこだ！」

藍のスペカが破壊されると同時に雪は凍らせ、瞬間移動し、目を見開いている藍の胴体を斬るように腕を動かす瞬間に、背後から迫る何かからの直線上から外れるように真横に跳び、距離を取る

先ほどまで雪のいたところに何かが通過したと同時に雪の足元にスキマが開き、雪は手を伸ばしてスキマからの脱出を試みるが、虚しく空をきり、落下していく

「は!? ちょっと待て! これ何回目だ!」

雪が叫ぶと同時に、どこからか男の声が聞こえる

『時間だ。お前はここから出ることとはできない』

端的にそれだけを言って男の声は聞こえなくなる。雪はそのまま落下していき、スキマの目が見えなくなると真つ暗な暗闇の中を漂う感覚に襲われた

## 第40話 黒幕

「上手くいったか？」

1人の男が、先ほどまで雪が影の幻想郷の山にいたところに静かに立っていた

男——陰極は目を閉じて3ヶ月までに能力で作り出した影の幻想郷が崩壊していくのを自覚する。しかし、陰極が呟いた言葉には別の意味が込められていた

「全く。片方の陣営に1人追加されるされるだけでこうも簡単に覆されるとはな。だが、ソイツは今影の幻想郷とともに消えていつている」

陰極は下で美しく飛んでいる弾幕を観ながらため息をつく。側に誰かがいたら落胆している、と思うだろう

「そろそろか」

陰極が呟くと、後方にスキマが開き、紫、藍、橙が現れる

「こちらは指示通り終わりましたわ」

「思っていたよりもすんなりいききましたねー」

「橙。相手を倒すのではなく、足止めをする目的でなら私たちの方が利はあるのだよ」

「そうか……終わったのか」

紫たちの報告を聞きながら、微かにため息をこぼす。目下では少しづつ弾幕の数が減っていくのを観ながら陰極は能力で、陰に入って移動する

「さて、どうするか」

弾幕が行き交う空間を安全に観れる特等席に移動した陰極は考えるようにして空を仰ぐ

「……………なあ白雪」

「何でしょうか」

「俺、幻想郷に来る前に人殺してるじゃん？元の世界に戻ったらどうなるの？」

「恐らく面倒なことになるでしょう。雪ですし」

「ヒゲエ」

「外の世界には雲と暦を殺害した組織が有りますし、もういつも通りの平和な日常に戻ることは厳しいでしょう」

「何かしら事件や面倒ごとに巻き込まれる平和な日常に対して大いに異議を唱えたいがそれは、まあ良い」

「そうですね。先のことよりも今を見ましょう」

「どうなってるんだよこれ！」

雪が大きな声で絶叫する

現在2人がいるところは雪の魂に白雪が常に人型で現れる空間。白雪が望むものは何でも出てくる。また、広さは所有者の器量によって変わる。広さは果てしなく、迷ったら戻ってくるのに時間がかかるくらいある

今、雪と白雪は隣り合って杖の上に置かれているテレビを観ている。そのテレビは雪の体の周りを映す物で白雪が背後にある物などに気づくことができるのもこれのおかげだ

その中は真つ暗。電源をつけていないと思うほどの暗さ。しかし、この空間には光があり、テレビをの電源をつけていないなら当然反射される。が、それが無い。つまり——

「今の俺の体はこんな真つ暗な空間にあるのかよ。しかもこれ落ちているのか漂っているのかわからないぞ」

雪が頭を抱えながら呻く。そう、スキマから落ちた先は真つ暗な何もない空間だつ

た。そこはどのような空間なのかは見当はついている

「恐らく影の幻想郷なのでしょう。藍という方は崩壊までの時間稼ぎをしていた、ということ……嵌められましたね」

「さっさと倒しておけばよかった……」

そう言つて雪は立ち上がる

「さっさとここから出るぞ。ここでも『外』にある氷にはつながっているんだよな？」

「ええ、影の幻想郷は結界を含めて完全に崩壊しています。なので問題ないですよ」

「さっさと戻つてこの異変を終わらせてやるよ」

それだけ言つて雪はその空間から姿が消える

「本当に暗いな」

自分の体を動かしてもう一度辺りを見渡して素直な感想を述べる

そして、外にある氷に、自分だけ瞬間移動できる方法を用いて崩壊した影の幻想郷を脱出する

「時は少し遡り陰極サイド」

「あと少しでこの異変も終わるな」

目の前で行われている弾幕を観ながら陰極は察する。弾幕の数が先程から明らかに減っている。そしてなによりもお互いが疲弊しきっていること

ここで陰極が参戦すればドツベルゲンガー側の勝利が確定する

だが、陰極はそれをしない。異変を起こした張本人が目の前の勝利に手を伸ばさない。伸ばそうともしない

「全く、どうしてこうなったんだらうな」

陰極……：本名、陰者極末。いんしゃごくま彼はもともと外の世界の住人だった。彼は幼い頃から銃や戦車など、戦争で使われた武器が好きで、武器の本を買ったり、モデルガンを購入して分解してみたりしていた。そんなある日、彼は『影から購入したモデルガンと全く同じ物を作り出した』。それを見た瞬間に彼は驚いた。が、すぐに喜んだ。この力があれば、自分が好きな物を影から作り出して自分のものにできる、と。それからいくつかの実験を行い、以下のことがわかった

・この力は細部まで見たものしか作り出せず、同じ物を2度作り出すことはできない

・本物が偽物によって破壊されれば、偽物が本物になる。その逆もあり得る。その場合、性能が2倍になる

・影に自分が描いた空間を作り出すことができるが、細部までは再現できない  
それを知ってからは軍の基地に乗り込んで様々な武器を分解して、見る。そして影から創り出す。そして、本物を破壊する。それを繰り返していくうちに大量の武器を手に入れた。人目につかないところで試し撃ちしたりなどもした

そんなある日、陰極は特に意味もなく、強いて言うなら気まぐれで森の中を歩いていった。しばらく進むと、江戸時代の風景をそのまま残したかのようなところに出た。一瞬、京都かと思ったが、違った。行き交う人々の着衣している服が昔のものであると確信した。一度引き返してみるが、歩けど歩けど、景色は一切変わらず、歩いて来た道とは全く別のところ歩いていると自覚した。その瞬間に、陰極の常識を超えたものが目の前に現れた。後に陰極は知ることになったが、それは魔獣であった。魔獣が唸り声をあげながら陰極に襲いかかる。それを紙一重で回避した陰極は影の世界へと逃げた  
それから、陰極は森を抜け出してから情報を集めることにした。それにより得た情報は常識からはるかに超えるものであり、同時にどこか安心した。外の世界では自分のような『力』をもつ人物がいらないと思っていたためだ。ここであれば、自分の『力』を人の目を気にせずに使用できるのだと



それから半年を過ぎると外の世界が恋しく思う。どうにか戻る手段はないかと考えたが、自分ではできない。ならば他人に協力してもらおうと言う手もある。が、それには博麗の巫女の助力が必要であり、頼んでみることにしたが、能力をもつ人物は外に出せないと言われてしまった。他に方法はないかと考え、考え、考え、そして、1つの方法を思いつく。『自分の【影から同じ存在を作り出す程度の能力】で異変を起こして結界を破壊すればいい』と。そして、半年、幻想郷住民を観察し、ドツペルゲンガーを創り出す。異変を起こしてみるが、誤算があった。異変が1ヶ月程度で小康状態になってしまったのである。それから2ヶ月間、全く異変は進展せずになっていたところに、彼と同じような存在が現れた。最初はその人物に協力を仰ごうかと思っていたが、その人物は異変を解決する側についてしまったらしく、陰極ができることがなくなってしまった。次第にどうでもよくなり、現在は目の前の戦闘が終わったらドツペルゲンガーを全て消して、外の世界に行くための手段を探そうと考えている

「さて、どうしたものか」

幻想郷から脱出する手段を模索している陰極の目にあり得ない光景が映る

巨大な氷の上に突如として現れた白髪の人間に陰極は驚きを隠せなかった。脱出不可能だと思っていた影の世界から抜け出したその存在が現れたと思っただけで、陰極を視界に収めて斬撃を飛ばしたのである

「あとちよつとよ！みんな頑張つて！」

本物の霊夢が目の前の自分のドッペルゲンガーに弾幕を飛ばしながら大声で他の戦っている少女たちを応援する

「よそ見してるんじゃないわよ！」

ドッペル霊夢が本物の霊夢に肉薄しようとするとその中間に斬撃が通過する

「……………」

2人の霊夢が同時に背後に跳ぶと、その斬撃の行き先を目で追うと1人の男が飛び降りるようにして回避する

「アイツは……………」

「陰極！」

ドッペル霊夢が自分たちの大将の名前を叫んでから全速力で飛ぶ

それを見た他のドッペルゲンガー達もドッペル霊夢と同じように陰極の方に飛ぶが、自分に背を向ける好機を本物達が黙って見逃すはずがなかった

「みんな今よー！」

どこからか聞こえた紫の指示よりも早く本物達はスペカを唱える

「みんな避けて！」

ドツペル霊夢の指示も虚しく、ほとんどの少女達は避けることができずに、消えていく

そんな中、陰極は落下地点にぼつかり開いているスキマに入ろうとそのまま重力に身を任せていた

「させるかあああー！」

そんな叫び声とともに、針のように小さい氷の斬撃が陰極の目の前まで来るが

「甘いな」

影から適当な銃を持ち、素早く氷の斬撃を撃つ。キンつと小気味良い音とともに銃弾は斬られたが、衝突の際に一瞬だが、陰極に届く時間が伸びた。それだけあれば陰極がスキマに入るのに十分だった

「甘いのはそつちだ」

そんな声が聞こえたと思ったら陰極の体はガクツと揺れ、重力とは真逆の方向に飛ばされる

「クツ」

陰極は下手な受け身を取ると、自分を飛ばした人物を睨みつける。その先には斬撃の先端に瞬間移動した雪が白雪を納刀したままで構えを取る

「雪。こっちは私たちがやっておくからさっさとそいつを倒してちょうだい」

本物の紫がドッペル紫と対峙しながらスキマの中に消える

「さあ、馬鹿騒ぎをさっさと終わらせるぞ」

## 第41話 異変解決

「さあ、馬鹿騒ぎをさっさと終わらせるぞ」

雪が言い放つと同時に陰極が弾かれるように後方に飛び、影からマシンガンを取り出し乱射する

「影から武器取り出すって………なかなか面倒じゃないか」

雪は白雪を地面にさして氷の壁を作り出し、銃弾から身を守る

「そして乱雑に氷の壁を蹴り砕く。砕かれた氷が弾丸のような形になって陰極に襲いかかる」

「チツ……厄介だな、それ」

「自分で使っていて思うけど、コレ敵に回したくない性能だよな」

マシンガンで迫り来る氷の弾丸を砕いていく。それでも弾丸の合間を縫って迫る弾丸を影から取り出した盾をその場に刺して後方に飛ぶ

「便利な能力だな、それ」

「使い勝手はいいが、それに至るまでが大変なんだよ」

陰極は影から手榴弾を取り出し、投げる。それを雪は回避しながら一気に加速し、陰

極に肉薄する

「ハア！」

「おおお！」

雪が白雪を振り上げた時に、陰極の前の地面に伸びている影から巨大な木が突き出る「はあ!?木つて、こんなことができるのかよー!うわつぶ……」

「人や武器ができて、なんで植物ができないと思っていた。ついだ」

突然の木の突撃に雪は対応できずに、そのまま身体が木に押し上げられる。その際に陰極が左腕を思いっきり後方に引くと、雪の近くの木の枝の一部がチェーンソーで削られていくように上から下へザザザツツ!と溝を作っていく

(この音は一体……)

(雪!後ろから手榴弾が!)

(そういうことか!)

先程陰極の投げた手榴弾のピンに細い糸をつけておき、雪が木に押し上げられたと同時に腕を引くと、手榴弾が雪と木に引き寄せられるように接近することになる。その後は、木の枝に当たった手榴弾のピンが反動で外れる

その後は言う必要はないだろう

雪がそこまで理解すると同時に、雪の視界に手榴弾が出現し、木の枝に当たってピン

が外れる

耳をつんざくような大音量を手榴弾が放ち、近くにあるものを吹き飛ばす。範囲内にあった木は粉々になって周りに飛ぶ

雪は爆発の寸前で氷の壁を作り出して身を守る。しかし、あまりの威力に氷が砕け、爆風で後方に吹き飛ばされる

「ガッ……痛……なんてもん持ってたんだよ……」

「チツ今ので仕留めたかったんだがな」

「危ねえ今のまともにくらつてたら即死だったぞ……こりゃあ全部の武器持っているって考えた方がいいな……!」

間髪入れずに影からまた別のマシンガンを取り出すと陰極が乱射する。雪は1度後退し、木の影に隠れる

「クソツタレ……さっきの爆発で耳が痛てえ……耳鳴りがすごいな」

（耳鳴りが治るまで隠れますか？）

「……………いや、一気に攻めてぶっ倒す。いくつ爆発物を持っているか分からないからな。さっさと倒した方が楽だ」

そう言うと同時に雪は気から飛び出し、一直線に陰極に突撃する

「お前の足よりも銃弾の方が早いぞ」

「だろうな！」

雪が叫ぶと左手を突き出す。手のひらから局所の吹雪が放たれる。その寒さは、防寒具を着ていても一瞬で手足がかじかんでしまうほどで、陰極の指の動きが緩慢になり、マシンガンの銃弾の数が著しく減った

その長すぎる隙を雪は見逃さずに、銃弾を躲しながら距離を詰める

「捉えた！」

「くっ……」

陰極はボックスステップで距離をとる。すると、影から数えるのも億劫にあるほどのミスイルが雪目掛けて発射される

「うおっ！危ねえな！」

雪は着弾寸前で横に体を傾けながら自分を中心に広範囲の地面を凍らせる

「チツ、ミスイルを防がれたか。だったらコレだ」

「は!? 煙幕! そんなの迄持つてるのかよ! けど……!」

地面を凍らせた事により、氷の上の位置情報は全て雪に筒抜けになっている。なので、雪にとっては目くらましなんてあつてないようなものなのだ

「テメエの位置なんざわかってるんだよ！」

「お前のもな」



陰極の右斜め後方に瞬間移動した雪は次の一撃で決着をつけるつもりで斬りあげようとするが、目と鼻の先に銃口を突きつけられる

「は………？」

「あばよ」

「クソが！」

突然の不意打ちに頭が真っ白になる雪。しかし、その間にも時間は動き続ける

ほぼ条件反射で叫びながら真横に頭を振る

しかし、陰極は銃口を下にずらし、引き金を引く

「ゲホッ」

「呆気ないな」

心臓に近い位置を撃たれた雪は片膝をつき、撃たれた箇所の手を当てて凍らせる

陰極はそんな雪を見下すような目で失望と落胆を加えた声で呟くと雪の顎を思いつ

きり蹴る

雪は抵抗も出来ずに後方に飛ばされる

「グッ………痛………」

「少し期待していたんだがな」

「何が………だよ！」

「この異変のことさ。俺としてはさっさと終わらせかけたからな」

「さてはお前……後先考えずにやったな？」

「なかつたわけじゃなかつたんだけどな。お前のおかげで現状こうなったんだよ」

「俺が……来なくとも均衡状態だったんじゃないか？」

「まあな」

雪が倒れながらも何とか立ち上がる

「心臓には当たっていないようだが、少なくとも意識が飛びそうなほど痛いはずなんだがな。良く立ち上がるよ」

「うっせ。やった本人が何を言うか」

苦しそうな細かい声で悪態をつく雪。そんな雪に陰極はゆっくりと距離を取りながら油断なく銃を構える

「そろそろ異変を終わらせないといけないから俺は行くとするよ。あばよ、負け犬」

「そうだな、もう終わりだな負け犬」

は？と陰極が雪の言葉の意味を理解しようとする。が、それと同時に足が巨大な重りが着いたように動くことが出来なくなる。慣性により重心が後ろに移り、尻もちをついてしまう

「しまった……」

「くたばりやがれッ！」

雪は残り僅かな体力を使い、陰極の背後に瞬間移動し、首の裏を強打し、意識を刈り取る

「安心しろ、峰打ちだ」

雪が眩くと同時に、尻もちをつき、意識を手放す

陰極が倒されたその瞬間、幻想郷に存在していたドツペルゲンガー達が消えていく

「陰極がやられたって言うの！」

「そんな……まだ生きていたかったのに！」

と、叫びながら消えていった者もいれば

「もうちよつと遊んでいたかったのにな……」

家の影でひっそりと誰にも気付かれずに消えていった者もいれば

「まだ戦えるだろー！」

消えるその瞬間まで戦闘に興じる者もいれば

「ふふふ。短い間だったけれど楽しかったわ」

そう呟いて消えるものもいれば

「勝者俺にしか分からないこともあれば、敗者俺にしか分からないものもある……か。是非とも感想を聞きたかったな」

自分の本物の前で座って笑って消えた者もいた

こうして3ヶ月もの間続いた異変は終わりを告げた。後にドッペル異変と呼ばれる今回の出来事は、たった一人の人間が来たことよって終わった、と稗田 阿求が本に綴られた

異変解決してから次の日

永遠亭にて

「明日宴会があるのでだけれど、参加するわよね？」  
「帰りたい」

## 第42話 再会

ドッペル異変解決から次の日の永遠亭。この異変を解決に導いた一人の人間は清潔なベッドの上で目を閉じていた

「最近修行してないな……やるか」

（そうして下さい。最近目は瞑っていましたが、今日からはちゃんとやってください）  
「ういーす」

雪は欠伸びながらゆっくりとした動きで立ち上がると外に出るために玄関に歩を向ける

すると、目の前にスキマが開き、紫が顔を出す

「あら、起きていたの」

「どけ。今から修行つつうか素振りする」

「貴方って素振りとかするイメージがないのだけれど」

「なんでだよ」

「ほん。と紫がわざとらしく咳をして話を切り替える

「明日宴会があるのだけれど、参加するわよね？」

「帰りたいたい」

即答で答える雪。それに対して紫は、まあそういうだろうな、という顔をする

「幻想郷だと異変を解決すると、宴会をする習わしがあるの。異変に係わった人全員が来るわ。今回の場合は幻想郷中の人があるわね」

「そうなのか」

「だから郷に入つては郷に従えというでしょ？今貴方は幻想郷にいるの。だから宴会に参加して」

「いや、参加しないやつもいるだろ？流石に」

「いえ、全員くるわよ例外なくね」

「わーお」

まあ、そういうことなら。と雪は考える

「まあ良いや。参加する。どこでやるんだ？」

「今回は規模が規模だからね。何時もは博麗神社でやるんだけど」

「入らないのか？」

「そうなのよ。いえ、私が少し弄れば出来るわ」

（無茶苦茶だ）

（チートですね）

紫の能力の凄さに一人と一刀が驚いていると、紫は真剣な顔になって雪にベッド座るように促す

「今回の異変のことは分かっているわよね？」

「ん？ああ、幽香の家で教えられたからな」

「異変での被害のことなのだけけれど——」

その言葉を聞いて雪は少し真剣な顔になる。いつもは適当に流すような事だが、自分のドツペルゲンガーが現れたから他人事ではない

「——人里の子供たちが何人か居なくなっていたのよ」

「そうなのか。何時もは人の被害が出ることは少なかつたらしいな」

「ええ、今回は異例だったから。あちらも必死だったから」

被害がないかと思っていた雪は楽観的だったと後悔した

が、過ぎてしまったことはどうすることも出来ない。切り替えよう、と思い再び立ち上がる

「宴会はいつやる？」

「夜よ。ちゃんと来てね？」

「覚えていたらな？」

紫に背を向けて永遠亭から出る



そして夕方になるまで基本の型を繰り返していた

そして博麗神社へと続く階段前

「此処か。まあ神社だから長いだろうとは思っていたが、想像の上に行ったな」

（まあ幼少期の特訓に比べれば楽でしょう）

「簡単に言ってくれるな」

愚痴を言いながら一段一段ゆっくりと登っていく

登り始めて10分。雪の目線の先にはまだまだ階段があり、終わりが見えない

「こんなにかかるものなのか？」

（どうでしょう。目算で約5分で登れると思ったのですが）

「だよなあ。仕方ない。あまりやりたくないけど……！」

雪は白雪に確認しながら歩くが、景色が全く変わらない

嘆息しながら白雪の力を使い、雪の両足を起点に階段が凍っていく。が、途中から先に進まなくなる

「そういう事か……!」

雪は何かを察したように白雪を手元に出し、居合いの構えを取る

「真楼の居合 瞬絶」

白雪の刃に靈力を薄く纏わせ、居合抜きとともに、針のように鋭く放つ。結界の壁みたいのところに靈力が当たると共に、ビキイと結界に穴が開く

「後ちよつと!」

雪は一瞬で穴の近くに移動すると手を入れ、無理やり横に手を動かす。強固な壁をえぐっていくような感覚とともに結界を破壊する

すると、雪の視界の光景が階段から賑やかな宴会の会場へと変化する

「やつと来たわね。主役が遅れてくるんじゃないわよ」

「そうだけ。全く何をやっていたんだか」

と、雪が呆然としている時に2人の少女に話しかけられる。前の異変の時にドツベルゲンガーの方と戦ったことがある。雪は、溜息をつく

「階段に障害物があったから遅れたんだ。仕掛けたやつが悪い」

「知らないわよ。時間通りに来ない方が悪いわ」

「しつかりとした時間を伝えられていないんだがな。夜まであと半刻はあるだろ」

「私たちの中では遅いほうよ」

「いや知らない」

雪は会話しながらあることに気づく

「まあ、急に視界が変わったら驚くよな？」

「まあ、そうね」

「だからこれは不慮の事故な」

雪は足元を見ながら言う。先程急な景色の変化に白雪の力を解除するのを忘れていた

結果……雪の足を起点として未だに地面が凍っていく

「ちよつとあんた早く止めなさいよー」

「もう止めたよ」

騒がしい合流となり、それから半刻後、宴会が行われた

side  
雪

宴会開始の合図をおれがやることになった。なんでだよ

「当たり前じゃない。今回は貴方がMVPなんだから」

「いや、知らない。俺は適当にお茶でも飲んで涼んでいる予定なんだが」

「知らないわよ。はい、マイク」

「叩き割るぞ」

「その場合は他のを持ってくるわ」

「あ、そう」

これは何をやっても無意味だわ

というわけでやることになったが……何言えればいいんだよ

とりあえずマイク片手に何言えればいいか考える

「えー、あー、異変が終わったことにかんぱーイイイ！」

俺が最後まで言おうとした時に背後から強烈なタックルをされる。そのまま前に倒れて顔をぶつける

誰だよ。顔を上げてぶつかってきた奴を見る

「すみません。大丈夫って雪でしたか」

「なら問題ない」

「何がだよ」

俺にぶつかって来た奴らがすごく見た事のあるヤツらだった。以前であった時と全く変わっていないくいつも通りに受け答えをしてしまった

1人は平均的な身長で平均的な肉付きの顔が整った紳士風のイケメン。白い手袋を手につけており、その手を俺にさしのべている

もう1人は小学生と間違われても違和感のないほどの小さな体格である仏教面の子供。俺に興味が無いのか周りを見回して居る

この2人には浅からぬ縁があり、幻想郷に来る前に一番交遊していた兄弟

「久しぶりだな燈、禊」

「ええ、一日ぶりです雪」

「1日って久しぶりに入る？」

命雛兄弟が幻想郷に来た

「皆さん初めまして。私は命雛 燈と申します。こちらは私の双子の弟の命雛 禊です。この度は雪がご迷惑をおかけしませんでしたか？」

「お前は俺の保護者なのか？おい」

「……」

燈が幻想郷の奴らに挨拶をしている最中に禊は近くの食べ物勝手にとって食べた。ふーむ、こんなことをするようなやつだったか？まあやってたな。俺も弁当のおかず勝手に食われてた

「自己紹介がとう。私は博麗 霊夢よ。アンタ達どうやって幻想郷に来たの？」

「ここは幻想郷と言うのですか」

「博麗？」

「博麗神社の巫女様だ」

霊夢が前に出て燈に問い詰める。禊に行かなかつたのは無表情で考えがわかりずらく、燈の方が話を通じそうだと思つたからだろうか

「私達はい先程、雪が居そうな所を探していたのですが、全く見つからなかつたのです。それで、もしかしたら異世界に移動したとメリーさんが言つたので、心当たりのある博麗神社に来たら、何かの境目でしようか？その中から何か聞き覚えのある雪の声が

聞こえたので閉じてしまう前に入ってきたのです。どうやらその境目は閉じてしまったようですが」

燈が簡潔に説明すると、靈夢が眉間を抑えて呻く

「それは異変の影響ね。まだ綻びがあったなんて……」

(ザルだな)

(辞めてあげてください)

(こいつ直接脳内に)

(このあとどうしよう)

しばらく会わなくなっているにも意思疎通は自然にできていることに不覚にも笑ってしまう

「なんでしようあの3人は……」

少し離れたところで俺たちの心を読んでいたさとりが驚いている。ホントになんて出来るんだろうな

「ん、あ？おい燈」

「どうしましたか？」

「お前さつきなんて言った？」

「いつでしょうか？」

「俺にぶつかってきた時に言ったことだよ」

「確かその時は『ええ、一日ぶりです雪』でしたよね」

……おかしいぞ

「燈……俺が居なくなつてそつちだとどれくらい経つた？」

「まだ一日ですよ。正確に言えば20時間ですが」

しばらく絶句する俺。おかしい。おかしいぞ

「雪は何日経つた？」

「……5日くらいだ」

「ふむ、これはなかなか……」

3人で考える様に顎に手を当てる

そこに傍観していた紫が割つてはいる

「どんなことが起きているのかがわからないけれど外の世界とこちらの世界の時間の流れがおかしくなっているようね」

「なんか少し老けたような気がする」

「お変わりは内容ですが？」



「いつかで急激に老けるとかどんな現象だよ」

「こんなやりとりも懐かしくなるな。やはり幼なじみは話しやすいということかなんとか直したわ。これで変わらないと思う」

「仕事が早いようだ」

「さっさと仕事を終わらせた博麗の巫女様に賞賛を言おうと伸びをする」

「さて、宴会には参加したし、紫約束通り帰してくれ」

「俺が紫にそう言おうと、紫と霊夢が視線を外す。おいまさか」

「紫、言っただけなの？」

「いや、言ったら殺されるかもしれないし……」

「全く……」

「霊夢は肩を落としながら平然と言う」

「幻想郷に来た人は私によって元の世界に戻すことが出来るけれど、例外があるわ」

「……………例外？」

「それは能力を持つている奴を外に戻すことが出来ないの。私がやろうとしても何故か結果が弾くの」

「その言葉を聞くと同時に燈と禊の方を見る俺」

「……」

「へー」

燈は固まってしまっている。いや、正確には高速で頭を動かしているんだろう。燈は全力で頭を動かすと、固まったかのように動かなくなる

禊に関してはどうでもいいと思っっているのか目の前に広がっている料理に目を向けている。気の抜けた返事付きで

「これは……なるほど。俺たち帰れないかもな」

「いえ、できるかもしれないよ」

燈が動き出すと博麗神社の鳥居の前まで歩く

「ここから出るのですよね？」

「そうだけど、それが？」

燈は目を閉じると右手を前に突き出す。そしてゆっくりと手を下ろす

すると、鳥居の向こうの景色が変わる

鳥居の向こうは見覚えのある街がある。時刻は昼なのかかなり賑やかだ。そう、賑やかなんだ

「メリー見てよ！急に境目が出てきたわ！」

「やったわね蓮子！」

2人の声が賑やかなんだ。もう声聞いただけでわかる。というか名前を呼びあつて

いるし嫌でもわかる

「な……どうやったの？」

幻想郷と外の世界を隔絶する強力な結界をたつた一人の人間に開けられたんだ。霊夢と紫だけでなく、それを見ていたほとんどのものが驚いていた

「なるほど、私の能力はこういうものですか」

燈は一人納得するように満足気に頷くとこつちを振り向く

「私の能力は願いを叶えるものに関するものらしいです。さあ、禊、雪帰りますよ」  
「うん」

「あー、みんなじゃあな。すつごく雑な感じの別れだけでもまあ楽しかったわ。戦わなければな。今後来る機会なんてないだろうけど来たらゆつくり観光する」

「そういつて返事を待たずに、鳥居をくぐる。そうすると一瞬だけ変な感覚が俺を襲ったが、直ぐになくなる」

「んー……ただいまマイワールド」

「アハハ雪何言ってるの？」

「マイワールド……」

「さあ帰りましょう。これから雪は大変なことになりますよ？」

「……うわあ」

帰ってきた俺たちを迎える蓮子とメリー。この二人を見るのも五日ぶりだろう。まあ変わりがないようで良かった。俺が老けたみたいになるかもしれない……

燈の言葉に頭を抱える。これから裁判や学校とかの問題がある……バイトのことも考えないと

そう考えると頭が重くなる

けど、まあ未来の事なんて考えるだけ面倒臭いだけだ。降り掛かる火の粉を払って  
いってあげれば良いか

「雪何やってたの？」

「これから家どうなるのかね？」

「さあな。俺は知らん」

秘封倶楽部の二人の質問に答えながら1度後ろを振り向く

そこには博麗神社の鳥居があるだけだ。鳥居の先には古びた神社が見える。さつき  
まで人外魔境の神社は見えない。燈が開けた穴は霊夢が閉じてくれたんだろう。多分

「さて、これからどうなるかね」

そつと眩きながら4人について行って行く

「さて、松戒は死んだ。さて、どうしたものか」

「あれ？何でしょうこの小包は……お姉様に見せてみよーと！」

「約束を守りに来たよ、氷霧！」

「さて、私のいところは元気かね」

「はあ！」

「……やっと戻ってこられた。影に隠れるのもなかなか生きて心地がしなかったな」

「研究……能力……ああ！頭が……！」

## 第2章 学園祭

### 第43話 帰った日常

「雪が幻想郷から帰ってきてから2日後」

side 雪

「はあ……眠」

俺はいつも通り早朝5時半に起きて30分基本の型をして朝食食べて学校に行く準備をして家を出て学校に行く

平凡な朝だが、親が居らず、1人でやらなければならなくなつた

ぶつちやけ大変だ。バイト探さないとなあ

あれから俺は何かとやる事があると思つて身構えていたが、なんとめんどくさいことは何一つ無い。有るとしても、携帯の契約とかそこら辺だけだった。近所の人がお裾分けしてくれたりしてくれてほんと助かっている

新聞を読んでみたらなんと俺達の事件が何一つ載っていないかつた。ネットの方で調べても何も無い。こんなの国絡みだろ……と思つてしまうくらい何も無い

なので俺は親が居ない以外は普通の生活を送っている

「さて、長い道のりを歩いていきますかあ」

ゆつくりとした速度で学校まで歩いていく

歩いて少しすると幼馴染の兄弟と出くわす

「おはよう燈、禊」

「おはようございませす」

「おは」

挨拶だけ済ますと歩き出す2人

「なあバイト探さないと行けないんだけど学校の許可必要だよな？」

「そうですね。私たちの通っている翠刹高等学校は無断バイトは規則で禁止されていますね」

「だよなあ」

「コンビニ」

「あーコンビニかあ。まあ知り合いと出くわしても仕方ないよな。近くのコンビニが良  
いかなあ」

少し愚痴を零しながら歩いていくと、燈が思い出したかのように話しかけてくる

「そういえば、そろそろ文化祭の時期でしたね」

「そう言えばそうだな。うちの学校は大掛かりだからなあ」



「隣町まで巻き込む」

「規模はどここの学園都市だよ……」

そう。そろそろ文化祭の時期なのだ。昔から続いているようで、隣町の長紅高校と合同でやるらしい。一般人の参加は自由で、とにかく期間中は大騒ぎ。街も何故か認めているようで、学生はとにかくにも遊ぶ。この日のために金を集めている奴も多い

色々なイベントがある。隣町の学校まで往復で行ってくれるバスもあるし自由に他校まで行ける

1番騒ぐのは翠利高校 vs 長紅高校の街全体を使ったサバイバルゲーム。翠利高校の生徒には翠のハチマキ、長紅高校の生徒には紅のハチマキを付けて、相手高校の陣地にある旗を取った高校の勝利。参加は自由でやりたくない人はやらなくて良い。俺は去年見てたかな。ハチマキを取られた生徒は自分の高校に戻るルールとなっている。隣町まで来てから帰るの大変だろうな……。参加していない人のためにいくつものドローン飛ばしているという。予算すごいな。とはいえ、ここまでの大掛かりを半日くらいで済むわけないので、丸一日使われる

「今年は俺不参加かねえ」

「雪は参加してみてもはどうでしょう？ あのスリルは中々面白いですよ」

「楽しかった」

「そうだねえ。俺も参加してみようかな」

まあたまには遊び尽くすのもいいかな

そんなことを呆然と考えていると学校に着く

「うーん……なんか嫌な予感がしてきた……なんだ……？」

「今思い出したのですが、どうやら転校生が来るらしいですよ」

「転校生？ こんな時期にか。珍しいな。3年は多分ないよな」

「ええ。なんでも外国から来るみたいです」

「交換留学？」

「いや、違うだろ」

「親の転勤でしょうか」

秋の転校か。珍しい時期に来るな。まあ俺には関係ないことだしいつも通り過ごし

ましようかね

く昼休みく

「おい、雪！ サバゲー参加しろ！」

いつも通り過ごしたかったなあ

「うわ……めんどくさいのが来た」

「誰がめんどくさいやつだ！」

俺が命雛兄弟と弁当を食べていると教室の扉が勢い良く開き、中に入って来る自分  
1人。名前は緋月<sup>ひづき</sup> 莉煌<sup>れお</sup>。何かと俺に絡んでくるめんどくさいやつだ。漢字が面倒臭  
いのでみんなから名前書かれる時に「レオ」と表記される

「俺は参加するよ。たまには遊びたいしな」

「ふっそうか。流石は俺のライバルだ」

「誰がライバルだ」

「というわけでどちらが多くハチマキを取るか勝負だ！」

（先にコイツのハチマキ取ろう）

レオは俺に言うだけ言うと言と教室から出ていく。邪魔なコイツから脱落させようと、心  
に誓う

「それはダメでしょう」

「なんの事かな？」

マジでなんなんだよ燈は……

〜放課後〜

「さて、家に帰って掃除とか夕飯の支度しないとか」

「私達の家で食べるということもできませんよ？」

「いや、遠慮しておくよ」

「バイトどうするの？」

「バイトは明日買物する時に求人票探すから、明日以降だな」

「そう」

そんなわけで命雛兄弟と別れて家に帰って来る。着替えてから料理を作って食べて洗って風呂入っていぎ、寝ようと自分の部屋に行こうとすると、和式の部屋に違和感を覚える。具体的に言うとは別空間に繋がっているようなそんな感じだ

「……はあ」

（どうしますか？）

「確かめるしかないだろ……」

心底嫌な気持ちで溜息をつき、目を閉じたままガラツと勢い良く襖を開ける

中には

「あら、いらつしやい」

勢い良く襖を閉める

「……おかしいぞ。今幽々子が居たんだが……」

「幽々子様でしたね」

「声出てるぞ」

(うつかりしてました)

「まあ声出してもいいけどな」

なんで俺指摘したんだろ……それほど狼狽えているのか？

「急に閉めることは無いじゃない」

「うわ、本物か？」

「ドッペルゲンガーでは無いわよ」

「お前とは初めましてか？」

「そうね。初めまして。私は西行寺 幽々子よ。よろしく」

「どうも初めまして博咲 雪です。よろしく」

自己紹介はしないと、初対面だし

「とりあえず入って入ってお話しましょう？」

「そうだな。話さないといけないことあるよな」

今の現状について話し合うために、幻想郷にもう一度、幻想入りする

「で？　なんでここに繋がってるんだ？」

「それはねえ。私が紫にお願ひしたのよ。せつかく博咲家の人物と会えたからもう会えないなんて寂しいじゃない？」

「はあ。まあ俺が話すことはあまりないから白雪にパス」

俺は知りたいたいことを聞いてからすつと立ち上がる。幽々子と話す事なんて本当に無い。なら、昔の知り合いの白雪と積もる話もあるだろうし、白雪を取り出してテーブルの上に出す

部外者の俺は一度家に戻る。白雪を奪われることは無いだろう……きつと

「さて、そろそろ寝る準備しとかなないと」

さつき寝ようとしてたんだつた……眠くて倒れそうだ……でも白雪も一緒に寝るようになつてるし……何してようかな

「ん？　なんだこれ」

水でも飲むうかと台所に行くと、テーブルの上に一振の鞘に納められている片手剣が置かれている

剣に関しては白雪が詳しいからこれがどんなものかわからないが、何故か急激に持ちたくなつてきた

「誰のだ？」

鞆に手を伸ばし、触れた途端、俺の視界は黒くなった

「……………け」「雪！」

「……………を……………け」「雪！」

「……………劍……………を……………け」「雪！」

「我……………劍……………を……………け」「雪！」

「我が劍の……………を……………け」「雪！」

「我が劍の鞆を……………け」「雪！」

「我が劍の鞆を砕け」「雪！」

「雪！ 起きてください！」

「う……………白雪？ どうした……………」

「雪こそどうしたのですか？ 床に寝てしまって」

「は？ 床に？」

体を起こして周りを見ると、確かに台所だ。そして、朝日が射している。どうやら朝

まで寝ていたようだ

「やっべ、支度しないと！」

(全く……)

白雪が嘆息しているが、気にしない。朝食は……コンビニで買うか！

現在時刻はAM7:45。歩いて30分くらいの所にある学校なので急がなくても良  
いが、命難兄弟を待たせるのは忍びない。まあ許してくれるが、コンビニに寄らないと  
いけない

「クソっ行ってきまー……す？」

急いで支度してから飛び出るように玄関を開けると

幼女がいた



## 第44話 勝負の妖怪

「久しぶり！氷霧！」

朝玄関から出たら幼女が居た

赤髪をサイドテールにしている、赤い瞳。水色の着物を着ていて、所々が切れていたり葉や小枝が付いている。9歳くらいの可愛らしい見た目だが、立ち方に一切の隙がない。何だこの子

「えつと…君は？」

俺は子供が苦手なのでどうすればいいか分からない。とりあえず近所にこんな子はいないはずだ

それを聞いた幼女は大きな赤い瞳を丸くしながら首を傾げる

「あれ？氷霧私の事忘れちゃったの？」

と言いながら目に涙を溜め始める

「ちよつと待ってくれ…思い出す。思い出すから泣かないでくれ！」

そう言うが全然思い出せない。何度も過去を遡るが、この子の顔が出てこない

（おや、この子は……）

（白雪知っているのか？）

そうだ、俺がわからないなら白雪に聞けばよかつたんだ！コイツならなんでも知っている

（この子は妖怪です。名前はイルカミア。博咲家6代目の氷霧と戦闘した妖怪です）  
（そう言えば俺の事を氷霧と呼んでたな）

「少し落ち着いて聞いてくれないか？俺は氷霧じゃない」

「え？でも氷霧と全く同じ顔だよ？」

「マジか……えつと名前はなんだ？」

「私はイルカミア！」

「イルカミアな。氷霧はもう死んだよ何百年も前に」

「じゃあ、豪雪？」

「俺は雪だ」

自己紹介は済ませた

さて、俺はどうするんだこれ……現在時刻はAM8:00。学校開始まであと30分  
ここでイルカミアを置いていくことも出来るが、この場合こいつどうするんだ？今日  
学校行かずにイルカミアのことを知るべきか……

「……仕方ねえ今日は休むか」

俺はそう決断し、燈に連絡する

今日行けなくなつたから、行つてくれ

と

「それで：：お前は6代目当主の博咲 氷霧と知り合つた妖怪なんだな？」

「そうだよ、氷霧：：じゃなくて雪！」

「それで、お前はどんな妖怪なんだ？」

「これは氷霧に聞いたことなんだけど、私は〔勝負には悪魔が宿る〕つていう迷信が恐怖を集めて具現化したみたいなの！」

なるほど。昔はどうだか知らんが、本番や勝負する時に、何かと不安になつたり思いもしないミスをする。そういった恐怖はあるだろう。俺も父さんと打ち合つた時、何かとミスをしたな

「私が出会つたのはねー……」

それから楽しそうに氷霧との出会いを語るイルカミア。ずっと満面の笑みを浮かべながら話しているうちに、時間が昼になつていた

昼の準備しないとな……と考へていると、こんなニュースが流れてた

『近頃、この付近の森の木が粉碎されたような形で発見されることが多くなりました。森に出入りしている人物の話によると、笑い声が聞こえたかと思うと、急に破壊音が鳴

り、気が粉碎されるということです』

物騒だな。これは異能者がやった事だろ。何故か規制される超能力。SNSに載せてもすぐに消されるらしい。まあ俺が関係してなければどうでもいいが……

「あ、ここ私が最近居たところだ」

「……………」

……………なにをやっているんだこいつは

「お前がやったのか……………」

「そうだよ！修行してたら周りのものが壊れていくの！」

「自然な感じで言っただぞこいつ」

俺は若干引く。なんだよ……修行するのに木を利用するのはまあ分からないことで

はないが……

「あ、修行で思い出した！」

「その前に昼飯食うぞー」

く昼食中く

「あー美味しかった！」

「洗い物めんどくさいな」

溜息をつきながら食器を洗っていく

「それじゃあ勝負しよー！」

「食事後の運動はNG」

「じゃあ後で！」

「……（嫌そうな顔）」

「コイツ勝負しないと帰りそうにないな……仕方ない

「分かった。で、何をやるんだ？」

「んーとね、試合！」

「……（嫌そうな顔）分かった」

俺が了承するとイルカミアは嬉しそうに走っていく

「はあ」

もう一度ため息をつくくと、後ろにスキマが開く

「雪……今の妖怪は……」

「強いだろうな」

イルカミアと対面してる時は警戒をしていた。幻想郷に行っていた時に出会った奴らと比較すると、正直勝てるかどうか。強さは地底にいた勇儀と同等くらいか……

「まあ命のやりとりってことじゃないだろうし、適当に頑張るよ」

「そう」

それを言うとスキマは閉じる

「さーて頑張りますか」

洗い物を終えた俺は食器を片付ける

そして道場の掃除を始める

## 第45話 vsイルカミア

「それじゃあ始めるか」

「良いよー！ 今度は私が勝つからね氷霧！」

「……氷霧じゃない」

「そうだった！」

場所は博咲家の道場。床に誇りはひとつもなく、所々に傷があり年季が入った床。広さはかなりあり、ここでもなら激しく動きながらも戦闘ができるだろう

そんな所に雪とイルカミアが5mの間隔を開け向かい合っている。雪は白雪を出しておりいつでも抜けるように柄に手を置いている

(さて、コイツはどう動くんだ?)

雪が姿勢を低くしてイルカミアの動きに注意を払っていると、イルカミアが動く  
初速から残像を残すほどの速さで雪に迫る

「そおれ！」

「う……おおお！」

予想外の速さで迫るイルカミアの拳を雪は反射的に抜いた白雪でなんとか防ぐ

「なんつー速さだ……」

「まだまだ！」

イルカミアの速さに驚いていると、足払いをかける

「くっ」

足払いをかけられ体が宙を一瞬浮く。その間に白雪を斬り上げるように振るうが、難なく避けるイルカミアは、更に雪の腕をつかみ、一回転してから床にたたきつける

「あーはっはっはー！」

「グッゲホッ」

雪は咳き込みながらも距離をとるために白雪の冷気を道場中に漂わせる

そして瞬間移動しようとした瞬間に、イルカミアが残像を残すほど速さで雪に接近し、後頭部を掴み、額に膝を叩きつける

「……ガハッ」

脳を揺さぶられ、意識が一瞬飛ぶ。その隙をイルカミアは見逃さずに、空中で一回転し、足を伸ばし雪の脳天にかかと落としをする

「どうしたの、こんなもの!？」

「っのやろうー！」

床に思いっきり額をぶつけ、血を流しながらもイルカミアから少し距離を取ったとこ



ろに瞬間移動し、空中にいるイルカミアに攻撃する

「真楼の居合 瞬！」

白雪の刃に薄く靈力を纏わせ、神速の速さで鞘から抜く瞬間に針のようにして飛ばす技。空中にいるイルカミアが避けるには至難の攻撃

それを

「あははははー！」

イルカミアは笑いながら手の甲で弾き飛ばす

「……………わぁお」

雪は苦笑いを浮かべる。その隙にイルカミアは床に着地すると同時に、道場の壁に跳びながら壁を蹴り、雪の近くの床に目がけて跳び、雪に回し蹴りをする

「てりゃあー！」

「うおっ！」

雪はイルカミアの真横に瞬間移動し、

「真楼の居合 豪！」

靈力を白雪に大量に纏わせ、そのまま力任せにイルカミアに叩きつけるが……

「そおれ！」

体を僅かにズラし、回避したらカウンターの拳を雪の腹部にめり込ませる

「びっふっ」

「まだまだまだ!」

イルカミアの追撃の回転蹴りは雪の横腹に吸い込まれ、雪は道場の壁に激突して地面に倒れ込む

(なんつー速さと力だ……これ下手したら勇儀よりも圧倒的に強いかもしれない……)

(雪、これはまずいですよ。なにか対策を講じなければ)

「アツハツハツハツハツ! もう終わりじゃないよね?」

「そうだな……まだ終わりじゃねえよ」

雪はよろよろと立ち上がりながら白雪を構える。抜刀しており、上段に構え、息を整える

(こいつの速さには勝てない……なら、予め予測しておく。それにそろそろ……)

雪はイルカミアの気配を捉えながら、じっと待つ

「来ないならこつちから行くよ!」

イルカミアが動いた。その瞬間、イルカミアの足が滑る

「えっうわわわ!」

「かかったな!」

雪は先程から漂わせた冷気を床に集め、氷を敷いていた。瞬間的に作ってしまうとど

うしても音が出てしまい、イルカミアなら平然と避けれるからだ。なので、雪は時間をかけながら床に氷を敷き詰めていた

「すっごい滑るー！ 楽しいー！」

「そうかいー！」

滑っているイルカミアに雪は瞬間移動してから斬り掛かるが、イルカミアはものすごい速さで回避する

「すばしっこいー！」

「ほらほらこつちだよー！」

イルカミアは氷の上をスケート選手のように軽やかに滑っている

白雪の氷で作られているのでいつでも足を止めようとするが、イルカミアはタイミン  
グがわかっているのか、簡単に避けてしまう

「これならどうだ！ 真楼の居合 震」

白雪を地面に叩きつけて、氷を震わせ、地割れを起こす

「おっそいよー！」

地割れの中心にいたイルカミアは悠々と回避する

(なんだコイツの異様な回避能力は……未来でも見てるのか?)

「そろそろわたしから行くよー！」

イルカミアは一直線に雪まで跳び、袖を掴む

「速い……が！」

「え？ 氷が離れない！」

イルカミアの手には、触れている袖から氷が這い上がって行くように凍らされていく  
「散々ポロポロにされてきたんだ……目で追えなくても、お前は直線にしかならないんだ。  
それならなんとなくのタイミングはわかる」

「うう……あそこまで届かないよお」

イルカミアは弱音を吐きながら身をひねって雪の腹を蹴りあげようとするが、雪が上半身を逸らすだけで回避する

「これで、終わりだ！」

徐々に凍っていくイルカミアの脳天に峰打ちをする

「きゅ〜」

イルカミアはそんな声を出しながら気を失った

「……………疲れた」

雪はそう呟くと、後ろに倒れて眠りにつく

「あの雪これはどういうことですか？」

「幼女と試合しました」

俺が目覚めると、横には寢息を立てているイルカミアが居た

傷の手当は白雪がやってくれていたらしく、包帯が巻かれていた

そしてどうしたものかと時間を見たらなんと既に学校が終わっている時刻だった。

なので、携帯で命雛兄弟を呼んで来てもらって現状説明中

「まさか雪が一方的にやられてしまうとは……」

「見た目に寄らないってことだな」

「人間と変わらなさそう」

「私も妖怪は初めて見ますが、人間と姿かたちは遜色無さそうです」

「早いぞーコイツめっちゃ早いぞー」

幻想郷の妖怪も人間と見た目はあまり変わらないやつが多いからな。羽とか角ある奴もいたけど

「これからイルカミアさんはどうするのですか？」

「そこなんだよな。コイツがどうするかって話を聞いておきたい。このまま居座られたらどうしよう……」

「遠縁」

「白雪はそれで賛成だろうけど……」

俺一人でこの妖怪をどうにか出来るか……

「イルカミアさんしばらく起きそうにないですね」

「だな。満足した顔しやがって」

「今日は泊めるの？」

「そうなるだろうな。紫に相談するかな」

俺が紫を呼ぼうとすると、燈が思い出したかのように話し出す

「そういうええ知っていますか？ この街には夜な夜な悪霊を除霊する日本刀を持った怪異が出るそうですよ」

「なんだその噂話」

「今日聞こえてきた話です。なんでも知り合いがその現場を見たとかなんとか」

「それって具体的にはどこで起こっているのか知っているか？」

「コンビニ前」

「正確にはコンビニの死角になるところですね」

ふーん、と気の抜けた返事をする、伸びをしてから立ち上がる

「とりあえず幻想郷の方に話してくるからイルカミア見といてくれ。暴れだしたら取り押さえておいて」

「b」

「分かりました」

2人の返事を聞いて俺は白玉楼に繋がる襖を開ける

それから幽々子と紫と話し合ったところ、白玉楼で引き取ることにした。勝負の妖怪という特徴から、幻想郷から出ることはあり得るとのこと。普通はありえないとのことだが、白玉楼に居る限り、外との境界が少し緩くなっているらしい

自分の部屋に戻ると3人が神経衰弱をしている所だったので、混ざって遊んだ

「例の奴はどうだ？」

「説得はできた。後は時が来るまで相手をしてやるだけだ」  
「そうか」

クツクツと笑う男の笑い声が部屋に響いた



## 第46話 波乱

「やっぱコンビニバイト……それとも……ふーむ、どうするか」

(少しでも続けられるところがいいですね)

学校にバイト許可もらってからサイトで探したり、求人票をコンビニで探していたら気が付いたら夜になっていた。白雪の言葉に頷きながら帰路に就いていると、何なら風を切る音がする

「誰か素振りでもしてるのか……?」

訝しみながら音のする方向へと行き、丁度角があるのでそこから覗き込む

すると、先が暗く、街灯もないところで、辛うじて女性だろうとわかる人影が日本刀を持ち、周りにあるものを利用して縦横無尽に飛び回っている現場を目撃した

「何やってるんだアイツは……ハリウッド映画のアクション練習か?」

(いえ、何やら方向性がありますね。それにこの気配……)

覗き込んでいると縦横無尽に飛び回っている人物がこちらの視線に気づいたのか、こちらに顔を向ける

「そいこも」

「ん?」

何かを呟いたかと思うと、一呼吸よりも早く、俺に接近していた

「白雪!」

俺の首を斬り上げるような軌道の日本刀に対して反射的に愛刀の名前を叫びながら、向かってくる日本刀を右腕で防ぐように振り上げる。その時には白雪は完全にその姿を現しており、相手の日本刀の刃を白雪の鍔から切っ先まで滑らせるようにして、軌道を上に変える

「なっ!」

「あつぶねえ!」

未だに暗くて姿が見えない相手が驚いている一瞬の隙をついて攻撃しようか、と考えたが、こいつはヤバい。こんな所で戦ったら間違いなく殺される。なら――

「あばよ!」

逃げる。いつでも緊急避難できるように、玄関の1部を白雪の氷にしており、瞬間移動できるようにしておいた

「今の悪霊は…いや、今の人物は…」

自分の剣を受け流した人物を思い浮かべた。あの人は確か……

「……………!!!」

私とその人物を思い浮かべようとすると、背後から凄まじい雄叫びが聞こえる。大気を震わせ、私に襲いかかってくる

大気を震わせるほどの雄叫びが住宅街に響けば、就寝しているものは起き、作業をしているものは一旦止めて発生源を確かめようとするだろう

しかし、それは霊感を持つものでしかできない。何故ならその発生源は悪霊だからだ。しかもただの悪霊ではない。私が目を離れた時に、いくつもの悪霊が合わさり出来た存在

「今はコイツを消すことに専念しよう」

先程までの思考を頭の隅に追いやり、右手に持つ日本刀……無月を構える

「成仏してもらおうよ悪霊！」

先程から過度に霊力を使っている。今ならコイツを成仏させられる

私の思いに反応するように霧が辺りを覆い始める

それからすぐに霧が辺りを覆う。その場にはもう、誰も居なくなっていた

「燈。俺はお前が言っていた怪異に遭遇したんだが……」

「まるで物語のタイミングみたいですね」（満面の笑み）

「殴りたいその笑顔」

「アレは怪異というよりも人間がやっているように思えたんだが」

昨日の出来事から翌日。玄関から自分の部屋まで直行して寝た。気が付いたら朝な  
んてことはよくある事らしい

毎度の如く命雛兄弟と登校しながら話に花を咲かせていた

「その人物の特徴はなんですか？」

「どうだろうな。本当に一瞬の事だったからあまり覚えてない。ただ俺よりも強いことは確かだ」

「逃走」

「もしかしたら、この学校の生徒、だったりするかもしれませんね」

「そんな二次元展開なんてあるわけないだろ」

「H A H A H A」

裸の感情の全くこもっていない笑いを聞きながら校門を通る

その時……学校の窓から視線を感じる

「ん？」

そちらを向くと、三年生の教室からコチヲを見ている女生徒が居た。遠いのでそこまではしっかりと特徴を確認することは出来なかったが、俺を敵視しているような感じがした

女生徒は、こちらが見ていると気付いたらすぐに窓から離れてしまった

「どうかなされましたか？」

「いや、なんか三年生に見られていただけだ」

「そうなんですか」

その時の燈の楽しげな喋り方はとてもながら嫌な予感がした

教室に入っても燈はどこか楽しそうにしており、より一層嫌な予感が増えていく

そして朝のHRが始まった

「えー、今日は転校生がこのクラスに来た。アメリカからの帰国だそうだ。とはいえ、日本には年に何回か来ているらしい。でもカルチャーショックがあるかもしれないから、みんな仲良くな」

そんな担任の声を聞きながら窓の外を眺めていた

ガラガラツと扉の開く音がする。転校生が来たみたいだ。この時期に転校生なんて珍しいな

転校生がどんな奴かと、黒板の方に目を向けると、俺は目を剥いた

「あたしは心月 ミイル。帰国子女つてやつだ。雪の従妹で、好きなどこは戦闘と体動かすこと。嫌いなことはじつとしてる事だ。みんなよろしくな！」

ああなんてこつた……まさかミイルが来るとは……

頭痛を吐き出すような深いため息が口から漏れた

## 第47話 お騒がせないところ

「あたしは心月 ミイル。帰国子女つてやつだ。雪の従妹で、好きなどこは戦闘と体を動かすこと。嫌いなことはじつとしてる事だ。みんなよろしくな！」

新月 ミイル。俺の従妹にあたる関係だ。母さんの妹の子供で小さい頃からよく会っている。父親がアメリカ人なので日本人とアメリカ人のハーフ

ミイルは運動神経が良く、体を動かすことで誰かに負けると、勝てるくらいになるまで練習し、勝たなければ気が済まない性格だ。これには禊は含まれない

母親が格闘家で、小さい頃から武術を叩き込まれている。俺もそうだが、剣術を主としているので、無手だとミイルに勝つことは厳しい。空手や柔道など、手広く武術を教えられ、最近のメールだと、八極拳にも手を出したとか

趣味が戦闘と体を動かすことで、じつとしてるとイライラするらしい。危険人物だな

とはいえしつかりとした所もあるし、悪い奴ではない。何かと勝負を挑んでくるのが鬱陶しいが、こちらを慮ってくれる。イルカミアと相性が良さそうだから会わせてみよう

「そんなわけだ。とりあえず」

「雪、気を付けてください」

「はっ。」

ミイルのことを思い出して、燈に促されミイルの居る教卓の方を見ると、上靴が目の前に迫っていた

「うおお！」

「良く避けたな雪！」

椅子に座っている状態から真横に飛んでミイルの蹴りを避けた。いきなりの事なので急には止まらず、隣の席の奴に突っ込んでしまった。その際に足をくじいた

ふっざけんなよ……マジで！

「喧嘩つばやいお前だけどいきなり蹴りに来るか!? 普通！」

「油断するんじゃないぞ！」

俺の使っていた机からそのまま蹴りが飛んでくる。俺の頭を正確に狙っている蹴りだ。とてつもなく早い

こっちは足くじいているのにこの速さは……

「くっそー！」

痛みがある足を無理やり動かして地面を蹴って回避する。俺が突っ込んだ奴の机の



寸前でミイルが床を踏みつける

そのまま俺は教室を出て、屋上に行くために廊下を走る。足が痛む

「待ちやがれ！」

「こつち来るな！」

そのまま俺とミイルは昼休みまで校内を鬼ごっこするわけだが……どうすんのこれ。燈が上手く誤魔化してくれることを願っている

「ゼエゼエ……」

「くっそまだまだだなあたしも」

「この狂人が……」

校内の構造に詳しい俺に理があつたため上手く逃げられたが、ミイルが詳しかったら疲れていたぐらいで済むわけがない

そんなわけで襖がミイルを止めてくれたために現在俺は保健室で腫れに腫れた足を冷やしている

「はあお前に言いたいことは沢山あるが、それは先生方に任せよう。前から変わつてな  
いよう目で目から涙が出そうだ」

「いつから雪は涙もろくなつたんだ？」

「前からだよ」

今は大人しいミイルは椅子に座りながら腕を組んでいる。顔は笑っており、非常に殴  
りたくなる

「それで、お前は どうして きたんだ。アメリカに居たんだろお前」

「そうだが、叔父さんや叔母さんが死んだって聞いたからな。それにお前それから3日  
くらい行方不明だったらしいじゃないか。血縁者として不安になるだろ」

「お前に似つかわしくない言葉が出てきたな」

「あ、そうだ。父さんや母さんはアメリカに居るから」

「は？ 待てよ。お前どこに住む気だ？」

「お前の家だが？」

「……………は？ 待て待て待てよ どういうことだ だつてばよ

「先生にも許可は出ている」

「命雛家に泊まろうかな」

「なんでだ」

「命が何個あっても足りないからだよ！」

「寝ている時に殴り合うとかは流石にない！」

2人で言い合っていると、保健室のドアが開く

「お二人共。保健室で騒ぐのはいけませんよ」

「や」

命雛兄弟が入ってくる。それで俺とミイルは黙る

「さて、6限目に文化祭について話します。早めに知っておいて良いでしょう」

燈と禊は椅子に座って話し始める

まあ簡単に言えば、翠利高校と長紅高校との合同の学園祭。通称翠紅祭

詳しくは前に回想したからそっちを見てくれ（43話）

「参加しないわけないよな！」

「知ってた」

「予測通り」

「では申し込みしてきましょうか」

燈が席に立つと同時に俺はひとつ聞いておかなければ行けないことを思い出した

俺が口を開こうとしたら、燈がこちらに向き直る

「そう言えば私たちのクラスで行う催しは、メイド喫茶です」

「はあ？」

「メイド喫茶です」

「メイド喫茶」

「誰がメイドやるんだよ」

「クジです」

……はあ？

「今回の学園祭休もうかな」

「ダメです」（ニッコリ）

クツソこのイケメンの満面の笑みを殴りたい……！

メイド喫茶にはいいイメージがない。母さんがコスプレが好きで、良くメイド服を着させられて何枚も写真を撮られたことがある。俺は嫌だと言ったのに……それ以降俺はメイド服に拒絶反応が出る。これは他人なら問題ないが、自分が着るとなると……うっ嫌な記憶が…

「あ、そういえばこの写真送りましたよ？ミイルさん」

「あっはっはっはっ！雪お前コスプレ趣味あったんだな！」

「ねえよー！」

燈いつ俺のコスプレ写真撮ったんだよ！

マイルに関しては大笑いしやがって……

「あ、そうだ。雪気をつけてください。最近あなたの周りが不穏なので」

なんだこの空気の変わりようは！

「……どう不穏なんだよ」

「あなたに挑戦的な気配が漂うんです。おそらく、学園祭の時に攻撃すると思いますが、いつ攻撃するか分からないので、気を付けてください」

「忠告感謝するよ」

学園祭に仕掛けてくるとか野暮なんてもんじゃねえぞ。楽しむ場所で戦闘とか俺は嫌だね

ある空間では1人と人間が立っていた。日本刀を片手に、血を拭う。足元には1人の動かぬ肉塊が転がっていた。次に狙う戦いの場は決まっている

次の対戦相手を思い浮かべて、彼は心躍らせる

## 第48話 学園祭1日目

ミイルが転校してから一気に時間が過ぎた。ミイルと生活していると、大変なことになる。学校の体育の時間に勝負したり、家で勝負したり、イルカミアと勝負したり、イルカミアvsミイルvs俺の構成の勝負したりの毎日だった。まあ、それよりも予想外なことが起きた。その予想外は、ミイルが幻想郷の存在を知ったことだ。紫と幽々子達の結果？で人払いをかけているらしいが、ミイルには見破られた。ミイル曰く、「なんとなく違和感を感じた！」……らしい

そして、学園祭の準備。メイド喫茶の準備をしたり、衣装の準備をしたり、燈の生徒会の準備の手伝いの手伝いをしたり、委員会の準備をしたり、衣装合わせに付き合わせられたり……と、色々なことを忙しくやった。その間にバイトも始めた。学校終わってからバイトに入ったことにより、家に帰るのは夜中になった。夕飯はミイルが作ってくれたものを食べている。ミイルの料理は思ったよりも美味しい。見た目は失敗してるようにしか見えないが……

そんなこんなでついに学園祭当日になった。朝から学校中が和気あいあいと賑わっている。俺はクラスメイトに頼まれた荷物を片手に登校する

「さて、今日は楽しくなりそうですねえ」

「その悪い顔をやめろよ。お前の場合シヤレにならん」

「早く行かないと遅れる」

「よし、雪競走だ！」

「嫌だよ疲れたくない」

変わらずに元気なマイルについて行くように教室に入る

そして時は過ぎ学園祭が始まる

しかし少し時間が遡る

「学園祭が始まったな。このタイミングで襲撃するんだ」

「襲撃はしない。正々堂々と正面から武士道をもって試合う」

暗闇で二人の男の会話が響く

不思議と声が反響するその空間で小さなため息が漏れる



「では頼んだぞ」

「ああ」

こうして平和な学園祭が遠ざかっていく

「こちら注文の品となります」

あるメイド喫茶を企画している2年生の教室から静謐な声が漏れる。メイドから注文の品を受け取った客は呆然とした顔をしてメイドを見る

メイドは、本格的だと思うほどのメイド服に白い髪をリボンでポニーテールにして纏めており、少しのメイクを施している。落ち着いた雰囲気醸し出しており、立ち振る舞いは滑らかなもので一目見て目を奪われた人は多いだろう

「ゆっくりどうぞ」

そのメイドは半歩引くと綺麗なお辞儀をすると、奥の調理場へ戻る

「凄かったな……」

メイドが見えなくなってもそこをずっと見てしまっている客はしばらくした後に、ドゴオ!という音に正気をもどし、注文の品を食べ始める

「この野郎……」

「甘い」

メイド服を着た雪が調理場に戻ると共に、お茶を飲んで休んでいるメイド服を着た禿に殴りかかるが、片手で受け止める

なぜこうなったかというと、学園祭の開始の放送が流れる前のHRの時、雪は急に意識を失ったかと思うと、メイド服になっていて寝起き早々接客しろと言われた

言われたとおりにやってみたが、イライラは止まらない

少しの間ボクシングをすると、落ち着いたのかりボンをとる雪

「俺は学校を回らせてもらおうよ」

「それならこれ持って行って」

そう言われると、でかでかと『メイド喫茶』とプリントされた看板を渡された

「……まあこれくらいなら良いか」

着替え終わった雪は渋々と看板を受け取ると、廊下に出る

「とりあえず適当にパンフレットを探しに回るかな」

雪が校庭に足を向けると見覚えのある少女を見かける

「あつははは！ここ楽しいなあ！」

「イルカミアさんあまり離れないでください！はぐれてしまつたら探すのが大変なんですよ！」

イルカミアと妖夢が居る……なんでだよ！妖夢とイルカミアは幻想郷に居るはずだろ！

「おい、何でお前らがいるんだよ」

「あ、雪さん」

「やつほー雪！」

「イルカミアさんが学園祭が気になると言つて幽々子様を説得したらしく、許可がでてしまつたんです。でも流石に1人では不安だと言うので私が付き添いとしてきました」

「そうか……神秘つてなんだろうな？」

「わたし雪のところにいきたーい！」

「あーはいはい。こつちだよ」

妖夢の説明で幻想郷の神秘性が薄まっているんじゃないかと遠い目をしてしまう

イルカミアに手を掴まれて自分の教室へ連れていく。正直足が重い

「可愛い人が多いね！」

「あー悪いけどこいつお願い」

「博咲君この子と知り合い？」

「少し前に迷子になっていた所を家に帰した後から何かと会うことになったな」

教室に入ると近くにいたクラスメイトにイルカミアと妖夢を預ける

イルカミアに関しては嘘だ。何代も前の因縁持ちつて説明しても信じないだろうな

「じゃ客寄せやってくる」

「よろしくねー」

「雪さんまた後で」

「おー」

妖夢に適当な返事をした後にもう一度校庭に足を向ける

校庭では、主に焼きそばやお好み焼きなどの食事が並んでいる。パンフレットを頼りにたこ焼きを買いに行くと、またもや見覚えのある少女を見かける

「外の世界ってこんなに賑やかなんですねえ！」

「おーいこれを2つくれ！」

文と魔理沙だった

「おいこらテメエら神秘はどうした」

「あやややや！雪さんではないですか！」

「お、ちようどいい所に来たな！案内してくれよ！」

「これ終わったら紫と話し合いしないな……」

肩を落とした雪は2人をメイド喫茶まで連れていく。妖夢と一緒に行動させた方が  
良いだろう

「そういえば襦。ミイルはどこに行った？」

「あそこ」

さつきから見かけない危険人物の居場所が気になってメイド服の襦に聞くと、教室の  
窓を指さす。窓の方に目を向けると、人が降ってきた

「……は？」

「バンジージャンプ」

「よく許可出したな学校……」

窓を開けて下を見ると、ちようど反動で戻ってきているところで、顔面にバンジー  
ジャンプ者の体と当たる前に身を反らす

バンジージャンプ者はミイルだった。満面の笑みをうかべて上がっていく

「見なかったことにしよう」

「お客が増えてる」

「妖夢だけじゃ無理そうだからこいつら頼む……」  
「ん」

襖の短い肯定を受けてもう一度校庭に行く。たこ焼きをひとつ頼むと、そのまま校内を1周する

「明日は長紅高校に行こうかな」

長紅高校は隣の高校だ。この学園祭は長紅高校と合同で行われているものだ。この期間だけ、この高校と長紅高校の往復バスが日に10本だされる

1人そんなことを考えてると、腕相撲大会をやっていた。一般人も参加している。1人の男子生徒と接戦している

「じゃあー！」

「……レオか」

目の前で緋月 莉煌ことレオが勝利の雄叫びを上げている

「ちようどいいところに来たな雪！勝負だ！」

「嫌」

「そう言わずに勝負だ！」

「お、いい所に出くわしたな！」

レオがしつこく言ってくるのをどうするか考えていると後ろからミイルが現れた

「ナイスだミイル。このバカと腕相撲で勝負してみろ。強いぞコイツ」

「OK！」

「勝負を挑まれたら断らないのが俺だ。こいつを倒したら次はお前だ雪！」

「あーはいはい」

ミイルとレオが腕相撲を開始すると共に俺はそつとそこを離れる

「次は……演劇のところでも行こうかな」

体育館で行われている演劇部の『ロミオとジュリエット』を見に行く

「なんで燈がいるんだよ」

演劇が始まると同時に体育館の幕が上がった。そこでロミオ役と思われる燈と目が合った。それも満面の笑みを浮かべて

「……………帰ろ」

そつと看板を持って体育館を出る

「さて、クラスの手伝いしたくないし…襦はそろそろ休憩時間だろ」

現在時刻は12:30になった所だ

足を教室に向けると、1人の女子生徒が目に入る

長紅高校の生徒だろう。制服がそうだからだ。特徴的なのが腰まで伸びた白髪だ。髪を先でリボンでまとめている。どこか寂しげな雰囲気纏っており、近寄り難い

右手にはわたあめがあり、周りをみまわしながら歩いている

「ひっ……」

偶然目が合うと悲鳴をあげて足早で見失ってしまった

「……」

(雪、どうしましたか?)

「なんか今の奴気になつてな」

(ほの字)

今の女子生徒……どこことなく異質だった様な。いや、混ぜっているのか……? 完成されたものを、必要などころでくっ付けた……が正しいのか?

物耽つているときっきの女子生徒の後を追うように、素早く動く影が接近して背中に抱きついた

「……!」

「……!」

遠くからなにやら声が聞こえる。内容は分からないが、言い合っているようだ

「……ああ明日はアレか。ゆっくり休むかな」

看板を持つてクラス企画の手伝いをする為に戻る。絶対にメイド服は着ない



数分後、雪はメイド服で過ごすことになった  
もちろん、知り合いから笑われたのは言うまでもない

## 第49話 学園祭2日目①

（文化祭2日目）

暗闇が辺りを包む場所。そこで一人の男の声が響く

「今日が試合日か」

音もなくその場を去る。その場には破壊された無数のガラクタになった部品が散らばっていた

文化祭2日目。そこで開催される企画が始まる。

「さあ！今年も開催されるこの企画！正直私もどうかと思うひとつの街を巻き込んだ祭りの時間だー！」

おおおおおおお！！！！と校庭に集まっている生徒たちの雄叫びを上げる

「ルールは簡単！相手校の生徒のハチマキをより多く集める事だ！怪我せずに正々堂々と行うように！説明以上！」

おおおおおおお!!と校庭に集まっている生徒たちの雄叫びを上げる

「今年は俺も参加する。さて、まずはどこに行くか。人気のない路地裏にでも行くかな  
「雪」

「なんだ燈」

「今回は禊かレオさんと一緒に行動してください。あなたに悪意を持つ人物がこの街に  
来ているみたいです」

「そうか……そいつは何処だ？」

「…………路地裏です」

「分かった。さっさと黙らせてこの企画に参加する」

「……禊は援護に向かつてもらいます」

「それで良いよ」

燈のこういう忠告は本当によく当たる。学園祭なんだから平和に楽しくやりたいもの  
のなんだが……

「さて、まずは……」

俺は横に視線を送る。そこには体操をやっているレオがいる。距離を取っているた

めこつちに絡んできてはいないが、いつこつちに来るかわからん。バレないよう  
に人混みに紛れよう

「まあレオなら目の前のやつに集中するだろう。邪魔をしては来ないだろ多分」

「では開始の時間まであと少しなので今のうちに体操しましょう！ルールをしっかりと守ってやりましょう！」

マイクを片手に持っている司会者が姿を消す。ついでに台を片付け始める

開始まであと5分

「さてと、あとちよつとか。どうする…」

か。と最後まで言い終わる前に音が消えた

「……………は？」

(雪、気をつけてください。結界が展開されました)

急展開に俺が呆然とすると白雪が解説してくれた。それによって周りを見ると、誰も居ない。近くにいた燈と襦。さらに体操していたレオも、司会者も居なくなっている

「これ俗に言う人払いの結界ってやつか？」

「ようこそ、博咲 雪。そして初めまして」

周りに誰もいないことを確認した。本気で誰もいない

ため息混じりに呟くと、校門から声をかけられた

「誰だ？」

「私はそうだな。ドクとでも呼んでくれ」

ドクと名乗る奴は、声からして男だ。背丈は180cmくらいか。白衣を着ていることまではわかるが、他の特徴が分からない

「何の用だ」

「なに、5分ほど暇なのだろう？私と話そうではないか」

「壁にでも話してろ」

「なかなかと辛辣だね」

「コホン、と一度ドクは咳払いをしてから話し出す

「君と一対一で戦おうと言う奴がいてね。済まないが、付き合つて欲しい」

「壁にでも話してろ」

「ふふふ。君は魔術に耐性はないみたいだね」

1人で話しているドクの話の聞き流しながら、コイツの特徴を掴もうと見ているが、全く分からない。どうなっているんだ

「あ、そうだ。君にいい話をしようと思うけど、聞いてみてくれないか？」

「……」

「君の親を殺した組織が何年か前に研究していた実験の被験体がこの近くにいるらしい

から戦ってみてくれないか？」

「……」

「黙るか。さて、そろそろ5分か」

「……」

「では、また会おうか。博暎 雪」

ドクと名乗る男は光に溶け込むように姿を消した。最後まで分からなかった

「雪。始まっていますよ？」

「！燈か」

ドクの特徴が分からなく嘆息した途端に燈に声をかけられた。反射的にそちらを向くと、殆どの生徒が走り出した。本当に5分経ったみたいだ

「行きますよ」

「…おう」

燈に促され、走り出す

少し遅れて街に出ると、まだハチマキの取り合いは始まっておらず、生徒たちは隣町まで各々の速さで移動していた

「燈、どこだ？」

「もう少し進んで左の路地です」

歩いている生徒たちの移動速度に合わせて、目的地まで移動すると、他にバレないようにつつそりと路地に入る

燈から「ご武運を……」と言われた

「さて、ここ先の先か」

路地に入ると一瞬視界がブレた

「つ……」

ブレた時に反射的に目を閉じてしまう

目を開けると、辺りには何も無くなっていた。視界には地平線まで白色だ

「なんだこれ」

「ここは誰にも侵入することの出来ない結界内だ」

俺がつぶやくと、それに答えるように後ろから声が出た

振り向くと、そこには俺よりも年上であろう男が立っていた。腰には刀を差しており、隙の無い佇まいだ

赤髪の短髪で目が鋭い。鷹のようだ。背は俺が少し頭をあげる程度だから175c

m程だろう

「アンタは誰だ」

「名乗っていなかったな。俺は片桐 鬼刃（かたぎり きば）。旅をして強いやつを探している者だ」

「道場破りしていそうだな」

率直な感想としては通り魔だが……言わないでおこう

「どうしてここに居る」

「それはな……」

片桐は一度言葉を区切り、居合の構えをとりながら良く通る声で宣言した

「俺はお前との一対一の決闘を所望する！」

「……………は？」

一瞬ポカンとしてしまう

「一度お前の戦闘する映像を観て剣を交わしたいと思つたんだ。そうすれば俺は更に行ける」

「お前を倒せばここから出られるのか？」

「そうだ」

ハアとため息を着く。今日で何度目なんだこのため息は

そして深呼吸を一度

「分かった。ここから出て学園祭に参加しないといけないからな。その決闘受けるよ」



「感謝する！」

俺も白雪を構える

(雪。彼は貴方よりも強いですよ)

(そうだな。だからつてずつとここにはいられない。なら倒すしかない)

(気を付けてくださいね)

(ああ)

白雪と短く会話し、目の前の的に集中する

「いざ、尋常に」

「勝負！」

2人の剣士が同時に動いた

## 第50話 文化祭メインイベント

雪と鬼刃が戦闘始まった頃、文化祭のイベントでは――

「うわあ！ いつの間にかハチマキが！」

「アイツだ！ 俺たち長紅が勝つにはまずアイツを脱落させるんだ――」

イベント開始から約20分。翠利高校と長紅高校の中間地点

小さな黒い影が長紅高校の10人の体育会系の集団の中を縫うように動き回っていた。長紅高校の運動部は県大会常連だ。その中でもバレー部、野球部、サッカー部は全体から見ても抜き出ている。それなのに、ほんの数秒のうちに10人中6人のハチマキが奪われた。奪われた6人はその場に崩れ落ちる

「生存者は固まるぞ！」

生存者のうちの1人が号令をかけて全員が味方に背中を向け、それぞれの方向見るように固まる。号令ひとつでここまでの陣形を組めることにイベントの観戦者は驚いた『流石我らが誇る運動神経化け物十二神将のうちの4人だ――！ 目にも留まらぬ速さの相手に隙なく全方位を監視できる陣形を取りました！』

『これは良い判断ですね。相手はどこにいるか分からないのでくまなく探す必要があります』

ます。何より驚いたのは4人が冷静になっていた事です。脱落者は運営部が邪魔にならないように回収しますので、お気になさらず』

『今回のイベントの実況は長紅高校所属私わたくし日下部ひさかべ鞠まりです！』

『翠利高校所属の草壁くさかべ玻璃はりです』

『おっと！ 私達が自己紹介している間にあちらに動きがありました！』

『ああやはり彼でしたか』

「うお、何だコイツ！」

固まっていた4人のうちのひとりが叫ぶと同時に小さな黒い影がハチマキをまたひとつかすめ取る

『彼は翠利高校の選手です！ 玻璃さん、説明を！』

『彼は命雛 禊さんですね。体力測定では全て9点以上をたたき出す化け物です。運動神経という点では翠利高校のトップです』

『凄い！ 凄いです！ 禊選手！ 運動神経化け物十二神将を翻弄している！』

『こういう勝負で彼に勝つのは今のところ翠利高校の誰にも無理ですからね。どうすれば良いのか私達にも分かりません』

イベント運動部の二人が実況している間にも禊が暴れる

『次々にハチマキを取られていく長紅高校の十二神将！ 残り1人になってしまった

！』

『おや、誰か来ましたね』

『あ、あれはア！』

小さな黒い影——襦が十二神将の4人のハチマキを奪い終わると同時に後ろから物凄い速さで走る音が聞こえた

「姉様の勝利の為——！ 君はここで落ちるんだあ！」

「落ちるのはアンタだよ」

走ってきたのは小柄で腰まで伸びた黒髪をツインテールにしている。長紅高校の運動服を着ており、ハチマキが頭に巻かれている。眼鏡をかけている目はギラギラとしており、口元は笑っている

襦は彼女の手に持つ物を一瞥し、舌打ちをする

「ルール違反でしょ」

『これは長紅高校の運動神経化け物十二神将の1人、湯真崎 由鶴（ゆまさき ゆづる）選手——！ 運動部に所属していないのに運動部レギュラーに匹敵するほどの運動神経を持つ化け物！』

『早いですねえ。ん？ 彼女の右手にあるものはなんでしょうか』

由鶴が手に持っているのはリボルバー式のモデルガンだ。もちろん、イベントのルー

ル違反だ

『これはルール違反確定です!』

『たった今運営委員の人から何か手渡されました。えーと、なにになに?』

湯真崎 由鶴さんの使用する物はルール違反になりません。イベント運動部よりらしいです』

『な、なんですとお!』

『それくらいの手ゲが必要ほどの相手ですからね禊さんは』

由鶴がリボルバーを回し、自分に向けて発砲する。瞬間、由鶴が霞になって消えるようにその場から消失した

『はい、ハチマキゲット!』

『ちゃんと取ってから言おうか』

発泡してから爆発的に身体能力が上がった由鶴は、真っ直ぐ禊のハチマキを獲るために手を伸ばしたが、禊は由鶴の手首をつかみ受け流すように後方へ投げ飛ばす

『やるねー! 小さいくせに!』

『……ぶっ潰す!』

『あー禁句を』

『どうしましたか玻璃さん』

『禊さんの禁句は背を低い等の言葉なのです。背が低いというコンプレックスに触れると尋常ではないほどキレます』

『これは弱点が発覚しました！ 由鶴選手はどうするのか！』

「さっさと倒させてもらおうよ！」

由鶴はリボルバーを回し、地面に向かって発砲する

発砲された地面が禊を一瞬で困ってしまうようにせり上がる

「遅い！」

「想定済みだよ！」

禊が一瞬で困ってしまう程の速さの壁を飛び越えようと跳ぶと、既にリボルバーを回して禊の上空に向けて発砲する

すると、禊は空中で何かに阻まれるかのようにぶつかり、地面に戻されてしまう

「これは……」

「ふふふーこのリボルバーは特別式でなんか前に送られてきたんだ。君の能力はチート並に強いからこうするのが最適解なんだよね！」

眼鏡がキラんと輝く

「邪魔だ！」

「そう来るだろうね！」

禊が怒りのままに壁を殴ると、壁が爆散して破壊されてしまう。が、壁の破片は空中でピタリと止まる

「君って単純だから何やるかわかりやすいね〜ま、能力が能力だからそれも仕方ないか」  
「……」ピキピキ

「所詮、君は特攻するだけで終わる敗北者……」

由鶴が言い終わるよりも早く、禊が動いた。地面を力の限り殴る

禊の拳は地面を割り、亀裂が由鶴の所まで伸びる。先程のせり上がった壁も崩れ落ちる

「うそお」

「落ちろ」

亀裂が更に広がり、由鶴は足を取られ、落ちていく

「姉様の為に私はここで脱落するには行かないよ！」

由鶴が叫ぶと同時にリボルバーを回し、自分に向けて発砲する。その瞬間に由鶴の姿が消え、近くの建物の上に移動していた

「多彩だね……」

「これ本当に便利だね。さあ続きと行こうか」

由鶴がりボルバーを回して構える

『こ、これはなんでしようか！ 最早イベントの攻防ではありません！ あなた達ハチマキを獲るのが目的って覚えてますか!?!』

『もう異能バトルの域ですねこれは。禊さんはもうこちら側に戻って来れそうにありませんね』

『さーて、こちらの攻防に注目していましたが、他はどうなっているのでしょうか!』  
『禊さんの次は燈さんか雪さんが暴れてそうですね』

長紅高校近くの大通りー

「雪の気配が消えましたか。なぜ消えてしまったのでしょうか……」

燈は禊がハチマキを取っている間にその横を通り過ぎて長紅高校の近くの大通りを歩いていた。いつもは道を行き交う人々で賑やかだが、今はとても静かだ。燈以外の人々がその場にいないからである

『どうやら燈選手は大胆にも長紅高校近くの大通りを歩いています』

『燈さんは前に出るよりも後ろで指揮を執っているイメージがあったのでこの行動は意



外ですわね』

『それにしてもただ歩いているだけで絵になりますわね』

『彼は容姿端麗、文武両道で紳士の完璧人間です。どこまでも驚く程に冷静で前に私たちの学校で起こった騒動も変わらずに居られました。ラブレターもこの前1000通を超えたとか』

『そういえば燈選手も能力を持っているという噂ですが、実際のところどうなのでしょうか』

『恐らくあります。前の騒動の時に雪さんや禊さんと同じ結果が出たので。とはいえ、雪さんや禊さんのようにわかりやすいものではないことは確かです』

『今回のイベントで判明することをねがきましょう！』

「イベントの趣旨が変わっていませんか？」

燈は本来分からないはずの実況者2人に対して的確な指摘をする

そこへ建物の陰から一人の男子生徒が現れる。ジャージは長紅高校のものだとすぐに分かる

顔は燈に負けず劣らずに整っており、背中まで伸びた真っ赤な髪を首あたりでまとめている。背丈は燈より高く、180cmはあるだろう

「君が命雛 燈君かな？」

「はい。私がそうです」

「俺は麗川うらかわ 弥わたるという。よろしく」

「よろしくお願ひ致します麗川さん」

『あー！　ここで我らが誇るイケメン！　麗川 弥さん！　ここに二校のイケメンが揃ったー！』

『いやー華やかですねー。観客の皆さんも大騒ぎです』

『麗川さんには本人非公式のファンクラブがありまして、彼氏がいない者の殆どの女生徒が所属されているのだとか。一部の例外として参加されていない人もいるとかいいたいか。私もそのうちの一人です』

『燈さんのファンクラブもありますね。中には男子生徒もいるとか……』

『そこまですか!?!』

「さて、俺は君の足止めをお願いされていてね。済まないが、ここで足踏みしてもらおう」

「それは困りますね。おや？　麗川さん足踏みなんて考えてませんね……私をここで脱落させようとしているように思えますが？」

「なんだ、分かってしまうのか」

麗川は肩を震わせて笑い出す。それから獰猛な笑みを浮かべ、構える

「さて、君はそちらにとつては大きな戦力だ。そんな君がここで一人になっていたら今脱落させればこちらが大きく有利になる。チャンスは活かさないとな」

麗川のセリフを聞き終わった燈は口に手を当てて少し笑う

「どうして笑うんだ？」

「いえ、失礼。私なんて翠利高校の大きな戦力ではないのですが……しかし、ここで脱落する訳には行きませんので、全力で抵抗させていただきます」

燈が構えた時には、すでに麗川の懐に入っていた。これを見ていた人は瞬間移動したかのように思っただろう

だが、麗川はそれになんとか反応し、数歩後方へ下がる

「中々に好戦的な内面があるじゃないか」

「私は負けず嫌いなので」

燈が微笑むと同時にまた動く。それは先程と同等の速さだったが、それを麗川は完璧に反応し、燈のハチマキに手を伸ばす。腕のリーチでは麗川が勝っているため、燈は手を払い除けつつ麗川のハチマキを取ろうとするが、麗川はその手を掴み取る

「ほう、1度見せたとはいえ今のを防ぐとは……何か武道を習っていましたか？」

「いや、俺は生まれてから一度体験したことに対応出来ることが出来てね」

「なるほど。ならばこれですね」

近距離で会話をしている間に燈は近くに落ちていた小石を視線誘導の為に自分と麗川の目の前を通過するように上に投げる

この状況でなら気にもしない些細な出来事だが、麗川は上を向いてしまう

「油断大敵……ですよ！」

「しまっ！」

麗川が上を向いてしまった瞬間に燈の手が動く。視界の外側からの攻撃になすすべもなく麗川はハチマキを取られてしまった

「……俺の負けか……」

「はい。私の勝ちです」

『決まったー！ イケメン対決では翠利高校の燈選手の勝利だアー！』

『ふむ。今のは簡単なミスディレクションですかね。動いてしまうものに反射的に反応してしまう現象でしたか』

『麗川選手は長紅高校に帰っていきます。目にも止まらぬ激しい攻防でしたね草壁さん！』

『細かいところでの駆け引きをお互いがかけており、目を離せませんでした。まあ襖選手と由鶴選手のところは別のところでの駆け引きが凄いですね。もうあそこの地面なんて割れに割れてしまっていますから』

『燈選手はどうやら翠刹高校の方面に歩いていきます。これ以上踏み込むのは厳しいと判断したのでしょうか』

『恐らく雪選手のところに行くのだと思われます。どこカメラにも姿が映っておりませんからね。それを知らずか、探しに行ったのでしょうか』

『なるほど。では他の選手のところを見てみましょう』

実況者2人が別のカメラを見ると、ミイルとレオの2人が長紅高校の選手のハチマキを縦横無尽に動いて奪っていく

「くっそ！ 雪はどこにいやがる！」

「雪はどこに……あつぶな！」

「他の奴らにやられてないんだろぅなあ！」

「あ、その人後ろにいるから気をつけて！」

『こ……これはなんとこののでしょうか』

『あー雪の自称ライバルのレオ選手と最近転校してきたミイル選手です。2人とも高い身体能力を有しています』

『運動神経化け物十二神将である人達と同等レベルですよこれは……』

実況者である鞠が絶句していると、カメラの端に新たな影が映る

『こ、これは運動神経化け物十二神将の6人が集まった！ 手には沢山のハチマキが！』

『これは翠利高校の選手が何人も脱落していますね。ざつと30人くらいやられています』

『長紅高校側も勢いを取り戻してきました!』

『運動神経化け物十二神将の皆さんがミイル選手とレオ選手を追い込んでいきますね。2人も粘っているのですが、時間の問題でしょう。多勢に無勢です』

玻璃が言うように、ミイルとレオは運動神経化け物十二神将によって押されている。2人の桁違いの運動神経は運動神経化け物十二神将の1人よりは高いが、連携には勝てない

「雪に勝つまでは俺は負けられないんだよ!」

「雪に負けた姿なんて見せられないねえ!」

2人が奮闘していると――

「まだ翠利高校は終わってないぞ!」

「こいつらをここで倒せばこつちに勝ちの目がみえる!」

「こんな所で負けられないよなあ!」

燈と禊以外の翠利高校の生き残りが全員この場に集まった

その反対の道路から

「長紅高校の主軸である6人はやられたが、まだ6人残っている」



魔理沙、文、イルカミア、妖夢が一箇所に集まって観戦していた。特大のモニターで繰り広げられる激闘を各々の反応をしながら楽しく観戦していると、急に静かになった。「おい周りに誰もいなくなつたぞ！」

「あやや……これは人払いの結界でしようか」

「誰がこんなことを……」

「あ、あそこに誰がいる！」

「おや、バレてしまつたか」

魔理沙達4人は誰もいなくなつた空間で周りを見渡すが、誰も見つからなかつた。しかし、イルカミアだけは気配を消した人物を見つけることが出来た

「君たちは見たことがない人達だね。ここら辺に住んでいるわけではないだろう。遠くから来たのかな？」

「それはどうかな」

「そうであつたとしても急にこんなことをする必要はありません」

「そうだね。だけど君たちからなんとも言えない気配を感じてね。この結界内に招かせてもらつたよ」

「これは拉致ですよ」

魔理沙達と会話している人物……長身で髪を短く整え、グラサンをかけている白衣を



着た男だった

白衣を着た男はハッハッハと笑う

「いやなに、君たちには私の実験に付き合っただけで欲しくてね」

白衣の男が言うと同時に、男を中心に空間が歪む

「こんなことを外でやるのは私としては不都合なんだ。だからこの空間に誘ったのだよ」

「これは紫と同じタイプか？」

「油断せずに行きましょう」

「外の世界にもまだ神秘は残っているんですね」

「さーて、戦おっか！」

魔理沙、妖夢、文、イルカミア、白衣の男以外の居ない空間でこの5人しか知りえない戦闘を始める

その頃……雪は

「ハア……ハア……」

「どうした、まだそんなものでは無いだろう？」

刀を構えて無傷の鬼刃の前で全身から血を流して白雪を支えに立っている雪が息を荒らげながら目の前の敵を睨みつけていた

## 第51話 結界内の戦い 前編

白雪を支えに血を流しながら雪は対戦相手、鬼刃のさつきまでの動きを思い返す

お互い居合の構えをとりながら静寂な時間が流れた。2人はピクリとも動かずに対戦相手を見据えている

最初に動いたのは雪だ

「さつきと終わらせてもらおう！ 真楼の居合 瞬」

「良い技だ！」

白雪の刀身に薄く靈力を纏わせ神速の居合抜きと共に針のように飛ばす

それを鬼刃は雪を超える抜刀で針のような攻撃を打ち消す。と、同時に真っ直ぐに駆け出す

「今度はこちらから行かせてもらおう！」

「来んな」

雪は鬼刃と一定の距離を保つように霊力の斬撃を飛ばしながら何も無い地面に氷を作り出し、徐々に自分の有利な空間を広げる

鬼刃は氷の地面を難なく進み、雪との距離を縮める

「追い詰めたぞー！」

鬼刃が雪に迫り、刀を振るう。その動きは流麗で長年の鍛錬の賜物だ

雪はその刀を白雪で受け流そうとする……が

「遅いー！」

「んな!？」

雪が受け流そうとした瞬間に、鬼刃の動きが変わり、刀の軌道が明らかに変わった。刀が意志を持ったかのように白雪を避け、雪を狙う。刀が雪の肌を斬り裂いていく

「チツー！」

「ほう」

雪は予め広げていた氷に瞬間移動し、致命傷になる前に退避する

「中々とユニークな移動方法だな」

「ふう」

鬼刃は感嘆したように雪に称賛を送る。それは、呼吸を整えている雪には届いていないようだが……

「白雪。本気で行くぞ」

（ええ、彼は雪よりも強いです。油断せずに行きましょう）

刀傷を氷で塞ぎながら居合いの構えを取る

「良い覇気だ」

鬼刃は雪を迎え撃つべく、正眼に構える

「真楼の居合 隆」

白雪の刀身に大量の霊力を纏わせ、雪の低い姿勢で地面に刀を擦り付けながら振り上げる。白雪の切っ先から氷の地面が隆起して鬼刃に迫る

「甘いな！」

「コイツ……どうなってるんだ……能力か？」

隆起している足場を、鬼刃は何も無いように躲して、越えていく。が、氷は雪のフィードルだ

「後ろだ」

「見えているぞ！」

鬼刃は背後に瞬間移動した雪を一拍の間をおいて反応する

それを見越して雪は再度鬼刃の背後に瞬間移動する

「良いぞ！　そう来なくてはな！」

雪は無防備な背中を斬ろうとするが、背後を振り返った鬼刃は超人的な速さで回避し、雪を斬り裂こうと反撃する

「クソが！」

腹部を数ミリ斬られたところでまた瞬間移動し、致命傷を避ける

「ハア、ハア、フウ……」

「息が上がってきたようだな」

「うるせ」

先程から瞬間移動の連続使用により、雪の体力と霊力がじわりじわりと削られていく。息が上がってきている雪に対し、鬼刃は余裕の表情だ

「少し賭けだが、やってみるか」

（危険ですよ！）

「やらなきゃこつちがやられる。それにもしかしたらあいつの能力が分かるかもしれないからな」

雪はひとつ鬼刃を倒す方法を思いついた。だが、安全性は無く、さらに傷を負うことになるだろう。それでもやらなければこちらがやられる、雪はそう考え、実行に移す

「飛ばすぞ、白雪！」

雪が叫ぶのと同時に、雪の背後に大量のスcoop程の大きさの氷柱が出現し、鬼刃に向かつて飛ぶ

「こんな小細工ばかりでは俺を倒すことは出来ないぞ！」

鬼刃は真つ直ぐに雪まで駆け出す。向かってくる無数の氷柱を髪の毛、衣服にかすらせることも無く、雪との距離を縮める

「ハッ！ そう来るだろうなあ！」

雪は鬼刃に氷柱が当たらないことに驚かずに、白雪を居合の構えで迎え撃とうとする。

「さあ、来い！ 博咲 雪！」

雪が抜刀する瞬間、鬼刃の背後に飛んでいる氷柱に瞬間移動する。白雪の刀身は正確に鬼刃の首の側面を捉えていた。それに対し、鬼刃は予期していたかのように刀で防ごうと間に割り込ませるが、雪はさらに鬼刃の正面に瞬間移動し、鬼刃が防ごうとした反対側の首に白雪の刀身が迫る

「甘いわ！」

鬼刃は叫ぶのと同時に身をかがめ、回避する。と、同時に刀を収め、居合の構えをとる

「やべ……」

「もらった!」

雪を超える神速の居合抜きが放たれる。あまりの速さに、立会人がいたならば、雷撃が放たれたと思うだろう。白雪を振り抜いている雪は瞬間移動することも出来ずに、なすすべもなく斬られる……はずが、一瞬、ほんの一瞬だけ鬼刃の刀身が雪の身体を斬り裂く寸前で止まる

「なに!？」

「うおおおおー!」

一瞬の出来事に動揺する鬼刃だが、直ぐに冷静さを取り戻す。雪は腹を微かに斬られたが、バックステップで距離をとりつつ、鬼刃の周りに氷柱を形成し、放つ。回避する隙間も作らないほどの量の中に雪は瞬間移動し、鬼刃を攻撃する。鬼刃は避けながらカウンターし、雪は深手になる前に、別の氷柱に瞬間移動し、攻撃する。それに反応した鬼刃が避けながらカウンターする。雪は背後に、真横に、時には真上に瞬間移動するが、鬼刃は完璧なタイミングで避け、カウンターで雪に傷を負わせる

「ハア……ハア……クソっ!」

「どうした、こんなものではないだろう?」

霊力が続く限りそれを行ったが、鬼刃に白雪の刀身が届かなかった。全身から血を流



す雪に対して、鬼刃は傷一つなく、余裕の表情だ

(なんだアイツは……全身に目でもあるのか？ これだけやっても能力が分からないし……)

先程までの攻防を思い返し、雪は焦りと困惑の表情を浮かべる

相手は自分よりも剣術、身体能力が高く、白雪の瞬間移動にも確実に反応する。白雪の氷を全く刀で防がずに躲す。これだけ圧倒的な差を見せつけられたら誰もが困惑するだろう

(どうやってアイツに一撃与えるか……どうやって白雪を届かせる……)

雪は焦りと困惑を押し潰し思案する。それを遮るように鬼刃が雪に問いかける

「お前の事はヤツから少し聞いた。何でも規格外の能力を持っているようじゃないか。なぜ使わないんだ？」

「……分からないからだ。自分の能力がなんなのか考えたことは無いからな。周りの奴

は氷を操るとか言っているが、それは白雪の力だからな」

(もしかしたら燈は気づいているかもしれないけどな)

雪は話しながらも鬼刃を倒す方法を考える

(距離を保ったまま戦うのはジリ貧だ。先に俺の霊力の方が尽きる……都合よく俺の能力が分かる、なんてことは無いだろうしな。捨て身の特攻なんて愚の骨頂。頭を冷やせ。考えろ……)

「さあそろそろ決着をつけようか」

「……」

鬼刃が居合の構えを取ると、雪は黙ったまま正眼に構え思考に没頭する

(マトモに戦うな。不意をつけ。間合いに入れるな)

「片桐 鬼刃。参る！」

鬼刃は叫ぶのと同時に雪との距離を一気に縮める。

それでもまだ雪は考える。微かに冷気が漏れだしていることにも気づかず

(動きを一瞬でもいい。動きを止められたら一撃与えられる……不可視の……これでやるか！)

雪は考えをまとめると白雪に大量の霊力を纏わせ、素振りをするように振るう。白雪に纏っていた霊力が鬼刃を迎え撃つようにして飛ぶ

「見えているぞー！」

それを鬼刃はスピードを落とさずに避ける。そのまま雪まで走るのだが（今のを避けるのは想定内。次は……）

雪まで後1mと言うところで鬼刃は急に軌道を右に変え、居合抜きをしようとする。「今のが見えるとはな」

「言っただはずだ。見えているとなー！」

雪は大量の靈力の9割を斬撃として飛ばし、残りの1割はその場で留まるようにしたのだ。留まっている斬撃はほぼ透明で9割の斬撃を見たあとだとそこには何も無いように見えるだろう。それを鬼刃は完全に見抜き避けた

「これで終わりだー！」

「まだだー！」

鬼刃の居合抜きを斬り上げるようにして防ごうとするが、刀同士が触れる瞬間に鬼刃は軌道を変えてそのまま雪の身体に刃が届く

（やべ……）

雪が死を覚悟した、その時

(結界も張られている。さて、異能のない真剣勝負で勝て)

どこか中性的な、しかし重い声がどことなく響くと、白雪によって作り出された氷が霧散する

と同時に雪に届いた刃が何かによって弾かれる

「なに!?!」

鬼刃は驚きの声を上げると共に距離をとる

「これは……」

雪は身体から出てきた小刀を見て困惑する。小刀は独りで雪の体から離れ、2人の間の上空に移動する

(さあ、剣士たちよ。決着をつけろ)

小刀からそんな言葉が響くと小刀は霧散する

「どうなっているんだ」

「わからん。しかし、白雪の力が使えなくなるとはな」

雪は何度か氷を作ろうとするが、できない。先程の小刀の『異能のない』は嘘ではなかった。異能が無くなったことで、止血していた氷も消えていて、じわじわ血が出てきている

「あの小刀に従うのは癪だが、お前を倒さないと外に出られないからな」

「ああ、第2ラウンドということだな」

二人はもう一度、最初のように居合いの構えを取る

「行くぞー!」

「来い!」